

一六二 新納時房ヨリ山之内作次郎へ

久光公ノ時弊革正ヲ望ム

方今天下ノ制封建ヲ變シテ郡県トナシ、門地世襲ノ土ヲ廢シテ全国一般貴賤ノ別ナカラシメントス、於是業ヲ失フノ徒特ニ無恥頑陋ノ農商ト伍スルヲ恥ルノミナラス、飢寒亦身ニ切ナルヲ苦ミ、怨望ヲ抱ク者天下ニ充滿シ、窃ニ乱ヲ伴カフニ至リ天下岌々乎瓦解ノ勢アリ、於是我二ノ丸公傍觀ニ忍玉ハス、疾ヲ力シテ千里ヲ遠シトセス、闕下ニ拝趨シ、忠誠ノ赤心ヲ以テ

聖上ノ意ヲ感悟シ、公明正大ノ謙讓ヲ以テ在朝諸臣ヲ説伏シ、上ハ

皇室ヲ泰山ノ安ニ措キ、下ハ蒼生ノ愁苦ヲ救ヒ、外交ヲ慎テ以テ覬覦ノ念ヲ断チ、内政ヲ修テ以テ蕭牆ノ變ナカラシメントス、其志吾徒得テ而シテ称揚スヘカラサル者アリ、而シテ其持論ノ如キハ草野ノ微臣敢テ与リ聞ク所ニ非スト雖トモ、窃ニ之ヲ道路ニ聞ク、郡県ノ制ヲ變シテ封建ノ治ニ復スルニ在リト、此言実ニ然ラハ小子窃ニ

憂ル所アリ、夫レ封建ノ制タルヤ侯国各其土地ヲ私有シ、山沢ノ利ヲ網羅シテ以テ其国ヲ富シ、恩義ヲ以テ其臣民ヲ愛撫シ以テ国家ノ藩屏タリ、之カ臣民タルモノ子弟ノ父兄ニ於ルカ如ク、手足ノ頭目ニ於ルカ如ク、死ヲ以テ其上ニ報ントス、上下固結シテ復タ揺撼スヘカラス、旧制ヲ以テ之ヲ觀ルニ天下侯国大小殆ント三百、夫レ三百固結ノ藩国ヲ以テ

王室ヲ護衛ス、

天子治民ノ勞ナクシテ民驩虞ノ化ヲ受ケ兵部徵募ノ煩ナクシテ 皇城九門精兵充滿ス、所謂垂拱而天下治ルモノ封建ノ制ヲ然リトス、然トモ国各其政ヲ異ニシ、民各其俗ヲ殊ニシ、彼此ノ別ナキコト能ハス、故ニ各藩ノ交際各其私見ヲ執リ、苟モ己レノ国ニ利アレハ隣国ヲ以テ壑トスルモ、亦願ル所ニ非ス、大ハ小ヲ侮リ、小ハ大ヲ陵ント欲シ、天下無事ナレハ各其爪牙ヲ藏シ、親睦ノ形アリト雖トモ、一旦事アレハ天下四分五裂、復タ收拾スヘカラス、此故ニ必ス封建ノ制ニ復セント欲セハ、其勢力

近世徳川氏ノ如ク、己レ侯国十陪ノ地ヲ有チ、十陪ノ兵士ヲ養ヒ、十陪ノ財ヲ貯ヘ、十陪ノ権力ヲ有シ、形勝ノ地ニ拠テ以テ列国ヲ制馭スルニ非サレハ、一日モ其安ヲ保ツコト能ハス、今ヤ 朝廷天下ヲ捏合シテ之ヲ有チ、名ハ天下ノ地、 朝廷ノ地ナラサルハナク、天下ノ兵、朝廷ノ兵ナラサルハナシト云ト雖トモ、其実徳川従前ノ勢力アルコトナシ、今ニシテ封建ノ制ニ復セハ何ヲ以テカ列国ヲ制馭センヤ、試ニ戊辰ノ事ヲ以テ之ヲ論セン、会津降伏ノ後若天下諸侯依然トシテ各其封土ヲ守リ、版図奉還ノ挙ナカラシメハ、列藩各狐疑ノ心ヲ懷キ、互ニ相猜忌シテ薩長土ノ如キ有功ノ国ヲ惡ミ、或ハ奸謀アリトシ、或ハ禍心ヲ藏ストシ、百方構陷シテ終ニ誣ルニ謀反ヲ以テシ、負ハシムルニ賊名ヲ以テシ、必ス殄滅シテ而後止ントス、 朝廷之ヲ制スルコト能ハス、或ハ其言ヲ信スルニ至ラン、彼ノ構陷セラル、者安能手ヲ束テ戮ニ就ンヤ、於是天下麻ノ如ク乱レ、大ハ小ヲ併セ強ハ弱ヲ兼ネ争戦止時ナク、民塗炭ノ苦ヲ受ケ、西郷・木戸ノ如

キ者百千群ヲナシ参議ニ列スト雖、又之ヲ如何トモスルコト能ハス、是時ニ当リ海外各国其機ニ乗シ大ニ其兵威ヲ輝カシ、以テ之ニ莅ミ以テ之ヲ誘惑セハ諸侯ノ内或ハ外国ニ内通シ、其余威ヲ藉リテ以テ其隣国ヲ恐嚇セント欲スルモノアラン、諸侯ハ猶可ナリ、其勢ノ止コトヲ得サルニ至テハ恐ラクハ、 朝廷モ亦外国ノ力ヲ藉リテ以テ内乱ヲ鎮ント欲スルニ至ラン、此ニ至テハ 皇国モ亦従前ノ 皇国ニ非スル近コロ告諭文ヲ拜読スルニ士ヘ従前ノ士ニ非勝前ノ 皇国ニ非スルノ文アリ、此言恐ラクハ不祥ノ兆ヲナサンテ慨歎スヘケンヤ、幸ニシテ列国返献ノ挙アリテ天下無事ナルコト今日ニ至ルハ、天下蒼生ノ幸福抑亦少小ニ非ス、然トモ变革ノ時ニ当リ其措置宜ヲ得ス、一ニ西洋ノ法ニ從ヒ亦人情国体ノ異アルヲ弁セス、紛紜更作シテ或ハ文明開化ト称シ、或ハ国勢進歩ト称シ以テ天下ノ大勢ヲ変セント欲ス、其実国勢日ニ退縮ニ就キ文明日ニ蒙昧ニ趨クヲ知ラス近コロ聞ク台湾ニ事アリ、兵部省兵ヲ起シ其罪ヲ問ハント欲ス、大蔵省軍實ニ乏キヲ以テ之ヲ沮ムト若シ旧幕府ノ時ニアラシメハ、西國二三ノ諸侯ニ命シ、之ヲ討タシメ、足ラズンハ之ニ四五名ノ諸侯ヲ加ニ、再ヒ足ラズンハ山陽山陰ノ諸侯ヲシテ陸統兵ヲ出サンメ、以テ其巢窟ヲ顛スニ至ラン、今ヤ然ルコト能ハス、是国勢退縮ノ効ニ非スヤ、維新ノ始ニ当リ首トシテ大ニ学校ヲ開ク

ハ可ナリ、而トモ其始輕忽事ヲ舉ケ復タ大小本末ノ慮アラス、故ニ久カ
ラスシテ官其費ニ堪エス、或ハ從前ノ學校ヲ毀テ、或ハ生徒ノ廩給ヲ奪
ヒ、加之金洲ノ人ヲシテ尺ク農工商賈タ、如此ニシテ今又更張ス
ラシメントス、是文明蒙昧ニ趨クニ非ヤ、ル所アラスンハ天下ノ勢在苒荏靡シテ遂ニ復タ言フニ忍
ヒサル所ニ至ラントス、於是天下有志ノ士慷慨扼腕シテ
天下ノ大勢ヲ挽回セシコトヲ思フ、天下ノ大勢ヲ挽回セ
シコトハ微力ノ能ク為ス所ニ非ス、故ニ一英傑ノ天下人
望ノ婦スル人ヲ推シテ其議ヲ主トラシメ、己レ之カ股肱
羽翼トナリ、以テ心力ヲ尽ントス、是時ニ当リ我
公闕下ニ拝趨シ、獻替ノ忠言ヲ発シ玉ハ、天下ノ土雲
從霧集シテ各其所見ヲ呈ント欲スルコト必セリ、此ニ至
テハ方寸ノ權衡実ニ安危ノ係ル所、愚蒙ノ徒敢テ喙ヲ容
ル、所ニ非ス、然トモ蕪蕪ノ言聖人猶扱フ所アリ、之ヲ
妄言センモ亦罪スル所ナカルヘシ、窃ニ惟ミルニ封建ノ
制其今時ニ適セサルコト上文言フ所ノ如シ、小子自ラ其
愚ヲ測ラス、私カニ擬スル所アリ、今ニ於テ旧藩土族ノ
業ヲ失フ者天下処トシテ之ナキハ莫シ、今量リテ之カ適
宜ノ禄ヲ復シ、判然トシテ士庶ノ別ヲ立テ、之ヲシテ世

襲セシムルコト從前ノ法ノ如クシ、以テ廉恥ノ心ヲ養ヒ
節義ノ風ヲ崇フシ、學校ニ於テ其才能ヲ長育シ、用ヒテ
官トナシ、点シテ兵トナスモ、一モ其職ヲ舉ケサルコト
ナカラシメ、而後古昔軍團ノ法ニ基キ、之ニ參スルニ唐
府兵ノ制ト我薩外城ノ法トヲ以テシ、必シモ其迹ニ泥マ
ス、必シモ其名ニ眩セス、時勢ヲ斟酌シテ其宜ニ從ヒ、
損益用捨シテ以テ之カ制ヲ定メハ或ハ可ナラン歟、若シ
小子ノ言採ルヘクハ願クハ広ク有識ノ士ヲ集メ、之ヲシ
テ其編見ヲ祛キ、務テ公平ノ心ヲ存シテ以テ討論講究セ
シメ、凡ソ事ノ利害得失大小緩急預メ之ヲ商略シ、一モ
遺漏アルコトナク議定テ、而後之ヲ施行ニ見シ以テ万古
不易ノ制ヲ建玉ハンコトヲ、彼西洋ノ如キハ国体風俗大
ニ我ト相懸殊スルヲ以テ、其政治善法アリト雖トモ用ユ
ヘカラサルモノアリ、然トモ其我ニ適スルモノ、如キハ
亦採扱セサルヘカラス、若シ其善美ヲ見テ之ニ心酔シ、
一ニ之ニ法トラント欲スルハ眩惑ナリ、其醜異ヲ睹テ之
ヲ惡ミ、一切之ヲ擯斥セント欲スルハ偏心ナリ、偏心ト

眩惑ハ大ニ天下ノ事ニ害アリ、慎マサルヘカラス、小子不才譎劣敢テ以テ自ラ是トスルニ非ス、聊カ胸臆ヲ吐露シテ以テ 先生ニ質スノミ、 先生以テ可トセハ之ヲ其人ニ呈示セヨ、或ハ愚者ノ一得アラハ小子幸甚ノ至ニ任エス、

明治六年癸酉二月

呈
山之内先生梧下

新納時房百拜

冊子原寸 縦二七釐 横一九・五釐 五枚

一六三 博聞新誌

和田八之進ノ封建論ニ就テ

二冊

一九八二ノ一

(表紙)
「明治六年二月 定価新貨三錢」

博聞新誌 第十五号

(巻)
博聞社
L

緒言

時ナル哉新聞紙ノ世ニ行ハル、開化進歩ノ捷徑ヲ開キ、世教ヲ裨益スト謂ベシ、然レドモ其多キ殆ンド十種、彼是復出読者冗費煩悶ノ憂ナキ能ハズ、因テ今般 官許ヲウケ、 公布及ビ内外ノ奇事ヲ輯メ、各種新聞ノ異条ヲ録シ、上梓発売遐壤僻陬ニ至マデ、日新ノ世態ヲ概知セシメンコトヲ庶幾スト云、

博聞新誌第十五号

○一月三十一日大藏省ヨリ御達第七号

今般地方緊要ノ件々、合議ノ上其宜ヲ求メ改正候ニ付、別紙記載ノ件々、迅速取調道路遠近ノ遅速ヲ量リ、來ル第四月一日ヲ期シ、長官・次官ノ内一員出京可有之事故有之、出京難相成候ハ々、奏任出仕ノ内出京可有之、此段相達候事、

但別紙条件之内当省ヨリ相達、既ニ取調差出有之候分并巡国官員於出張先取調相分候分、於目今相達致候廉無之候ハ々、此度敢テ取調不及候事、

○二月三日太政官ヨリ府県へ御達第三十四号

各府県貫屬家禄并賞典米ノ儀ハ、四季ニ割合可相渡答ノ
処、御詮議ノ次第有之、自今一ヶ年ノ禄高ハ其年ノ十二
月ニ取纏メ一度ニ渡方可致、自然米金ノ都合ニ寄り、年
内悉皆渡方難致向ハ、其府県ノ適宜ヲ以翌年二月迄割合
相渡候様可致事、

但壬申年分相当ノ禄ヲ当五月八月迄ニ割合相渡候向ハ、
当三月四月兩月ノ内ニ取纏メ一度ニ可相渡、且当年分
ニ相当リ候禄ヲ当年季毎ニ繰上相渡候向ハ、当十一月
迄従前ノ通取計、明年ヨリハ本文之通可引直候、尤処
分ノ次第ハ大藏省へ可申出事、

○秋田県下ニテ去申十一月二十七日夜城町ト云所失火シ、
十二三軒焼失セリ、右消防ノ為一ノ稲荷社ヲ打毀シ折柄
豈計ンヤ大地忽チ震動破裂シ、其声数里外ニ聞ヘタリ、
之ガ為ニ大傷ヲ受ル者九人、内四人ハ三四日ヲ経テ死セ
リ、其原因ヲ尋ヌルニ旧県引渡ノ時士族ノ内ニテ彈藥ヲ
取出シ、時ヲ待テ之ヲ用ントノ目論見ニテ、窃ニ社内ニ

埋置タル由、右ニ関係周旋セシ町人一人召捕相成、県庁
ニテ厳シク御吟味中ナリト云、

○京都本願寺ニテハ仏堂ヲ除ノ外、家作残ラス取毀チ負
債ノ償却ニ充テ、婢妾二人従者五名ニテ大谷ニ移住セン
ト内議セル趣キ、滋賀新聞ニ載タリ、夫レ仏者三世ノ因
果ヲ説キ愚民ヲ誑誘シ、其膏血ニ暖飽センガ、一転シテ
此ニ至ル、則チ因果ナル者カ將タ窮迫ノ形ヲ示シ、愚民
ニ勸財スル術ナルカ、噫、

○千八百七十三年二月二十九日ヘラルト新聞ニロントソ
電報ヲ記シテ曰ク、普帝ウイルヤムハ今年五月下旬ヲ以
テ魯國ニ至リ、魯帝及ヒ王子ト同伴アリテ澳國ノ博覽會
ヲ見物アル由、

○鹿児島県土族和田正道始メ外六人、先般左院へ建言ス
ル所アリ、同院ニ於テ応接討論ノ記文ヲ得タリ、蓋シ和
田氏ノ手書スル所ト云、依テ左ニ載ス、
十一月二十三日十字集議院ニ出頭シ其旨ヲ以聞ス、暫ク
有テ給事來テ議席ニ案内セリ、既ニシテ左院一等議官松

岡時敏・一等書記官土居光華出席ス、然テ松岡曰、此節御辺ノ建白左院ニ於テ一同廻覽評議ニ及ヒ、已ニ去ル十

二日二等議官宮島等面会ニ接ニ及ブト雖モ、趣意齟齬セシ故、今日予宮島等ニ代リ嚮ノ応接ヘ取返シニシテ、更

ニ応接ニ及ブヘシ、然シテ今日ハ寛然熟論ヲ遂ケ、依違ナキヲ以テ要トセン、嗚呼御辺ノ建白ヤ慨然憂國ノ情文

表ニ著ルシ、豈尋常ノコトトセンヤ、然ルニ其主意専ラ封建ニ復スルノ論ヲ以テセリ、夫レ吾朝封建ノ制ニ於

ルヤ、古ヘ神武帝ノ御宇ニ始メテ国造ヲ置カレ、世々ニ伝ヘテ各其

國ヲ治メシメ玉ヒシ者、即チ漢土封建ノ制ノ如シ、然ルニ凡ソ一千三百二十余歳ノ後チ、

天智帝ノ御宇ニ至リ、勢ヒ止ムヲ得サルヲ以テ、祖宗ノ法ヲ革メ、既ニ成ルノ制ヲ變ジ、郡県ノ制ニ易ヘ

ラレ玉ヒシ也、其後或ハ廢シ、或ハ置キ、變遷無窮、然レハ則封建郡県ノ因革ニ於ルヤ、吾カ国固ヨリ一定不易ノ法アルニ非ス、必ス其勢ヒヲ以テ其時ノ宜キニ適ハ

シムルノミ、於是乎方今天下ノ勢ヒ広ク万国ト交際スルノ時ニシテ、第一

王室ヲ尊大ニシ、

皇統ヲ高重ニシ、万世無窮敵手トシテ犯シ難ク、確乎トシテ動シ難キノ国礎ヲ扶植シ、然シテ吾ガ国内ヲシテ政

令法制一轍ニ出、必ズ国々政ヲ異ニシ、家々俗ヲ殊ニスルノ風無ラシメ、唯同心一体シ、吾ガ皇國ノ全力ヲ協

セテ以テ万国ト对立スヘキノ時勢ナレハ、則古ヘ天智帝ノ御政体ニ遵復セラレ、既ニ斯ク郡県ノ制トハ為

サレシ也、旧世封建ノ世ヤ極弊頗ル甚シク、恐多モ王室浸ク微ニシテ霸府其權ヲ擅ニシ、諸侯各其政ヲ專ニシ、人民亦各其主アルヲ知テ

王室アルヲ知ラズ、実ニ尾大不掉ノ弊ノミナラズ、天朝ヲ暴蔑スルノ甚シキ者アリ、然ルニ戊辰、

王政維新以還諸侯封土返獻セシヨリ、更ニ侯ヲ罷メ知事ヲ置キ、然シテ各其旧土ニ置レシニ断然因襲ノ弊未タ脱セズ、猶其旧習ニ固着シ、依然トシテ更ニ一視同仁ノ風

立ス、是故ニ止ムヲ得ズンテ斯クハ革メラレシ也、然リト雖モ此制既ニ発スルヨリ、其業未タ管テ成ラス、夫レ天下ノ鴻業焉ソソ僅カニ一歳ニシテ成功ニ至ル之レ有シ、古人曰、百事成功ヲ急ク可カラズト、彼ノ西洋ノ如キハ一般皆久シキニ堪ヘ、功ヲ急ガサルノ質ニシテ、事十年ニ成ラサレハ百年二期ス、其身ニ成ラサレハ其子ニ待チ、必ズ其功ヲ成スコトヲ要セリ、是レ則チ今日ノ盛ナルニ至ル所以也、事大ナレハ成ルコト亦遅フシテ且難シ、其遅キニ堪ヘ難キニ堪ヘ、然シテ後大事成ルコト有ヘシ、御辺建白ノ如キモ又其理ナキニシモアラズ、然レドモ既ニ 廟謨一決、 朝旨確然亦変ズ可カラズシテ百官群吏各目的ヲ一ニシ、協心同力唯此鴻業ヲ成スコト必ズ十年ノ後チヲ期スルノミ、実ニ方今内外患難一時四出、百職群僚任重フシテ道遠ク、其闕失ナキヲ欲スト雖トモ亦得ンヤ、是ヲ以御辺モ又其 朝旨ノ已ニ発スル処ヲ遵奉シ、猶持論ヲ建、奮然尽力アランコトヲ望ムノミ、是レ吾カ輩偶然ノ言ニ非ズ、固ヨリ議スル処アレハ也、

御辺ソレ之ヲ領承アレ、臣謹テ答テ曰、御説論ノ旨趣臣一千万其意ヲ了知セリ、然リト雖モ臣愚見ノ如キハ固ヨリ大ニ是ニ反対セリ、今日ニ至リ未タ管テ頑乎トシテ解ケ難シ、然シテ封建ノ得失、郡県ノ利害ニ於ルヤ、臣等論ズル所固ヨリ固陋ニシテ且疎漏言ハズンテ明ケシ、然トモ諸賢ノ論説亦既ニ明ナリ、或ハ曰、封建ハ聖王天理ニ順ヒ天心ヲ承ケ、天下ヲ公ニスル所以ノ大端大本也、郡県ハ霸世暴主ノ人慾ヲ縱ニシ、天道ニ悖リ、一身ヲ私スルノ大弊大賊也ト、或ハ曰、郡県ノ制作レハ則世襲ノ制亡ブ、世襲ノ制亡ヘハ則教易ハルノ弊生ズ、教易ハルノ弊生ズレハ則人民定志ナシ、人民定志無レハ則国家荒蕪ス、又曰、ソレ封建ハ聖人ノ制ナリ、徒ニ恩ヲ推シ功ニ報ユル所以ノミナラズ、親ヲ親ミ賢ヲ賢トシ、外ハ以テ夷狄ヲ防禦シ、内ハ以テ王室ニ藩屏シ、其天下ノ利是レヨリ大ナルハナク、邦家ノ守是レヨリ要ナルハナシト、是等皆先哲ノ確論更ニ余論ナキ者ト思ヘリ、然シテ凡ソ諸侯ノ封土ヲ受ルヤ、各其國ヲ保チ其民ヲ馭シ、宗

廟ヲ立城市ヲ營ミ、士ヲ勵マシ農ヲ勸メ士民ト共ニ之ヲ守リ、子孫相保チ上下相親ミ主民相安シテ以テ王室ニ藩屏ス、此封建ノ利豈万世ノ法トセサランヤ、殊ニ方今外夷疊ヲ伺ノ時ニ當リ、藩ヲ廢シテ県トナシ、唯一時ノ選ヲ以テ令トナシ、參事トナシ朝ニ出テ夕ニ替リ、則チ數ハ易ルノ弊生シ、官吏定守ナク庶民定志ナク国土荒蕪シ、一般守備全カラズ、反テ分崩支離天下統紀ナキノ今世ニ馴致セリ、嗚呼既ニ皇國ノ全カ沮喪スルノ近患、既ニ生ズル者ト思ヘリ、此臣ガ郡県是トセサルノ愚論也、凡ソ今議論上ニ於テハ郡県モ亦其理ナキニシモ非ズト雖モ、必竟姦佞ノ方寸ヨリ出、唯勤王ヲ名トシ、實ハ藩國ノ勢ヲ拔キ、躬自ラ朝權ヲ執リ、私利ヲ逞フセントノ私為妄為ニシテ、更ニ公誠忠実ノ盛意ナキヲ知ル也、如何トナレハ今ノ大臣參議及ヒ諸卿ノ權豪曩キニ撥亂反正ノ際ニ當リ、王政一新ヲ名トシ、天下ノ政事大小トナク悉ク一己ノ臆見ヲ以テ各私ニ相語ラヒ、衆謀ヲ攘却シ、恐多モ

主聽ヲ螢惑シ奉リ、以テ吾ガ朝

祖宗ノ法ヲ大变革シ、竟ニ國基頽敗、皇威磨滅シ黠

慮其虚ニ乘シ、狡謀ヲ熾ニシ、皇國生靈ノ膏血ヲシホ

リ、今日ニ至リ吾ガ臆兆ノ民ヲシテ悉ク塗炭ノ苦ニ陥ラ

シムル者、是國家ヲ売弄スルノ所為ニシテ、則チ姦佞ノ

甚シキ者ト云ハズヤ、是ヲ以テ臣等疎愚ト雖モ憤然激發

必死論諫セサルヲ得サル所以ナリ、○余ハ後号ニ出ス、

博聞新誌第十五号終

一 謹テ同好ノ諸彦ニ告ク、内外ノ奇說異聞其事実ヲ詳ニ

シ、住所姓名ヲ并記シ、一枚ヲ惠与シ玉バ其製本一冊、

二枚ナレバ二冊ヲ呈シ、聊カ芳志ニ報セン、

一 各種新聞ヲ集メ縦觀セシメ、以テ四方ノ看官ヲ待ツ、

一 博聞新誌定価新貨三錢、毎月五次出版、

十冊ヨリ五十冊迄引請ノ向ハ一割ヲ引、五十冊以上ハ

三割ヲ引トス、右ノ外御定メ郵便賃錢トヲ并セ、前金

授与アラハ速ニ送達スヘシ、尤遠方ニテ売弘メ望ノ向

ハ、本局へ引合ノ上御相談申スヘシ、

本局 東京南鍋町一丁目 博聞社

売 東京通り四丁目
金 花 堂

大阪心齋橋通安堂寺町
秋田屋太右ヱ門

弘 西京東洞院三条上ル
村上 勤兵衛

甲府八日町
内藤伝右衛門

所 豆州三島村市ヶ原町
堺屋又三郎

幡州龍野柑屋町
平井八十郎

一洋製齒磨

右ハ西洋ノ伝法ヲ得テ良薬ヲ饗メ精製シ以テ之ヲ世ニ

公ニス、 本局謹白

冊子原寸 縦二三種 横一五種 九枚

一九八二〇二

(表紙) 明治六年三月 定価四銭

博聞新誌 第十七号

博聞社 付録

緒言

時ナル哉新聞紙ノ世ニ行ナハル、開化進歩ノ捷徑ヲ開キ、世教ヲ裨益スト謂ベシ、然レドモ其多キ殆ンド十種、彼是復出読者冗費煩悶ノ憂ナキ能ハズ、因テ今般官許ヲウケ、公布及ビ内外ノ奇事ヲ輯メ、各種新聞ノ異条ヲ録シ、上梓発売遐壤僻陋ニ至マデ、日新ノ世態ヲ概知セシメンコトヲ庶幾スト云、

博聞新誌第十七号付録

十五号ニ書載スル和田氏応接ノ余ヲ左ニ記ス、

松岡曰、嗚乎忠憤激発頗ル切実ニ出、豈感ゼザランヤ、然シテ其指陳スル処孰レモ無理ナシト思ヘリ、去ナガラ

臣曰、^{テイネイ}丁寧ノ御懇諭亦謝スル処ヲ知ラズ、然リト雖トモ
臣頑固不屈恐多モ今日未ダ嘗テ其朝旨ノ明当ナル者、
臣ガ心ニ於テ更ニ之ヲ了解セザル也、是則愚昧ノ未ダ開
化セザル所以ノ者ト思ヘリ、是ヲ以テ猶退テ勉焉苦学
シテ、以テ自然其朝旨ノ遵奉スベキヲ知リ、然シテ後
事ヲ任ジ、奮然之ヲ勉強セン、臣愚一介ノ書生今何ヲ以
テ自ラ任ジ事ヲ成スヲ得ベキ、唯臣ガ自任シ、君ノ
為、國ノ為尽サンコトヲ欲スル者ハ独封建ノコトノミ
豈他アランヤ、既ニ御採用ナキニ至テハ茫然トシテ亦為
ル処ヲ識ラズ、徒ニ手ヲ拱スルノミ、最モ此事ニノミ県
庁ニ懇請シ来レリ、然ルニ臣今日幸ニシテ斧鉞ノ戮ヲ赦
サセラレ、活命ノ特恩ヲ拜セリ、嗚乎臣ガ幸甚コレヨ
リ大ナルハ無シ、唯願クハ速ニ帰県シ復命スルコトヲ許
サセ玉ヘ、臣更ニ余志ナキ也、御辺亦ソレ之ヲ亮察セヨ、
松岡曰、嗚呼御辺ノ言誠ニ切実ニ出ツ、豈敢テ其ヲ曲ル
コトヲ得ン、最モ旨趣悉ク精当孰レモ余論ナシト討論已
ニ畢レリ、然シテ松岡又曰、凡ソ建白書ノ採用ナキ者ハ、

正副皆返却スルノ規則ナリト雖モ、此節御辺ノ建白ヤ論
諫激切頗ル顔ヲ犯シ、怒ニ触レ、其情忠憤ノ余ニ出ル者大
ニ臣子ノ鑑戒トナスベキ也、是ヲ以テ正副二本ノ者一本
ハ左院ニ藏メ、猶官吏ノ省顧ニ備ヘ、一本ハ規則ノ如ク
返却スベシ、是レ全ク御辺ノ忠志ヲ空フセザルノ朝意
也、御辺ソレ之ヲ了知セヨ、臣対テ曰、誠ニ恐入ルベキ
也ト、松岡又曰、今日御辺ト一席ノ論談予未ダ心ニ飽キ
足ラズ、必ズ又一夕閑室ニ於テ優遊トシテ討論ヲナサン
ト、臣謹デ命ヲ拜スト云テ辞シ退ケリ、然シテ翌廿四日
招ニ応ジ松岡ノ私室ニ訪フ、亦前日ノ事旨ヲ続ギ討論説
破丁寧反復懇々トシテ言ヲ尽シ、更ニ余心ナキ也、然ト
モ朝旨至敵亦犯スベカラズ、故ニ臣依違決セズシテ罷
メ去レリ、

壬申十一月

和田正道自識

記者曰ク、夫レ進言ノ難キ古人之ヲ戰鬪ニ比ス、苟モ
精忠身ヲ忘ルノ士ニ非バ、誰カ能ク尺言シテ不測ノ禍

ヲ蹈^フンヤ、和田氏ノ論其当否如何ヲ知ラズト雖トモ、
 今日太政ノ枢機^{スツキ}ヲ掌^ツル右大臣參議ノ諸公ヲ売國ノ佞臣
 ト指^サ目シ、時運ニ依テ既ニ成ルノ郡県ヲ今俄^{シカ}ニ封建ニ
 復^サセント欲ス、其言暴激^{ボウケン}ニシテ時機ニ迂ナル無ランヤ、
 然レトモ方今制度變更ノ際、或ハ是非得失ナキ能ハズ、
 而シテ開化ノ弊^{ヘイ}一ニ洋風^{オウフウ}ニ流ル者アリ、和田氏夫レ或
 ハ激スル所アツテ此言アルカ、之ヲ要スルニ憂國愛君
 ノ衷^{ウラ}ニ出ル所ニシテ所謂精忠身ヲ忘ルノ士是ヲ阿諛^{アゴン}利
 ヲ規^ヘル者ニ比セバ果シテ何如ゾヤ、松岡氏ノ之ニ接ス
 ル慰諭^{ヱイゴン}懇篤^{コントク}其理ヲ弁明シ、聊^{イッ}カ加ルニ威權ヲ以テセズ、
 是レ 朝廷士ヲ待ツコト厚ク進言ヲ勸奨スル所ニシテ、
 上下各其道ヲ得タリ、近爾ノ一美談ト云ベン、
 ○第十七号ニ書載スルビルジニヤ兵学校ブローク氏ヨリ
 小野氏へ来翰ノ後ヲ記ス、
 日本国民一般ノ教育ヲ施サンニハ、先ヅ衆庶一般ノ教
 導^{オウ}ニ要スル外國初学ノ書教部、都テ之ヲ日本語ヲ以テ訳
 シ、及ビ万国普通^{フツウ}ニ用ユル教表及ビ図表ヲ記載シ以テ之

ヲ行フベシ、而シテ此事業ヲ成ニハ外國ニテ研學^{ケンガク}セシ日
 本人ヲシテ諸科ノ善書ヲヨク訳シ得ル者ヲ日本政府ニ於
 テ命ズヘシ、而シテ其訳書ヲ刊行シ諸学校ニ於テ之ヲ用
 ユベシ、斯^カシテ人民一般教育ノ為メ一層高尚ナル学科ノ
 書ヲモ訳セシメ刊行スベシ、終ニ學問ノ諸科日本語ヲナ
 セル初学及ビ高尚ナル諸書全備スルニ至レバ、日本ト雖
 モ外國ト異ナラザルニ至ルヘシ、若シ如斯為サズンテ外
 國語ヲ用ヒ外國ノ書ヲ以テ日本人ヲ教育セントスレバ、
 其教育ノ法自國ニ立ズ、辛^カフシテ外國語ヲ學ビ、外國人
 ノ如ク教育セラレン所ノ者ハ、自然外國ノ學問ヲ尊^{タツ}ビ、
 教育ノ事ニ就^ツテハ毎ニ外國ノ法ヲ仰^{アホ}グニ至ルベシ、而シ
 テ既ニ數年ヲ経テ外國大ニ進歩シ得タルモ、日本ハ之ヲ
 得ル能ハズ、故ニ僕ガ論ズル學問ヲ用ユルヲ急務^{キウム}トス、
 之ヲ行ヒ成功ヲ奏^{ソウ}スルニハ、日本ニ於テ既ニ此學問ヲ自
 國ノ語ニ翻譯^{カシヤク}ナサルヲ得ズ、如斯スル時ハ其學問大ニ
 盛大ニナリ、現今日本從來ノ學問ヲ講習スルト其勞異ナ
 ルコトナキニ至ルナリ、而シテ此學問終ニ日本人固有ノ

モノト成リ、其國民所有ノ習練ニ從ヒ進歩シ能フベシ、
既ニ其習練ハ外國ト優劣ナキニ至ルベシ、僕君ノ速ニ回
答アランコトヲ希望ス、貴書ノ惠投実ニ雀躍ニ堪ヘザル
也、庶幾ハクハ君ニ侍シテ以テ事ニ從フヲ得バ僕ノ僥幸
何ヲカ之ニ如シ、往年ニウヨルクヨリ懇友ノ印トシテ僕
ニ賜フ所ノ時計殊ニ良品之ヲ見ル毎ニ君ヲ思ハザルアラ
ズ、且日本ニ於ル僕ノ友人ヘ宜敷伝声シ賜フベシ、君ノ
起居健ヤカナランコトヲ願フ、頓首、

千八百七十二年第七月二十五日

ブロークヨリゼンケンヘノ添翰

旧友小野友五郎ノ投書在中ノ貴翰落手拝見欣然ニ不堪候、
然バ今般同氏ヘ回答ニ及ベキノ処、其宛所不分明ニ付君
ニ托シテ通達ヲ請フ、君日本國ノ事情ヲ實驗シ以テ思慮
セヨ、爰ニ論說スル所ノ者ハ重大ノ事件ニシテ同國人物
ニ付僕ガ既ニ熟知セシ所ノ者ト甚符合セリ、且我米利堅
人ノ如キハ恐ラクハ他國ノ者ニ比スレハ、合衆國都府ノ
人物タル所以ノ仁人君子ノ風多シト雖トモ、日本ニテ愛

シ置ク所ノ留ノ上手工者小商人等ナル者ヲ歎息ス、蓋シ
此等ノ徒ハ仁人君子タルベキ者少クシテ小人多キモノナ
リ、今般同氏ヘ書ヲ送リテ教育ノ事件ヲ論ズ、僕教頭タ
ルニ因テ幸ヒ教育ノコトヲ知ルヲ得タリ、教導上ノコト
ハ其根本ニ基キ開化ヲ進メ、良善ヲ起スヲ主トス、因テ
今其教則ヲ論ズルナリ、方今日本ニ於テ如何ノ者ニ施行
スルヤ僕之ヲ知ラズト雖トモ、必ズ一兩名ノ手ニ出ルヲ
知ル、又日本教育ヲ施スニ直ニ外國ノ方法ヲ要セント欲
スルヲ知ル、愚按ズルニ其教育ハ自國ノ方法ヲ以テシテ
直ニ外國ノ法ヲ用ユベカラザルベシ、之ニ因テ同氏ヘ告
知シ其教育ヲ施行スルニハ、先ヅ初学ノ良書數部ヲ日本
語ヲ以テ翻訳シ、國民一般ノ為之ヲ刊行シテ以テ文明國
普通ノ數表・圖表ト共ニ諸學校ニ用ユベシ、而シテ後高
尚ナル書モ亦之ヲ訳セシメバ、遂ニ日本ニ於テ其國ヲ以
テ頭サル諸学科書全備スルニ至ルベシ、此本翻訳ノ事業
ヲ成スニハ日本人ノ曾テ外國ニテ研学セシ者ヲ命ズベシ、
斯ノ如キ教則ニ依テ以テ行フ時ハ、天性ニ戻ラズシテ其

模範学校ノ称スル所ノ名義ニ背カザルコト自カラ明ラカ
 ナリ、又日本ノ人物ニ於テ大ニ感称ス、若シ万国ニ交通
 シテ最初バーコン氏ノ理学ヲ学バシメバ、其学歲月ヲ経テ
 大ニ進歩スベシ、然トモ速ニ其成事ヲ得ンコトヲ務テ却
 テ人民一般学ビザル而已ナラズ、之ガ為日本ニ於テ其貴
 人タルベキ高風士氣ノ衰ヘンコトヲ恐ル、吾輩往昔ノ開
 化ヲ見ルニ、其功績強盛ニシテ風俗ノ淳美、器械学ノ隆
 盛ナルヲ知ル也、正ニ日本ニ於テ其自然ノ高尚ヲ顯シテ
 以テ其国民ノ氣象ヲ基本トシ、開化ノ成業ニ至ルベキ事
 ヲ希望ス、右教育ノ愚ガ説ハ皆學問ヲ進歩セシムル所ノ
 者ナリ、右一条ニ付僕ノ愚考ヲ呈ス、足下之ヲ以テ至当
 トセバ日本長官ニ会シ、幸ニ之ヲ進達セヨ、之レ僕ノ大
 慶之ニ過ザルナリ、

右ノ事件ヲ論説スルコト甚簡易ニシテ、若其意ヲ尽サバ
 レバ他日之ヲ詳論スベシ、

君日本ノ海岸ヲ世界中ノ美景ト思ハザルヤ、此地ノ開化
 セシ前、下田ヨリ箱館迄、僕ノ船行ノ愉快ヲ察スベシ、

就テ僕モ亦屢バ此行程ヲ今ニ忘レズ、実ニ歎ズベキハ往
 日其旅行同船ノ交友相会スルヲ為スニ由ナキ也、レキス
 ントンハ山地ナレトモ其候熱スルガ故ニ休業ヲ為シ、即
 今其休業ノ半ナリ、大抵夏ノ間ハ海辺ニ暑ヲ避ケルト雖
 トモ、今年ハ暑氣ニ感傷セリ、当国盛ニ改革ヲ行ヲ務ム
 ルガ故ニ、此忠告ノ成否如何ヲ論ゼズ、两国間ノ親睦増
 加スベキコトヲ知ルナリ、

今爰ニ施行スル所ノ學則其度ヲ得ルヲ以テ、吾輩大ニ満
 足ス、僕ノ居宅ノ裏門ニ於テセキスタントヲ以テ時刻ヲ
 監定シ家族ト共ニ住ム所ノ草庵ヲ治ムルヲ以テ樂トス、
 當時靜謐僕ニ於テモ無事也、足下ノ懇書謝スルニ不堪、
 頓首、

○大坂府権知事渡辺昇殿撰スル所勸学ノ文ヲ記ス、
 獅子ノ子ヲ生ム、必ズ之ヲ千仞ノ谿ニ擠スト、是其子ヲ
 憎ムニ非ル也、雉ノ卵ヲ覆フ其野ノ焼ルニ当テハ、己ノ
 羽翼ヲ焦爛スルヲ顧ミズト、是其身ヲ惜マザルニ非ル也、
 皆其子ノ成立センコトヲ思テ也、禽獸且然リ、況ヤ万物

ノ靈タル人トシテ誰カ我子弟ノ能成立スルヲ願ハザル者
 有シヤ、然ニ府下從來ノ風俗女ヲ生バ必ズ糸竹歌舞ヲ教
 へ、男ヲ生バ必ズ活花煎茶ノ技ヲ習ハシメ、游治風流ニ
 歳月ヲ費シ、一小技中ニ一生ヲ終ル、是豈天与ノ美質
 ヲ全成スル者ト云シヤ、今哉 朝廷天下ニ学制ヲ敷キ、
 邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人無ラシメントス、是他ナ
 シ、海内ノ人民ヲ子視セラレ其成立セシコトヲ図ラセ玉
 フ、無限ノ仁慈豈感戴セザル可ケンヤ、然ルニ真ノ父母
 タル者却テ眼前ノ愛ニ溺レ、稚兒ノ我膝ヲ離ル、ヲ嫌ヒ、
 或ハ苦学ノ病ヲ生シコトヲ恐レ、或ハ学資ヲ厭テ子弟ノ
 成立ヲ思ハザル者アリ、獅子ノ愛ヲ忍デ其子ヲ擠シ、雉ノ
 卵ヲ擁シテ己ガ身ヲ燒ノ情ニ比スレバ、万物ノ靈タル所
 以ノ者其レ何クニ在ヤ、希クハ人ノ人タル道ヲ尽シ、
 身ヲ責テ学資ヲ助ケ、愛ヲ忍テ学路ノ難ヲ履マシメ笑ヲ
 禽獸ニ招カズ、 朝廷仁慈ノ大旨ニ負カズ、子弟ヲ成立
 シテ一家ノ榮ヲ来サンコト、府下一般ノ人民其レ之ヲ思
 ヘヨヤ、

記者曰ク、大坂府ハ素ヨリ殷富繁榮ノ地ト雖、人心頗
 ル固陋ナリシヲ、府庁ニ於テ大ニ尽力アリ、政令能ク
 行届キ施設ノ間緩急取捨其宜ヲ得、人情ニ随テ教誨
 誘導アリシカバ、人民一般悦従シ、駭々トシテ開化ニ
 趣ケリ、其教誘ノ厚キ是ノ文ニ就テ亦以テ見ベシ、
 博聞新誌第十七号付録終

物価略表

米兩ニ上二斗五升二合 中二斗六升四合 下二斗七升五
 合○大麦兩ニ七斗五升○小麦三斗六升○大豆兩ニ二斗八
 升○小豆二斗八升○茶一貫目ニ付上二百廿匁 中百五十
 五匁 下百六十匁○醬油上八分五厘 中一樽七分 下二
 樽五分○味噌上九貫九百目 中十貫八百目 下十一貫三
 百目○田舎ミソ上十一貫目○油十樽ニ付坂水百十二兩
 地水九十五兩 魚油上六十七兩 下四十兩○塩兩ニ赤穂
 三俵 本才四俵七分 新才五俵二分○生糸一品奥州三百
 七十兩 浜付三百二十一兩 信州三百七十兩 米沢三百

八十兩○繰綿兩ニ扱上六百六十目 扱丹七百五十目 尾
上六百六十目○蠟兩ニ上一貫二百十目 下一貫二百二十
目ヨリ七十目 晒八百三四十目 洋銀六十二匁二分七厘
第三月廿日調

一 謹テ同好ノ諸彦ニ告ク、内外ノ奇説異聞、其事實ヲ詳
ニシ住所姓名ヲ并記シテ惠与シ玉ヘ、則其製本ヲ呈ス
ヘシ、

一 博聞新誌定価新貨三銭 毎月五次出版

十冊以上引請ノ向ハ一割半引、四十冊以上ハ二割半引
トス、右ノ外御定郵便貨錢トヲ并セ、前金投与アラハ
速ニ送達スヘシ、尤売弘メ望ノ向ハ本局ヘ引合ノ上御
相談申スヘシ、

本局 東京都南鍋町老丁目 博聞社

東京日本橋通四丁目
金花堂

売 西京東洞院三条上ル
村上勘兵衛

大坂心齋橋通安堂寺町
秋田屋太右衛門

弘 甲府八日町
内藤伝右衛門

所 豆州三島市ケ原町
堺屋又三郎

播州龍野紺屋町
平井八十郎

冊子原寸 縦三二種 横一五種 一二枚

一六三 作州津山平野耕平ヨリ集議院ヘノ建白

三河国土地開墾ノ件 三通一綴

人蔘栽培ノ件

同前

一九八三ノ一

(朱) 集議院江建言書写

建白書

御維新以来百事開化之秋、素既

御体裁整備更御遺漏可被為在筈は無御座候得共、遠境瑣

細之儀は

上聞ニモ被為在間敷ト奉存杞憂難黙止謹愚意奉建言候、

元額田県御管内三河国は人民多候故小前末々之者活計ニ

苦、往々棄兒墮胎之惡風習モ有之、惘然之至奉存候、然

ル処同国内不毛夥敷故障聊モ無之、開墾之地凡拾万石余

モ可有御座、右成開五穀桑茶綿等種付候ハは、民富国饒

終ニ墮胎之弊風モ相減可申候ニ付、同国之有志輩屢県庁

江出願候得共、御多端之故欸書面御預之俟有無之御沙汰

無之内、県名御廢止愛知県江合併相成候得は、当分之内

は別テ御多端ニ付、有志輩又々失機候次第ニ御座候、

扱私儀三州表ニは旧來之知己有之、殊昨今暫寄留仕、不

毛之実地目撃且国情モ略承知罷在候処、同国不毛之地入

札御払下ケ相成候而は却而不都合ト奉存候、其故は小前

身薄之者は力不及、一面之広場多候間、富豪之者モ十分

之入札不仕、依之同国不毛忽開墾相成候主法大略左面条

列奉申上候、

一不毛之地反別地味或ハ畑、篤ト相調比隣古地田畑当今至

当之直段引格ヲ取り、上等之地は五分ト 古田畑千兩相

兩ト相 定メ、中等ノ地は四分ト 古田畑千兩相當ニ候 定メ、

成候 下等之地は三分ト 古田畑千兩相當ニ候 定メ、右之通先ツ

仮ニ直段ヲ設、不毛不殘地位定メ 可成丈ケは地元村々ニ於

相任、地元村方望人無之候ハ、隣村 置、扱開墾望人有之候得

隣々村江も相談致候様有之度奉存候 置、扱開墾望人有之候得

は、又々実地検査之上可被 仰付事、

但開墾費用詳細見積、最多分ノ入費不相掛種芸之品

能生熟可致地味ナレハ、五ケ年之畝下被 仰付、六

ケ年目より至当之御租税上納可被 仰付地ヲ以上等

トシ、或ハ開墾堤防等ニ多分入費相掛、且地味亦次

ナルヲ中等トシテ畝下七ケ年被 仰付、尚入費多分

相掛畝下十ケ年之処は又其次ニシテ下等ト究候也、

一地処望出検査相済候ハは、仮ニ設置候直段之十分一ヲ

上納、而後開墾可致事、

一上等五ケ年畝下之分、六ケ年目より御租税ハ相極リ候

得共、皆代金上納之儀、中等下等共同様十ケ年目ニ至

リ、其節又々比隣之地所至当之直段引格ヲ取確定シ

五分四分三分三等之、
規則前件之通ニテ、
初年仮之直段ヲ以十分之一相納置候
金ヲ立用ニシテ、
殘金皆済候事、

一開墾之場処一統ニ幾拾町歩モ有之候ハは、
割地ニ致五
町歩ヲ以一株ト定メ
一人ニテ何株引請候モ不吉、又一、
株之内幾人合併致候モ不吉候也。
地位相定置候通、
各十分之一納済之上相開候様可被

仰付候事、

一幾百町歩モ一統相成候場処有之、
望人割地引請候跡尙
教株開余有之候ハは、
兼而國中身元髓成開墾有志之者
江開墾世話役被
仰付置、
其者共同盟協力、
規則ニ応
出金速成開可仕事、

但望人十分之一相納置、
若十二ヶ月以上其假捨置
入不致者は、
其地所御引揚、
且相当之科料錢出サシ
メ、
地面は外望人江開方被
仰付候様有御座度候也
農家狡猾之者種々云
々之儀御座候故也。

一開墾世話役之者開墾場処年中見廻、
成田出精候様教諭
致候手数料トシテ、
百坪ニ付一ヶ年銀壹匁ツ、
取立、
是ヲ以入費ニ給候様可被
仰付事、

右此方法ヲ以愛知県御管内三河国身元人物髓成者江開墾
之儀、
加茂郡足助村鈴木利十郎・幡豆郡矢田村杉浦・豊田郡下新井村三
矢平三郎・碧海郡鶴ヶ崎村南部篠松右等歎モ人望有之者共ニ御座
候、
御委任被
仰付候ハは、
富豪有志之者并諸旧藩士兼

々婦農望之者等協力奮発速成効可相成、
入札ニ而ハ第一
人氣ニ係、
職業怠リ、
空敷日ヲ費無益之事ト奉存候、
併
皇國御一般中は夥敷不毛御座候儀、
中中以私風情并蛙管
見之難及次第ニ御座候得共、
三河一國不毛之地ニヲイテ
ハ此法御施行相成候ハは、
屹度相開可申ト奉存候、
若当
春開墾相後レ候得は、
一ヶ年幾拾万金之宝ヲ失道理御座
候間、
偏

御英断被為在度奉祈上候、
猶又國中胎毀之數一ヶ年凡千
人余モ可有御座候処、
前件之通耕地潤沢相成、
窮限追々
安業ヲ得候ハは、
漸々弊風相止幾万之蒼生蘇息仕、
莫太
之御仁恤厚可奉感戴候、
誠恐誠懼頓首、

癸酉二月

作州津山
平野耕平

集議院御役所

一九八三ノ二

建白書

皇国御種人蔘往古は日光名産ニ御座候得共、当時雲州・会津ヲ以上等ト称シ、産出之數亦多分ニ候、然ル処私生国伯州ニ而祖父之代より試作仕、其製品雲州同様相成、廿ヶ年前領主江建白仕、即因伯両国人蔘植付教諭方役被命、漸々盛種付相成候、私儀ハ作州ニ住居仕候故、同処ニテ年々試作仕、大阪薬店江売捌候処、雲州同様之製品ト申事ニは候得共、何分聊之品數ニ付支那人直引合不能、薬店江相嘱候間、格別之利益モ無之、其内ニ私儀京都府出仕被命、彼是蔘作打捨、扱免職後は專開墾ニ而已志候処、此頃追々支那国之模様相伺候得は、

皇国之人蔘直段頗貴趣、幸駿遠ニ濃信等芝原無税之地沢山有之、人蔘作ニは至極之地味御座候間、盛ニ作立候様御告諭被為在度、尤其土地之者作法熟候迄は

官圃ヲ所々ニ御出来被遊、追々農民伝習シ、作立候生根は至当之直段ニ而御買上ケ相成、勿論農業之間ニ出来仕、尚手數モ多分不掛品ニ御座候、依之左ニ作方大略奉記載候、

一不毛之芝地老反歩 薬園諸入費

金百廿兩 壕代馬糞 金并人賃竹木諸品

金六拾兩 五ヶ年之間草取其外手入賃共

金七拾兩 三ヶ年目位ニ屋根掛替入用

ノ式百五拾円

金五拾兩 掘立并製諸入用

合金三百円

一生蔘方 式百貫目 但極上地ニ而四百貫目其次三百貫目より式百五拾貫目位迄ニ御座候、

製根方 四拾八貫目 但式分四厘上り之積り立

但上品は三分五厘位より其次三分位又次式分五六厘位は何国ニテモ上り候也、

此人蔘三百斤 但百六十目斤

此代金凡七百五拾兩

但横浜・神戸・長崎ニ而売捌候而も平均此直段ニは可相成候、

右人蔘代佃支那国ニ而は凡拾層倍ニモ相成候趣ニ御座候
間、乍恐各地方

御長官方江御説諭被為在、海内不毛之地江広種芸相成候
様奉祈上候、最製法之儀肝要ニ而、肥後人蔘は製方不宜
故、直段大違ニ御座候、元来此品外作物ト違

皇國中は一樣ニ可有之処、製ニ依テ品格異候は可歎事御
座候、私経験仕候処、暖国は猶更宜敷分留モ多御座候、

芸州杯步留宜、四国之地ニモ能応候得は、製熟練為致度
候、旧習ニ而口伝秘事杯ト称開化ニ不至、却而外国江粗

末之品ヲ渡可恥次第二付、希諸国一般旧癖相除、一同墾
熟仕製一樣相成候ハは、是亦眼前之国益、外国江対シテ

ハ、
皇国之美名之一端欵ト奉存候、猶又此作強凶豊モ無之候

間、
皇国一般江御布告被遊作法伝習仕候様、御教導偏奉仰候、

誠恐誠惶頓首、

第一大区小十四区堀江町三丁目拾番之地所
桑島屋雄雄主方止宿

集議院御役所

癸酉三月二十三日

作州津山

平野耕平

西四十四歳

一九八三ノ三

建白書

第三月二十三日御種人蔘之儀上書仕置候得共、素不学文
盲ニ而愚慮之万一不能陳述遺憾之至奉存、又々奉建言候、
扱当今海内諸州より所産之斤数凡三拾万斤計モ可有御座、
右品一斤ニ付弍円半位之引当ニテ不残御買上相成、当冬
支那国江漕輪御売払之上、過当之利益御座候ハは、夫々
江割合ヲ以 御分与被 仰付度、就テは兼々奉申上候通、
製方第一之品ニ候間、肥後ヲ始芳野・信州等江製方伝習
且培養法モ能熟練候様御教導被 仰付候ハは、莫太之
御国益ト奉存候、凡毎歳六月種登七月製候ニ付、従来諸
州蔘作致居候場所江早々御出役被為在、製法は勿論作方
等其土地新畑当年植付之
種精撰之儀肝要御座候御説諭有御座度奉存候、若御採用被

為在候ハは、乍恐御買上代金之儀は私共兼而存知罷在候
富豪有志之者江申談候テモ、國家之為方ニ候間奮發仕御
引請可申上候、何分只今之通ニテは在留之支那人江悉利
益ヲ被奪、残念之次第御座候間、偏御英断奉祈上候、右
は不顧不肖屢獻言奉恐入候得共、報國之微衷迄ニ御座候、
尚參作製ニ於テは、種々奉言上度儀御座候得共、賤陋不
文不能尽万一、誠恐誠惶頓首、

癸酉四月三日

作州津山

平野耕平

集議院御役所

冊子原寸 縦一九櫃 横一四櫃 一〇枚

一六四 城井寿章ヨリ久光公へ

詩六首

一九八四ノ一

(包紙ウラ書)

「巴調」

一章」

英雄拳事貴投機 連滯怪

公幾失時

盟頼所呈果断字 猷芹微意請三思

文書原寸 縦一五櫃 横三五・五櫃

城井寿章
再拝写

座下積薪御顧然 有人咄々泣呼天

魯戈回日是

公任 何仰波慶淚滋然

聞人誦

島津相公詩有感

恭次

高顔青奉呈下執事

寿章

再拝写

文書原寸 縦一五櫃 横五一櫃

正邪不兩立 薰穢難同器

拳賢尤所難 去惡亦不易

七日誠正卯 三月魯國治

一朝放四凶 雪廷御善類

巫人大作用 唯在一斷字

讀史有感

寿章

未定稿

叱正

文書原寸 縦一五種 包紙原寸 縦二四・八種

横六〇種

横三四・五種

一九八四ノ二

(包紙ウツ書)

「巴調 二章」

讀史有感

幾歲養阿西海濱 忍聞廟議日紛々

早揮撰帝候龍手 一掃城狐社鼠群

三聘熱懃起海隅 慨然力疾贊皇國

莫言安石謝安字安石 出山後 天下蒼生猶未蘇

癸酉晚夏下澣

寿章

未定稿

文書原寸 縦一五・三種 横六八種

黃霧濛々日色微 妖重時見犯皇畿

明公自有回天手 早向中原試一揮

癸酉春 讀史有感

寿章

未定稿

文書原寸 縦 二三種 包紙原寸 縦二五種

横二・二種

横三五種

一九五 「ニコライ」司祭ヨリ副島外務卿へ

不敬語ノ弁解

一九八五ノ一

高閣下子ヲ責テ曰ク、聞ク爾ノ門人我國

皇帝陛下ニ対シテ不敬ノ言ヲ発スト、是爾ノ教ル所乎、

予謹テ答フ、門人ノ口ニ出ル言ハ概ネ師ノ意ニ出サルハ
ナシ、故ニ其罪ヲ師ニ責ルハ固ヨリ当然ナリ、然ルニ
高閣下議スル所ノ罪ヲ予ニ帰スル者アラハ、予他ナシ、
唯謹テ公裁ヲ請フ、確ナル証人有リ、予ノ実ニ貴国

皇帝陛下ニ対シテ不敬ヲ教ルト証セバ、予ノ足再ヒ貴国
ノ地ヲ蹈マス、裁判決定ノ日、西界ニ向フノ舟ヲ載セ
帰リ、終身日出ノ域ヲ予ノ目ニ隠サントス、弊邦ニ帰ル
後モ予ノ罪猶大刑ヲ免レサラン、夫レ人アリ、僕ヲ親朋
ノ家ニ遣ハシ賀音ヲ贈ントス、然ルニ彼僕受ル所ノ命ヲ
果サズ、却テ其家人ヲ擾シ、其家規ヲ破ル等ノ罪有ラバ、
彼ノ主將ニ如何ナル罰ヲ以テ其僕ニ加ヘントスルヤ、謂
フニ、諸刑諸罰ノ中彼罪ニ越ル者ナシ、蓋シ其僕実ニ人
ノ性ヲ失ヒ、人ノ列ニ入ルニ足ラズ、噫、高閣下議ス
ル所ノ罪ハ実ニ醜恥恐懼スベキ大罪ナリ、故ニ予愈固ク
公裁ヲ促ス、吾ガ教ニ此罪ヲ帰スル者何人ソヤ、予ノ門
人ノ中此罪ヲ犯ス者誰ソヤ、若シ或ル者予ノ門人ト称シ、

而シテ

皇帝陛下ニ対シテ一言モ不敬ノ語ヲ発セバ則チ此人妄人
ナリ、予彼ニ関カルナシ、若シ予自ラ門人ノ中

皇帝陛下ニ対シテ不順ノ心ヲ懷キ、不敬ノ言ヲ発スル者
アルヲ認メハ、則チ直チニ斯ノ若キ人ヲ門藉ヨリ放逐ス、
蓋シ此人

朝廷ヲ干カス先ニ既ニ吾ガ教ヲ干ス、

皇帝陛下ニ対シテ逆臣トナラザル先ニ既ニ天主ノ逆臣ト
ナル、彼モ亦予ノ関係スル所ニ非ス、夫レ声ナケレハ響
ナシ、火ナケレハ煙ナシ、吾ガ教中何ニ縁リ

皇帝陛下ニ対シテ不敬ノ心生センヤ、吾ガ教ハ私教ニア
ラス、乃チ天主ノ聖言ナリ、此ノ聖言命スル所左ノ如シ、
曰ク、上位ニ居ル者衆宜シク之ニ服スヘシ、天主ノ命ニ
非サレハ則チ位ニ居ル者ナシ、凡ソ位ニ居ル者皆天主ノ
命スル所ナリ、位ニ居ル者ニ敵スルハ、是レ天主ノ命ニ
逆フト為ス、逆フ者必ラス罪ヲ受ク
新約書羅馬人ニ達スルノ
書十三章一節ヨリ三節ニ
至、当サニ世人ヲ統轄スル者或ハ上ニ在ルノ王、或ハ王

ノ命スル所ニ服スヘシ同ク彼得ノ前公、書二章十三節 君主ヲ敬セヨ同ク十

王ノ為メニ籲告祈禱求恩祝謝セヨ云々同ク提摩太ニ達ス、多

文ヲ引クニ違アラズ、全聖書コレニ同シ、此ノ如キ誠ハ

君王自ラ奉ズル所ノ教ニ毫モ関カルナシ、蓋シ天主ノ教

世ニ顯ル、時ノ君王ハ此教ヲ受ケザルノミナラズ、即チ

コレヲ首敵トシ、恒ニコレヲ苦難窘逐シ、ハリストス世

リ用ル所切支丹ノ本音ナリノ親シキ宗徒彼ノ誠ヲ世ニ伝ヘ及ヒ、全新約

書ヲ述ベシ者皆苦難中ニ命ヲ致スニ至ル、ハリストス以

後三百年ノ間、都テ天主ノ教ヲ奉スル者ノ血流ル、コト

川ノ如シ、此教ヲ奉スル者其君王ニ於ルノ關係ヲ試ミ、

曉ルニ十分ノ時ナリ、彼世ノ史ヲ披テコレヲ視ヨ、天主

ニ叛カサルカ為ニ諸君王ノ命ニ依テ、苦難刑殺セラル幾

万幾億ノ中チ、誰カ君王ニ對テ不敬ヲ言ヒ、或ハコレニ

服セサルヲ教ヘ、而シテ死スル者有ルヤ、決シテコレナ

シ、耐カタキ苦ミ中ニ死スルモ天主ノ教ヲ奉スル者ノ口

君王ニ對テ佗言ヲ出タスコトナシ、唯コレガ為ニ祈リ、

コレニ服スルヲ教ユ窘逐中ト雖トモ此教ハ愈繁盛セリ、

遂ニ帝室諸官署及ビ軍營ニ満ルニ至ル、而シテコレヲ奉

ズル者ノ中チ君王ニ叛クノ例一モアルコトナシ、職ニ任

ズルニ遇テ職ノ為ニ心ヲ尽スニ、天主ノ教ヲ守ル者ト誰

カ能ク肩ヲ比センヤ、蓋シ天主ニ叛クノ外カ他事何ニ於

旨〔付紙〕頭末務メテ其非ヲ斷ル、惜ラクハ懷蓄ノ與 天主ニ叛クノ外此七字ニ影射ニ比シテ問シ、我意ニ逆ノ外必ス父母ノ命

テモ君王ノ命ヲ受ケ、唯君王ノ命トスルノミナラズ、即

チ天主ノ命トシテ而シテ行フ軍ニ遇フテ君王ノ為ニ命ヲ

致スコト、亦誰カ能ク此者ニ勝サランヤ、窘逐セラル、

時ニ順ナルコト羊ノ如ク、窘逐セシ君王ヲ守護シ、国敵

ヲ防禦スルコト虎獅ノ如ク、天主ノ教ヲ奉スル者ノ外誰

カ能ク及バンヤ、皆是レ私言ニ非ス、即チ史伝ナリ、披

キ視テ予ノ言ノ確ナルヲ覺ユ可シ、今ノ天主ノ正教ハ西

語ヲトドクスト称スケレテヤ及ビ〔洋〕ハリストス及ビ彼レノ親シ

キ宗徒教ル所ト毫モ異ナルコトナシ、故ニ敢テ言フ、今

モ君王ニ對シテ忠ヲ尽スコト此教ヲ奉スル者ニ若クハナ

シ、予隱サズ貴國中ニモ既ニ此教ヲ奉ズル者アリ、而シ

テ

皇帝陛下ニ對テ彼等ノ心如何、貴国人ノ初メ教会ニ入ル

ヤ祈禱スルニ及ンテ、其發端ニ唱フル所乃チ「天主ニ求ム、

日本皇帝ヲ佑助シ、其后妃及ビ皇族ヲ護リ、彼等ニ平康安和及ビ永生救贖ヲ賜へ、並ニ諸仇ニ勝ツヲ得セシメヨ」トノ祈禱ナリ、既ニ教会ニ入ル後集リテ天主ヲ拜スル毎ニ此ノ祈禱ハ諸願ニ先タチテヨリ發セサルハナシ、斯ク天主造物主ノ前ニ心願ヲ尽シ、唱ヒ慣ル、所ノ

皇帝陛下ノ尊名ハ豈他時輕シクコレヲ用ルニ忍ンヤ、小例ト雖トモ察スベシ、去年春仙台及ヒ函館ニ天主ノ正教ヲ奉ズル者ヲ捕ヒ、敵ニコレヲ鞠スル時、多人ノ中チ一人モ

皇帝陛下ニ對シテ不敬ノ言ヲ發スル者アリシヤ、未タコレヲ聞カズ、當今ノ

朝廷恩惠涯リ無シ、然ルニ万一天主ノ教ヲ奉スル者ヲ攻メテ皆死刑ニ処スルコトアラハ、今モ天主ノ正教ヲ奉スル者黙シ、順テ其首ヲ刑卒ニ供へ、而シテ

皇帝陛下ノコトヲ祈禱スルハ唯死シテ後已ム、天ハ地ニ

何ソ其レ遠キヤ、

皇帝陛下ニ於ルノ不敬ハ天主ノ正教ヲ奉ズル者ノ心ニ遠キコト此ノ如シ、其不敬毫モ人ノ心ニ萌サバ此ノ人ノ為メ天主ノ教会其門既ニ閉ツ、顯然タル

皇帝ヲ敬セザル者烏ソ能ク幽焉ノ天主ヲ敬センヤ、見ユル所ノ民ノ父ヲ愛セザル者烏ソ能ク在天ノ父ヲ愛センヤ、噫、予ノ門人ハ

皇帝陛下ニ對シテ不敬ノ言ヲ發スト云ハ、何ソ其レ実ニ戾ルノ甚シキヤ、高閣下願クハ義裁ヲ賜へ、頓首敬拜

魯西亞國司祭尼^(ニコライ)适頼

明治六年三月二日

外務卿

副島種臣高閣下

一九八五ノ二

明治六年三月二日魯西亞國司祭尼适頼、外務卿副島種臣閣下ニ答ル書中解シ難キ所アリ、依テ聊カ陋説ヲ贅

シテ以テ識者ニ質サントス、

夫レ人アリ、僕ヲ親朋ノ家ニ遣シ賀音ヲ贈ントス、然ニ彼僕云々、

尼适頼ノ北辺ニ来リ布教スル、茲二年アリ、其間我カ国民ヲ誘ヒ、其本体ヲ棄テシムルコト殆ト数百員ニ及フ、此徒皆我神明ヲ蔑棄シ、君父ヲ輕視ス、如是非常ノ行事ニ适頼ノ教ユル所カ、將彼カ知ラサル所乎、而シテ却テ其家人ヲ擾シ、其家規ヲ破ラサルノ意ヲ著ス、解シ難キ一也、夫我國人ヲ教ユル常経、其大体ヲ明メ、其礼節ヲ守リ、其知識ヲ広メ、其行儀ヲ淳ススルニアリ、元ヨリ教法ハ政府ノ令スル所ニアラスト雖トモ、民心ノ向否ニ依テ、政ニ関渉スル大ナル所ロアレハナリ、

若シ或ル者子ノ門人ト称シテ、而シテ

皇帝陛下ニ対シテ一言モ不敬ノ語ヲ発セハ、則チ此人妄人ナリ、予彼ニ関カルナシ、

若或ル人尼适頼ノ門人ト称シテ不敬ノ語ヲ発セン時、

一概ニ関係ナシトスヘカラス、宜シク其門人ト偽称ス

ルノ証ヲ明ラカニシテ、而テ后関係ナシトスヘシ、然ルヲ只妄人ト目シテ関カルナシト書ス、不可解二也、

若シ予自ラ門人ノ中、

皇帝陛下ニ対シテ不順ノ心ヲ懷キ不敬ノ言ヲ発スル者アルヲ認メハ、則チ直チニ斯ノ若キ人ヲ門籍ヨリ放逐ス云々、

曾テ尼适頼学舎洗礼式ヲ閱ルニ、本文ノ意ト齟齬セリ、固ヨリ天主教ノ正否ハ我カ論スル所ニ非ストイヘトモ、苟モ我國体ヲ誤ル者一人ト雖モ、我政府ノ焦心煩慮ヲ喜ムヤ否ヤ、況ヤ又魯西亜政府我ニ懇親ヲ表シ、交誼ヲ厚フスルノ際、豈肯テ我カ政府ノ焦心煩慮ヲ傍觀スヘケンヤ、不可解三也、

蓋シ此人

朝廷ヲ干カス先ニ、既ニ吾カ教ヲ干ス云々、

一点ノ念慮、心頭ニ萌スヲ云フ、此言天主教徒ノ事ナリ、

我政府天主教ヲ奉セス、又之ヲ制禁ス、然ルニ尼适頼

窃ニ我カ愚民ヲ誘導シ、尚ホ如斯言ヲ發ス、我ヨリシテ之ヲ言ヘハ、蓋シ此人天主教ヲ奉セサル先ニ、既ニ我カ朝憲ヲ干ストスヘシ、本末錯雜、不可解四也、天主ノ命ニ非サレハ則チ位ニ居ル者ナシ、凡ソ位ニ居ル者皆天主ノ命スル所ナリ云々、

我国古今天主ト云フ者ノ命ヲ受タル

皇帝アルヲ聞カス、唯

神孫一系連綿、古今不易ノ迹、旧史国典載セテ粲然タル有ルノミ、国律モ亦之ト共ニ立ツ、是我国民トシテ天主教ヲスヘカラサル所以ナリ、然ルニ尼适頼先ニ我政府ノ天主教ヲ奉セサルヲ知り、而シテ反テ天主教ヲ奉スルモノ、

我国

皇帝陛下ニ対シテ不敬ノ心ヲ生セサルヲ証セントシテ斯ノ如キ文ヲ引ケリ、試ニ問フ、言フ所ノ国君又ハ位ニ居ル者トハ、我国

皇帝陛下并ニ有位操權者ヲ指ス乎、若然リトナラハ言

フトコロノ天主ハ我国ノ有位者ニ命シテ、自ラノ教ヲ制禁セシムルヤ、若爾ラストナラハ引証ハ不齊ヲナン、恐クハ異門ノ鍵鑰トナラン、是不可解五也、

天主ニ叛カサルカ為ニ諸君王ノ命ニ依テ苦難刑殺セラル云々、

凡ソ国君ノ民ニ於ケル赤子ヲ保スルカ如シ、而シテ之ヲ刑殺スル、豈本意ナランヤ、蓋シ止ムヲ得サレハナリ、止ムヲ得サル所以ハ固有ノ国是アレハナリ、又天主教徒ノ政府ニ抗敵スル先蹤ナシトセス、若シ如是モノハ政府天主教ヲ奉セサルカ故ナリト云ハ、上条ニ述ル建国相承ノ旨思量スヘシ、寔逐ニ値フ等ノ事ハ臣子ノ常分更ニ贅言ヲ待タス、尚曰ク、コレヲ奉スル者ノ中チ君王ニ叛クノ例一モアルコトナシト苟モ魯西亜國ノ司祭トシテ無稽ノ言ヲ發スル理ナシ然リ、而シテ我國之ニ反スル者今現ニ往々之アリ、不可解六也、

職ニ位スルニ遇テ職ノ為ニ心ヲ尽スニ、天主ノ教ヲ守ル者ト誰カ能ク肩ヲ比セシヤ、

天主教ヲ奉セサル国ノ重臣ニ答フルニ傲言ヲ出ス、尼
适頼如是宜ナル哉、門人我国ニ対シテ不敬ノ言ヲ発ス
ルコト以証スルニ足レリ、抑又説アリヤ、不可解七也、
蓋シ天主ニ叛クノ外、他事何ニ於テモ君王ノ命ヲ受ケ、
唯君王ノ云々、

凡ソ百行一事ヲ欠クモ以テ成人トスヘカラス、天主ノ
命ヲ受ケス、天主ノ教ヲ奉セサル処ノ我政府令ヲ発ス
ル時ニアタリ、尼适頼カ教誘スル日本生徒趨舎如何ト
スルヤ、凡ソ我政府ノ命令一モ天主ニ受ル処アラス、
若シ天主ニ受サルノ命令ニ於テ一ツモ之ヲ受ケハ、乃
チ天主ニ叛クト何ソ異ナラン、若シ天主ニ從フトシテ
政府ノ命ヲ領セシムルハ、所謂其家人ヲ擾スノ事尼适頼
何以陣^(ヤ)セントスルヤ、不可解八也、

予隠サス貴國中ニモ既ニ此教ヲ奉スル者アリ云々、
尼适頼曾テ我カ頑民ヲ誘導シ、不敬ノ言ヲ発セシムル
ヲ問ニ当リテ、先ニ親朋之家ニ賀音ヲ贈ルノ僕使タル
ヲ自示シ、此ニ於テ傲然我民心ヲ賊スルノ状ヲ白シ、

其家人ヲ擾シ其家規ヲ破ラシムルヲ表ス、嗚呼政府汲
々隣好ヲ厚フセントス、而シテ尼适頼カ陳スル所口ヲ
賀音トスルヤ魯西政府此ニ意ナキカ如シ、決シテ然ル
ヘカラス、恐クハ尼适頼一時ノ杜撰ニ出ルカ、不可解
九也、

万一天主ノ教ヲ奉スル者ヲ攻メテ皆死刑ニ処スルコトア
ラハ、今モ天主ノ正教ヲ奉スル者黙シ、順テ其首ヲ刑卒
ニ供ヘ云々、

凡ソ民ノ順ナル者只死ニ就クノ從容ナルノミヲ云フヘ
ケンヤ、刑ハ寔ニ國家ノ不幸也、若シ能ク命令ニ從ハ
、則チ刑措テ用ヒサラントス、豈善ラスヤ、若シ命
令ニ從ハス異途ヲ墨守シ、只刑ニ從容タル愚ト云フヘ
キノミ、豈傷シカラスヤ、且天主教ノ宗トスルヤ生前
ノ苦難ヲ以テ将来幸福ノ助トシ、一身死ヲ見ル畜ニ輕
ンスルノミニ非ス、即チ獻身活祭ナリト重ンス、人心
ヲ盪惑スル、是ヨリ甚シキハ非ス、是我國民ノ天主教
ニ潛潤スルヲ深憂スル所以ナリ、此ニ至リテハ独リ我

國ノミニ非ス、海外各国政治家ニ在リテ左モ忌憚スルト

コロ識者ノ能ク弁スル所ナリ、尼适頼ノ説定テ云何、

冊子原寸 縦二八種 横一〇種 一六枚

一六六 東京府土族城井寿章ヨリ和田八之進へ

封建郡県制ノ一利一害ヲ論シ久光公ノ上京ヲ

促ス

一八九六ノ一

別紙

客歳封建之議を御建白ニ而御上 京之処、不図も老友

斉藤貞蔵得拜肩接譬效御高論を拜聴仕候由、御発程後

同人より御忠憤之儀を委曲領掌仕候、扱封建之議ハ僕

元来之持論ニ而、己巳年諸大藩郡県之議を建白之節も

僕独り要路を干して其不可を論弁仕候得共、畢竟は篤

と熟考仕候得ば、封建ニハ封建之利あり、又封建之害

あり、郡県ニハ郡県之害あれば、又郡県之利あり、孰

れも利計リにて害なき事を得ず、害計リにて利なき事

なし、是を奮封建・郡県の二つ而已ならず、凡百制度

皆然らざるハなし、殊ニ郡県・封建の二ツハ古来より

其得失利害を論弁するもの数十百家嘖々訟聚之若し、

然れとも君もし堯舜にして臣皆稷契・皋陶なれハ、郡

県にても可也、又封建ニ而も可也、畢竟治人あつて治

法なし、苟卿言千古不磨と謂べし、抑今般郡県の議之

起りしハ、元其

尊藩長肥土之諸大藩と連署して封土奉還を請しより、

天下大小諸侯是を見倣て各版籍を返上し、終ニ今日如

此郡県之制ニ一定せり、然れとも乍恐

朝廷ニ於而ハ郡県之利計リを知て其害を知らず、故ニ恐

くハ郡県之利を保つ事能わず、僕愚窃ニ以謂尽之郡県

之害を知らざる者は、尽く郡県之利を知る事能わず、

是れ今般 執事之封建論を主張被成候所以欤と奉察候、

然れとも今日ニ至り突然 執事其論を主張被成候而は、

却而天下人心之疑惑を生し可申故ニ、徐ニ時勢を熟察

し、篤と其利害得失を斟酌商量し、漸々以て封建之制

ニ被為復候様御尺力御周施被成候ハ、(旋)僕封建之愚論あれと、も他日拝晤ニ付す

天下之大勢水之低に就ク如ク、人畜ニ疑惑を生せざる而已ならず欣然悦服すべし、是れ何となれば口ニ郡県を説共心ニ封建を悦ざる者なければ也、抑僕天下之大勢を通観するニ、治安之名あつて治安之実なし、恰も火上之積薪ニ座するが如ク、漏船ニ乗て大洋ニ航するが如し、今日其焚溺之禍を免るハ僥倖也、漢賈生・宋老蘇の如き人あらば、其痛哭流涕長大息如何なる事を知らず、是僕之喋々瀆告するを待す、執事之必御熟知被成候儀と奉存候故ニ、封建之御論ハ姑置之他日ニ付し、先づ燃眉之急務ニ御尺力被成度候也、昨年従三位島津公之御建言之件々ハ、実ニ時病ニ的中せり、恰も良医之病症ニ対して薬剤を投するが如し、万古不易之

皇統も共和政治之悪弊ニ被為陥候云云、実ニ時病之膏盲を御診察被為在候言と謂べし、因而窃ニ怪む、如此危急之病症を御洞察被為在候而、今日迄も御手を下し御

力を尽させられざるハ、天下人之所疑且惑ニ御座候、

明儒劉念台有言、千尺狂瀾亦止恃清議一綫為之撐砥今

や天下ニ清議之絶へざる事殆んど縷の如し、昨年

従三位公之御建言ハ実ニ空谷の足音にて、天下志士是

れを鳳し、朝陽ニ鳴に譬ふ、今日千尺之狂瀾を撐砥し、

国家之一綫之命脈を維持するハ実ニ此御建言と奉存候、

昔者

従三位公徳川氏之逆焰猶熾なる時に當つて、断然天下

ニ先つテ

王事を御勤勞被遊、終ニ今日

皇室再造之大勲功を被為建候、今日之事ハ昔之如ク至難

至險之事あるにあらず、所謂事ハ古之人ニ半して功必

倍之、惟此時為然とは今日之謂也、僕客歳

従三位公之御建言書を拝誦して、景仰欽慕之至リニ堪

へず、聊愚者千慮一得之鄙見を書綴り、貴邦ニ赴き

尊厳を干瀆し、狂瞽之言を進呈せんと奉存候処、今春

は御上京被遊候風聞を承り、日夜渴望する事畜ニ大早

之雲霓而已ならず、是皆僕一人而已ならず、天下之人

ニ翹首企足而渴望せざるハなし、所謂后来其蘇の古言
の如し、伏願くハ 執事

従三位公を愆憑して一日も早く御上京ニ相成、中原赤
子再び蘇息を得候様御尽力被為在度、為 国家不堪千
析万禱之至也、若し執事

従三位公を愆憑輔翼し奉り、此狂瀾を磔砥し頽勢を挽
回する事を得ば、執事の御勲功も大禹之下ニあらざる
也、恐惶頓首、再拝白、

癸酉三月初三

和田君

執事

城井寿章

一九八六ノ二

唐突之至リニ候得共呈一書候、然れハ当春老友斉藤貞藏
不図も得拝眉御高論を拝承し候由、御発程後同人より承

り御忠憤御慷慨之段不堪感佩之至候、併御発程後ニ而一

度も警咳を不得接、遺憾此事ニ御座候、扱時艱孔棘国、
勢岌々雖僕傍觀座視するニ忍ひず、杞憂難然止愚者千慮

一得之管見を別紙ニ相認候間何卒不苦候ハ、
従三位公乙夜之 台覽ニ被為備度奉嘱候、昨年
従三位公之御建言書を拝誦仕、景仰欽慕之至リニ堪へず、
聊鄙見を進呈仕度候得共、最早不日御発程ニも可相成と

奉存候間、見合具扣罷在候、何日比御発途之御都合ニ可
相成哉、不苦候ハ、御内々御洩し被仰越度奉冀候、時下
余寒尚嚴折角被為厭為国御自奮被成度奉存候、草々頓首、

再拝啓、

癸酉三月初三

東京府實屬士族

城井寿章

和田君

執事

追而自然 従三位御啓行之期御遅引ニ被為成候儀ニ
御座候ハ、其段乍恐一寸御報告被成下候様具々も
奉冀候、以上、

冊子原寸 縦二七種 横一九種 五枚

一六七 青森県布達

開拓者手当廃止ノ件

青森県にて布達之写

元斗南県身分上ニ付、先年来当県庁より相達置候布令并規則等悉皆相廃候、此段相達候事、

明治六年三月十五日 青森県

元斗南県貫属は去申七月限面口扶持被廃候得共、開拓事業等未タ施行取調中ニ付県庁限り格別之詮議を以、更ニ手当米差遣置候所、今般御主意も有之候ニ付、当月限り手当相廃候条、此旨一同へ無洩可相達候事、

明治六年三月十五日 青森県

別紙兩通相達候ニ付件々為取調、左之官員来ル十六日当地出張、各所へ出張候条為心得相達候事、今般手当米相廃候ニ付而ハ、左之条件各見込相立取調至急ニ可申出、若達延^(編カ)ニ及候向ハ一切取揚不申事、

一各自營業之儀ハ農工商買各欲スル所其自由ニ任セ候間、三府并若松県下を始送籍致自立活計相立度望之者ハ、何業を以何之地江移転仕度旨可申出候事、

一他管下へ送籍望之者ハ老人ニ付米弍俵・金弍兩ツ、差遣候、更ニ今般之評議を以為資本一戸ニ付金拾兩ツ、差遣候事、

但爾後官給を不仰旨誓書差出可申、最米之儀ハ代価を以相渡候事、

一管内自營望之者ハ老人ニ付米五俵・金五兩差遣候、更ニ今般別段之評議を以為資本一戸ニ付金五兩ツ、差遣候事、

一開拓場ハ三本木ヶ所ニ確定候事、

一開拓之儀、諸県下ニ於て是迄諸県下へ致施行候類例も有之候得共、貫属之身を以力耕之義ハ不容易多くハ失敗等有之候ニ付、今般施行候ニ付而ハ屹度成功を遂不申候而ハ、上奉対

朝廷恐入候義ハ勿論、到底其者困難ニ陥り候条、仍而

厳密ニ法則を建可致施行候事、

一 右開拓場へ移転望之者ハ永住之確定シ、農業相働候旨
誓書差出シ可申候事、

一 開拓場へ移転致候者ハ一戸中強壯之男子老人有之者ニ
非されハ差許シ不申候事、

但強壯之男子有之候而も、甚キ厄介有之輩ハ此例ニ
非ス、

一 開拓場へ移転之者一戸中強壯之婦人兩人有て、格別之

厄介無之者ハ検査之上差許候事、

冊子原寸 縦二四・五種 横一七・五種 二枚

一八九 勅書

勅書

朕汝久光ノ久シク病ニ在ヲ聞ク、近コロ如何、朕去歲西
巡本県ニ駐スルノ日汝建議ヲ奏ス、而シテ匆卒ノ際批答
スルヲ得ス、齋婦テ之ヲ熟覽スルニ其条陳スル所全憂國
ノ誠ニ出ツ、朕甚タ之ヲ嘉ミス、尚ヲ汝意見ノ蘊底ヲ聴

ント欲スルモ千里路隔リ相見ヲ得サルヲ恨ム、朕切ニ望
ラクハ、汝久光病微ニ間ナルニ方ラハ速ニ闕下ニ来リ、
朕カ国家ノ為メニ諮詢スル所アラント欲スルノ旨ニ副ヘ
ヨ、乃チ特ニ海軍大輔勝安芳・侍従西四辻公業ヲ遣ハシ
動静ヲ問ハシメ、且朕カ内旨ヲ伝ヘシム、併テ慰問トシ
テ此品ヲ遣リ致ス、
(遣)

御拝領物

一 許江門花卉山火冊(水カ) 一帖

一 唐静岩山火冊(水カ) 十二幅 一帖

一 花瓶 一基

一 白綸子 三卷

右明治六年酉三月廿二日御拝戴

文書原寸 縦一八種 横八〇・五種

〇一八九 久光公へ桜田邸下賜ノ御沙汰

一五〇 谷山武之輔ヨリ久光公ノ上京ニ随從許可願

乍恐口上

不肖之私恐懼之至奉存候得共奉歎願候、全体私事廢藩之

砌より万分一報恩之微衷ニ而君辺江奉仕之儀、頻ニ心願

罷在、一昨未十月右微衷書取を以奉歎願置候得共、其後

何分之 御沙汰承知不仕、然ニ此節 御上京之御沙汰拜

承仕、殊更難黙止乍恐再応奉歎願候、勿論勤方ニ付而は

奉願置候通、御草履取辺之処ニ而も何ニ而も輕処江御召

仕、且御供迄も被仰付候ハ、年来之望相達是以本懐之

至奉存候、尤当分桜島神社主代相勤居候得共、右は父

母妻子養育之為、一時無余義相勤居候事ニ而辞職等仕候

義は少も子細無之候、尤御供奉願組多人数有之候得共、

御召連不相成哉ニも伝承仕候得共、私事前文通先年より

奉願趣も有之候間、旁別段之御取訳を以願意御採用被成

下度奉願候、実ニ浅陋之私、別而恐縮之至奉存候得共、

此段奉至願候、誠恐謹言、

西三月

谷山武之輔

通義

文書原寸 縦一六・七糎 横一〇四糎

一五一 福永直之丞ヨリ久光公進退ニ就テノ上書

乍恐申上候、此節

御上京ニ付而は

御趣意被相行候義は無相違形ニ奉伺候得共、第一古老之

者共奉勘考候は不容易

御懇勅之御事ニは御座候得共、未御建白之趣御採用之風

態相見得不申、西洋信用之者共今之内ト奔走仕候体ニ而

乖戻仕候義而御座候、就而は権詐之御所為明白ニ而誠

ニ不輕御事ニ而頻ニ議論承、的当仕候義ニ而甚奉恐惑候

御事ニ奉存候間、今一往深

御工夫被遊候御場合ニ而は有御座間敷哉、就而は幸此節

両勅使下向之御事候付、前条近比迄茂御採用之形相見得

不申趣を以、厚御廻リ御穿議被遊、其上猶又

御上京被遊御場合ニ至候は、初より乍御病中押而

御上京之御事候付、若し於東京

御趣意不相立目ニ相成候は、全御不用之者候間、一紙之御届書ニ而速ニ

御下向御入湯被遊度趣勅使江御廻リ、此等之御都合御交合之墨付御取付ケ被遊候御用心は被成置いかゝ可被為在哉、此等は疾ニ厚

御含茂可被為在奉恐察候得共、私ニ茂

御先江出立仕候付、乍恐懸念之余不憚愚慮此旨言上仕候、

恐惶敬白、

三月

福永直之丞

文書原寸 縦一七種 横一三〇種

一六二 群馬県富岡町医生一万田如水ヨリ集議院へ

ノ建白

新貨幣改鑄ニ就テ

(表紙)
「論新貨幣改鑄之説」

乍恐演舌

東京日々新聞第二百四十一号ニ所載ノ造幣権頭益田君^(孝)建言書一読シテ愕然、慨歎ニ不堪ヲ以孤陋剪劣ヲ忘レ、不顧恐懼聊愚衷ノ鄙意ヲ奉建白候、

建言書ニ云、宇内万国ノ貨幣ヲ歴視スルニ、合衆政治ノ国制ヲ除クノ外必其国王ノ肖像ヲ模刻ス云々、又曰、其肖像ヲ印スルハ君視民如子仁恤撫愛ヲ示ス、民亦視君如父、且其国民其帝王ノ肖像ヲ拝シ、苟モ尊愛貴重スベキノ感情之ナキ者アラン哉云々、縷々丁寧ニ喻説セラルルトモ、愚想フニ彼国土固ヨリ其風習ナランニハ是ナルベキ歟、然レトモ 本邦ハ之ニ反シテ神像ヲ始メ、賢君英將繪テノ諸肖像等猥褻ニ至ルヲ憚リ、装幀掛軸トナシ、或ハ牀頭ニ安置シ、以テ敬拝スルヲ尊重トス、然ルニ一天万乗ノ君ト奉仰 皇上ノ尊像ヲ貨幣ニ模刻シテ日夜兆民ノ手ニ触レ、或ハ取落シテハ不淨ノ場ニモ埋リ、或ハ火災等ニ焼滅スルモ少ナカラス、又外国へ渡ルモ夥ケレハ改試ノ為メニ切斷スルモ有シ、或ハ更鑄シテ他器ニ

製造スルモ有ルベシ、去レハ現存

皇帝ノ尊像ヲ印シタルヲ下輩ノ輕易ニ取扱ヒ、掌上ニ玩弄スル苟モ人臣タル者ノ忍サル所也、誰カ之ヲ愛ストセシ、人民共ニ畏憚シテ嘆議スルハ昭々タリ、然ルニ君民相親ムノ大義ヲ欠トハ外国ノ民風ハ固ヨリ不知コトナレトモ、本邦ニ在テハ至当トハ云ベカラス、如何トナレハ方今其顯然タルヲ見ルベシ、中世王綱弛廢以降大政武門ニ帰スル六百有余年ノ久キヲ経テ、漸ク御復古ニ及ハセラレ宇内ヲ馭シ玉フ、纔ニ五六年ヲ過キズト雖モ、僻陬海隅ノ土民ニ至ル迄

皇上ヲ天ノ如ク父ノ如ク仰慕尊重スル弁ヲ不待所ナリ、是実ニ万古ノ一帝系ニシテ神州ノ神州タル所以ニアラスヤ、縦令外人ヨリ其模印ナクテハ各国ニ通用シ難シト強説セラル、トモ、我国土ノ風儀ヲ以テ説論シテ可ナラシ、況ヤ彼国人モ亦能ク天理人道ヲモ知得ナレハ、豈波テ之ヲ為サシムルニ至ランヤ、去歲辛未二月、条公難波ニ於テ貨幣御検査ノ上各国公使出会頒布ノ御条約ニ相成

且伊勢神廟并ニ両加茂マテモ奉幣アラセラレタル趣ハ、日誌新聞等ニモ見エタレハ、万国通用ニ支梧ナキハ明白ナリ、儲方今一切ノ事業洋風ニ模倣ナサセラレ、万般御更張ノ時際ナレハ宜ク国典ヲモ参考励精アラセラレ、外国へ関係セサル事ハ旧典ヲモ照鑑シ、善良美事ハ国法ト為シ置レ、尚又其内ニモ万世不易ノ定格ヲ立サセラレ度、外国ハ殊更年ヲ追テ益開明ノ由ナレハ、後世ニ至リ卓然タル道眼ノ識者出タランニハ、聞ク日本ハ開闢以來ノ一帝国ト、サレハ其風習ノ中ニモ美法存シテ後世易ユ可ラス、各国ニテモ則ルベキモノ有ト贊美セラル、様ニ、責テ両三法位ハ確乎タル国典ヲモ立サセラレ度奉懇祈候、斯申サハ弁者定テ言ハシ、陋習脱セス知識開サル頑固ノ説ト、然トモ蕩々タル神州

神武天皇以來二千五百三十有余年ノ間、我レニ為ス所ハ皆非ニシテ西洋各国ノ所為皆是ト云シ欵、先ツ他ハ姑ク置、尊像模刻ノ一事ノミモ伏テ冀ハ、賢明有志ノ方々天下後世ノ為ニ同心戮力厚ク御建議為有ラレ度、不堪賤陋

区々之至誠、

右卑賤ノ身ヲ以テ長官ノ説ヲ弁議仕ル不敬僭越ノ罪難
遁、然レトモ先年来言路御洞開不憚忌諱云々ノ御布令
モ屢拜承仕居ルヲ以テ、社稷ノ御為ニモト痴老婆心ノ
丹衷ニ出シナレハ、伏テ願ハ大寛仁恕アランコトヲ、
誠惶昧死敬白、

明治六年第三月

群馬県管下

上野国甘楽郡富岡町

医生 一万田如水拜具



東京府貫風土族
代人 城井寿章

第五大区小八区

浅草門跡後元組屋敷
仁井田政秀方寄留

集議院

御中

副白

日新真事誌第三号中ニ、横浜新聞ニ一千八百七十三年ノ
年首ニ横浜在留ノ米国人ハ、当時彼国ノ風習トナルニ由
テ年甫ノ祝儀トシテ、其朋友ノ館宅ニ往キ祝賀スト、夫
レ年甫祝儀ノ根原ハ日本ノ美風ニシテ、数人ノヲ信用ス
ルニ至レリ云々、又云荷蘭ニハ年賀ノ例ナキガ故ニ、昔
時長崎ノ港内出島ニ在留ナセシ荷蘭人、其本国ニ於テ日
本年賀ノ式ヲ伝タリ、而シテ荷蘭ヨリ新約紐ニ此規式伝
ハリ云々ノ条ヲ一閱シテ、三歎拊喜ニ堪ヘス、因テ蛇足
ナカラ摘挙シテ御参考ニ備ヘ奉ル、古来西土ニテ本邦ヲ
君子国或有礼義国ナトノ称ハ、歴史ニモ載テ衆庶モ皆知
テ伝呼スル所言ヲ待サルナリ、又人氣ノ勇義ナル君臣ノ
礼アル衣服ノ美ナルナド、賛称アリシト云ルコト、先哲
ノ書中ニ侃散見セシカドモ、今真事誌中ニ歴然上件ノ事
ヲ挙テ懇説セラレシハ、流石貌刺屈氏ノ道眼モテ、方今
上下ノ士挙テ銳意ニ一新ヲ謀ルヨリ、遂ニ国風ノ美法マ
デヲ合テ廃棄センコトヲ歎惜ノ余風諫セラル、ノ深意ニ
ハ非ル歟、庶幾ハ在上ノ諸賢君国風ニモ注意シテ取捨有

ラセラレンコトヲ、恐懼再拜、

冊子原寸 縦一九・二種 横一三・六種 六枚

一九五 大分県士族梶江高峯ヨリ久光公へノ建言

時弊矯正意見

(表紙)
一建言

大分県士族
梶江高峯

謹按スルニ、太政復古シ百事一新在セラレテヨリ、爾来弊習一洗シ、世態面目ヲ改メ、

皇威大ニ振ヒ、家々万歳ヲ唱へ、戸々

鳳代ヲ祝シ、衆傑上ニ在テ万機ニ参与シ、毫モ間然スル処無ク、民庶仰テ感拜セザル無シ、然リト雖退テ熟考スルニ、古語ニ久者弊生ト謂ヘルガ如ク、今日ノ体勢国家ノ肺肝ニ聊カ病根ヲ萌スノ憂ナキニシモ非ズ、聞ク不在其位者不議其政ト、然レドモ国家ノ疾病アルヲ知テ泣告ザルモ亦臣道ト謂ベカラズ、故ニ忌諱ヲ憚ラズ微衷ヲ吐

露シテ以テ建言ス、謹テ方今ノ世態ヲ視察スルニ、大学校廃セラレテヨリ以来学則蔽立セズ、皇国学ヲシテ本トセザルガ故ニ、自然大義ヲ誤リ本末ヲ弁ゼザルノ徒多ク、甚キニ至テハ廢

帝共和ノ説ヲ唱ヘテ憚ル色ナキモノアリ、然リ而テ金穀乏ク兵力整ハズ、驕奢ノ風習盛ニシテ節儉ヲ専ラトセザルガ故ニ、上下疲弊シ政旨下ニ徹底セズ、下情上ニ貫徹セズ、是故ニ動モスレバ党民沸騰シ、東西騷擾ス、加ルニ外ハ邪教辺境ニ逼迫シ、此頃ハ既ニ内地ニ侵入シ、我民ヲ誘惑シテ以テ彼民ト変セシム、夫民ハ国ノ本ニシテ民心変スルトキハ其国殆シ、然ルニ内ハ国教未ダ定ラス、上真ニ敬神ノ意薄ク、神仏ニ教ヲ並立為シムルガ故ニ衆庶ノ方嚮二端ニ分レ民心一致セズ、若シ今近ク凶秋ニ遇ハ、餓民忽チ沸騰シ、盜踰四方ニ起リ、然ルノミナラズ邪教ハ益蔓延シテ以テ我民ヲ奪ヒ、内乱外寇並ニ至ン、茲ニ広瀬林外ナル者魯人尼适頼ト問答セシニ、尼适頼ノ難論アリ、其言ニ云、方今貴邦ノ政是ヲ衆裁役君トイハ

ン、斯ノ如キ国ニシテ以テ永久ヲ維持スベキモノハ、某未ダ之ヲ聞ザルナリ云云、清盛・頼朝ノ禍ヒ復タ今日ニ見ルナリ云云、某以テ今日ノ形勢ヲ観ルニ、大権旁落チ而シテ大乱ノ機恐クバ十年ヲ出ザルナリト、委クハ日要新聞付録ノ西教新論ニ載セタリ、外国人ノ見ニモ乱遠カラザルヲ知ル、果シテ如此ナラントキハ亦之ヲ如何トカスル、是ニ於テ之ヲ救ヒ且ツ之ヲ防ント欲スト雖、金穀乏ク兵力整ハザレバ徒ニ国家ノ傾クヲ束手シテ観ルノ外アルベカラズ、国家病根ヲ萌スト云ハ即是ナリ、夫如此国家ノ危キ累卵ノ如ク、

皇統ノ殆キ連糸ノ如シ、速ニ之ヲ医治セズンバ病毒必ス謂可ザルニ至ン、臣民タルモノ豈安眠甘食スルノ秋ナラシヤ、依テ管見ヲ集メ条目ヲ分チ次紙ニ記載シ、謹テ以テ拜呈ス、黄口ノ小言タリト雖、少シク御採用成下サラバ幸甚之ニ過ル無シ、誠恐誠惶多罪謹白、

明治六年四月廿三日

大分県士族
梶江高峰 頓首

島津従二位殿

呈閣下

一神祇官御再興在セラレ、国教ヲ定テ教法ヲ掌ラシメ、上ヨリ敬神ノ意ヲ表シ、以テ下ニ御示シ相成、海内一般ニ播布シ、衆庶ノ方嚮ヲ定メ、民心ヲ維持シ給フコト、今日ノ御専務カト奉存候、

政ト教トハ車ノ両輪ノ如ク相須テ離ルベカラザルモノニシテ、必ズ並立セシムベキモノナリ、按スルニ天下万国何レモ国教ヲ定立セザルナシ、特リ我国未ダ国教ヲ定給ハズ、故ニ宗教雜駁シ教導区々トシテ一定セズ、既ニ教部省ヲ設ラルト雖、神仏ニ教ヲシテ並立セシムルガ故ニ、其説ク処ニ端ニ出、聽従スルモノ其頼処ニ惑ヒ、却テ方嚮定ラズト聞ク、夫教法タルヤ蠢愚ノ民ノ方嚮ヲ定メ、死生其頼処ヲ知ラシメ、政令ニ従ハシメ相背カザラシムルノ為ナリ、然ルニニ端ニ出ルヲ以テ衆庶其頼処ニ惑ヒ、方嚮一定セズト云ガ如キハ、是全ク国教ト定タル本教ノ無

キガ故ナリ、慶長四年清原国賢朝臣ノ表文ニ、日本
紀歷代之古史也云云、蓋神道者為ニ方法之根柢、儒仏
二教者皆是神道之末葉也頃學ニ儒仏ニ者夥而知ニ神書ニ
者鮮矣、物有ニ本末ニ事有ニ終始ニ何棄レ本取レ末於ニ神
国ニ争疏ニ神書ニ乎、万機之政尚以ニ神事ニ為ニ最第一ニ
云云、欽惟陛下寬惠叡智之余後世惜ニ其流布不レ広、
遂命ニ鳩工於レ是始壽ニ諸梓ニ云云ト云ヘルガ如ク、
皇国固有ノ神教ハ実ニ万教ノ根幹ニシテ、儒仏ヲ初
メ天下ノ諸教一ニ之ヨリ出ザルナシ、抑和銅・養老
ニ記紀ヲ撰シメ給ヘルヨリ、慶長ニ此紀ヲ上梓シ給
ヘリシ列
皇ノ聖慮ヲ恐察シ奉ルニ、一ニ是皆此大教ヲシテ広
メ給ヒ、永遠国家ヲ輔シメ給シガタメノ 叡旨ニ非
ザル無シ、然ルニ今之ヲ措テ信用在セラレザルハ聊
御闕典アルニ似タリ、方今邪教辺ヲ侵シ、此民ヲ蠱
惑シテ以テ奪国ノ術ヲ逞クス、真ニ容易カラザルノ
時ナリ、願クハ列代

聖皇ノ叡慮ヲ繼セラレ、固有ノ大教ヲシテ国教ト定
メ給ヒ、大ニ御尊信在セラレ、以テ之ヲ下ニ播布ナ
サシメ給ハ、人心不日ニ一定シ、上下一般天祖
皇太神ヲ崇奉スルニ到ラン、苟モ如此ナルトキハ、
邪教之ヲ誘惑ストモ人民敢テ顧視スルモノ有可ラズ、
然レバ、則国家ヲ維持スルハ神祇官ヲ御再興在セラレ、
国教ヲ定メ大ニ之ヲ播布シ、人民ヲ帰化セシムルニ
有リ、
一先般御高札御取除相成タリト雖、御高札ノ如キハ固是
国憲ノ大綱ヲ掲ケ、広ク衆庶ニ示シ給フ処ニシテ、專
ラ国体ニ關係スル物ナレバ、更ニ御設在セラレ度奉存
候、

其節従前高札面ノ儀ハ、人民熟知ノ儀ニ付取除申ベ
ク、更ニ揭示スベキ事件ハ、其度告諭スベシトノ御
布令アリト雖、未ダ弁知セザル者モ之レ有ト見エテ、
既ニ西京辺ニテハ、乍恐

今上皇帝ニ罪名ヲ負セ奉リ、代テ天誅之ナド相唱へ、
491

衆ヲ煽動セシ者之レ有シ由、此他廢

帝共和ノ説ヲナスモノ洋学者流ニ許多之レ有、加ルニ外務省御雇ノ魯国希臘教々師尼适頼ナル者ハ、駿河台ニ在テ邪教ヲ開キ、我国ノ人ヲシテ誘惑シテ其門ニ入シメ、恐ナガラ

今上皇帝ノ肖像ヲ其徒ニ踏シムト聞、就中是等ノ事ニ大ニ臣民ノ大義ヲ誤ルノ甚キ者ニテ、伝聞スルノミモ痛歎ニ堪エズ、願クハ魯人尼适頼ノ如キハ速ニ此国ヲ放逐シ、其門徒ヲ初メ共和ヲ唱へ、廢

帝ヲ議スルノ輩ハ悉ク誅戮シテ以テ海内ニ御示シ、至急高札御設在セラルベキコト最モ今日ノ御急務ナルベシ、

一文部学則御改制在セラレ、皇国学ヲ以テ本教トシ、漢洋ヲシテ羽翼ト御定メ、至急各府県ニ学校御開建在セラレタク奉存候、

学校ハ是人才ヲ醸シ生ノ処、知覚ヲ広メシムルノ処ナルニ、曩年大学校廢セラレテ以来、繼テ諸県ノ学

徒ヲ到シ、徒ニ虚学反則ノ洋学ノミ流行シ、口ニ蟹文ヲ誦スルノミニテ、専門ノ科学ヲ為ザルガ故ニ、一トシテ国家ノ裨益トナルモノナク、皇学ヲ本トセザルガ故ニ本末ヲ弁ゼズ、大義ヲ誤リ大蔵省御雇ノ中村圭介ガ如ク、

皇上ヲ嘲リ奉テ、擬泰西人上書ト云ヘルモノヲ公然建白スル者アルニ至ル、願クハ是等ノ弊ヲ一洗シ、皇学ヲ本トシ、舍密・分析・窮理・殖物・機巧ノ実科学行ハレ、専ラ国家ノ裨益トナルベキ御規則立サセラル、事御急務ナラン、

一陸軍兵力未ダ整ハズ、若シ今外寇内乱アルトキハ、何ヲ以カ之ヲ防シ、願クハ速ニ兵力整候様在セラレタク、是今日ノ御当務ト奉存候、

伝承スルニ方今陸軍ノ兵員四万ニ過ズト、夫如此寡兵ヲ以テ海内ヲ護衛センコト甚ダ危シ、近頃又更ニ生民ヲ徴テ是迄ノ兵卒ニ替給フ由、熟按スルニ従前各県ノ士卒其俸俸禄ヲ給テ以テ今日ニ至ル、然ルニ

之ヲ廢セザレバ安遊徒食ノ風ヲ絶ツ能ハズ、若シ亦忽チ之ヲ廢スルトキハ各婦スル処ナシ、苟モ婦スル処ナキトキハ所謂貧極為盜ノ患ヲ醸シコト計リガタシ、是ヲ以テ考レバ各県士卒ノ禄ヲ平均シ、之ヲ二等ニ分チ、上下シ士卒ノ中老病怯弱ノモノヲシテ下等ノ禄ヲ食シメ、壯健ノモノヲ撰ビ上等ノ禄ヲ食シメ、其壯健ノモノニ兵役ヲ命ジ給ヒ、其県々ニ於テ隊ヲ編制シ、若シ国家異変非常ノ事アルトキハ忽チ之ヲ徵テ鎮撫ナサシメ給ハバ、屯田同様ノ法方ニシテ、更ニ鎮台ヲ設ケ、若干ノ財ヲ費シ給フノ憂ナクテ、速ニ兵力整ヒ、且ツ廢セラルベキ士卒、更ニ活業ヲ得、弥

皇恩ヲ奉戴シ、戦地ニ立死ヲ願ミズ奮戦センコト必セリ、夫如此死ヲ輕スルノ鋭兵巨万内国ニ充滿セバ、外非礼ヲナスモノ無く、内暴党ノ憂ナク国家ヲ富嶽ノ泰ニ置シコト、此一挙ニアルベキカ、

一 下議院ヲ御設在セラレ、公撰ヲ以人民代理ノ者ヲ立テ、

百般ノ事ヲ議セシメ、上ノ御趣意下ニ徹底シ、下ノ苦情上ニ貫徹セシムル事今日ノ御專務ト奉存候、

諸所党民ノ起ルモ全ク上下ノ事情貫通セザルガ故ナリ、此院ヲ設ラル、トキハ是等ノ憂ナク、且ツ政令ノ可否得失ヨリ府県ノ官員ノ公私曲直ヲ察スルモノ、此ヲ設ラル、ニ如ナケン、

一 此節新定ノ服制ハ更ニ御改制在セラル、カ、又ハ中古ノ服ニ復セラレタク、如何トナレバ俗ヲ變スルトキハ人心變ズ、人心變スルトキハ国体ヲ失ス、国体ヲ失スルトキハ国家危シ、故ニ俗ヲ變スルコトハ屹度御禁止アラセラレタク奉存候、

太古ノ服一變シテ中古唐服ノ制ヲ用ラレシヨリ、人心随テ變シ、専ラ漢土ノ風習ヲ貴ビ、終ニ基經(藤原)・義(北)時等ノ如キ逆臣出ルニ至ル、是即俗ヲ變スルコトノ不可ナル証ナリ、但シ中古唐服ノ制ヲ用ラルト雖、今ノ直垂及ビ平常服ノ如キハ全ク真ノ唐服ニ非ズ、是等ノ事ヨリ服制ノ事別ニ僻考アリト雖省略ス、西

洋諸国モ官服ノ如キハ其国産物ノ極品ヲ以テ之ヲ制スルヲ礼トスト最至当ト云ベシ、我國モ大和錦ヲ以テ官服ト定給ハ、四方ノ批評ナク国体ヲ穢スナケシ、

一 電信寮及ビ灯台寮等ハ廃セラレテ然ルベク奉存候、

電信ノ如キハ全ク人民便利ノ為ニ設クル処、灯台ノ如キハ船人ノ為ニ設クル処、然レバ必竟人民ヨリ築立スベキ事充当ナリ、然ルニ方今金貨乏キ折柄、官ヨリ之ヲ設ケラル、ガ故ニ、洋人御雇ノ給金ヨリ及ビ許多ノ官員ヲ置キ、若干ノ財ヲ費シ給フト雖、指テ上ノ御利益トナルヲ聞ズ、願クハ是等ノコト官費ニ預ルヲ止メ給ヒ、自然人民ニ論シ、民心開化ニ移ルヲ俟カ、或ハ富商ニ命セラレテ築立開業ナサシメ給シコトヲ、西洋諸国ニ於ル鉄道ヲ初メ、是等ノコト一モ官費ニ預ルヲ聞ズ、且ツ我横浜ノ鉄道ノ如キ美麗ナルハ、西洋諸国ト雖稀ナリト聞ク、方今本邦金力乏シ、然ルニ外債シテ是等ノコトヲ為シ、専ラ

姿飾ノ美觀ヲ貴ブハ、仮令ハ貧者ノ美服ヲ装ヒ、驕奢ニ馳シコトヲ欲スルガ如シ、願クハ爾來是等ノ惡弊ヲ洗除シ、嚴ニ歳入歳出ノ限ヲ量リ、百事施行在セラレンコトヲ、

一 諸省中外國人御雇入相成、若干ノ月給ヲ費シ給フト雖失費シ給フ処ノ財ニ比較スレバ、御有益少ニ似タリ、願クハ爾來外國人御雇相成コトヲ止メ給フカ、或ハ人員御減少在セラレタク奉存候、

就中兵学寮ノ如キハ、本邦全国ノ兵員ヲ一目瞭然ナル処ナルニ、外國人ヲ御雇入兵力ノ多少ヲ知シムルハ、狼虎ヲ山林ニ畜ヒ、賊ヲシテ粟米ノ数ヲ算セシムルガ如シ、海外各国兵学寮ニ外國ノ者ノ入ヲ禁ズト、是他ナラズ、今日和親中ハ彼我ノ別ナキニ似タリト雖、事故アリテ破親スルトキハ、忽チ讎敵トナルガ故ナリ、外務・文部・軍医寮等ニハ、殊ニ邪宗ノ教師御雇入相成居候故、教育間ニハ希臘天主ノ邪教ヲ説テ誘導シ、軍医ノ如キハランドセルニ耶蘇ノ

十字架形ヲ画キテ憚ル色ナク、入院ノ病者昨申夏ハ
単衣ニ十字架形ヲ画ケルモノ許多之レ有リ、実ニ傍
觀ニ堪エザル次第、仮令外人御雇相成トモ、邪教
師ノ如キハ堅ク御禁止在セラルベキカ、

一諸建白及ビ新聞ノ類、前後ノ弁別ナク本来ヲ取違ナド
セシ文面少カラズ、願クハ政体国体ニ関スル事件ハ、
新聞ニ載スルコトヲ斟酌シ、建言書ノ如キハ議院ニテ
公評シ、臣分ヲ誤リ本末ヲ弁ゼザル類ヲバ至当ノ御処
置在セラレタク奉存候、

伝聞セシニ、大蔵省ヨリノ建言ニ、海陸軍ヲ廃シ、
其為ニ費ス処ノ金貨ヲ貯積シ、万一国家非常ノ際ニ
於ル速ニ敵国へ贖罪金ヲ出シ候方、大ニ御利益ナリ
云云、又海内神社ノ境界ヲ狭メ、五間四方トシ、其
余地ヲ開拓セバ大ニ御利益ナルベシ云云、抑海陸軍
ヲ廃シ、贖金ニ替ルト云ガ如キハ、第一我国威ヲ減オト
スノミナラズ、
朝廷ヲ愚弄(弄)シ奉ルコトニテ、婦女子ニモ劣リタル見

ト云ベシ、然リ而神社ノ境界ヲ狭メ開拓シテ本邦全
国何程ノ事ガアル、同シクハ寺院ノ境界ヲ狭メ、其
余地ヲ開墾セント云ハ、少シク可ナルベシ、但シ
是等ノ小利ヲ計シヨリハ、民ニ徳沢ヲ施シ、山野ヲ
開拓セシメ、不毛ノ地ノ無ラシメンニ如カズ、或官
員ノ建言ニ、日本全国士民ノ所持セル処ノ刀劍ノ類
悉ク御取上ゲ在セラレ、其刀劍ヲ以テ鉄道ヲ作り給
ハ、莫大ノ御利益ナラント云ヘル由、是等ハ唯時
勢ニ媚タルノミナラズ、究理ニ昧キ盲論ニシテ捧腹
ニ堪ザル愚論ナリ、此他中村圭介ガ擬泰西人上書ナ
ドヲ初メ、国体ヲ知ラザルヨリ、臣分ヲ誤リ本末ヲ
弁ザルモノ屈指ニ勝ズ、願クハ斯ノ如キ者ヲバ、官
員ナラバ官ヲ逐ヒ、平民ナラバ至当ノ御処置在セラ
レタシ、

冊子原寸 縦二四種 横一六・八種 一二枚

一五五 山階宮晃親王ヨリ島津三品卿へ

久光公ノ東上ヲ賀ス

(封紙ウツ書)

「島津三品様

玉案下

晃

ノ

ノ

時令御自愛奉祈入候也、

春光日々熾盛ニ候

聖上弥御万安御互ニ恐寿仕候、随而尊卿益御勇健奉大賀候、抑今度依

別勅遠路御上東御苦勞之義と奉存候、此鯛二尾乍輕少芽出度内々令進上御笑留奉存候、尚不日拝肩書面申入度奉存候也、

四月廿四日

文書原寸 縦一七極 横四九極

恐々謹言、

一五六 小田村達藏ヨリ久光公へノ建言

時弊ノ矯正、国基ノ確立ニ就テ

(表紙)

「上」

一倭洋売国ノ奸臣ヲ竄殛シ、天下ノ憤怒ヲ散シ、大ニ

皇綱ヲ振ヒ、国基ヲ立ツヘキ事、

舜四罪ヲ急ニシ孔丘少正卯ヲ誅スルヲ先ス、皆治国

ノ最要ナリ、国家今日ノ大急務亦タ此ニアリ、

一華族及ヒ士族ノ常職ヲ復シ、文武忠孝治乱敵愾ノ氣ヲ

鼓動セシメ、農工商ノ厚斂過税ヲ減シ、天下ノ愁怨ヲ

除キ、国家ノ命脈ヲ培スヘキ事、

一封建郡県ヲ折衷シ、中古守介ノ制ニ準ヒ、潤色適宜ノ

制ヲ創メ、八道要衝ノ地ハ府ヲ置キ、九載三考褒貶ノ

制ヲ定ムヘキ事、

各県怨憤土崩ノ勢已ニ醸ス、依テ一時ノ権道ヲ以テ

元諸侯ヲ元藩ノ守介ニ任シ、民心ヲ安セスンハアル

ヘカラス、

一

幼主ノ時ニ乘シ佞臣權ヲ專ス、忠毅老実ノ大傳ヲ撰ヒ内

庭ノ啓沃尤モ急ニスヘシ、且唐ノ學士ニ擬シ公明忠諫

ノ士ヲ擧ケ講習討論、

聖徳ヲ裨益スヘキ事、

一郷學州學府學ヲ置キ、大學是ヲ總括シ、全國ノ文武ヲ

進メ貢生ノ制ヲ定メ、大學ニ進メ、試験ノ上其科ニ適

スル者ハ百官欠員ヲ待テ登用ス、撰擧一途ニ出テ、賢

路洞開奔競躁進ノ門ヲ塞クヘキ事、

守介以上ノ官ハ華族ノ賢能ヲ用ヒ、其以下ハ士族ヲ

用ユ、我國ハ元來門閥ヲ尊フノ國体ナレハ、只尊賢

ノミニテハ衆庶不伏、尤モ拔群ノ賢明ハ平民ト雖モ

不在此限、

一大藏省出納ノ制ナク、濫用度ナク、内外ノ國債遂ニ土

地ヲ割ニ至ル、諸省合併冗官沙汰土木ノ功、博覽會等

外見不急ノ務ヲ止メ、実心從事実地老練ノ人ヲ擧ケ、

非常ノ節儉ヲ行ヒ、外債弁済、国力裕舒自立ヲ謀ルヘ

キ事、

一外國通商ハ強弱大小ノ分ヲ知り、恭敬ヲ用ヒ、公法ヲ

守レハ夫ニテ事足ルヘシ、佞嬖スレハ侮ヲ受ルニ至ラ

ン、通商ハ有無貿易互ニ國益ヲ生ル者ナリ、適用ノ物

品ニアラサレハ輸入ヲ許サス、各港常備倉ヲ置キ、國

產伍賈外商ノ制轄ヲ受ル時ハ官ヨリ買上ケ、飛騰ノ時

ヲ待テ内商ノ窮蹙ヲ助ケ、物力ヲ盛ニスヘキ事、

熟考スルニ、逋逃売藩ノ徒幕府瓦解ノ期ニ乘シ、幼主ヲ

欺キ、公卿ヲ嫖リ、

朝權ヲ掌握シ、浮薄奔競ノ書生ヲ党援シ、己カ爪牙トシ、

其兇愆ヲ助ケ、西洋ノ収斂ヲ學テ膏血ヲ浚ヘ、西洋ノ商

利ヲ倡ヘテ士氣ヲ弱メ、秦ノ說律ヲ以テ天下ヲ愚ニシ、

後漢ノ朋党ヲ以テ位權ヲ固メ、南宋ノ柔弱ヲ以テ外洋ニ

媚ヒ、驕侈淫逸專恣忌憚ナク、億兆憤怨神明憤怒、其勢

ヒ已ニ國ヲ売り身ヲ賣ルニ至ル、之ヲ疾ヒニ喻ルニ百ノ

惡症一時ニ轉ル、其斃ル立ヲ待ツヘシ、天下ヲ汎視スル

ニ此ノ衰弊ヲ挽回シ、

皇統不朽ノ基ヲ立ルモノハ 閣下一人ノミ、嗚呼閣下ノ
進退ハ天下ノ治乱、

皇統ノ安危ニ係ル 閣下ノ東行ヲ聞テ普天喜躍、神明ニ
誓テ其成功ヲ仰ク、天下ノ從フ所ヲ以テ神明ノ憎トコロ
ヲ一掃ス、成功決テ不可疑、蓋シ道路ノ説ヲ聞クニ、
朝廷奸猾口給ノ徒ヲ撰ヒ、 閣下ヲ説破セント謀ル事如
シ、此ニ至ラハ蝦夷ヲ

玉座ノ下ニ誅ス、亦今日ニ用ヒスンハアルヘカラス、国
家回復ノ大機會、今日ヲ除テ他日ナシ、力疾東行積年ノ
鄙懷聊遺トコロナシ、機事要密一覽ノ後焼捨ヲ賜ヘ、

四月廿四日

小田村達藏再拜頓首、謹呈、

從三位島津公閣下

冊子原寸 縦二四・五種 横一七種 七枚

一九六 山階宮晃親王より島津從二位公へ

久光公の東上を祝す

(封紙ワラ書)
「島津」二位様

晃

侍史中

ノ

ノ

逐日温暖之節ニ相成候、弥御宜候ニ被為入候哉、尚委曲
令拝承度奉存候、抑此度以

勅使被仰出候ニ付、速ニ御上東之趣伝承仕、遠路之所毎
々御苦勞之義ト奉存候、併奉為国家乍恐大慶仕候、此粗
魚乍赤面御無恙御上東之御悦申入候印迄ニ進上仕度、御
笑留被下候ハ、本懷弥々畏入奉存候、先右申入度如斯
候也、

敬白、

四月廿五日

二白、時令折角御用意御給候東伏水と西国へ無障奉
職相濟私晃畏入候、乍序御得聴御礼傍申入候、今度

愚男菊丸梨本宮エ養子御願被仰出畏入奉存候、曲折
拜面事ニト書略候也、

文書原寸 縦一七種 横三九種

一五七 伊達宗城卿より島津久光公へ

久光公ノ上京ヲ賀ス

(封紙ウラ書)
一島津老堅公閣下 宗城

封

「

文書原寸 縦一七・八種 横六〇種

〇一六 久光公宮中車寄迄乗車許可ノ御沙汰

一五八 久光公上京ニ付鹿兒島士青崎一郎ヨリノ建

白

物価ノ下落其他ノ件

(表紙)
一上

「

拝呈春暖之候候処、愈御勝常奉大賀候、扱一昨日ハ航海

無御淹滞御着京之由、為

朝野欣然之至御座候、就而は是迄御契鬪打過候謝罪旁近
日御清暇之日御示被下候得は、拜趨可仕、万縷期其時陳

述ト御動靜伺度如此御座候、頓首、

四月念六

二伸、此腐魚乍輕少御歛之驗迄貢庖丁候、於御叱留

本懐存候、已上、

乍恐奉建白候

一朝 為御、 一 二ノ丸様御為、 一 為万民、

乍不及自心江戸中諸所江罷越、当世成之儀四方山々承
合申候処、当分 二ノ丸御君公御事を薩摩君と奉申上

候、一日茂早ク 御上京被為在、万民安普は勿論、諸

色下直相成候様 御政事被成下候様之咄シのミ承り申

候訳合御座候、就而は諸色は第二第三奉存候、第一

二ノ丸様御人徳御威光被遊御付候御儀第一と奉存候ニ

付、乍恐奉建白候、

此節 御上京被為在候御儀ニ付恐多次第奉存候得共、
当分東京中之万民男女子供ニ至迄、 二ノ丸様 御上
京朝夕と奉待上候儀ニ御座候、 其外八九ヶ国之土族茂
御君公 御上京及承、 追々罷登奉待上候儀ニ御座候、
誠以 御人徳被為在候御儀と乍恐奉存候、 此上は猶又
御人徳御威光第一奉存候、 兎角誰茂有事人徳依而は能
キ事茂悪敷事茂行ひ行不届、 就而は 御君公 御時節
参申候ニ付、 何辺之筋能キ行ひ事を被仰出候得は、 御
尤之御事ニ御座候得共、 若シ悪敷行ひも捨有之は皆人
ソシル茂同前と奉存候、 乍恐 御君公当御威勢ニ依而
は譬悪敷行ひ事を被仰出候而茂、 能キ行ひ可有之儀と
奉存候ニ付、 乍恐此函を御弛シ不被遊候様奉願上候、
尤日本国中之大儀建と不被為建とは此節 御上京ニ有
之候、 何れ 御君公江人徳不被為付内は何様ニ茂相調
不申候ニ付、 御人徳を被為得度候様乍恐奉存上候、 御
人徳御威光当分より猶又御付被遊候御儀は三ヶ条有之

候、 右之儀は左ニ奉申上候、

一当分大藏省ヨリ市中之者共江貸家と名付、 煉化石を以
異官を造立、 諸人江御貸付ニ相成候筋之御吟味ニ而、
折角過分之御物入ニ而造調方有之候ニ付、 是迄町人共
銘々親之代ヨリ所持致居候家屋敷惣而無代銀ニ而御取
上被仰付、 其上小路は拾五間之大路ニ相成申候、 譬是
迄八間小路ニ而有之候小路ヲ拾五間之大道ゆへ、 銘々
共之屋敷之奥行、 是迄拾間茂所持之居屋敷右之通訳合
ニ付、 両方之片脇江五間ツ、 茂カケ引、 其上御取上ケ
被仰付候、 残り五間は馬場通りを後向ケ家作を据へ、
住居スマイを付申候得は、 誠以難渋等茂残念等茂難申候儀
御座候由承り申候、 何分御上ヨリ御沙汰之御事ニ御座
候得は致方茂無御座、 唯込居次第のミニ御座候、 尤是
迄五間茂所持仕居候屋敷之儀は、 毛頭残無之、 無抛親
之代ヨリ住馴居候家屋敷を立ノキ申次第、 誠以不便之
至ニ奉存候、 夫故忒三人は変死いたし候者茂有之候由
承申候、 尤当分之処ニ而煉化石江居住致度心当之者は

纔京橋ヨリ新橋迄之間ニ三拾七八家之外無之由承り申候、何之訳柄ニ而居住不致候哉之儀を段々承り申候処、御上ヨリ之税ひ、畳耆枚敷ニ付耆ケ月ニ金耆兩位ツ、高家賃錢ゆへタイカイノ町人共迄は居住致兼申候由承り候、右様之店賃錢高直ニ有之ゆへ、無抛諸色茂高直ニ売出シ申候訳合ニ御座候、夫は扱置煉化石官ヲ今之通被召置申候得は、後は外国人共居住致外国諸品店先キ江売出シ申儀は相違無御座候、其訳合は煉化石官高家賃錢ゆへ町人共居住致兼申候処ヨリ、明家ニ相成居申儀は疑イ無御座候、右明家を外国人共氣ニ付、右明家貸入度段大藏省江願出申候得は、大藏省之官人耆寸先キは不相見、当座之事さへ宜敷儀ニ候得は、当座賃シニ外国人共江御貸付ニ相成方宜敷杯と吟味ヲ付、異人なれば少々位之高家賃錢差出申儀は少シ茂カマイ不申候ニ付、自然御貸付相成申儀疑イ無御座候、左候得は追々は外国人共、明家を見掛願出申儀は相違無御座候半と奉存候、若シ願通御免御座候得は、後々は京橋

ヨリ新橋迄之間は外国人共我かもの面ニ而勝手次第致申儀は相違無御座候、其節ニ至而は、乍恐 御政事は御届キ被遊間敷奉存候、尤去年出火ニ而焼残り申候場所なれば、煉化石官御開キ被遊候御儀御尤ニ奉存候得共、京橋口より耆町計先キ之方三拾四五軒茂焼残り申候場所迄茂御取崩シニ相成、殊ニ藏家作并土藏迄茂モロ／＼処御取除キ相成、煉化石御造調方有之次第、誠以不便之至、何とも難申候儀ニ御座候、乍恐矢張當分之通、煉化石官被召置申候得は、後々は薄ス／＼承り申ニは共和政事之方宜敷杯と申候人茂有之哉ニ内々粗承り申候儀ニ御座候、実は後々ノ共和政事之糸口ニ可相成儀茂無御座候半と奉存候、右様之御政事ゆへ御上を奉恨ミ候次第、ものニ譬候得は十ヲハ七ツハツ迄は奉恨ミ候人多シ、左様御座候得は、後々は自然と共和政事ニ相成方ニ万民ヨリ相招キ候様ニ罷成申儀は案中と乍恐奉存候ニ付、此涯一先御見合ニ而御取止被仰渡奉存候、

一分市中江何編ニ不依税ひと名付過分之税ひ有之被仰渡候、何れ税ひは可有之儀、当前ニ御座候得共、何れ品柄ニ茂依り申之儀ニ御座候、只今之処ニ而は有而不被為在もの迄税ひ被仰付訖ニ御座候、当分之通税ひとか罪金とか余リ被仰渡候而は、乍自 御上を奉恨ミ之外は無御座候、当分之処ニ而は、万民一統税罪金ニ而甚以意外之儀ニ奉存居候、違相之事開化無之方宜敷杯と諸人之咄シ計段々承り申候、今通万民 御上を薄ス
く奉恨ミ候而は、廻々ニは 御上を奉除キ之外は無御座候半と恐多茂奉存候、若シ其之節ニ至而は文明開化茂入用無御座候、 御上被為在御座候而文明開化茂入用御座候、余リ文明開化茂格別替々ものニ而は無御座候、乍恐開化茂半方有之方宜敷儀ニ而は無御座候半と奉存候、何編余リ頭勝ニ相成申候而は後者モクラモチノ石当り、余リ行き過而跡江カヘルと申事茂御座候、後悔先キ建不申候儀と奉存候、何編ニ不依半方ツ、有之方宜敷ものニ而は無御座候半と奉存候、尤伏見戰爭

は能々 御考被遊、時之將軍茂一夜ニ没シ儀茂有之、跡更能々アンシ申ニ、將軍家茂前広能ク手当事行届キ、能ク談合茂行届キ申候得は、于今矢張時之將軍家ニ而可有之儀と奉存候、徳川家茂余リ欲クニ迷ひ先祖代ヨリ之家茂一夜ニ没シ候例シ茂近比ニ有之候ニ付、乍恐税ひ之儀は此涯一先御見合ニ而御取止被仰渡奉存候、一御布告ニ裸ニナル事を御禁制被仰渡候処、困窮者共日々之家業、就而は何仕事を致ニ茂荒仕事のミいたし、一刻茂ハタカニ不相成候而は、アセをカキ甚込居申候、尤夏向ニ相成申候得は、猶更難渋仕次第ニ御座候、勿論日本国中之人民は是迄はハタカニ成居、兼而荒仕事ノミ致居候者共ニ御座候、ハタカは扱置女共道路ニ而俄ニ雨ふり出シ申候得は、着物之裾を纏高ツフイ上ケ、通行致申候処ニ、纔計足之股之辺少シ高ツフイニ而通行致申候得は、直ニ羅卒共より被咎目ニ付、則羅卒共詰所ヲ屯所ト申候、右屯所江列行罪金被仰付候事尅両考歩被申付候人茂有之、尅両被申付候人茂有之、三

步被申付候人茂有之、右之通罪金之高下有之、万一茂只今金子持合無之者は右屯所之内ニ各人格護所有之、右格護所江三日三夜計御留置、其上御咎目として、木刀を以拾打ウタル、者茂有之、忒拾打ウタル、者茂有之、其後タ、キハナシニ相成申候、其上当分は東京中ニ諸所方々ニ小便致シ申候得は、金老朱ツ、罪金被仰付候、其節ニ至色々過言抔申出候得は、別段ニ金老步茂過言料として罪金被仰付候、就而屯所東京中江百忒三拾ヶ所有之、屯所毎ニ毎日八九人拾人計ツ、罪金御取被成候次第、誠以非法之御政事ト乍恐奉存候、何編ニ不限税とか罪金とか、或は裸かニ居ルとか足之股之辺見ヘタとか申候而御咎目被仰付候次第、実以股紬王ノ政事茂如斯御座候半と奉存候、夫ニ付而何編税罪金と有之ゆへ、日々ニ諸色は高直ニ罷成申候、日々暮シ之者共ハ纔日ニ忒貫文か三貫文か之賃錢ヲ以、家内之四五人茂拵抱致申候上、税は扱置、罪金之尅尅余茂差出申候而は甚迷惑千万奉存候、今成ニ而は日々暮シ之

者共ハ、建行不申廻國中^ニ之ツカレと相成申ものニ而は無御座候半と奉存候、尤家業ニ而税ヨリ差出申儀は何少シ茂厭イ不申候得共、前文之通罪金ニは甚恐入次第ニ御座候、右之趣ゆへ日々ニ諸色高直ニ相成詔合ニ付、諸色高直ニ有之咄シ抔と当分之高官人江段々咄シ抔と申掛候処、諸色之儀は外国抔ニ而は極高直ニ有之、当日本國中^ニ之諸色は未下直ニ有之抔と返答承り申次第ニ御座候、是迄日本國中^ニ之諸色は下直ニ有之國中ニ御座候処、当分は外国之真似ニ而高直之方宜敷抔と承り、以之外之儀承り申候、尤万民フツト一ヲ起ス根本は諸色高直之処ヨリ皆々難儀ニ有之詔合ヨリフツト一ヲ起シ申儀ニ而は無御座候半と奉存候、尤國中豊ニ有之候得は軍務抔茂能ク相調申候ものニ而は無御座候半と奉存候ニ付、右之裸か成之儀は、此涯一先御見合ニ而御取止被仰渡奉存候、

右三ヶ条 御着涯御繁多被為在御座候得共、東京中は勿論万民御助分 御着当日ヨリ日数二十日計之内ニ御

触渡シ有之候様 朝廷所江 御願被遊、右三ヶ条是非
々々御触渡シ有之候得は、万民之歎ニ數無限次第、朝
夕兩手を合せ奉拝シ申儀は相違無御座候、左様御座候
得は、御人徳御威光重増倍被為在御座候御儀と乍恐
奉存候、就而若シ 御政事御預り被遊御儀茂御座候得
は、東京中は勿論諸国県々江隠シ目付數千人御差出シ
置、下々之者共之今日之行実之善惡を能々御聞合被遊
候御儀、乍恐第一奉存候、

一 税ひ御取被遊候御儀は、当分迄万民難儀不致候様、御
取被遊候儀外ニ有之候ニ付、右趣法建之儀は、御採用
被為在候御儀茂御座候得は、後日追々奉建白候、
一 諸色下直ニ相成候様之趣法建之儀茂右同断奉建白候、

月日

鹿兒島

青崎一郎

冊子原寸 縦二八・五糧 横二〇糧 九枚

二〇〇 耶蘇教伝道ノ件其他

合三通一綴

仏教師クウザン曰、日本民律モ未タ立スシテ、揭示ノ高

札三枚トモニ取除ハマケオシミニシテ、頑固ノ習風可笑
也ト云々、

諸教師近県近邑ニ教ヲ布ント欲スレトモ、地理人情ヲ知
スシテ其策伸ズ、西京博覽ヲ機会トシ、モリス等近日入
京ノ積ナリ、仏教師ハ已ニ入京セリ、一往京地ノ景況ヲ
見、追テ施行ノ意ナリ、

関忠三キヨリキニ随ヒ、中村喜一ウリヤムスニ随ヒ、筆
稿ヲナス、コノ兩人坂地ノ巨魁タリ、

和州当麻寺ノ和尚某クーサンニ入門ノ由ナリ、未タ何ノ
為ナルヲ知ズ、甚可怪也、

ギヨリキ学生七十員ニ充ツ、関忠三信徒ヲ誘ヘトモ未タ
帰向ノ徒ナシ、坂地ハヨホト開化ノオソキ地ナリト時々
慨談セリ、

神戸学生百員余アリ、吉田・倉谷ナルモノ執事タリ、公
会ノ徒廿余人、関貫三及同父兄影山耕三執事タリ、前田
泰一丹波士歎書肆ヲ開、異書ヲアキナフ也、近日米国女
教師二員来ル由ナリ、

〔卷〕
「右丙四月大坂より報知書ノ内ニアリ」

鹿兒島県下山ノ口馬場二官橋角

岡村休左衛門内

長野彦助

水科清事谷彦助方へ同人兄今村権助ナル者ト浪花ニテ知己ニナリ、其因ミニテ罷越候由風説ニ付御知セ仕候、以

上、

〔卷〕
「四月長崎より報知書の内」

琉球江長ク在留ノ教師、琉球語ニテ新約ヲ訳シ長崎へ廻シ候処、私シ未タ披見ハ不仕候得共、恐クハ長崎ニテハ不用物ニ属セン、併弘法ノ為メ尽力可恐事御座候、馬可伝翻訳書、旧冬五拾冊余横浜ヨリ送来候処、一時ニ施本致シ尽シ、今又此間百冊余取寄セ、盛ニ施本致シ居候事、

冊子原寸 縦二七・五釐 横一九釐 四枚

三〇一 東京府士族村上政信ヨリ久光公へノ建言

政務上改善意見

〔表紙〕
一御政務之儀ニ付申上候

第三大区十小区

士族

村上政信

卑賤不学愚昧之私

御政務ニ関係仕候儀申上候は恐縮之至と奉存候得共、

方今不容易御時節、浅見瑣末之儀茂心付候事件不申上

罷在候は、却而

御国恩忘却仕候儀共可相成奉存候ニ付、不顧多罪左ニ

言上仕候、

一 御一新以来西洋之方法追々御採用相成、洋書ヲ読不

読文明開化ヲ唱へ候処、彼レノ長スル窮理・化学・

医術・器械・造船・礦山・練兵・航海之類ヒハ最モ

師トシテ学フヘク、政律・宗門・教法ノ如キハ、

皇国ノ神道・漢土聖賢ノ法則ニ反シ、君臣父子之道不

正、只利慾ヲ基本トナシタル窮利ノ説トモ存ラレ候
ニ付、断然御採用無之様奉存候、乍恐

皇朝ハ、

神祖ヨリ数千歳、連綿タル

御血統ノ

至尊ニ渡ラセ玉ヒ、地球中最第一君臣父子ノ道正シキ

御国ニ有之処、近来稍モスレハ共和政治ヲ良法ト申ス
族有之、以ノ外心得違惡ムヘキノ徒ニ候得共、必竟

其起元ハ彼レノ政律ニ模擬スル 御政典 御発行有

之ニ付テノ儀、尤モ彼レノ法則百事 御採用無之様

ト申次第ニモ無之、勝レタル美事ハ 御英断ノ上被

為 行、其他ハ凡ヘテ廃棄ナサセラレ、急務ニ無之

御備ノ西洋人ハ速カニ被 免候様奉存候、

一 人才 御撰挙ニ付、種々ノ方法可有之候得共、德行

ヲ先ニシ學術ヲ後ニスルヲ良法トモ奉存候処、近来

ノ 御撰^(德)ミニハ老壯ヲ論シ、学力ノ高下席上討論ノ

擾劣ニヨリ平素ノ行状 御探索不行届、老人無学ノ

者先ツハ 御採用無之候得共、学力討論ニハ勝レ候

トモ、平日ノ行ヒ不正多慾奸曲愛憎邪正ヲ謬リ、信

義無之下情ニ不通ノ類ハ 御騰用^(登) 御政典ノ害トナ

リ、又老年不学ニテモ、右ニ反スル輩ハ 御採用ニ

益アリ、将タ若年ノ徒ハ少シク学才アルモ事情ニ暗

ク、血氣ニ任セ事ヲ過ツモ不少、拔群ノ事業才力無

之者ハ、学問諸術勉勵時務ニ通達スルヲ待テ 御登

用可有之歟ト奉存候、

一 賞罰ハ政典之大綱目、賞ヲ重クシ罰ヲ輕クナスハ聖

代善政ノ道ト存候処、賞典ノ新令ハ格別 御布告ニ

モ拜承不仕、西洋ニ模擬スル贖罪ノ新律ハ普ク 御

布令有之、追々犯罪ノ族罰金御取上ケニ相成候処、

右モ 御政務ノ障礙ニ不相成儀ハ、可成文ヶ簡易寛

太ノ御法則可然歟、併官員ノ党ヲ結ヒ、賄賂ヲ貪リ、

其任ニ堪ヘサル者ヲ周旋登用シ、訴訟ノ是非黑白ヲ

変乱シ、政典ニ害ヲナス類、酒色ニ耽リ、不正ノ行

ヒ有之族、罪状發覺之節モ多分免 職而已ニテ、罰

金ノ御沙汰無之ニ付、衆人ノ誹謗ヲ免カレス、其本
乱レテ末治ル理無之、自然 御布令ヲモ蔑如スルニ
至リ候ニヘ、官員モ其罪状ニ依テ免 職ノ上、相当
ノ御所置有之、専ラ懲惡之典相立候様奉存候、既ニ
是迄奉職官員ノ内、稍モスレハ時備同様ノ心底ニテ、
俸金ヲ専務ト心掛、私慾ヲ主張シ、賄賂ヲ貪リ、露
顯免 職ノ後モ蓄財有之故、格別悔悟モ不仕族有之
候、旧幕府衰政ニモ權家職務不正ノ儀有之、免職ノ
後ハ必ス預ケ者、營繕ノ類多分散財ノ儀被命候、況
テ今日 御一新ノ折柄、懲惡之 御法則相立スンハ
不可有ト奉存候、

一 間ハ政府ノ耳目ニ代ルヘキ緊要ノ者ニ付、篤実・方
正・無慾・鄭重・勉強少シク才力有之、下情ニ通シ
タル者御精撰教輩 御登用有之、官員之邪正ヨリ万
民ノ得失并各国在留異人ノ情実迄、微細ニ 御探索
行届候様奉存候、尤モ旧幕府町奉行并先手加役ノ配
下手先キト称ヘ候者ハ多分不正ノ者ニテ、己レニ利

アル事ノミ探索ヲ遂ケ、利ナキ事件ハ傍觀シ、賄賂
ヲ貪リ衆人ノ害ヲナス事少ナカラス、当節ニ至リ未
タ其弊不相止、右等ノ者ハ速カニ被 免御改正御座
候様奉存候、

一 四民君臣ノ名義被 廢止、備入之称号ニ相成候ニ付、
備主備入ノ者恩義情実共ニ亡失シ、浮薄ノ人情ニ移
リ行上下混同、終ニハ乍恐

至尊之可奉敬ヲモ忘却仕、利慾ニノミ走ル洋夷ノ臭風ニ
押移ルヘキ形勢、就テハ昌平打統、万民遊惰ニ相成
候内、別而士分之者家禄余アリテ、空手素餐ノ族多
ク、御一新以来世禄モ減耗被 仰出候ハ至当之儀
ト奉存候処、終ニハ士ノ称モ可被 廢止勢ヒ、假令
当節素餐ノ者ニ付、又々家禄ハ相減候共、士ノ称号
ハ被 立置、君臣ノ名義ヲ復シ、四民尊卑ノ區別順
次弁別有之、

御国体相立候様奉存候、

一 府県貫屬其用ニ充ツヘキ分ハ兵隊ニ被 組立、其他

ハ器ニ応シ、最モ下等ノ職務迄ニモ被 召使候様希

望罷在候処、近来農商ノ内多分 御採用有之、尤モ

非常ノ才力有之分 御登用勿論ニ候得共、凡備俗吏

農商ノ分ハ元ニ復シ産業ナサシメ、貫屬ノ者ヘ如何

様ノ卑職ニテモ被 命候ヘハ、農商ヘ給リ候ヨリ俸

金相減候テモ、窮迫ノ者共 御恩沢難有感戴勉勵尽

力可仕、且ツ徒衣徒食ノ防害共可相成奉存候、

御政典 御変革ハ瓊末ノ儀モ前後ノ理害得失精密ニ

御斟酌 御評決ノ上 御布告可相成之処、時トシテ

朝令暮解^(改)ノ儀有之、万民ノ目的不定、苦情ヲ述候者

道路ニ不絶、自今 命令一度出候後ハ、大事件有之

外容易ニ 御変換無之、衆人方向ヲ得候様奉存候、

一方今 御多端 御失費莫太ニ有之候処、西洋ニ倣ヒ

急務ニ無之家屋・門戸・器械等 御製造有之、虚飾

ノ御入費不少事実 御穿鑿之上可被禁止、亦諸省東

京府并諸庁ノ内、終始模様替等ニテ散財ノ事件多分

ニ有之趣、右等モ御時節柄ヲ体認シ、少シク不都合

ノ儀ハ宮繕ノ費ヲ厭フ為メ勘弁可有之儀ト奉存候、

新聞紙ノ類、万民知覚ヲ開ク為メ、免許一般流行仕

候処、其文章中 御政体ニ關係シ虚実不分明ノ儀、

愚民ヲ惑ハス奇怪ノ説、遠国来状ノ偽説、道路ノ妄

説著述作意ノ文等、衆ヲ惑ハシ 御政典ニ害トナル

ヘク、右等ノケ条ハ嚴敷 御差止メ相成候様奉存候、

博奕惣テ賭勝負ノ類、従前制禁ノ処、近来稍モスレ

ハ集会博奕其他貨幣賭勝負并浪花米相場ニ齊シキ儀

致シ候族多分有之趣、必竟産ヲ壞リ、風俗ヲ乱ルノ

基ヒ、 御探索嚴禁被 仰出候様奉存候、就テハ卑

賤ノ小兒輩銅錢ヲ以賭ノ遊戯致シ候処、其父母タル

者誠メス、自然成長悪習ノ萌シニ候間、是亦嚴鋪

御制禁之様奉存候、

一 近来都下ヨリ諸県ニ至ル迄、無益ノ禽獸草木ノ類、

其品物流行ノ節ハ不相当高価ニ売買、時々刻々ニ其

価ヒ昇降致シ、夫レカ為メニ諸民職ヲ廢シ、一時ニ

利ヲ得ルヲ旨トシ、産ヲ壞リ候者不少、当節兎豚ノ

如キ千金ヲ費シ候族有之趣、右ハ稀レニ僥倖大利ヲ得候者ヲ照準トナシテノ慾心ヨリ発リタル悪弊、殊ニ奇ヲ好ミ、洋種ヲ愛シ、無益ノ品物ニ散財、空シク外国ヘ利ヲ被得候ハ遺憾ノ至リ、迅カニ禁止不被仰出時ハ、博奕賭勝負同様大害ニ可相成、自今無用ノ翫物ハ、仮令流行致シ候共、其の不的当代価高料ノ売買 御制禁、若違令ノ者有之節ハ相当ノ御咎被仰付、品物可被 召上旨ニモ 御布告相成候様奉存候、

一 人力車ヘ男女合乗ノ儀、西洋夫婦ノ別無之国風ニテハ斟酌モ無之欵、男女ノ道正シク被為 成候 御政典ニハ、尤モ可忌ノ醜風ニ付、十歳以上ヨリ凡ヘテ男女同車ハ 御制禁相成候様奉存候、

一 仏法渡来ノ後、乍恐
 神祖ヲ始メ奉リ、諸神共本地仏有之ノ妄言ニ惑ハサレ候
 千有余年ノ弊風、 御一新之際忽チ 御改正有之、
 神祇官^(祇)ヲ被為 建難有御事ト奉存候処、亦々西洋ノ

邪説行ハレ、衆人ノ信心ハ誠心ヨリ出ル処ノモノナル故ニ、政府ニテモ禁スル事不能ト云事 御採用ニ付、在来ノ淫祠又ハ名モナク徳モナキ者ヲ私ニ神ト称シ、謂レナキ古木ヲ祭り、加持祈禱ニ衆ヲ誑カス奸黠ノ謀計ニ陥リ、愚民ノ帰依信心散財ナスヲモ其假ニ被差置候得共、右ハ淫祠等ニ關係スル奸人ノ慾ニ充ルノミ、速ニ制禁不被 仰出時ニハ、不正ノ信心増長シテ、浄土真宗・日蓮宗門ノ如ク、一時ニ手ヲ下シ難キニ至ルヘク、二葉ニテ根元ヲ断切ナス時ニハ斧ヲ用ルノ憂ニ至ラス、素ヨリ愚民ハ時ノ流行ニ移リ安ク、信心ナス所ノ淫祠ノ類、 御制禁破却有之時ニハ、乍恐正シキ

御先代之 神徳ヲ尊信シ奉リ、随而

皇国ノ御為メ君父ノ為メ忠孝勲烈有之、在来ノ神靈ニ帰依致スヘク、就テハ諸宗門共謂レナキ加持祈禱ニ財ヲ貪ル類、又神仏ノ籤壳・ト・觀相・墨色呪法之類、是亦奸人諸民ヲ愚弄シ、財ヲ貪ルノ器械 御制

禁相成、専ラ

神州之名義、御主意貫徹致シ、西洋宗門不可入之予
防、御所置有之候様奉存候、

一 都下大小各区ニ区別有之、戸籍人口御取調有之、

御取締ノ為ニハ邏卒 御配分有之候得共、今以遺漏
不都合之儀不少、又一般浮薄ノ人情ニ流レ行キ、近
隣ト雖トモ氣質ノ異同ニヨリ交接親睦ノ儀無之ニ付、
先ツ武家ノ分五家ヲ伍ノ小組合ト相定メ、一邸ノ内
同居別居共、銘々伍ノ数ニ算入シ、寄留ノ武家モ同
様タルヘク、五伍ヲ一組トスルト雖トモ、土地ニヨ
リ戸数ノ多少ハ便利ニ任セ、凡ソ二十五家ヲ何大区
何小区何号ノ組トシ、其内ヨリ伍長ヲ可撰奉、尤伍
長ハ方今俸金不給、御布告廻達其外取締向勉勵ノ

次第ニヨリ、御登用或ハ賞金給リ候儀モ可有之歟、
平常組内忠孝・貞烈其他賞譽スヘキ事件有之輩ヲハ
伍長ヨリ其区庁ヘ可申立、右ニ反シテ不良ノ行ヒ有
之族ハ、伍長懇切ニ教諭致シ、悔悟改心不致時ハ同

断可申立、勿論一組中睦シク相交リ別テ小組合ハ互

ニ親戚ノ如ク相親シミ、心得違ノ者有之時ハ速カニ
諷諭シテ、若シ不用節ハ其始末伍長迄可申出、万一
罪科ニ可被所程ノ儀、他ヨリ露顯スル時ニハ伍長并
小組合近隣ノ怠慢落途ニ付、夫々 御沙汰可有之、
將タ農工商モ同様ノ規則タルヘク、且各邸門戸表札
ヘモ組ノ号ヲ記シ、一邸ノ内数戸有之向キハ、門戸
ヘ無洩名前書出シ、市井商戸ノ表札ハ商業職業迄相
記シ、裏家ノ分モ露次口ヘ明細相記シ、農家モ右ニ
準シ各戸ヘ表記スル時ニハ、昼夜共一目瞭然タルヘ
ク、尤前条ノ通り、伍ヨリ編立 御取締行届、普ク
信義淳朴ノ風俗ニ改正スル時ニハ、自然邏卒モ無用
ノ者ト可相成儀ト奉存候、

一 高年ノ者 御扶助米ノ儀、当年限り被 廃止ノ 御
布令有之候得共、右ハ養老ノ 御仁政人望ニ関係致
シ候儀ニ付、従前ノ通下賜リ候様奉存候、
一 今般復讎 御制禁 御布告ニ相成候処、右ハ臣子ノ

誠心止ムヲ得サルヨリ出候情実、忠孝ノ道ニ於テ最モ不可欠事件、人命ハ至太至重ノ物ニ有之故、其人命ヲ害シタル者ノ罪モ随テ至太至重ナルヲ以テ、臣子ノ身ヲ以復讎ナスモ障礙有之間敷儀ニ候得共、宦ニ代リ人命ニ関係候大事件、私スルヲ防ク為カ、是迄復讎ノ願ハ禁セラル、ト雖トモ、事實相違無之時ハ、復讎ノ後格別ノ咎メ無之、元來君父ノ復讎ハ害セラレタル者曲事罪狀無之分ハ、臣子ノ願 御聞届ニ相成、宦ニテ探索捕縛有之時ハ、其臣子ニ刎首被命、又讎敵亡命、他邦ニ潜ミ居候ヲ、臣子ノ者探索シテ其所ノ庁ヘ訴出ル時ハ、迅カニ讎敵ヲ捕縛糾問ノ上、無相違時ニハ臣子ニ刎首被命、忠孝ノ情願ヲ遂サセラレ、或ハ時宜ニヨリ庁ヘ不訴シテ復讎ヲナス共、其事実相違無之時ハ御咎メニ不及、人道ヲ尽サシメ、品ニヨリ賞与有之、勸善懲惡ノ 御政典被為 行候様奉存候、然ルニ西洋ニテハ人ヲ害シ候罪科ノ者モ、終身徒刑等ニ所置ナス趣、天理ニ背キ

タル悪政人命ヲ害ヒタル者ハ、格別ノ事件有之外速ニ死刑至当ノ理、尤モ彼レノ国風、君臣父子之道不正、只管利慾ニノミ走ル汚俗醜習ニ馴レ、子弟復讎ノ念モ無之歟、

皇朝忠孝ノ道ヲ弁ヘ候人倫ニテ、君父ノ讎敵存命ト雖トモ徒刑ニ所セラル、カ故ニ、仇怨ヲ散シ、共ニ天ヲ不戴ノ語ヲ忘却スル者有之間敷、若万一君父ノ鴻恩モ不弁、頑愚ノ者有之節ハ、

皇朝ノ正敷神教并支那聖賢ノ道ヲ以教導シ、君臣父子之道ヲ明亮ニ知覚ナサシメ、外夷汚濁ノ惡習ニ伝染不致様教育被命、

皇国ニ 御政体基本相立候様奉存候、

一 紙幣ハ不得止 御時勢ヨリ 御製造相成候処、近来贋作被為 厭ニ付而之儀哉、洋人ニ 御依頼有之、右ハ

皇国最第一ノ貨幣ニ代リ候品ヲ外国ヘ製作被 仰付候ハ、外器械共相違仕遺憾ノ至リ、

皇国内ニテ製作相成難ク、異邦へ御頼ミニ相成候ハ、乍恐

御国辱共奉存候、就テハ御深慮モ可被為在候得共、更ニ其御旨趣弁解ノ御布告モ無之、西洋人ハ至誠至信ノ者ニ非ス、只利慾ニ長シ、交通ノ諸国ト雖トモ、好機會ヲサへ得ル時ニハ、互ニ属国トナスヘキノ奸謀ハ有之共、他邦ヲ富饒強大ニ為スヘキノ信義無之ハ、是迄渡来交際之先轍ヲ以テモ計ルヘク、且紙幣

皇国内ニテ御製作有之時ニハ、

御国内偽作ノ憂有之、他邦ノ製ヲハ模写スル事能ハサル故、贋作ノ予防ニハ可相成候得共、他邦偽作ノ防キハ如何可有之哉、右モ西洋何国カ一国ノ外決而製作ナシ難キ程ノ品物ニ候ハ、御頼ノ紙幣御改メ有之、員数増過スル時ハ、其旨御掛合ニ相成、其国ノ政府ニテ弁済モ可致ナレトモ、右様ノ次第ニモ有之間敷、就テハ各国在留ノ異人共、贋紙幣ヲ以テ

諸物品買取候後、贋物タル事相知レ候共、何レノ国ノ製作ナルヤ不分明ノ節如何御所置可有之哉、万一外国偽作ノ紙幣ヲ以テ、万物奪取ラル、儀有之時ニハ、

皇国内ニテ御製作有之様仕度、御恥辱衰弱モ目前ノ儀ト乍恐痛心仕候、既ニ先年旧幕府之節、西洋人横浜表へ贋作ノ壹分銀持渡リ候先蹤モ有之ニ付、紙幣ハ何卒

御国内ニテ御製作有之様仕度、

御国内贋作ノ分ハ、若真偽見分ケ難キニ至リ通用仕候テモ、

御国内ヲ不出、外国ノ贋作ニハ空鋪産物ヲ被掠奪ノ大患有之候、

皇国内ハ素ヨリ外国ト紙ノ質モ相違致シ候間、精細御工夫モ有之候ハ、容易ニ異邦ニテ贋作難相成品モ出来可仕儀ト奉存候、

右数箇条多分は当節御政体ニ反対仕候儀ニ付、不敬誹謗之罪ニ陥リ、万死ヲ不免茂不厭言上仕候、万々一

御採用相成候廉茂有之候ハ、賤劣之身ニ取如何計歟
難有仕合奉存候、誠恐誠惶頓首謹言、

明治六年四月

第三大区十小区
士族
村上政信 (朱、「政信」)
○

冊子原寸 縦二七種 横一九・二種 一四枚

10011 小倉県士族水島均ヨリ政府へノ建白

邪教ヲ排シ本教ヲ興スノ議

(表紙)
「建白書下案」

臣聞、英雄之事ヲ挙ル、必先ツ之カ大経ヲ立、以テ万世
不拔之業ヲ定ムト、抑維新以来 廟謨専ラ開化ノ進歩ヲ
務メ、制度・文物ノ大ヨリ百工技芸ノ広ニ至リ、一ニ欧
州ニ師倣シテ、此民ノ朦昧ヲ開カシメ玉ハントス、実ニ
盛事ノ至リニシテ億兆ノ大幸ナリ、然レトモ振化ノ民其
本ヲ忘レテ其末ニ走ルノ弊ナキコト能ハス、於此乎教部
省ヲ立ラレ、本教ヲ宣シ、国体ヲ明ニシ、内先ツ之カ大

経ヲ立、外無窮ノ変ニ応シ、皇化ヲ億万斯年ニ施シ玉
ハントスト、豈亦盛世ノ洪拳ト可不謂哉、然ルニ教部ノ
拳未タ其当ヲ不得乎、教職未タ其人ヲ不得乎、議論紛々
或ハ之ヲ可興ト云、或ハ之ヲ可倒ト云、或ハ民ノ所好ニ
任シテ官之ヲ不問ニ可措ト云フカ如キ、喋々談説アリト
雖モ、朝廷既ニ教部省ヲ立ラレシハ、是則邪教可防本
教可興トノ 廟議確乎タルコト、復タ言ヲ不待ナリ、今
ヤ新化ノ勢辺陲ニ波及シ、民心其抛ヲ紊ルノ日、邪教可
入ノ時ニシテ、本教モ亦可興ノ機ナリ、彼既ニ其時ナル
ヲ察シ、百方手ヲ下シテ其法ヲ布カントス、我モ亦此機
ニ投シ万緒策ヲ設ケ、之ヲ興シ之ヲ防カサルヲ得ス、実
ニ急務中ノ尤急務ナルモノニシテ、豈勞ヲ厭ヒ財ヲ吝ミ
之ヲ姑息ニ措クノ日ナランヤ、人或云、邪教ヲ防キ本教
ヲ興スハ今日ノ急務ト雖モ、官之カ堤防ヲ築キ、之カ法
度ヲ立、之ヲ防キ之ヲ興スヘキニ非ス、固ト教義ハ民ノ
信ト不信トニ依レハナリ、故ニ今日ノ拳ハ神官・僧侶・
異端小説ヲ不問、民心ノ所好ニ従ヒ、唯暫ク彼ニ移ルヲ

繫留スルニ在ルノミ、他日英雄教師ノ出ル有ツテ、民心
之ニ帰向セハ、本教始テ興起スルニ至ラント、夫所言ノ
如クナラハ、教義ハ民ノ所好ニ任シテ官之ヲ不問ニ可措
ト云ノ論ニ帰シテ、多少ノ人ヲ役シ、多少ノ財ヲ費シ、
教部ノ一省ヲ置テ何ノ益カ有ランヤ、且神官・僧侶・異
端小説ヲ不問、暫ク民心ヲ繫留スルハ、必然ヲサルヲ得
スト雖モ、民心ノ開化日ニ進ミ、鴻荒ノ事ハ疑ヒ易ク、
新奇ノ説ハ聞カンコトヲ望ム、殊ニ彼ニ向フトキハ金ヲ
得、此ニ帰スルトキハ財ヲ費ス、夫疑ヒ易キノ言ヲ以テ
望ム所ノ説ヲ排シ、利スル処ヲ棄テ、損スル所ニ帰セシ
メントスルハ、英雄教師ト雖モ必ス之ヲ難シトセン、況
ヤ凡庸ノ神官・僧侶何ノ資スル所アツテ、其術ヲ施スコ
トヲ得ンヤ、且仮令然ラストモ、既ニ教部ノ一省ヲ立ラ
レシ上ハ、必ス之カ法制ヲ立、之カ嚮導トナリ、之カ首
倡トナリ、神官・僧侶ヲシテ大ニ其術ヲ施サシムルノ策
ヲ立サルヘカラス、文部省ノ如キ既ニ然リ、従来固陋ノ
学ヲ遏メ、新振文明ノ域ニ進メ玉ハントスルヤ、之カ学

制ヲ立、之カ教則ヲ設ケ、億兆ノ子弟六才以上ノ者ハ悉
ク入校セサルヲ得ス、私塾ト雖モ亦然リ、其民ヲ束縛ス
ル尤甚シキモノト謂ヘシ、然レトモ 朝廷之カ目的ヲ立、
必ス此道ニ進マシメサルヲ得スト為シ玉フトキハ、必ス
斯ノ如クナラサルヲ得ス、豈教部特リ之カ法制ヲ立、之
ヲ束縛スルヲ得サルノ理アランヤ、然レトモ教部ノ如キ
ハ強テ之ヲ束縛スヘカラス、唯民ノ心特ム所アツテ勢ヒ
之ニ帰セサルヲ得サルノ策ヲ設ヘシ、抑維新ノ始メ神祇
官ヲ太政官ノ上ニ立ラレ、宣教使ヲ置レシカハ、山野ノ
愚夫モ旧来ノ耳目ヲ一洗シ、神明ノ可敬、朝廷ノ可
尊本教ノ自ラ有ルヲ知レリ、然ルヲ幾許ナフシテ之ヲ改
メテ省トシ、諸省ノ中ニ列シ、隨テ之ヲ廢シ、宣教遂ニ
不振、民亦漠然トシテ平昔ノ心ニ反リ、敬神ノ実復タ如
何シタルヲ知ラス、是 朝廷祭政一致ノ古典ニ基キ 皇
祖天神ヲ殿内ニ祭り、其名ヲ棄テ其実ヲ取り玉ヒシモ、
民耳目ノ触ル、処、反テ 朝廷敬神ノ名アツテ其実ナク、
開化ヲ先ニシ布教ヲ後ニ為シ玉フトスル者十ニシテ八九

ニ居レリ、此ヲ以テ教部ヲ輕視シ教職ヲ侮漫スル、日ヲ追ヒ月ニ隨テ熾ンナリ、是豈大経ヲ確立シ永世ヲ綱紀スル所以ノ道ナランヤ、臣故ニ云フ、廟謨既ニ本教可與邪教可防ト決スルトキハ、必ス先ツ民ヲシテ目ノ所見可仰可驚、耳ノ所聽可尊可愛ノ事ヲ起シ、不告シテ曉リ、不語シテ喻リ、其心恃ム所アツテ勢ヒ之ニ帰セサルヲ得サルノ策ヲ設ヘント、何ヲ以テカ之ニ処セン、臣愚謹テ據ルニ、朝廷都ヲ東西ニ立ラレ、皇居ヲ東ニ定メ玉フトキハ、必ス泉涌寺ニ類スルノ一所ヲトシ玉フヘシ、故ニ此名義ニ依リ、都下清潔ノ地ヲ撰ミ、一ノ大院ヲ創立シ、其既ニ内ニ祭リ玉フ処ノモノヲ再ヒ外ニ出シ、皇祖天神ヲ始メ、神武天皇以來御代々ノ皇靈ヲ安置シ奉リ、其祭祀ヲ崇シ、其觀望ヲ盛ニシ、之ヲ朝廷ノ本宗院トシ、皇上時ニ百官ヲ帥ヒテ行幸シ玉ヒ、民ヲ縦ツテ之ヲ拝觀セシムルトキハ、其尊大ナル民必ス可驚、其壯嚴ナル民必ス可仰、則チ之ヲ大教院トシ、教部省トシ、天下ノ神社ヲ統轄シ、海内ノ寺院ヲ隸屬セシメ、其

実ヲ挙テ之ヲ天下ニ及ホシ、七宗ノ寺院其大ナル者ハ中教院トシ、其小ナル者ハ小教院トシ、之ヲ億兆ノ本宗院トシ、是亦皇祖天神ヲ祭り、民各其祖先ノ靈ヲ配祭セシメハ、民必神明ノ可尊教院ノ可愛ヲ知ラン、既ニ可驚可仰可尊可愛ノ形成ルトキハ、民ノ不告シテ曉リ、不語シテ喻ルノ実必ス挙ラン、夫如斯ナルトキハ民心ノ所恃、独リ教院ニ係リ、法ノ可布教ノ可施我掌中ノ物ニシテ、神官・僧侶モ感激奮発、其力ヲ尽スコト必ス今日ニ百倍シ、丁寧(親)信切黔首ヲ教導シ、億兆ノ相率ヒテ本教ニ帰センコト、豈沓水ノ下ニ就クカ如クナランヤ、沛然ノ勢將ニ之ヲ禦ノ術ヲ得サラントス、假令西荒耶蘇ノ徒百方手ヲ擢クト雖モ、豈又可乗ノ舉ヲ誘ノ民アランヤ、実ニ快哉ノ至ト謂ヘシ、此独リ臣之言ヲ待ツテ之ヲ知ルニ非ス、朝廷必ス断シテ之ヲ行ヒ玉ハサルニ有ラムノミ、蓋シ断シテ之ヲ行ヒ玉ハサルモノハ、要スルニ大藏省ノ用途多端ニシテ、支給ノ此ニ及ヒ玉ハサルニ有ラン乎、臣愚以為教院ノ費用ハ必ス大藏省ニ仰クヘキニ非スト、

夫天下ノ寺院ハ現今既ニ億兆ノ本宗院タルヲ以テ、民各其家産ヲ割テ之ニ給ス、之ヲシテ教院トナストモ、亦今日ニ異ナルコトナケン、故ニ大教院ヲ以テ 官家ノ本宗院ト為シ玉フトキハ、是亦其内費ヨリ給シ玉ハサルヲ得ス、此ヲ以テ 官家内廷ノ用途ヲ節シ玉ヒ、宮内省定額十分ノ一ヲ出シテ之カ基本トシ、三公以下諸省府県ヲ不問、大小ノ官員及ヒ華族ニ課シテ之カ役ヲ助ケシメ、其下士族ヨリ平民ニ至ツテハ、意ニ随テ金穀ヲ寄付スルコトヲ許シ玉ハ、豈費用ノ給セサルヲ憂ン乎、是猥リニ民ノ財ヲ取ルニ非ス、 朝廷名義ニ依リ、明ニ天下ニ勅諭シ玉ヒ、其本ニ報シ、其祖ヲ尊ミ玉フ所以ノ誠意ヲ拙メ玉フトキハ、民モ亦 天祖ニ報シ、 朝廷ニ答ヘ奉ルヘキノ大義ヲ知り、必ス不令シテ從ヒ、不期シテ會シ、欣喜踊躍シテ其用ヲ奉センコト、之ヲ鏡面ニ見ルカ如ケン、言浮過漫然ニ似タリト雖モ、臣反覆熟図スルニ事甚タ難キニ非ス、唯 廟議ノ断ト不断トニ有ルノミ、夫非常ノ事ヲ為サ、レハ非常ノ功ナシ、庶幾ハ 朝廷断シテ

之ヲ行ヒ玉ハンコトヲ、然レトモ方今外教ノ四境ニ入ントスル驛々乎トシテ既ニ迫レリ、臣大教院ノ落成スルヲ待テ之ヲ防クノ謂ニ非ス、其燃眉ノ急ヲ救フ所以ノモノハ、臣別ニ愚見アリ、 廟議ノ此ニ決スルヲ待ツテ施行セサルヲ得サレハ、今敢テ陳述セス、 朝廷苟モ臣之言ノ可見アツテ高議万分ノ一ヲ裨補セハ、臣之幸甚何事カ是ニ如ン哉、臣不勝恐懼戰栗之至謹取進止、

明治六年癸酉四月

小倉県士族

水島均

冊子原寸 縦二七・八釐 横一九・三釐 六枚

三〇三 久光公上京ニ付隨行願出ニ対スル論達

此節拙者上京ニ付旧恩ヲ不忘致隨行度類ニ申出、於志は感賞不少候得共、多人数ニ相及候ニ付、不得止不応其意候、併此末人数入用之節は可申越候条、迅速上京有之度候、若拙者発足之日等卒爾之舉動有之候而は、以之外之

事候条、此旨分而相達候事、

酉四月

久光

文書原寸 縦一九・三種 横五三・二種

1008 安房神社少宮司加藤熙ヨリ海江田信義折田

主税へノ書

二冊

三種ノ神器並ニ南帝御伝説ニ就テ

1009 四ノ一

上三器洪範表

同伝来紀

上、

三器洪範表、

謹奉密啓候、抑是御伝説ハ

吉野先帝様ヨリ御秘授被為遊候因、

聖旨編著仕候一古書ニ御座候得ハ、第一

至尊御学問ノ事ト申ス御箇条ニ必要ノ御儀、実ニ不ニ偶

然ニ御際会ト奉欽仰候儀ニテ、

吉野聖靈ノ御秘訓、今日珍鋪奉ニ颺言ニ候ハ、却テ恐懼之

至候得共、必竟宇内形勢和漢洋仏之四教正説不判然ガ

故ニ、上下億兆之方向不相定、各々其所好ニ阿リ、各

々其所長ニ相泥ミ候次第ニテ、此一大原旨サヘ、儼然

以

歴聖御伝説、乍恐

御自得被為在候ハ、右四教四学ノ得失、万機之御

政粲然明備、内外万方下風ニ犇ラザル者有之間鋪ト奉

存候、伏奉仰

神鑑垂照候、誠恐誠惶昧死敬白、

明治六年四月

安房神社少宮司
兼大講義

加藤熙百拜

三器宝範伝来紀

謹按ニ、抑 南朝勤 王諸将ノ名族里見氏ハ新田之一

族ニシテ、上州新田ヨリ義貞義兵ヲ拳ルニ從テ、脇屋・

大館・里見等、一同鎌倉ヲ責落シ、遂ニ上京、各後醍醐帝ノ御勸賞ヲ蒙リケル時ニ、此三略伝ハ古本里見九三略伝書乾坤二卷アリ天皇ヨリ御免シナリシ也、其後里見氏足利將軍ノ為メニ屈セラレ、暫ク結城ニ属シテ、里見家基、春王・安王ヲ扶ケ、足利・上杉ト戦ツテ敗死ス、因テ家基ノ子義実十七歳ニテ、結城ヨリ安房ニ落、自是里見九代安房ヲ押領シ、上総ヲモ并スルニ至レリ、去バ其先里見氏ノ祖、三略ノ伝ハ後醍醐天皇ヨリ御親シク御伝授ノマ、ヲ、其家代々ノ兵秘戰略トシテ後葉ニ伝ヘタルナリ、其余耀終ニ自然ト一族ノ参州徳川氏ニ延及シテ、終ニ徳川氏再天下ヲ掌握スルニ至ル、全ク

列聖秘授ノ御余光、爰ニ及ヒシハ偶然ナラズ、終ニ天下ノ太平三百年ニ及ンデ、其余沢吾輩ニ及ビシ所、豈料ンヤ、外交ノ事起リ、頻リニ皇国全州ノ騒乱ヲ聞キ、是ガ為ニ徳川氏遂ニ乱敗シテ、天下ノ政權再朝廷ニ歸スルニ至ル所、漚辱クモ積年勤王ノ宿志ヲ達

シ、全ク神聖ノ光祐ヲ以テ、桎梏ノ横災ヲ脱シ、鉾ノ余命ヲ存シ、辱ナクモ軍務官ノ帷幄ニ参シ、遂ニ京都大学校ヲ開キ、博士ノ末列ニ加ハリテ、尚又神典皇籍ヲ初テ大学ニ立ルコトヲ得テ、神儒ノ大道ヲ唱フルニ、国学者ハ神典ヲ横ガマニ主張シテ、遂ニ皇典ノ本意ヲ誤マリ、漢学者ハ又漢学ノミニ固僻シテ、勿論聖道ノ本旨ヲ失ヒ、遂ニ皇漢両学ノ得失紛然トシテ、漢学最衰ヘタルニ、哀哉マタ皇学モ自ラ孤立シテ、洋外ノ教道、其虚ニ乗シテ如_レ鸚_鵡群起セントス、今又是ニ抗対ノ力ヲ孤立シ難キヲ以テ、終ニ新ラタニ皇釈ナド、称シ、神官・僧侶ト並立ツテ、我神州ノ大道ヲ維持シテ、海外万国ト衡行セントスルニ至ツテ、漚亦再教部ノ末列ニ陪シテ、遂ニ安房神社少宮司兼大講義ニ奉命、右大難ノ際ニ當ツテ積年東馳西奔、皇漢仏洋等ノ學術、得失如何ト苦心精慮ニ及ンデ自ラ信ズレトモ、確然人ニ喻スノ力ヲナク、百世ノ後ヲ俟ント自ラ決セシニ、不料安房ノ神社ニ奉祠、大氣ナクモ専ラ

齋部ノ衰替ヲ再興セントノミ神明ニ誓ツテ、狂瀟ヲ凌
 キ風雪ヲ犯シテ白頭航海、又ハ荆棘ヲ披ヒテ奔走、自
 ラ其老ヲ忘ル、ニ及ンデ、傍ラ里見氏ノ旧記等ヲモ探
 リ求ルニ、一老翁ノ南軒ニ背ヲ晒ラシテ、煤黒キ怪シ
 キ故本ヲ攤ケ居ルヲ見テ、何ヤラト予ニモ一見ヲ乞シ
 ニ、快ヨク許シケレハ、携婦ツテ是ヲ熟覽スルニ、何
 ソゾ料ラン、 皇典ノ奥旨、 後醍醐帝ヨリ 南朝勲
 功ノ諸忠臣ニ、窃カニ許シ 御伝授アラセ玉フヲ見ル
 ニ、我積年刻苦唱ヘタル三種ノ宝訓、 聖道ト合一ナル
 コト、北畠公ノ正説ヲ独リ断然確乎、是ヲ全ク 神代
 ノ古訓ト服膺信尊セシニ、不思議ニモ暗符冥合シタル
 ニ、驚喜敬服、初テ知己ニ遇フテ肺腑ヲ傾ケタル心地
 ニテ、積年ノ疑慮苦心、渙然氷解、手ヲ拍ツテ、自ラ
 踊リ自拜セリ、去レバ親房公、全ク 後醍醐帝ヨリ親
 シク御歴代ノ御宝訓ヲ受玉ヒテ、自ラ伝ヒ玉フコト分
 明ナリ、今又敬テ稽フルニ、 後醍醐帝掛卷モ長キ、
 天祖已来ノ御秘訓ヲ伝玉フ確証ヲ歴ニ詳ニスルコトヲ

得テ、 神典皇道ノ全ク、 聖經漢学ト一致タルコトヲ
 發明スルハ、 実ニ 神明ノ御賜ト云ヘキノミ、 サテ謗
 ニ所謂秘事ハ末毛ニテ、 一句一章トイヘトモ、 是ヲ敷
 衍シテ拡充スレハ、 六合ニモ亘ルヘシ、 乃今此御秘説
 ヲ得ルニ、 片言ニシテ 神儒ノ大道議論定マル、 国学
 ト漢学ト積年猜々鬩牆、 呶々論弁セシハ皆片言ニシテ、
 全ク積年無用無益ノ筆端ヲ勞シ、 舌頭ヲ費ス事、 恍ト
 シテ開悟、 一夢ノ覚タルガ如ク自ラ一笑シテ止程ナレ
 ハ、 抑 神聖、 御歴代ノ御遺訓、
 明王 南帝ノ御余耀、 全ク 南朝勲 王諸將ノ余沢、
 実ニ齋部祖神
 天太王命ノ御賜ト云ヘキノミ、 嗚呼是 御宝訓ハ、 畏
 クモ
 天日嗣知食ス
 皇々帝々、 三器御伝授ノ時ニ添サセ玉フ所ノ 神勅
 ナルコト明ケシ、 堯舜伝授ノ心法モ、 豈是ニ過ンヤ、
 万一読者苟モ輕慢、 道聽塗説ニ均シク心得ナバ、 豈

列聖在天之神罰ヲ逃レンヤ、阿奈畏コ、阿奈尊止、

明治六年二月三日、立春之前一日、百拜謹識、

安房神社少宮司兼大講義加藤漣

尚又密啓仕候、右は 御両公様共積年之任御知遇前書之
次第ニ而、希代之

御伝説ヲ幸ニ致抄録置候処、今般

御老公様 御東上被遊候由、就而は極密御一見之上不善

儀ニ御座候ハ、右両卷猷芹之寸慨

御進達被為下候ハ、大幸之至奉存候、尚其上之儀ハ

御老公様 御内覽之上、御尊慮茂可被為在、先は右格

外之御垂助ヲ以テ宜鋪御取次被下置度、偏ニ奉内願候

余委曲之儀ハ更期拜趨之時候、誠恐蕪手謹言、

明治六年四月

辱知加藤漣

再行

海江田從五位殿

兩賢潔左右

折田主 税殿

再白、右火急ニ草卒相認候間、追而御沙汰次第、尚又謹
而清書ヲ以、乍併例之鈍筆千万御推覽是祈候、再拜、

冊子原寸 縦二四・五種 横二六・五種 一〇枚

二〇〇四ノ二

表紙

「南帝御伝説」

古本里見九代記鈔之内、三略伝書乾坤之卷等有之候、
其内ニ

夫日本ハ神国ナレハ三種ノ神器ヲ以テ秘。伝。ト。定。賜。フ。是
全ク宝ヲ伝玉フニ非ス、知仁勇ノ三徳ヲ大宝トスルノ正
印也、然ルニ神者ヲ仁ニ合スルニ深理アリ、荒増ヲ云ン
ニハ、先天地之間ニテ人ヲ為^世レ大、人之中ニハ

天神七代 地神五代ヨリ打統キ、

天子ヨリ大ナルハ無シ、其道ニ三ノ御宝ヲ和シテ、

御子孫不レ絶様ニ御守トアル其事ヲ大名小名民ニ至ル迄

押弘^{本ノマ}事迄^{事ノ字恐クハ万世又ハ}種ヲ遺ス事ヲ教賜フガ仁也、
後世ナド云三字ノ誤リ

故ニ其徳ヲ

御先祖ヨリ請玉フテ

御子孫へ御渡シ成サル、所之印也。以上ハ宝玉ノ徳ヲ論シテ、文意脱誤等アラシキ、難審解、

然大意ハ宝玉ハ仁徳ニ体シテ、天下万世ヲ安ニスルノ宝印トス、最ト人ノ靈魂ヲ以テ玉ニ体シテ仁トス、不測ノ妙理アル可シ、是ハ畏クモ至薄ノ玉体ニ具在シ賜フ御事ニテ、賤臣等ノ敢テ擬議シ奉ル所ニ非ス、

宝劍ハ神用有体ハ如右如右トハ、宝玉ノ神用有、本ノマ、ニ此一句誤リアラシ、是ハ乍恐、天祚万々世受継セ玉フト云意ナラン繼玉フテ社稷ヲ他

人ノ為メニ破ラレマジト道ヲ以テ守リ玉フガ孝ナレバ家臣是ヲ忠トス、忠孝人々ニ守ツテ自他共ニ治ルヲ体也トス、不道成ル人有レ之テ乱ヲ興ス時、切り平グルニ可レ用

此一条ハ宝劍ノ靈徳ヲ論シテ、三徳中ノ勇トス、蓋玉ト鏡ハ文、劍ハ武、政ト教トハ文、兵ト刑トハ武也、爰ニテ忠孝一理、君臣ノ分ヲ説、真ニ深キ旨アリ、

諾冊ニ尊ノ天神ヨリ、瓊戈ヲ賜ヘリテ、万物ヲ造リ初メ玉フ、私カニ文武ノ神徳ニ比ス、果シテ然リ、アナ賢ミタス

御鏡ハ此理ヲ治事ノ毎々理明ニ知、理ハ是非ハ非ニ押分テ日月ノ諸方ヲ如ニ照給、可レ成自明ニ明德ニ体也、新レ民所レ成用也、右此三ツヲ以テ、五倫ヲ治メ万物ヲ育ス

ルヲ太平トス此一条、宝鏡ノ靈徳ヲ述テ、日月之明、人ノ明德ニ及ボシ、民ヲ新ニスルニ及ボシ、然後五倫万物ニ及ボス、学庸ハ問体ノ書ニシテ、三徳ト五達道ト尤妙合ノ神理著ハル、曾テ謂一部ノ中庸以テ三器ノ注脚ニ充テ、未足今得此明証、意味深長言語文

字ノ能尽ス、所ニ非ス、

然ルニ乱世程久鋪雖レ有ニ此伝亡ビ里見家ニ残ルトイヘトモ、

事ヲ悲ミ、愚按ヲ不顧如是指シ置ク也、後賢是ニ文ヲ付後世ニ伝給へ、太古ハ

上御一人之伝ナレトモ、吉野ノ御帝ヨリ有レ功者ニハ有ニ御免ニ也、雖然新田・楠・

里見各々滅亡以後ハ若シ三河ニヤ残ルラン饌処ニ有間敷伝也、可秘々々此一条説別ニ具、

上御一人ノ伝ト云一句、畏ミ考ヘシ、阿奈畏コ、阿奈尊ト、

一三略者始終、知仁勇ノ心持有リトイヘトモ、分ケテ見ル時上略勇、中略知、下略仁之心持也三略ヲ分ケテ勇ヲ上

下略トスルハ顛倒スルニ似タレトモ、是里見氏戦國ノ時ニ当ツテ、乱世ニハ武ヲ右トシ、尚ブノ時宜ニ因ツテ、三徳ヲ私ニ活用スル術ナレトモ、遂ニ大業ヲ成スコト不能シテ止ム、故ニ將ノ方賢ニ英

雄心ト云事ハ上略ナリ此説知勇ヲ混スルニ似タリトイヘトモ、自ラ剛健ノ勇ニ体シテ、外謙虚以テ英雄

ノ心ヲトルト云ヘルハ、深キ旨アリ、即チ勇ニシテ知ヲ兼タルナリ、北条早雲只此一句ヲ終身守ツテ、遂ニ関左八州ヲ吞併スルノ大業ヲ成

タリ、
可深考

一里見家ニ三略ヲ用ル事ハ知仁勇ノ三徳、聖賢之分ハ生
知安行利行之安也。安也ノ安忍ラク、中人以下ハ自ニ三近、
道ニ可レ入、故ニ三近ノ心持ニテ用レ之。此一条ハ中庸ノ三徳也、
或ハ勉强而行之トアル、三行ヲ大略ニ説ヒテ、人ニ聖賢ノ分アルコト
ヲ述、サテ中人已下ハ、三近トアル、好学近于知、力行ハ近于仁、脩業
ノ功アルコトヲ論シテ、三徳ノ活用、脩業ノ聖教ヲ論ス、實ニ深切、
著明、庸儒輩ノ能及所ニ非ス、是亦三徳古伝ノ奥秘タル事知ルヘシ、

八幡宮以來有ニ数度之功ニ皆是三略之心持也、弥又三種
神器御相伝以所レ秘之大事。
八幡宮ハ、初テ漢学ヲ開カセ玉フ、聖帝ニ在セバ、別ケテ已來ト
断ハレリ、然レ共、其已前ハ、三略ノ神理自ラ存セリ、故ニ弥又
二字篇ト可考、
皇典漢籍ニ能通スルノ者ニ非ンバ、此ニ家容易ニ下シ難シ、

一此安房国ヲバ小袋ノ国ト名付テ、諸国ノ打洩サレ兵ノ
共、度々軍馴レタル兵共来リ籠リ居、軍サモ随分仕リ
タリケルニ、不慮ニ稻村ノ乱出来リ、古来ノ者皆打死
シテ自ラ弱国ニ成タリ、新田・里見・鳥山ニ所伝兵書
ヲ此時失果テ、參河ノ国ニヤ残ルラン、

付録

右一書ノ中、根元ハ三略知仁勇ヲ主トシテ、左右敷衍
シテ、一家ノ軍法兵制ヲ立ルトイヘトモ、其内ノ金
言、実ニ闕キ難キヲ抄録スルコト如左、

里見法度条目及上中下三略ノ内、

一恩ヲ不知者ハ不レ可レ為レ人、故ニ孝行專一ニ相勤メ、奉
公ニ出テハ、忠勤ヲ專一トシテ、非番ノ時ニハ文武ヲ
心掛ケ、常ニ不可油断事、

一桶正成天下ヲ働クモ云々、国家ヲ治ルニハ、知仁勇一
ツモ欠テハ不レ可レ叶、

一財宝ハ民ノ困勢ヨリ出ル物ナレハ、游興ノ為メ不レ可レ
費、家ハ風雨ヲ凌キ、衣類ハ寒暑ヲ防キ、食ハ身命ヲ
助ケ、兵具ハ敵ヲ防ク益ヲ考ヘ、無益ノ飾不レ可レ致事、
一將謀欲ニ密、士衆ハ欲レ一、攻レ敵欲レ疾、攻レ疾トキハ、
備不レ及レ設ト、義経公ノ不意ヲ討玉フ事、皆此心ヲ專一
被レ用伝置所也、

一佞奸ヲ遠ケ、賢知ヲ近クルニ、諸書ニ所載、不レ可レ不レ

慎善^{トシテ}、善不^レ進、惡^{トシテ}、惡不^レ退、則賢者少ク、衆ハ惡ニ付易クシテ、必賢者ヲカクシ、敵ニセラル、者也、如此ハ不肖者在^レ位、而国必受^ニ其害^一、君臣賢明ニシテ、謀及^ニ小民^一、則功可^レ述、

一 智勇貧愚ノ四情ヲ使フ事、

智者ハ其功ヲ立ンコトヲ好ム、勇者ハ其志ヲ行ン

コトヲ好ム、貧者ハ趨^レ利、愚ナル者ハ不顧死、

因^ニ其情^一用^レ之、

一 義士ハ可^ニ以^テ義使^一、不^レ可^ニ以^テ財使^一、智者不^レ為^ニ暗

主^ニ謀^一、

一 君ヨリ出ルヲ命ト云、文章ニ彰ハル、ヲ令ト云、受テ

行^テ行政ト云、不^レ正時ハ邪臣勝、邪臣姦佞ハ膝下ノ敵也、

不^レ可^レ不^レ退^ケ、

一 清白ノ士ハ不^レ可^ニ以^テ威脅^ス、故ニ不知王道シテハ、無

上ノ重宝タル賢臣ハ得難カルヘシ、

一 聖王用^レ兵非^レ樂^レ之以^テ義討不義也、兵不祥之器也、天道

惡之、王者不^レ得^レ已而用^レ之又^ニ天道也^一、又^ニ字尋常人之下^一、得^ル所ニアラズ、

一人之有道、猶魚之有水、不義而尚盛ナレトモ、又ハ生^レ付福厚キ故也、然レトモ福尽テ兎角禍来ル也、

一人道トシテハ無別条、用賢則不肖者遠サカル、賢臣内^レ則邪臣外也、邪正ハ敵身方也、敬而不可忘、我一身亦^レ以^レ正^ニ為^ニ味方^一、以^レ邪^ニ為^ニ敵也^一、只專^ニ一味方^一ヲ養育ス^{ヘキ}事、第一之要心也、

一 賢人ヲ挙テ不肖者ヲ惠ムハ治国之体也、有^レ賞祿スルハ、

治国之用也、云々衆ト志ヲ一ニスルハ治国乱国共ニ一

也、

一 剛柔強弱ノ事、柔ニシテ公ケナルヲ徳ト云、私ナルヲ

善柔ト云、剛ノ公ケナル者ハ、万物ノ上ニシテ、私欲

ニ不^レ引^{カレ}私ナルハ賊也、弱ノ公ケナルハ、人ノ助クル

所ナリ、私ナルハ国ノ削ラル、所也、強之公ナルハ国

ノ彰ハル所也、私ナルハ人ノ惡ム所也、四ツ共ニ公ケ

ナルハ、則^レ因^レ敵端末ノ間ニ転非ス、此一句解シ難シ、上下必

在^ニシテ通利スル^一、私ナルハ、則^レ出^テ敵周章^一フタメク、然

ハ存亡ノ端在^レ此、不^レ可^レ不^レ慎^一、

右二篇全ク里見氏遺老ノ忠臣、里見氏衰替之運ニ逢、
敗亡ノ後、畏クモ遂ニ

南帝ヨリ伝ハリタル三略之宝訓、天下后世ニ絶ナン
コトヲ恐レテ、是ヲ後人ニ書残シタル者ニシテ、凡
古道神秘ノ旧記遺老ニ伝フル、イト尊キ事多シトイ
ヘトモ、如此

三神器 御相伝ノ

神宝道統之 御伝説ナレハ、難^レ有尊者⁺、又外ニ再
可^レ有^レ之哉、今幸ニ始テ是ヲ見ル事ヲ得テ、畏クモ
其要ヲ抄録スルコト如^レ是、噫心ナク是ヲ読ハ、千
万遍トイヘトモ、益ナカル可シ、心ニ信シテ是ヲ読
バ、片言以テ天下ヲ御スルニ足ラント云、爾賤臣某
薰手百拜謹識、

冊子原寸 縦二四・五釐 横一六・五釐 一二枚

二〇五 伊東長辭、樹下茂国、中条信汎、戸田氏貞、

鈴木騰彦、平井則正、連署久光公ヘノ建白

神祇官ノ復旧、皇政復古ノ大業成就ニ付

(補裏書)
伊東長辭

皇祖瓊々杵尊天壤無窮之天勅ヲ奉シ玉ヒ、天降遊シシヨ
リ以来、万世一系ノ天統ヲ被為繼、実ニ天日ノ如ク万民
瞻仰奉リ、殊ニ

当今御即位在シヨリ、中世以来ノ旧弊ヲ革除遊シ、
御政体

神武天皇ノ御創業ニ被為復トノ御布告相成、草莽ノ微臣
等ニ至ル迄、積年ノ朦霧ヲ払ヒ、赫々タル青天白日ヲ奉
戴セント、一日如三秋相窺シ処、豈凶ンヤ戎狄ノ小道蔓
延シ、太政官上ニ列セラレシ神祇官御廢絶、随テ百官諸
司只々百千ノ一二ヲ残スノミ、悉皆戎狄ノ制度ニ変シ、
脱刀・戎服、終ニ蛮夷ヲ尊奉シ、密ニ邪教ヲ公行セムト
為ルノ勢トナル、堂々タル官省ヲ始テ率土之浜ニ至ル迄、
頑乎トシテ不顧、安座高枕、奸賊之術中ニ陥溺スルヲ知

明治六年 (1873)

ラス、有識純忠之士孰カ切齒シテ深ク之ヲ憤ラサラムヤ、
我輩先年来 皇道ヲ学習シ、皇制ヲ固守ス、故ニ同志ノ

明治六年
四月

鈴木騰彦
戸田氏貞

士民ヲ会集シ、官許ヲ経テ浅草八幡街 八幡社内ニ小
教院ヲ設建シ、竭力尽慮、皇道 皇憲ヲ回復シ、御国

内ハ云モ更ナリ、彼海外ノ蠢民ヲシテ、吾無上大道教ニ

從五位伊東長辭

開化セシメ、夜国氷海ノ境界迄モ吾

從三位島津久光殿

天皇ハ大地球上ノ

文書原寸 縦一七・五釐 横一九三釐

大皇帝ニ大座ス事ヲ知ラシメ、其酋長等モ尽ク御牆下ノ

犬猫ト等敷使令シ、

〇三〇〇 久光公參朝御沙汰

応神天皇之御代ノ如ク、土物ヲ百八十船之棹楫不乾貢上

奉ラシメント欲シ、日夜刻苦勉勵スルノトコロ幸甚哉、

二〇〇七 今晝皇城御炎上ニ付安田轍藏ヨリ久光公へ

今般御上京御参内之上へ、定メテ

ノ献策

皇政復古之御大業可被為立ト恐察ス、我輩蒙昧無識ト雖、

皇居御造管献金ニ付

国家ノ為ニ進而以死為榮、敢テ水火之難ヲ不辭、願ハ勤

(端裏付箋)
「安田轍藏」

王攘夷ノ一任ヲ賜ラハ、生テハ身ヲ錦旗之下ニ致シ、死

今午前一字、如何ナルコトカ、皇城出火シテ忽チ皇居焼

テハ草ヲ馬前ニ結ヘン而已、誠惶謹言、

失ナリテ、臣民恐入ヨリ他ナシ、上下衆官又如何ナル策

平井則正

ヲ建テ給フヤ、今日早金策之論アリト聞ク、又人之談話

スルヲ聞バ、赤坂離宮ニ当分皇居ヲスエ、至急煉化石造之御所造営シ給フト言風聞アリ、其真偽如何ナルヲ不可弁ト雖モ、商人は是ニ方向ヲ決シ、利ヲ釣ルノ工夫ニ思慮ヲ尽スト自ラ言フ、且此上何様之苛法酷律ヲ施行シ給フト、火光未盛ナルニ氷肝寒心スルワ、抑上利ヲ貪リ給フニヨリ、下酷吏ヲ悪ム既ニ如是ナリ、於此処謹テ情勸考仕候処、流石ニ皇城ノ焼失ヲ聞者、如何ナル下郎野夫ニテモ酷吏ヲ悪ム前件之通ニ怨言ヲ発スト雖モ、誰モ恐入ザルワナク、既ニ皇城御造営アラバ、皆尽力シタキ寸志之萌若ヲ言上ニアラワシ、政府之貧ナルヲ痛思スル憂愁之情合ワ、感余リ有ル国体ト奉存候、別而方今ワ被為对万国ニ日本官府之実ニ大政之発起スル所ニ、無粉事(秘)ヲ衆庶不述共、飽迄弁知シ得タル者ニツキ、皇城御造営ニワ、何レノ金策ヲ仕出シ給フヤ、外国ニ金ヲ借り給エバ、年々利足金其他失費ニ巨害ヲカモシ、海内全国之臣民、苦楽ニ関系(係)スル大ナルモノト言フ事ヲ弁知シ候ニツキ、全ク空シク皇城御造営傍觀スベカラザル事モ、都テ存シ

候者共、村役トナリ町役トナシ来リ候ニツキ、全国之利害得失ヲ並テ論スレバ、明亮弁知シ、喜悅シテ至急ニ此場合ニテ皇城御造営ヨリ海外債之返シ方、矩則可相立奉存候ニツキ、恐縮至極ニ奉存候得共、愚考左ニ奉申上候、一方今之皇城は実ニ扶桑全国之大政発起スル所ニシテ、衆民ノ苦楽は此処ニ所置ヲ決ス、要所之枢機タル事モ能弁知シタル世風トナリタルニヨリ、是ヲ造営スルモ、海内全国之衆力ヲモチテ造営スルワ、至当タル事ヲ弁知シタルニヨリ、我政府及ヒ全国貧ナレバ、皇城造営モ美麗ヲ不可尽ト言フ事ト、国力ニ大過シテ美麗ヲ尽セバ、国力是ガタメニ空虚トナリ、国内貧困之位地ニヲチイルト言事実ヲモ弁知スルニツキ、上ヨク誠実ヲモチテ所置シ給エバ、下ヨク忠誠ヲモチテ其令ニ随ヒ可申は無論之儀ト奉存候ニツキ、左ノ割合ニシテ至当ト奉存候、

一直任官当年月給百分之七ヲ献納スベシ、

則百円ニ付七円ナリ、

一奏任官百分之五ヲ献納スベシ、

則百円ニツキ五円ナリ、

安田轍蔵

一判任官百分之一ヲ献納スベシ、

則百円ニツキ二円ナリ、

一非役華族米価ニシタガイ、前件ニ順ス、

一海内之四民、一名ニツキ金一步ヲ三ヶ年ニ割上納ス、

但シ老年一名ニツキ五匁ツ、上納ス、尤三井・小野・

山中・長田其他海内ニ聞エル富民ニ至リテは、貧民多

人数ニ代リ上納ヲ許スベシ、是ニヨリ其富民上納ニ依

テ貧民は上納ヲ免スベシ、尤全国之人民華族ヲ除之外

一名一步之目途トス、

右ニテ凡計一千万円余ニ可相成奉存候間、皇城并ニ諸省

ヲ大政官内ニ被為建、無名之失費ヲ減シ、殘金何程ヲモ

チテ外債消済之方向ヲ被為建度奉存候ニ付、重々恐縮仕

候得共奉入御内見候、恐惶謹言、

明治六年五月五日

前件は方今臣民都テ国家ニ報スルノ任ヲ全クナサセ給フ
ニアレトモ、当セツ献金之令ヲ不行、三井組楮幣ヲ止メ
一千万円ノ楮幣ヲ製造シ、米巻旧製之利益ヲモチテ十ヶ
年ニ皆済ナサセ給エバ、実ニ前件奉入御内見候金策ニ其
功百千倍ニシテ、衆モ皆ヨク知得タル事ニテ、献金上納
ヨリは其妙不可窮ニヨリ奉申上候、

旧製米巻トアルワ、俗十石切手ト唱エ、現米ヲ旧諸藩大
坂蔵屋鋪ニヲキ、十石ノ石切手ヲモチ売買スル例ナリ、
諸人至極之弁理トセリ、此法信義ヲ失スレバ甚害アリ、
又肥後之米切手、薩之砂糖切手ヲ例トナスレバ実ニ商家
ノ幸甚無論ナリ、

文書原寸 縦一七種 横二六・七種

三〇〇 湊川神社宮司折田年秀ヨリ政府ヘノ建言

楠公遙拝所ヲ東京ニ建設ノ議

乍恐以書面奉懇願候

近來

朝政 御一新万機開化ノ

御盛運ニ当リ、贈正三位左近衛中将楠公戰死之地ニ

社壇ヲ 御造営ニ相成、

勅号ヲ湊川神社ト下シ

賜ヒ、 祀典ニ被列候者元弘之古逆徒悖乱

朝廷ヲ蹂躪仕候ヲ、公眇々ノ驅ヲ以テ大義ヲ天下ニ首唱

シ、

天日既墜ノ機運ヲ挽回シ、遂ニ忠魂ヲ湊川ニ留候、其

誠忠ヲ

御進賞被

遊、從今天下ノ臣子ヲシテ悉ク楠公ノ精忠義訓ニ服

膺セシメントノ

御聖意ト深く奉感戴候、然ルニ今般年秀不肖ノ身ヲ以テ

不図宮司兼大講義ノ

命ヲ奉拝、誠ニ以テ恐惶難有次第奉存候、速ニ西下社

務勉勵可仕ノ処、熟方(熟)今開化ノ形勢ヲ相考候ニ、西

洋日新ノ学人々研究仕、精理窮格有用ノ教ニハ候得

共、一体

皇国之儀ハ

御歴代綿々

聖統ヲ被為

繼、四海内外比類無之

御国体ニ御座候、然ル処西学方一悖逆誤解仕、共和遷替(悖)

等唱候類御座候テハ、以テノ外ノ事ニテ、窃ニ洪敷

悲泣仕候次第御座候、尤古來人心ヲ正シ、風俗ヲ移

シ候事ハ

神明ヲ祈り候典額ニ付、今般有志ノ徒ヲ募リ、

輦輦ノ下ニ楠公遙拝所ヲ經營仕、元弘・延元以來誠忠殉

国ノ將士

王事ニ勞セシ忠魂ヲ配祀仕度、左候ヘハ教化ノ一助ニモ

相成可申奉存候ニ付、別紙^(幕カ)擧勸ノ記相添ニ御差函奉

伺候、当今

聖世ニ当リ、右様ノ儀言上仕候段恐入候へ共、治不忘乱
安不忘危ト申ス古語モ候へハ、歴代世運ノ變遷ヲ鑑
ミ、方今開化ノ事実ヲ慮リ、時勢ニ依ツテ民心ヲ挽
回仕度、不顧斧鉞ノ誅此段奉言上候、何卒年秀等区
々ノ誠心御憐察被成下、可然御評議御採用之程奉願
候、

以上、

湊川神社宮司兼大講義 折田年秀

明治六年五月五日

冊子原寸 縦二八・五糎 横二〇糎 三枚

1100R 静岡県士族小田井蔵太ヨリ政府へノ出願

彰義隊戦死者ノ大赦ニ就テ 同文一通

不願恐奉懇願候

静岡県實屬士族

小田井蔵太

謹而奉懇願候、去明治元辰年春徳川慶喜奉犯

天怒、掃城仕候ニ付、

御征討使御差向可被為在哉之趣、遙々奉承知深恐入、
東叡山ニ蟄居恭順謹慎罷在奉歎願候得は、
皇怒ヲ以テ水府表江退身、猶謹慎可罷在段、寛典之
御所置被

仰出、誠以テ難有仕合奉存、彼地江出立仕候、然ル所
ニ従前慶喜謹慎中、市在鎮撫方自然ト等閑ニ相成候虚
ヲ付込、悪行躁妄之徒涌出致、富家之農商ヲ強奪致シ、
金銀財宝奪取故人心不穩、是ヲ鎮撫之為徳川家臣之二
三男、又は譜代諸藩之士共、彰義隊ト名付、東叡山屯
集罷在候故ニ慶喜水府表江出立之砌、

天朝江失敬之義不及申、凡而恭順之道ヲ不失、府下之蒼
生難涉不及様取置可致教諭之上ニ、池田大隅并私共外
式人江隊長被申渡退身仕候後、私共四人屯集之者共江
厚ク申渡候得共、多人數之事、所中ニは麤暴之徒茂有
之、官軍之士卒江非礼之所行致シ候事度々ニ及、遂ニ

御征伐ニ相成候義、実以奉恐入候義ニ而、私共慶喜ヨリ隊長申付候詮モ無之、必竟指揮不行届故ニ右様事件出来候間、何様重科ニ被為所候共、聊遺憾無御座、実以恐惶仕居処、格外寛典之

御所置ヲ以テ重科被免、誠以テ難有次第ニ奉存候、然ル処前文

御征伐之砌、東叡山ニ於テ死亡之者、今以テ

御赦免無御座奉恐入候、尤右之者共義全

御上江遺憾相合候者ニハ無御座、多ハ徳川家旧恩ヲ思

ヒ、白刃ニ臨ニ億シタリト人ト口ニ膾炙スル事ヲ恥チ、

恭順ノ道ヲ失ヒ、終ニ一命ヲ捨テル者共ニ而、今更泉

下ニ於テ後悔可罷在間、東叡山ニ於テ死亡者共義一統

大赦被成下置候へは、泉下ニ於テ何より之御仁沢ニ相

浴シ可申儀ト奉存、此段奉願上候、宜シク

御採用被下置度奉歎願候、以上、

西五月六日

奉

冊子原寸 縦二八糎 横二〇糎 六枚 同文二冊

二〇〇 宇都宮増淵弘都ヨリ久光公へノ上書

神国治世策ノ高教ヲ仰グ

情ブラクワモシムル 惟ラフククワイシク ニ多マ 外国ノ真マ 似ニ ノ中ナ 二下ニ 劣ラ 神国ノ志シヨク ニ

シテハ、何イカ ニモ大海ニ小舟ノ如シヤウシウ、便方無オボヘカケテ、実ニ尊公大

船ト奉ヤ、マロシクテ 聽ツリ 及ネガハク、願ヲホシ ハ乍ハ 不及シ 及モ、神国治世ノ御意蒙拜

仕シカマ 度マリタク、右等ノ儀ミギラ ニ付ツキ、日本六十余州大小ノ神祇シシギ 二対

聊イサ、カイツワリ 偽ワリ 不シ 申上候、恐惶謹言、

〇(墨)

西 五月七日

野州宇都宮貫属 第一大区四ノ小区 増淵弘都〇(墨)

薩州鹿兒島

島津三郎様

追加

下劣儀不学ニ付文字違ひも難計、乍失礼本字ニ仮名ヲ付ケ奉申上候間、不悪御憐察之程奉希上候、以上、
文書原寸 縦二四・五櫃 横三二櫃

二〇二 教部省権少講義中西源八ヨリ久光公へノ上

書

佞吏姦商芟鋤ノ件

「(表紙) 上」

教部省権少講義 (墨) 中西源八〇

涕泣百拜万死ヲ犯シ言フ

島津明公ノ閣下建ツ、抑戊辰ノ更始ヨリ衰政一変、

王政ニ復古シ、諸賢君左右ニ補翼シ赫々之美政四海ニ布

クト雖モ、辺疆ノ小民ハ勿論、市街億兆ノ人民ナレハ、

陽ニ服シ又ハ陰ニ怨ヲ生スル者半ニ過タリ、是何ノ故ナ

ル耶他ナシ、佞吏姦商強兵ヲ先ニ、富国ヲ後ニスルカ故

ナリ、赫々タル良史^(史)モ佞吏ノ為ニ詛惑セラレ、挙ルヘキ

仁政モ佞吏ノ為ニ鬱閉ス、故ニ傍觀シテ国事ヲ憂ヘス、
慷慨ノ深切薄ク、一度民心離去セハ方今外国交際ノ時ニ
当リ、万一菑害生スルノ期ニ至ラハ臍ヲ咬トモ及フヘカ
ラス、故ニ有名有志ノ士ハ喑黙ス、只

明公ノ下車ヲ仰キ、激望スル日月久シ、今幸ニ微ニ応セ
ラルレハ、天下ノ蒼生雲霧ヲ披キ、白日ヲ視ルカ如シ、
仰願ハクハ佞吏姦商ヲ芟鋤シ、一洒シ玉ハンコトヲ恐懼
畏縮ノ至リナレトモ、小僕素ヨリ無学短才一文不通、野
鄙ニシテ取ヘキナシ、然シテ先 幕ノ時ヨリ国事憂ヘテ
爰ニ年アリ、若シ鄙陋ヲ厭ハセラレスハ、階下ヲ汚シ尊
問ニ応シ奉シコトヲ昏瞑嘔血稽首シ建言ス、

癸酉五月八日

冊子原寸 縦三〇・五櫃 横二二・七櫃 三枚

二〇三 安田轍蔵ヨリ久光公へノ上書

太政官内ニ諸省併置其他ノ件

「(包紙ウツ書) 上」 安田轍蔵

大政官内江諸省被為召建度奉存候次第は、諸省各所ニ分
居スレバ一省毎ニ各局ヲモウケザルヲエズ、此故ニ官員
モ多カラザレバ不叶、各省道ヲ隔ツレバ、馬車使部モ隨
而多ク、実ニ費テ不惠ル財ヲ消失スル事、年ニ巨大ニ至
ラン、且方今国内年分出納ニライテ、官人之多キ失費減
テ無害、巨大之益アル事弁論ヲ不待、衆視明亮知ル処ナ
リ、其上各省分居スレバ各論起ルノ害モ不少、今幸ニ大
城 皇居焼尽ス、此機会ニ乗シ大城 皇居御造營中、西
京ニ被為遊還幸ニ二条城中ニ大政官ヲ代用ナシ給ヒ、且西
本願寺御室御所等之内ニテ当分離合、外務省ヲ代用被遊
大ヲ換ルニ小ヲ以テセバ至急ニ官員ヲ減ズル名正シク、
実明カニシテ、年中ノ御入費ヲ減消スル計算、実ニ可驚
程アリ、是ヲ細密ニ取調べ、苛酷ナラザル丈、人界浮生
之世味辛苦ニ過キザル程ヲ深ク勘考シ、七ヶ年又は五ヶ
年消除ナル真実之楮幣ヲ至急ニ製造シ、財貨品物之運転

之枢機ニヨリ、至急ニ外国債ヲ返金シ給ヒ、不至急諸人
之困苦ナラザルヨウ、東京之大城 皇居ヲ御造營被為在
度奉存候、乍去諸官員華族之献金は、先達テ奉申上候丈
被仰付度奉存候、且四民之献金は不被仰付、当人共考ヲ
モチテ献金願出候得は、御免相成候迄ニ被為成候得は、
実ニ両全之御策ト奉存候ニ付、恐入候得共奉備 尊賢候、
誠恐誠惶謹言、

六年五月九日

安田轍藏

文書原寸 縦一七種 包紙原寸 縦二三・七種

横四九種 横三四・五種

〇三三 久光公へノ国事諮詢ト麝香問祇候拜命

三〇四 松平春嶽公より島津久光公へ

勅書写返還之件

(封筒)
「島津老公閣下 慶永

不及貴報候

〔封筒ウラ、朱「誠」ニツ阿ジ〕

〇一

過日は参堂緩々得拜顔難有奉存候、爾後御安泰奉賀候、

陳は恩借之

勅書写返上仕候、御落手奉希候、何レ其内又々罷出可伺

御教示候、頓首、

五月十日

慶永

島津老公閣下

文書原寸 縦一七・四糧 封筒原寸 縦一八・八糧

横 四三糧 横 四・六糧

〇二五 皇后宮御誕辰ニ付久光公御召

〇二六 浜松県士族小峯新九郎ヨリ久光公へノ願書

仕官採用ヲ乞フノ件

私儀

御一新後明治元辰年八月被 召出、外国官付拜命、同年十二月越後国新潟表開港ニ付、英国領事ラウダ事出港ニ付護衛被命、同港着後新潟県官員之列ニ 拜命、昨申年迄五ヶ年無滞奉職罷在候処、同港は海内第一之積雪之場所柄故、病災ニ被犯候事度々有之、殆と困弊仕、無抛職務 御免奉願、賜物頂戴帛府罷在種々加養仕候処、快復仕候ニ付、尚抽丹精奉職仕度其筋奉恐願候得共、未愚意不貫之情殆と当惑罷在候、然ル処
君公 御参府之儀伝承仕、殊ニ御深慮被為在候御建白之趣モ粗奉拜承、万民拳而 御明德奉柳度、乍恐奉待上候折柄、私儀微力ニは御座候得共、為国家抛一心、一際職務尽力仕度只願奉恐願候、格別之以 御哀憐ヲ相心之御官省江被 召出候様、偏ニ 御仁恵之御沙汰九拜奉恐願候、何卒前頭之趣被聞召訳ケ此段御採用被為在候様、幾

重ニ茂奉恐願候、以上、

東京

第三大区九ノ小区市ヶ谷本村町
貳拾六番屋敷寄留住宅
浜松県貫屬士族

明治六年五月十三日

小峯新九郎（憲）

文書原寸 縦一七・三釐 横一〇二釐

三〇七 芝増上寺通玄院春成ヨリ久光公へノ建白

服制其他ノ件

（表紙）
「建白」

建白

一諸官員諸士ニ至迄、蕃製衣服帽靴等都テ禁止シ玉フヘ
キ欵、況華族方ヲヤ、衣服ハ国俗ノ標幟ナレハ、タト
ヒ商農タリトモ猥ニスヘカラス、方今ノ如ク自国ノ正
風ヲ捨テ、他方ノ制ニ従フコトハ古来未曾テ聞カス、
清人ノ西洋人ニ使令セラル、輩スラ、猶自国ノ服ヲ改
メス、況ヤ 皇国ノ人何ソ彼ヲ学ハンヤ、且ソレカ為

ニ若干ノ財ヲ棄ルハ何ソヤ、

一僧服ヲ改新シテ蕃服ヲ用フヘキ布告アラン欵ノ風聞アリ、此亦何ノ為ソ、但シ従前ノ服或ハ華美ニ過ル者有ヲ以テ、節儉ノ制度ヲ立玉ハンハ至当ト称スヘシ、此亦古制ヲ失ハス如法ニ整ヘシメ玉ハンコトヲ希フナリ、一先般御創立ノ大教院、畜無用ノミナラス、却テ若干ノ瑕瑾アラン所以ヘ、此只虚名ヲ流シ玉フ耳ニシテ、何ノ業ヲ修スルコトモ無ケレハ、実功ノ成ル可キヤウナシ、諸宗管長各宗ノ徒ヲ促シ、何ノ試験モナク試験ト称シテ拜命セシムルハ、何ノ所要ソ、而シテ年分院中ノ諸費幾何ソ、其財ハミナ各宗未々ヨリ構取シタル膏脂ナラスヤ、其中ニ於テ管長等ノ己利ヲ射ルハ、沙門ノ宜キ所ニアラス、此頃聞ク管長ノ沙汰也トテ、門末寺僧ノ拜命ヲ促シ、多分ノ謝物ヲ出サシムルニヨリテ、中小ノ寺ハ堪匡ク宗務局ニ歎訴スルニ至ル、カ、ル事ノ恒ニ行ナハレナハ、門末漸疲弊ニ及ハンコト必セリ、且教院用ト称シ、年々若干ノ財ヲ出サシメハ、住持自

力ニ及ヒ難ク、檀越商農ニ託セン、然ル時ハ自ラ庶民ノ勞苦ニカ、ラン、凡ソ今ノ宗管長タル者、只樞機ヲ求メ昇進シタルニテ、中ニハ本來道心無ク、為法ノ志ヲ失ヒ、偏ニ名利ノ為ニシ、本分ノ教法ニ暗クシテ恒ニ非法ヲ作ス者アリ、而シテ教院ヲ指揮シテ左道ヲ行フ故ニ、年少ノ學僧ヲ誤リ、如法ノ者モ一トタヒ教院ニ入レハ、濫行ニ染テ挽回成リ叵シ、カ、ル無益ノ管長教院共ニ廢セラレ、各宗本寺等ニ於テ宗徒教育ニ尽力セシメ玉ハ、却テ実功ヲ成スニ至ラン歟、本寺ニ於テ研学ヲ策勵シ、才學ノ低昂ニ応シテ黜陟セシメ、ソレタ、本寺ノ手ニ任セラレス、教部省ヨリ本寺へ檢査官ヲ出サルヘキ歟、

一 今般大教院ヲ増上寺境内へ移サレ、大殿ヲ

神殿トシ玉ハンハ如何ニソ、大殿ハ徳川氏祖先ノ香火所ナリ、タトヒ仏像等ヲ徹セラルトモ、本是仏宇ナリ、皇大神ノ稜威云何ニオモホスラン、先ニ寺院中ノ神社ヲ廢セラル、ニ非スヤ、然ルヲ今如此ハ庶民ノ怪ム

所ナリ、神仏混淆且徳川氏ノ仏殿ヲ教院トシ玉フコト、下民ノ疑論嗷々タリ、末エ遂ニ西洋人ノ口端ニモカ、ランコト痛心ニ堪ヘスナン、山門ニ標札ヲ掛ケ示サル、ヲ見テ此ノ教院 朝廷ノ建築ニアラス、徳川氏ノ香火院也ト嘲笑センコト必セリ、因テ速ニ此教院ヲ廢セラレ、大殿ヲ故ノ如ク増上寺へ返シ玉フヘキ歟、且教院建築ヲ唱へ、諸寺院ヨリ聚メタル財若干何レモ膏脂ナリ、然ルヲ建築ヲ廢シ、學功ヲモ成サス、諸管長如何ソ座視スル、不審不審、如此虛名无実ノ事ニ力ヲ勞シ、外国ノ嘲ヲ受ンヨリハ、各宗ニ大小教院ヲ設ケ、如実ニ尽力セシメ玉ハンコトヲ希フ也、右増上寺大殿ヲ 神殿ニ改メラレタルニ因テ、仏像等ヲ徹シ、雜人參詣ヲ止メラレ、去年來土地繁榮ノ為ニ

官許ヲ蒙リ、新建セル肆店ヲ始、スヘテ次第ニ淋シク成リ行クヘントテ、門前其外下民ノ慨幾何ソ、此等モ厚ク勸察シ玉フヘキ歟、
右大殿ヲ大教院トシ玉ヘルハ、実ニ 朝旨ヨリ出タル

ニ非ス、全クハ数名ノ管長、官吏ニ示シ合セ搆出セル
ニテ、其実ハ財利ヲ釣ランノ權謀ヨリ出タルコトトソ
キク、カクテ後外国ノ嘲ヲ受ルニ至ランコト、恐多シ
トモ遺憾トモ言フニ堪ヘ回クナム、

一下民ノ困苦ヲ問ハセラレ、都テ臨時ノ營繕ヲ始トシテ
官員ヲモ省キ、用途ヲ節シ、年貢運上等旧幕府ノ時ヨ
リハ減少ストモ加増無キヲ要セラレナハ、庶民自ラ悦
服セン、然ル時ハ社司・僧侶三条ノ説教ヲ不待シテ奉
戴、皇上遵守 朝旨ノ誠ヲ尽スニ至ラン、仮令社寺
ノ徒尽力ストモ、収斂ノ厚キコト幕政ノ時ニ過ナハ、
何ノ庶民ヲ悦服セシムヘキ、

一僧徒ニ食肉帶妻ヲ許シ玉フハ何ノ為ソヤ、既ニ僧ヲ立
置カル、上ハ、戒行第一タルハ勿論ナリ、且仏誠ニ曰、
王法ニ浄トスルコトハ、仏法ニ於テ不_レ行_ルコトヲ得ス、
王法ニ不浄トスルコトハ仏法ニ於テ不_レ得_ル行ト云ヘリ、
此言深ク味フヘシ、今般ノ布告ニ蓄髮俗服等可為勝手
トハ必然ノ令言ニ非ス、

一説教ノ業古今ヲ通觀スルニ、仏者ノ説示ニ過ルコトナ
シ、是仏者ノ自負ニアラス、余教ノ學者往々此旨ヲ談
セリ、若僧ヲシテ説教セシメハ、必ス先ツ持戒堅固ナ
ラムヘシ、故ニ一向宗ノ外スヘテ古来ノ通持戒セン
ムヘキナリ、

上件ノ条々旧習固陋ノ責雖難逃、方今形勢慨歎ニ堪ヘ
ス、且僧徒不顧前後、漫ニ文明開化ト称シ破法ノ挙動
不少、恐多クモ

王政ヲ妨クルニ至ランコト、慨歎ノ至ニ堪ヘス、因テ
螻蟻ノ誠、伏シテ電覽ヲ冀ヒ奉ルナリ、

癸酉
五月三十日
增上寺
滑揚院別当
通玄院隱居(墨)
春成○

二位様
御用人中
冊子原寸 縦二七・七釐 横二〇釐 七枚

三〇八 布治婦 一郎ヨリ久光公へノ建白

皇居御造營ニ付テノ三策

二〇一八ノ一

(包紙ウツ書)

「密啓

(朱)婦(一郎)

布治婦 一郎

急務三件

一 皇居乃御経營不可緩漫事、

一 右件ニ付他乃土木当分可止之事、

一 右件ニ付県下乃献金一々不可受之事、

右賜見乃上可奉申上候処、急務ニ付不及奉待密啓仕候、
以上、

癸酉五月

布治婦 一郎

文書原寸 縦一九・五種

包紙原寸

縦二七・五種

横三八・五種

横 四〇種

二〇一八ノ二

(包紙ウツ書)

「上言

布治婦 一郎

俚隸布治婦 一郎

誠恐誠恐謹て上言し奉る、俚隸^(後)屢門ニ踵りて請見するハ、特ニ微言を献せむと欲する而已ならず、方今開化日進の頌声路上ニ遍しと雖とも、之を要するニ概輕薄の諛言ニ過す、若し革新其時を失ハ、恐クハ不可救業ニ至らむ、抑王政復古の創業令公ニ在るハ皆人の知る所なり、既ニ之を創れハ則宜く之を終えて、以て民望ニ応すへし、令公此機ニ臨み、業瞑眩ニ至らずして、其効を見むと欲するが若きハ固より俚隸の与り知る所ニ非ず、若し成敗を天地ニ委ね、存亡を邦家ニ同せむと欲せハ、俚隸冀クハ俸秩を仰かす、自養以て賤軀を令公の門ニ致さむ、俚隸一兼并の徒座して以て数口を養ふニ足るも忝感慨する所ありて、偷生と貪安とニ意なく、常ニ一死を欲して未死所を得ず、故ニ令公ニ就て之を要求し奉る、仰願クハ其瀆冒を罪せず、速ニ取捨を賜らむことを、誠恐誠恐頓首

頓首謹言、

明治六年五月十四日

紙録

布治帰一郎

島津従二位公閣下

文書原寸 縦一九・五種 包紙原寸 縦三二・五種

横 一〇二種 横 四一種

〇三二 久光公正院へ出仕ノ御沙汰

三〇〇 近衛忠房卿より島津久光公へ

諸国巡行説教報告

(包紙ウツ書)

「御在東」

従二位島津久光殿 祭主大教正兵衛忠房

在濃

御内覧

(朱「忠房」ニツト重復)

五月十五日夜於濃州高須認

(朱「忠房」ト「封」ノ文字トハ重復)

封

(封紙ウツ書)

在濃

「御在東」

従二位久光君

内々

近衛

祭主大教正

(朱「忠房」ニツト同シ、「ト」重復、「鎖」ノ文字ト重復、墨引ト重復)
鎖

追々薄暑催候弥其御方御安泰恐賀、抑今般ハ御東上之由
恐悦候、為天下呉々御尽力奉祈々候、然ハ拙者義去ル二
月ヨリ伊勢神宮へ出張被 仰付、尚教導受持之県之教導
職引率巡行被 仰付、三月下旬伊勢出立全国巡行、岐阜
美濃県下不残巡行、今十五日高須ニテ大説教行ヒ、今日
限りニテ美濃ハ無滞相済候、明十六日尾張津島へ罷越、
明後十七日より大説教行ヒ、夫より追々尾州全国巡行、
尚三遠二ヶ国全国へも巡行候事ニ候、駿河・甲斐・信州・
飛騨・越前・加賀、右モ私ノ受持場ニ候、迺モ一時ニ悉
巡行モ難整事ニ寄候へハ尾三遠相済、一応伊七神宮へ帰
参、其上東帰可仕も難計、何分右之仕合ニテ、早速ニ得
拜顔候事も難相成、尚東帰之上久々ニテ得拜顔候事ト相
楽シミ居候、扱又貞姫ニモ追々所勞も宜敷、此節ニハ出
立東上之由申来候旨、東京屋敷より旅中へ向ケ申越シ、
先々安心之事ニ候、何レ拙者東帰迄ニ東着と存候、私留

主中故氣之毒ニ候へ共、待受旁早ク東着可然と存候事ニ候、扱拙事長々日々之旅行ニテ大ニ疲労仕候、併教導之義美濃全国何方へ参リ候而も盛大ニ行ハレ、大幸此事ニ候、日々珍敷所々見物、去ル十四日ニハ大垣出立、南宮へ罷越候序、教導職下役同道ニテ多度山へ登山、養老ノ瀑見物仕候事ニ候、殊之外立派成ル事ニ候、夫ヨリ南宮へ着、翌日より大説教取行ヒ、昨十四日今十五日等ハ高須ニテ大説教在之候、実ニ聴衆夥敷、昨今モ五万人余在之候、晴々間敷事ニ候、拙ハ日々衣冠着用、下役ハ直垂着用出席之事ニ候、先ハ荒々遠路隔テ不任心底、乍不文久々ニテ捧愚札候、其地之御模様共御序ニ御一筆御内示希入置候、将又去日

皇城炎上之事御承リ何共驚愕恐入存候事ニ候、先ハ大乱書御推覧可被下候、書損不文御判覧呉々奉專祈候、用事而已如斯候也、再拜敬白、

五月十五日夜

濃州高須ニテ認

尚々、時候折角御保愛祈入候、呉々も為國家御尽力祈入候、色々申入度義も在之候へ共、後便ニト不取敢荒々而已申入候也、

文書原寸 縦二三・八種 包紙原寸 縦二七・五種

横 一四九種 横四〇・五種

三三三 深見有正ヨリ久光公へノ建言

劍道奨励ノ件

(包紙ウツ書)

「 深見有正」

刀劍ノ大略謹而奉建言候、夫劍法ハ万国ニ卓越シタル技術ニテ、不可偏廢ノ実、正氣ヲ養ヒ意必固、我ノ私ヲ去リ、身体手足筋節ノ運動ヲ習ハシ、業ヲ修スルヲ要ス、僅ニ私意萌セハ、明ヲ蔽フ処有テ变化ノ用固滯ス、所謂生於其心害於其政ノ意ノ如シ、一毫ノ疑惑心目ノ間ニ留ルコト無キハ、能其機ヲ察シテ变化ノ用速ナリ、所謂有牙者食之、有爪者抓之、有針者刺ノ類雖不教之天理自然

也、凡人道は何用哉、武備ノ肝要ハ砲劍ノ二ツ也、其实
修己治人文課ニ配シテ益ヲ得ルコト多カラシ、

皇国無二奉尊崇神劍ノ威徳、其用邪正ヲ分断シ、乱臣賊
子ヲシテ恐懼畏縮セシメ、威徳万々世ニ光輝ス、嗚呼劍
徳ハ広大深遠ナリ、豈凶哉、旧幕人榊原謙吉(鎌吉)、当節官許
ヲ蒙リ、劍術ヲ見セモノトシテ価ヲ取り渡世トシ、見物
ノ人々男女ニ限ラス、実ニ宝劍ノ尊道モ拙クシ、斯ク取
扱ヒ候テハ、方今武ヲ仰高スル大道ヲ失ヒ、歎息流涕ノ
外無御座候、自然ハ見セモノ劍術御禁止相成度奉存候故
ニ、

朝廷所ニ於テ武館御取設ケ、実着ノ学業専務トスル教司・
教授御撰挙被為在度、撰スル其任ハ山岡鉄太郎(鉄舟)可然奉存
候、何分重ク御取立不被為在候テハ、更ニ劍法衰微可仕、
兵員ニ劍法ヲ熟スレハ益氣正ヲ得、今ヤ銃砲日々御盛大
余論無御座候、思召モ被為在候者宜ク御聞置遊ハシ被下
度奉仰願候、誠恐々々謹言敬白、

五月十六日

深見有正

文書原寸 縦一六・三種 包紙原寸 縦一四・五種

横六四・七種

横三四・五種

二三 城井寿章ヨリ和田八之進?ヘノ書翰

公及左院ヘノ上書二通ニ付公ノ諒解ヲ求ム

口上覚

別冊卷通ハ小生実父上毛群馬原管下一万田如水と申者、
今般

明公閣下之御登京被遊候由を遙ニ拝承仕、欽慕景仰之余
右書奉備乙夜之

台覽度、小生迄申越候、外一通ハ今春三月中左院江進呈
仕候処、御採用ニ不相成候旨を以而御付紙被成下、御返
却ニ相成候間、是又奉崖 台覽度申付越候間一同進呈仕
候、何卒同人区々請猷之微衷ヲ御諒察被為在度奉存候、
若自然同人江御下問之儀も被為在候ハ、小生迄被
仰聞被下度奉存候、恐惶頓首啓、

五月十七日

城井寿章

和田君

侍史

文書原寸 縦一五・三釐 横九〇釐

二三三 安田轍蔵ヨリ久光公へノ上申

公大臣拜命仁政施行希願ノ件

上申

一新以来政体之改革当ヲ失スル不少、善良之法則盛ニ振起セズ、民心之困苦競起リ、世形之前途遠望スレバ、氷肝寒心ス、豈仁

君治世之形勢ト言ハシ、臣子之情為國家誰カ悲泣セザラシ、此故ニ海内之衆民実ニ我

公之大臣タラン事ヲ希望スル、干民之雨ヲ祈、轍魚ノ水ヲ求ルヨリ大過セリ、既ニ衆民之望ミ足リ、我

公之大臣タル今日トナリ、苛酷貪掠之法則消尽シ、善良慈仁之美政発起スルヲ待ツ、実ニ一日千秋ノ如シ、臣親

シク衆民今日ノ情実ヲ見聞シ、不耐恐縮ト雖モ万民心鏡ヲ上申シ、伏テ我

公之方向ニ犬馬之勞ニ代リ尽力セン事ヲ奉歎願而已、誠恐誠惶謹言、

明治年五月十八日

安田轍蔵(先)〇

文書原寸 縦一七・五釐 横三〇・二釐

二三四 城井寿章ヨリ朝比奈某へノ口上書

其他雜件。断片。封筒等 合計廿六枚

二〇二四ノ一

口上

別封一通昨日相認、和田君江相托可申と奉存候処、今朝(朝カ)御発程御帰郷之由ニ付、何卒奉托先生候間、乍恐御前江御進呈被下、奉備

台覽候様御取計被下度奉至囑候書外万緒付拜晤、早々不一、

五月十八日

城井寿章
再拜

朝比奈先生
侍史

文書原寸 縦一五・三種 横五七・五種

二〇二四ノ二

別紙御廻申上候也、

十二月九日 内史

左大臣殿

文書原寸 縦一七・三種 横二二・五種

二〇二四ノ三

当夏骨折引寄セ被下候事件ニ付申上候、

二当詰之内、他借等ニ而難渋之者共、御家令江御心付之

内願申出ル者有之候由、私共江内談御座候付、右之者

共計被成下候而は不公平ニ付、御家從辺迄は被成下候

方、可然御家從辺は誠ニ精勤いたし候段申述候処、余
り多人数と申事ニ付、左様ならへ年末被成下候事を御
引寄セ被下候而は如何と申候処、右之処ニ決し伺相成
候処、

御沙汰之趣有之候付、員数減し以来かよふ相極入候段、
御家令より御達し承知仕候、然処当月ニ至り

御沙汰之通り、段々苦情申立ル者有之候由、乍然当夏
御達し相成居候付、御家令共今更いたし方無之由、就
而は御金操も随分出来申候由ニ付、別段之

御沙汰を以骨折被成下候而は、何様可有御座候也、右
様被成下候付而は、東京詰人員交代且月給御県許共、
此涯吟味いたし候様

御沙汰被成下候へ、行先キ之會計ニも関係可仕儀と
奉存、愚存之候申上候、謹言、

十二月三十日

文書原寸 縦一六・五種 横八二・七種

二〇二四ノ四

明治七年四月十三日

一 任賀茂別雷神社少官司大講義如故 教部省

同年五月十七日

一 京都府内神道教導取締可為引受事 大教院

湊川神社權官司

加藤 澂

文書原寸 縦二〇〇 横一〇〇

二〇二四ノ五

静岡縣御役人付 全

御役替并御改名速ニ相改申候、

文書原寸 縦一六・五 横一三・八

二〇二四ノ六

(此行抹消ノ印アリ)

一 大臣協和之事

一 大藏省改革之事

一 民心安着之事

文書原寸 縦一七・五 横一八

二〇二四ノ七

国憲云云

各省各府県へ云々

神祇官云云

海軍云云

文書原寸 縦一八・八 横一九・七

二〇二四ノ八

旧中村藩当分

磐前県 富田 高慶

右同

齋藤久米之助

鹿兒島県

又木元右衛門

文書原寸 縦一五・七 横二〇・二

二〇二四ノ九

御沙汰書ハ島津彈正・内田仲之助江相渡、右より御達相成申候間、此段申上置候、以上、

文書原寸 縦一六・四種 横一六種

二〇二四ノ一〇

白浜 七二

児玉八郎兵衛

坂口良介

文書原寸 縦一六・三種 横一〇・五種

二〇二四ノ一一

一月十七日

県元町人

○水口清方江参候所、土州人参咄ニハ、県元より当月中

兵隊出候由咄居、

○旧参議相勤候内、佐々木兵一残り、外兩人県元江罷帰

候由、

○岩倉公を暗殺之ものハ土州人欽薩州人之内ニ可有之と咄居、

○肥後陣營焼候ものハ土州人之由、同所兵隊ハ土州より参居候旨、

一月十八日

○昨日四字頃、工藤堯内方江池月直澄参同志数人捕縛ニ

相成、我等並板垣も追々捕縛ニ相成候やも難計、左候

得ハ此後懸御目候も相成間敷ニ付、御尋申上候旨相咄、

尤近頃教寄屋橋近辺江転宅仕候由、御願を申上候、

文書原寸 縦一一・三種 横二七・七種

二〇二四ノ一二

具祝

実美

実美

大隈

大木

寺島

具祝

実美

伊藤

勝

黒多(田)

伊地知

文書原寸 縦一七・五種 横一〇種

二〇二四ノ二三

教部省

中録

鈴木大

元水戸藩鈴木安之進事、

文書原寸 縦一六・三種 横一三・八種

二〇二四ノ一四

田中直哉

広瀬昌柔

文書原寸 縦九種 横七種

二〇二四ノ一五

(封筒)

愛知県ナゴヤ
カジヤ丁一丁目
清水中属ニテ書

東京御在勤
從一位左大臣閣下
○浅井実雄
(消印)「熱田明治七・七・三三」

御自展 ○
(同消印)

緘
「封筒ウラ」(四錢切手一枚、一錢切手二枚、「熱田検査」ノ印アリ)
□ □ □
七月廿二日

封筒原寸 縦一八・三種 横七・七種

二〇二四ノ一六

薩州鹿兒島 中仙道通り
島津三郎様
(封筒)

從旅先奈佐原駅

「封筒ウラ」(黒印ニツ同シ)

○ 賃済
○ 総目方老奴八厘

封筒原寸 縦二五種 横五・二種

二〇二四ノ一七

記

乍恐別紙差上候条、御内覽被遊下候上、御教諭被成下度
奉願候、仍敬白、

七年一月

海山百拝

報ルノ一端ニ俱フルトス、

島津尊公

閣下

隠士

穂積重樹

文書原寸 縦二七種 横三九・五種

文書原寸 縦二七・五種 横三八・五種

二〇二四ノ一八

二〇二四ノ一九

是御軍制建言普通之私言ニテ、田夫野人ト雖トモ聊心思アル族ハ、茶話ニモ語ル言ナレハ、今更ニ建書ナスヘキニ非ス、旧幕時勢西洋法学一偏ニ惑溺シ、活法ヲ失スルヲ、師者野慵齊旧三世臣初名小野寺鼎之ヲ歎キ、彼カ砲術伝習ナス十有余年ニ至レリ、其地位ヲ得ル上ハ我物トシ、活用ナシテ自在スヘキヲ、終始彼ニ固執シ、他ヲ容ル能サルハ死物也、彼ニ於テ採ルヘキハ器械ノミ也、運用ノ業ニ於テ甘スヘキナント云々、如此常ニ云、依テ愚重樹時ノ有司ニ属テ建言ナスニ洋習ニ酔溺シ容レズ、当御一新ニ至リ一二ノ友人建書ヲ勸ムニ付、一度大原侍(重徳)從殿ニ一書ヲ呈セシニ、未此時勢ニ非スト云々ニテ採用ナシ、此以來黙止ス、尚友人等再三促スニ随ヒ師意ヲ演ルモ、師恩ニ

本錢速ニ製造方被仰渡度、尤本錢ニ穴無之候ニ付真中エ穴ヲ明ケ、製造方被仰渡度、穴無之故、当時追々開化ノ砌柄、如此不便ノ品物ハ外ニハ無之、不便第一等ト評判到シ、於市中小町錢ト名付、諸人甚難渋カル錢ニ御座候、後後ハ不便ニ候得ハ、多分ハ付錢ツイセニテモ付候テ通用致シ候様罷成申儀ハ案中ニ御座候、夫故御上之御規則自然ト破レ申訳合ニ御座候、尤洋銀ダラ又ハ日本金貨銀貨等エ穴無之故、金貨銀貨ノ御趣意ニテ製造方被仰渡候得共、御存ノ通り金銀ト銅トハ格別ノ位違ニテ、金銀ハ紙ニテ包品物ニ御座候、銅錢ハ紙ニテ包方ハ少シ無勿体、高ノ知タ銅ニテ候得ハ、穴ヲ明ケツナキ方致儀至極便利ニ御座候、尤御上又ハ大家ノ用通ハ金銀ニテ通用致シ、小家

ノ用通ハ錢ニテ用便致候儀御座候、於御上御差支無之儀
候得ハ、穴ヲ明ケ製造方被仰付度、乍恐私忝人ニテ悪敷
申上候処、於御上は多分御承知モ無之管候ニ付、市中民
一統エ御評儀被仰付度、左候得は民一統善悪可申上候、
其通り被仰付候事、

文書原寸 縦二四・五種 横三二・二種

二〇二四ノ二〇

僕七月四日ヲ以テ岩手県ヲ発シ、同十四日東京ニ着セリ、
諸用ノ余暇ヲ以テ、愚十余紙中ニ草々ニ筆セリ、元ヨリ
無文字ノ生ニテ文ハ語ヲナサス、語ハ亦解シカタス、且
カナノ違ヒ多シ、帰県ノ日逼リ再按スルニ暇アラス、此
仮ニ紙屑ニ投スルモ実ニ遺憾ニ堪ヘス、元老院ニ呈スル
モ亦名ヲ求ムルニ当リ、元ヨリ好ム所ニアラス、且堂々
タル開化ノ世、何愚陋等ノ如キノ論采ルアランヤ、巷説
虚多ト雖トモ、聞ク所ヲ以テスレハ、一覽ヲ乞フヘキ君
子モ亦ナキニ似タリ、唯従二位公独リ僕ノ深ク敬慕感戴

スヘキコト多シ、依テ恐レヲ顧ミス此一冊窃ニ欲願 高
覽、僕僻遠陋愚ノ情ヲ哀憐シ、不文ヲ推汲シ、一覽ヲ汚
シ玉ヒ、不遜妄言ヲ免赦シ玉ハ、生涯ノ面目死テモ忘
レサル所、執事御中、僕ノ為宜シク謀リ玉ヒ、再拝頓首、

乙亥八月十九日

岩手県土族
奈良真令

島津従二位公殿下

執事御中

文書原寸 縦二四・三種 横三二・五種

二〇二四ノ二二

記

熊谷県管下

- 入間郡竹間沢村
- 牧野義道
- 郡古市場村
- 高山忠晴
- 宗岡村
- 高野弥十郎
- 入間川村
- 齊藤文吾

//

同村
 甲 田了作
 上広瀬村
 東海林龍吟
 今福村
 和久津孝学
 福田村
 寺沢泰乘
 福田新田
 福田久松
 大袋村
 新井治郎左工門
 広瀬村
 新居 日怡
 下富村
 富士野圣尽
 川越久保町
 本多藤間
 下奥富村
 松井松翁
 久下戸村
 湯沢寿仙
 古谷本郷村
 岡田奥之丞
 古谷上村
 湯沢大祐
 南畑村
 水村秀道

文書原寸 縦一六種 横七五・二種

古谷本郷村
 粕谷利喜蔵
 南永井村
 前田了益
 新宿村
 木野村俊平
 岡村
 比留間弥太郎
 宮戸村
 高橋弥五郎

二〇二四ノ三二

記

何某

右之者筆学教示差免者也、

文書原寸 縦二四・三種 横一四種

二〇二四ノ三三

(端裏書)

憲法一冊

入尊覽候

御覽後
 御返却可被下候」

謹而奉申上候、然は不相替書翰ニ御座候得共、是迄御

自分様之御見識御唱立等被為在候儀は先暫其俣被差置、

此聖徳太子憲法を新に被 仰出候処被仰立候ハ、幸

古昔

天皇様 御膝元ニ而御出来之御条目ニ御座候得は、近幕

府等ニ而沙汰之無之品、却而一旦珍敷甚可然御品と奉

存候間、御承知とは奉存候得共、藏書一冊入尊覽候、

此中武事を不申ハ却而面白被存候、御用透御一覽可被

成下候、以上、

十月十五日
縦書

文書原寸 縦二八種 横四〇・五種

二〇二四ノ二四

編輯例則

一苗字姓尸実名

通称初何某後何某又ハ何ト号ス等詳記スヘシ、但シ

壬申五月第百四十九号布告以後、通称名乗廃棄ノ分

ハ朱ノ□形ヲ加ヘ弁別スヘシ、

一郷貫食禄

何府県貫属元堂上諸侯士庶人元何領管下国郡村名等

ヲ詳ニスヘシ、

一生涯年齢

年号干支月日、何府県何国郡何地ニ生ル、又明治七

年一月齡幾年幾月、

一世系

祖父何某父母何某或ハ某ノ幾男某ノ兄弟、

一履歴叙任

復古前後ヲ論セス、総シテ国事ニ干渉シ、時務ニ執

掌セシ凡其一身、艱苦経歴ノ事蹟ヨリ官位・職務・

祇役・征戦・褒貶・進退或ハ特命或ハ職掌ニ依リ、

担当施設セシ事務ノ顛末及ヒ現今奉職ノ有無等ニ至

ルマテ、一切年月方所ヲ詳記シ、宣旨・達書・建議

・策文等ハ原文ヲ掲ケ、次序編輯シ事理ノ本末貫通

理会シ易キヲ要ス、

一已ニ死去致候輩ハ、親戚朋友ノ者、其事蹟ヲ編述シ、

死葬ノ年月方所碑表ヲ記シ、遺著類ノ国事及ヒ其経歴

事蹟ニ関涉スルモノハ、併セテ録上スヘシ、

一本年六月ヲ期限トシテ在官者ハ史官、非職者ハ其本管

庁へ差出スヘシ、

明治七年二月

正院歴史課

文書原寸 縦二・二種 横二七種 二枚

二〇二四ノ二五

乍恐奉申上候

抑廿余年前年より御国付御心配被為遊候御事、土民之我等ニ至ル迄不残奉大悦候、是ニ依而年来相考候拙書一封奉献上度、宜御伝達奉願上度候、恐白、

明治六年

六月

神奈川県支配所

相州鎌倉郡

十二区戸塚駅

十八番屋敷

石渡彦太郎

上

文書原寸 縦二四・五種 横三四種

包紙原寸 縦三三種 横二四種

二〇二四ノ二六

〔封筒〕 第二大区内幸町二番地

本所相生町六番地
茨城県土族

島津久光様

伊藤辰之助

尊下要用書

〔封筒ウラ〕 朱「伊藤」ニツ同ジ

〔酒印〕 東京・明治八・一・一八・夕

〔朱印ト「絨」ノ文字ハ重複〕

〇絨

正月十八日

茨城県

伊藤辰之助 〇〔朱〕

乍懼奉申上候、蠹蚩旧祖一刀斎ヨリ子々孫々迄伝来之一刀、乃チ元徳二年正宗有名長サ二尺五寸、当一品蠹蚩所持罷有候処、目今窮迫罷有候故、一時ノ窮迫ヲ促スノタメ不得已売物ト決心仕候処、如何共商人ノ手上ニ相渡可申之処、離ル、ニ難忍故ニ前後ヲ不顧御伺奉申上候処、若シ御一覽ノ上御思召モ候ハ、蠹蚩ニライテモ本憶此

事ト決心仕候間、迅速ニ奉獻可申上一心故ニ一応以愚書
御伺奉申上候、謹言頓首、

正月十八日

島津久光様

再啟

御思召之程御返言奉待候、

乍懼宿所本所相生町一丁目六番地坂東惣兵衛方仕
宿、

文書原寸 縦二一・三種 横二七・五種

封筒原寸 縦一二種

縦二一・三種 横一二・七種

横六種

三〇五 東京府士族城井寿章ヨリ久光公へノ建白

官吏淘汰紀綱更張ノ議

東京府實屬士族城井寿章頓首謹再拜

從二位島津公閣下ニ白ス、曩日天下ノ士領ヲ引キ足ヲ
企テ、閣下ノ入京ヲ俟ツヤ、恰モ大早ノ雲霓ヲ望ム
ニ似タリ、其既ニ入京スルヤ、古ニ所謂奎雲(暈)德星ノ世

ニ見カ如ク、都下人民相共ニ先ヲ争テ路傍ニ拜觀ス、
既ニシテ都下士人胡服ヲ抛チ、戎裝ヲ脱シ、袴ヲ穿チ
枉ヲ正シ、或ハ又双刀ヲ帶ルモノアリ、以テ新政令ノ
出ヲ待ツ、蓋シ人心ノ 閣下ニ帰嚮スル一ニ如此、
閣下モ亦大ニ天下ニ対ル所以ノモノ自ラ其道アルベシ、
雖然寿章竊ニ疑ヒ、且ツ惑フ所アリ、何トナレバ、万
古不易ノ

皇統モ共和政治ノ惡弊ニ陥リ、終ニ洋夷ノ属国ト可成形
勢ハ、鏡ニ掛テ拜スルガ如キハ実ニ 尊説ノ如シ、是
誠ニ一日片時モ傍觀座視スル時ニアラズ、先賢云ヘリ、
天下ニ為スベカラザル時ナク、又成スベカラザル事ナ
シ、明儒劉宗周又云ヘリ、天下事雖万々不可為在臣子、
豈有不下手之理、誠下手時、一人下手、人々皆下手、
事焉有難濟者乎ト、況ヤ今日ノ事万々為スベカラザル
ノ時ニアラズ、 閣下徳川氏ノ凶焰猶熾ル時ニ當ツテ、
天下ニ先チ断然策ヲ決シテ、
王事ヲ勤メサセラレ終ニ天日ヲ挽回シ、

皇室ヲ再造セリ、今日ノ事勢決シテ昔日ノ如ク至陰至難ニアラズ、然ルニ隱忍シテ今日ニ及ブハ壽章ノ甚々怪ム所ナリ、伏以 閣下徳高ク位貴シ、所謂佐命元勳ニテ天下ノ具瞻スル所ナリ、今 閣下ノ如キ天下ノ重望ヲ負ヒ、出世出ノ雄略ヲ抱クモノ、天下ニ先チ一トタヒ手ヲ下セバ何事カ為スベカラザラン、又何大難カ濟フベカラザランヤ、是但 閣下ノ一英断ニアル而已耳、一今日ノ急務ハ君子ヲ進メ小人ヲ退ケ、不才斗筭ノ官員ヲ淘汰スルニアリ、抑百揆ノ挙ラザル一事ノ遂ケザル皆其人ヲ得ザルニ座セラル、也、且ツ自古賢不肖君子小人各皆其党アリ、一小人 朝ニ進メハ群宵随テ窶進ス、一君子退ケハ衆賢亦随テ擯斥セラル、故ニ、君子小人ノ進退消長ハ天下 国家ノ治乱安危ノ所係也、今日内政ヲ調理シ、紀綱ヲ舉ルノ本源ハ、賢邪ヲ黜陟スルニアリ、杜牧言ヘリ、上策莫如自治々々術以進君子退小人為本、君子進則雖微必強小人進則雖盛必衰トハ千古格言ト謂ベシ、是故聖人ノ小人ヲ待ツヤ極メテ敵也、

苟モ誅戮放流ヲ加ヘザレバ、必ズ之ヲ四夷ニ屏ケテ与ニ中国ヲ同セズ、經典所載昭々トシテ明ナリ、而シテ之レヲ処分スルハ英断、以テ人ノ意表ニ出ルニアラザレハ、反テ多少ノ禍害ヲ醸生ス、江公望宋主徽宗ニ上奏シテ曰ク、不吝於岳牧、而有四罪之誅、後世不以仁智為不足、而以勇称舜者、以善断故也、舜以是伝之湯、故伐桀而断之、以今朕必往、湯以是伝之周公、故誅二州而断之、以從十夫之哲、周公以是伝之孔子、其於少正卯、疑若無頭過也、断之以七日之必誅書曰惟克果断乃罔後艱信乎、当断不断、其蹈後艱也必矣ト、今ヤ四凶少正卯ノ如キ小人ナシトイヘトモ、唯一身ヲ謀リ私利ヲ營ナマントスルモノ滔々皆是也、苟モ一身ヲ謀リ私利ヲ營メバ為ザル所ナク至ラザル所ナシ、先輩云ヘリ、公私不兩立謀身必至誤国ト、此事古人ヲ待ズ、今見ニ洋人モ亦云ヘリ 庚午正月折田年秀ト云フ人 荀爾杜尾爾公使ロウレイロト云フ者ト問答セシ筆記中ニ見ヘタ、嗚呼君子小人ノ消長ハ 国家安危ノ所係ニテ、固ヨリ壽章ノ喋々瀆告シ奉ルヲ待ザル也、然而シテ進退

黜_ニ陟_之ハ偏ニ 閣下ノ一英断ヲ仰ク而已、古今英雄

ノ大事ヲ挙ケ大業ヲ成スハ一英断ノ其機ニ投ズルニア

リ、古人云ヘリ、断而為之鬼神亦避之ト、今 閣下ノ

心事磊々落々、其所為公明正大ニシテ之ヲ天地鬼神ニ

質シテ疑ナク、百世聖人ヲ俟テ惑ナクハ如何ソ、天地

鬼神モ冥助セザラン、況ヤ

天祖 天孫歷朝 神聖照鑑シテ上ニアリ、天下億兆人民

渴望瞻仰シテ下ニアリ、

閣下何ヲ猶予シテ断然ト事ヲ決セザル、蒯通云ヘリ、

時ハ難得而易失ト、今ヤ君子小人消長ノ大機會ニ臨ミ、

何ヲ憚リテ一トタヒ手ヲ下シテ、上ハ以テ

宗廟社稷ノ靈ヲ安シ奉リ、下ハ以テ天下万民ノ望ニ対ヘ

ザル、前日ハ凶ラズ初テ拝謁ヲ得タリ、卑賤寿章ノ如

キ者ヲ棄サセラレズ、 御下問ヲ賜ハリ感激ニ堪ヘズ、

然レトモ猶イマダ区々微衷ヲ尽サズ、因テ今又狂瞽ノ

言ヲ竭シテ進呈ス、瀆冒 尊嚴恐懼無己寿章頓首稽首

再拜白、

癸酉五月廿八日

文書原寸 縦二七・三櫃 横一九櫃 六枚

三六 佐々木高行ヨリ大久保利通ヘ

(封紙ウラ書)
「大久保参議殿
御親展

高行

拜呈仕候、暑氣甚強ク御座候処、先以益御清穆、昨日御

帰京之御旨奉拝賀候、過日来御無人ニ而御帰京之処大早

之雨を乞候心持ニ御座候場合、実ニ安心仕候、いか様御

所勞之御趣、为国家厚御加養專一ニ奉存候、何分共御規

則之通、三日_日暇中ニは御快和ニ御趣ニ而御参

朝之義奉折候、右付匆匆頓首、

五月廿八日

追而、別封落着致候間差出候、御落掌可被下候、

文書原寸 縦一八櫃 横五七櫃

二〇三 山階宮晃親王より島津久光公へ

時候御見舞

〔封紙ウツ書〕
島津従二位様 晃

ノ
ノ
「

尚々、如此時氣御自愛希入候、去月今日ハ拝面畏入奉存候也、

薄暑之節趣御勇健奉巨賀候、抑此茶菓二折不形不齊赤面候へ共、時令御見舞申入候印迄ニ進上候、御笑納被下候ハ、本懐畏入奉存候、

敬白、

西五月廿九日

文書原寸 縦一七種 横四九・三種

二〇六 島義勇ノ意見書（大久保へ？）

久光公優遇ノ件

〔封紙ウツ書〕
〔御内読〕

拜啓、時下倍御壯健御焔

朝被成奉招祝候、就中再度之御航海尚更御励勞、乍然西洋情実現在御看破、爾来御輔佐之御一助御有益も可被為在と奉察候、陳は今般御旧臬之

〔島津久光〕
從二位公節角御上 京、輿論に而は早速大臣等に御任し

被遊当今之苛政も御改、四民共安堵は勿論細大之綱紀御挙ケ可被成と、天下之士人始農商に到る迄希望罷在候処、要路中之奸徒、例之詐謀に而陽に尊之陰に嫌之姿に相見江、御建白之件々抔緩々御問訊に相成、曠日期延之御所置遙々重く被 召候詮無之、有志之士彼五六輩之奸詐術と歎息仕候、

御中興之業は御旧藩第一之御尽力に而如此之通相成候処、今日に至り外国人さ江諸省に御雇入れ、然に自国に大功勞も被為在、政治には御老練之御方を御採用無御座は、彼輩（鼠）一身之寵を失ふ事を恐れ候心景に而憐れとも拙きとも人天之怒る所に御座候、此之

御政体に而は乍恐駭々乎し而、外国之属国にも可相成勢

に付申上に不及候得共、

従二位公 御政事に御預り被成候半ハ、外国ノ御所置よ
りし而昔政も御除き、

御国体も万古不動様に可相成、一体近況御聞被成候とは

奉存候得共、人に依り心得違いたし操戈入室候向も有之

哉も難計、維新之

朝廷に而も奸物も不少、定而御深慮を以て前件之御周旋

も可被成候得共、海内県々之士人を始日夜憂念憤慨、

従二位公之御進退

皇国之安危存亡に係り候義に付、勇退之身も難沈黙不僻

嫌疑諸士に代り申上候、筆不尽意宜御諒察可被下候也、

拜上、

五月廿九日

島義勇



文書原寸 縦一五・八糎 横三八・二糎

三三 佐賀県士族柴田洪平ヨリ久光公へノ建言

時弊ノ匡救ニ就テ

〔表紙〕
上

柴田武行謹再拜奉書于

従二位公閣下、武行 閣下を景仰する久し、天下万民も

亦 閣下を偲仰する大旱之雲霓を望か如し、武行謹白

夫其位ニ不在而其政を議者ハ妄也、其官ニ不在而其事

を可否者ハ誕也、妄誕之言誠ニ斧鉞之誅を所不免也、

伏冀は 閣下特ニ降寛容頃者、

御維新之際、天下無事之日ニ乘シテ功劳忠讜之士被斥黜、

狡猾不羈之徒荐ニ薦ミ、宇内之勢形を不察、治国之枢

要を不弁、屢洋夷ニ諂諛し、政教を汜濫し、井蛙之見

を以封建を廢シテ郡県を興し、士を賤し商を貴ひ、野

蠻卑陋之俗を慕ひ、無用之貨財を費シテ無益之(餘之)玩器を

装作し、租税苛酷ニシテ刑律又(餘之)酸刻也、是ニ由て人々

悲哭踟躕而立、猶覺鐘之牛穀煉而死地ニ就か如し、人

民不勝命國家將顛覆せんとす、可勝慨歎哉、武行此京地ニ寄留于茲三五年、熟今日之景況を觀ニ、

皇化日ニ衰頽シテ國体月ニ縮迫し、外夷固覬覦シテ以我覺乘せんと欲す、雖然大臣之頑然偷安を苟且シテ我將亡滅せんとするを不知、人才之撰擢又其道を不得シテ交際之可否を不弁、國家之隆替を不厭、哀哉五倫之常經を煙滅シテ儀礼格式終ニ頽墜し、廉恥之風糜滅シテ礼讓之道絶斷す、於是乎奸臣

宝位を覬覦シテ共和政治を大唱し、人民凍餓を哭泣すれハ、官吏微笑シテ其生産を不収を嘲り有志之士國家之傾覆を慨歎すれハ、頑固蠢愚と詈り、洋夷荐ニ跋扈すれ共、猶神仏を崇尊するか如し、是を以郡県之騷擾多端ニシテ都下之人民亦已ニ動亂を希望す、故ニ令奸兇宝位を覬覦せしむるも、今日人民をシテ騷擾動亂を令醸も、亦今日ニシテ洋夷ニ授与するも、今日國家之顛墜を救ひ人民を綏撫するも亦今日也、今日之景況真ニ不容易之秋也、實ニ國家之危急今日ニ蹙迫し、小人之頗雖

所鼓腹、又君子之大ニ所慷慨憤怒也、武行之怯鷲固雖不足採、亦座視傍觀ニ不忍、曩日前書以呈伊知君而未其諛恕を不蒙、又未一面之接遇を不得、武行之妄誕雖不可寬恕、又報國之一念固微軀を不顧、而又所以冒閣下也、閣下特ニ降寬容、武行方今政途之所繫及び愚按を著シテ一冊とし、且曩日伊知地君ニ所呈之書と併て以奉于閣下、武行之狂愚窃ニ所以冀律外之所置也、而書辭暴慢意旨錯雜實ニ雖不足觀、一辱閣下之尊寬則何之榮か之あらん、武行之僥倖又有過之者哉、

武行誠恐惶頓首再拜謹白、

明治六年五月

佐賀県士 柴田洪平〇

謹謹上

從二位公閣下

冊子原寸 縦二四・三種 横一七・二種 五枚

二〇〇〇 愛知県士族小川彰ヨリ久光公へノ上書

時弊匡救論 詩六首添 二通

(包紙ウツ書)
「上」

二〇三〇ノ一

(封筒)
從二位島津公 閣下

小川彰謹上

(封筒ウツ書)
「固」

彰微賤之身ヲ以テ、閣下ニ謁シテ其持論スル所ノ策ヲ進メ、其所抱ノ経略ヲ説ク、閣下之ヲ聞テ其狂暴ヲ罪セサルノミナラス、且諭スニ 皇朝ノ為ニ功效ス可キヲ以テス、其懇情厚意真ニ一世之知遇ナリト謂フ可シ、夫レ嘉永以來今日ニ至ルマデ、一時海内之名望ヲ負フモノ漸ニ彼カ為ニ風靡セラレ、敢テ一人ノ其節ヲ全フスル能ハズ、豈ニ歎ス可シヤ、終始其志ヲ一ツニシテ確乎トシテ動カス、皇朝ヲ維持ス可キハタ、独リ 閣下有ルノミ、

是彰カ其狂迂ヲ顧ミス、切ニ其説ヲ進ムル所以也、閣下冀クハ頃日進ムル所ノ三策ニ注意シテ大ニ為ルコト有ント欲セハ彰不肖ナリ雖モ腕ヲ扼シテ 閣下ニ從ヒ、皇朝ノ為ニ大功業ヲ立テ、姓名ヲ竹帛ニ垂ントス、然ルニ家素ヨリ貧ニシテ費用支エス、久シク都下ニ滞シテ其期会ヲ待ツ能ハズ、今婦耕セント欲ス、故ニ其居所ヲ別記シテ之ヲ呈ス、閣下他日衆議ヲ排シ、断然 皇朝ノ為ニ事ヲ為シ欲セバ、一行ノ書ヲ付シテ之ヲ召サバ、タ、チニ劍ニ仗キ之ニ趣カントス、事成ラハ寇萊公タリ、虞允文タリ、事縦ヒ成ラザルモ林則徐・陳化成ノ氣慨節烈ニ譲ル可ラズ、皇朝養士民コ、ニ数千年、此時ニ当テ一ノ偉男子出テ、以テカノ洋虜ノ胆ヲ破ル無ル可シヤ、成敗ハ常ナリ、苟モ其誠忠ヲ尽シ 皇朝ノ為ニ死セバ豈ニ愈快ナラザランヤ、閣下以テ如何ントス、述懐之詩二首并呈静閑燕居之時高覽ヲ希フ、古人云ルコト有リ、工ノ遅キヨリ拙ノ速ニ如カズト、天下ノ蒼生タ、閣下ノ来ルヲ待チ、其沢ヲ受ケントス、渴シテ水ヲ望ムカ如シ、

然ルニ今也固ク臥シテ起キス、天下之蒼生ヲシテ工ノ遅
キヲ恨マシムヘカラス、閣下之進退ハ実ニ天下ノ安危
隆替之所繫焉、宜シク天下ノ為ニ勉励シ、一タビ出テ以
蒼生ヲ救ヒ其力ヲ養ヒ、終ニ皇威ヲ五州ニ震セシメハ、
彰欣喜ノ至リニ任エサルナリ、頓首頓首敬白、

五月十六日

從二位島津久光公

閣下

小川 彰（憲）

冊子原寸 縦二七・五種

封筒原寸 縦一六・八種

横一九・五種 二枚

横 六種

彰（実美）嚮ニ三条公ニ謁シテ時事ヲ説カント欲ス、公見ルヲ許
サス、爾後持論スル所ノモノヲ書シテ県吏ニ因テ之ヲ政
府ニ上ク、然ルニ其言フ所尽ク時ニ忤ヒ、世ヲ矯ルノ説
当路ノ人之ヲ誦テ迂ト云ハスンハ必ス之ヲ狂トイヒ、壅
蔽（校徳）技術シテ説終ニ行ハレス遺憾ニ耐サル也、彰草間ニ在
テ 閣下之名ヲ聞キ、其感慨名節一世ヲ軽重スルヲ慕フ
故ニ、再ヒ其説ヲ書シテ之ヲ上ク、論スル所素ヨリ精微

深博ナル能ハス、天下ノ事務ニ於テ挂漏遺脱スルモノ多
ラン、然レトモ其大綱ヲ論スルニ至ハ 閣下之ヲ誦テ彰
カ説ヲ以テ迂ト云、狂トセサルヲ知ル、

明治六年五月

閣下

從三位島津久光公

愛知県實屬土族
小川彰謹白

今マ天下之為ニ言ハント欲スル所三ツ有リ、一曰倍養士
氣、二曰興起国力、三曰霸万国、何ヲカ士氣ヲ倍養スト
イフ、今ヤ天下之士民利ニ走り私ヲ營ミ至ラサル所無シ、
然ル所以ンハ 朝家士ノ禄ヲ省シ、民ノ税ヲ厚ス、故ニ
士民共ニ生計ニ勞シ、猾商トナリテ利ヲ射ラスンハ、必
ス一日之旧半面ノ識ヲ求メ、付託懇請ノ宦ヲ得ル、世之
ヲ目シテ機関ト云フ、苟クモ機関無キ時ハ異能宏才之士
ト雖モ、其才能ヲ施スコト能ハス、ア、各県之士民尽ク
竹頭木屑ノミナランヤ、 朝廷之ヲ機関之一路ニ委シテ
意ヲ加ニス疎ナリ云ヘシ、夫ノ雄偉倜儻大ニ為ルコト有
ルノ士、豈敢テ此ノ途ニ出ンヤ、大有為之士此ノ途ニ出

サル時ハ、必ス齷齪(マカ)ノ吏胥ニ非スンハ凡庸無恥ノ徒也、齷齪凡庸之徒ヲ以テ諸省ニ充ツ、天下無事則已ム、苟モ事有ラハ禽走獸遁一敗塗地如何トモスヘカラサルヲ知ル、是士氣ノ不振ヲ歎スル所以也、今大ニ選舉之法ヲ設ケ、各県ニ勅シテ公平ニ異能宏才之人ヲ選ヒ、其人沈実而不浮華、大事ニ任ス可キ者、小心而事ヲ勤ム可キ者、各其才之長短巨細、其器之大ト小トニ因リ、為卿・為輔・為吏胥各其任ヲ得、其器ニ充タシメ、又其人胆略有リテ謀ヲ能クシ、意氣一世ヲ籠絡鼓舞ス可キ者、身健而ヨク闘者之ヲ將ト為シ、裨為シ歩トシ、各県之士民一人之棄材遺能無ランメバ、士氣大ニ振ヒ国家隆盛之域ニ至ラン、是士氣ヲ倍養スル所以ノ道一也、何ヲ国力ヲ興起ストイフ、今国家之形勢ヲ視ルニ、恰モ一家ノ産アリナガラ揮霍融通スル能ハス、空シク座食スルガ如シ、日一日ノ儉安ハ致ス有リト雖モ、豈之ヲ万世之久シキヲ保ツト云テ可ナランヤ、何ントナレハ人才有リト雖用ル能ハス、時機有リト雖モ決スル能ハス、紀綱法令簡嚴ナラス、繁文

細故国威日ニ耗シ月ニ削シ終委靡振ハ不ルニ至ラン、此時ニ当テ其弊ヲ矯メ其患ヲ徐セスンハアル可ラス、朝政維新已来既業五六年、其間一二大臣賢相之ヲ維持シテ未タ弛頹ニ至ラサレトモ、創業厲精政治之日ニ匹スルハ遜スルモノ多シ、馴致之極終ニ昔日將家之政ニ如カサルニ至リ、民心モシ一ヒ去ラハ復タ収ム可ラス、アニ長歎ニタユ可シヤ、昔後醍醐天皇中興之業、其終ヲ全スル能ハス、千歳ノ遺憾トス、今也 朝廷宜シク古ヲ鑑トシ、宵衣汗食深思熟慮紀綱ヲ簡ニシ、法令ヲ嚴ニシ、賢愚甄別黜陟失セス、恩威並行外人之ヲ視テ駸々乎犯ス可ラ不ルノ勢有ルニ至ル、是国力ヲ興起スル所以ノ道二也、何曰覇万国、今五州角立中ニモ歐洲之諸国明君賢相輩出シ、之ニ加ルニ謀將猛士其人ニ乏シカラス、各逞スル所有ント欲スルヤ久矣、然レトモ英ハ鄂ニ庄セラレ、法ハ普ニ敗ラレ、普ハ英法ニ控掣セラレ、独リ鄂ノミ全勝之地ニ抛ルト雖モ事ヲ成スヤ遲シ、幸ナルカナ 皇朝亜細亞東陲之一島ヲ占メ、

近隣ノ諸国ヲ倪視スルニ么麼羸弱齒スルニ足ルモノ無シ、
 此時ニ当テ外ハ歐洲之諸国ヲ結ヒ、内ニハ雄謀宏図不出
 世之人ヲ用ヒ、大ニ国家ヲ一変シ、漸々凶之ハ自ラ覇業
 成ラン、カノ織田右府之甲越二家ヲ騙シテ以テ中原ヲ制
 セシカ如シ、是覇万国所以之道三也、然ラスシ事無キヲ
 幸トシ、恬熙空ク過キハ十年ニ出スシテ、鄂カ為ニ先ツ
 鞭ヲ着ケラレンコト必矣、然ル後俯伏奔走彼カ下風ニ立
 ント欲ストモ得可ラサルナリ、皇朝版図狹少遠大之事
 業如此容易ナラスト云フモノ有ン、是天下之大計ヲ知ル
 モノニ非サルナリ、伏惟彰年少氣鋭所言一々狂暴之罪ヲ
 免レスト雖モ、其誠衷ヲ洞察シ少シク留意セハ幸甚、

四月

冊子原寸 縦二七・五種 横一九・五種 五枚

二〇三〇ノ二

二十男児何磊落 時々呼快劍華白
 中原兵略向誰論 若不世民定孫策

意氣縱然吞一世 可憐末路易倉黃
 那破能兵歷山智 不及鄂羅彼達王
 万里汪洋泰西連 鉄輪剪浪走樓船
 海天若得好期會 直到魯車英吉辺
 奇謀雄略無人識 一曲高歌也激揚
 他日君看我功業 姓名震破大西洋
 英文法冊事紛如 空使後生歲月除
 五大洲中婦一統 何人新製普通書
 醉裏譚兵驚座客 唐家偉業孰超倫
 當時若許從軍去 庄倒凌煙閣上人
 落魄都門久矣 寫胸中鬱勃之氣以遣悶、時三月十三日寒
 風吹破衣、冷徹骨終夜不能寢也、 狂生 小川彰

文書原寸 縦二四種 横三三・五種

尾州伝馬町東御添地ニ而
 愛知県實屬土族小川円藏長男
 小川 彰

文書原寸 縦一六・五種 包紙原寸 縦二七・五種
 横 六種 横 三八種

三〇三 小倉県土族水島均ヨリ政府へノ建言

財政整理ノ件

(表紙)
「建白書草案」

夫国ノ安危存亡スル所以ノ者ハ財ナリ、能ク財ヲ理スル者ハ天下ノ財之ヲ天下ノ事ニ用ヒテ余リ有リト雖モ足ラサラシメス、能ク財ヲ理スルコト不能者ハ之ニ反ス、抑戊辰以来大ニ天下ノ大勢ヲ一新シ玉ヒ、封建ノ体ヲ変シテ郡県ノ制トシ、天下ノ利権ヲ一ニ併セ、民租ヲ裁減スルコト不能ノミナラス、市ヲ征シ商ヲ摧シ到底税アラサルハナク、而シテ毎ニ財ノ不足ニ困シ、一タヒ災異アルトキハ茫乎トシテ術ノ可施ナシト、臣甚タ惑フ、巨大蔵省ノ出納其詳ナルヲ不知ト雖モ、天下ノ費冗且大ナル者ハ華土族ノ禄ニシテ、大数五百万石殆ント天下税租ノ央ヲ費スト、夫五百万石ヲ以遊民ヲ座食セシメ、更ニ官員ノ俸給、海陸軍ノ用途ヲ具ヘントス、財ノ不給亦怪ムニ足ルモノナシ、今ヤ 朝廷創業ノ際尚新聚ノ家ノ如シ、

衣服・器皿・屋宇ノ設一ニシテ足ラス、然レトモ特リ新聚ナルトキハ可ナリ、守成ヲ以創業トシ久安ヲ以新聚トシ玉フ、是ヲ以廢陳ノ物累々トシ屋ニ満チ、新置ノ需メ日ニ益熾ンナリ、国何ヲ以テカ其弊ニ勝ン、故ニ廢陳ノ物ヲ取ツテ悉ク水火ニ投シ、更ニ新者ヲ置トキハ可ナリト雖モ陳者不可棄シテ新者不措ヲ得ス、陳新並ヒ措テ財ノ不足ヲ患フ、誰カ能ク之ニ当ラン、而シテ陳新並措ハ尚可忍ト雖モ、今日ノ勢費ス処ハ陳新並ヒ費シテ、用ニ充ル者ハ陳者ニシテ新者ヲ兼ヌル者ナリ、何ソヤ今夫華土族ニ給スル処ノ五百万石ハ冗ノ実ナル者ニシテ、之ヲ食フ者未タ悉ク遊民タラス、三公以下諸省府県ノ官員多クハ華土族中ヨリ出ル者ニシテ、偶々農商ヨリ出ル者アリト雖モ、未タ必ス數十人ニ下ラシ、兵卒トイヘトモ亦然リ、家禄ノ有無ヲ不問、更ニ官禄兵給ヲ受ル、則チ用ニ充ル者ハ陳新相兼テ費ス処ハ兩岐ナルモノニ非スヤ、是豈策ノ得タル者ト可謂哉、難者將ニ言ハン、華土族ノ禄タル皆祖先ノ功劳ニ依リ其余福ヲ受ル者ナリ、最前減

刪シテ既ニ家産トナリ、農商ノ家産ト亦異ナルナシ、故ニ官トナリ兵トナル者四民同等ノ禄ヲ受ル、豈之ヲ不当トセンヤト、臣以爲不然ト農商ノ産ヲ立ルヤ、或ハ心ヲ勞シ或ハ力ヲ勞シ、朝夕孜々トシテ未タ嘗テ安処セス、偶安処スルトキハ忽然之ヲ失ス、何ソ華士族ノ安然禄ヲ受ルト同シカラム、故ニ華士族モ亦受ル所ノ禄ヲ以家産トセハ、或ハ官ニ任シテ心ヲ勞シ或ハ兵ニ役セラレテ力ヲ勞シ、以テ祖先ノ余福ヲ守ルヘシ、豈天地ノ間心力ヲ勞セス安然手ヲ拱シテ産ヲ得ル者アラムヤ、故ニ臣カ愚見ニ依レハ、華士族ノ禄未タ悉ク没収スヘカラサルヲ以、暫ク家産ト見做シテ之カ証券ヲ賜ヒ、五百万石ノ禄ヲ融(融)酌シテ官員ノ月給ヲ裁減シ、又兵賦ヲ課徴シ海陸軍ノ用途ヲ補ヒ、其家産ヲ受ル者ハ之ヲ官ニ役シ、之ヲ兵伍ニ充テ其心力ヲ勞セシメ、暫ク祖先ノ余光ヲ受ケシメ玉ヒ、陳新兼用ヒ費用一途ニ出テハ、公私其宜ヲ得テ理財ノ法モ亦随テ立シ、臣請フ、試ニ目今ノ利害ヲ述ヘン、抑維新以來 廟議專ラ欧米各国ノ体ニ倣ヒ玉ヒ、華士族ヲシ

テ文武ノ常職ヲ解カシメ、穢多非人ノ稱ヲ廢シ、貴賤上下ノ別ナク四民同權平等ノ物トシ、唯其才コレ見テ其用ニ任ル者ハ挙テ之ヲ禄シ、其用ニ不任者ハ棄テ禄セス、以テ綱維ヲ更張シ玉ハントス、誰カ之ヲ不宜ト云ハム、然レトモ世界万国自然ノ体ニツテ氣節風習不同サル者アリ、世態人情時ヲ異ニスル者アリ、徒ニ其名ヲ美ナリトシ、其実ヲ不察トキハ其弊モ亦大ナルヘシ、夫欧米各国古ヨリ君臣ノ分定ルニ非ス、生ナカラニシテ貴賤上下ノ等有ルニ非ス、世襲ノ禄ヲ食ンテ官トナリ、兵トナルノ習ヒナク、四民同權平等ハ因襲ノ俗ニシテ、文武農工商意ニ随テ之ヲ業トシ、氣節ノ高ヲ不尚、廉恥ノ薄キヲ不責、其官ニ任スル者モ大賈巨商必ス家産ノ富豪ナル者ニシテ自ラ望ム者ニ非ス、亦義ニ依テ進ム者ニ非ス、偶賤民ヨリ拔擢セラル、者有リト雖モ、是亦自ラ望ミ自ラ求メテ之ヲ得ルニ非ス、是ヲ以官禄不多ハ之ニ居ルヲ好マスシテ、不快ノ事アレハ之ヲ去ツテ不義トスル者ナシ、故ニ廉退謙遜ノ実自ラ存シテ自然ノ宜ニ適スル者アリ、我カ

皇國ノ体タル開闢以來君臣ノ分定リ、生レナカラニシテ尊キ人ハ自ラ尊ク、賤シキ者ハ自ラ賤シ、王ニ種アリ、相ニ種アリ、中世以降兵農相分ルニ從ヒ、其稱シテ武士タル者特リ文武ヲ以常職トシ、因襲ノ久シキ是亦貴賤ノ等ヲ分チ、氣節風習自ラ農商ト異ニシテ其官ニ任スル者敢テ自ラ望ミ、自ラ求ル者ニ非ス、君ノ明ヲ以任用セラ、時ハ、其力ヲ尽シテ國ニ報スルコトヲ得ルヲ樂ミ、職ノ繁劇ヲ不厭、祿ノ多少ヲ不問、身ヲ殺スニ至テ敢テ避ケス、豈亦家ノ利不利ヲ顧ルノ暇アラムヤ、假令不快ノ事アリトモ猥リニ私意ヲ以退休スルコトヲ得ス、固此君臣ノ間義ヲ以合スル者ニシテ、廉退謙遜ノ厚キ各藩然ラサルハナシ、則チ國体習俗ノ彼ト同シカラサルコト此ノ如シ、然ルヲ俄然トシテ之ヲ更メテ彼ニ倣ハントスルヤ、世態人情ノ時ヲ異ニスルヲ以、其弊タル華士族特リ其志操ヲ棄テ其氣概ヲ失ヒ、孜々トシテ征利ノ途ニ奔走シ、大ニ商賈ト同一ノ境ニ進ミ、其農商タルモノ徒ニ開化ノ末ヲ追ヒ、其氣節風習未タ從前華士族ノ域ニ進ム者鮮シ、

而シテ華士族其祿ノ不可恃ヲ知り、其心一日モ安処セス、日ニ貪利ノ風ヲ長シ、其農タルヲ得ス商タルヲ得サルモノハ皆官ニ就カムコトヲ求ム、一タヒ官ヲ得ルトキハ家祿ト官給并受ケテ其利タルヤ亦大ナリ、是ヲ以官ニ任スルモノ其力ヲ尽シテ國ニ報シ、死シテ不厭ノ人ニシテ止ランヤ、或ハ空疎冒進多少ノ利ヲ攘ノ徒ナキヲ保ンヤ、廉退謙遜ノ風果シテ何クニカ存スル、四民平等ノ実果シテ如何也ソヤ、是朝廷徒ニ多量ノ財ヲ費シ、風俗ノ衰頹ヲ求メ給フニ似タリ、且兵ハ天下一日モ不可欠モノニシテ、天下ノ費兵ヨリ大ナルハナシ、頃日天下ノ民悉ク兵役ヲ課シ玉フノ令ヲ聽ケリ、皇國上古海内拳テ兵ナリ、此必ス可襲ト雖モ中世以降農ト兵ト相分ル、所以ノ者ハ、民一人ニシテ農ト兵トヲ兼ヌルトキハ田或ハ蕪シテ兵或ハ食ナキコトヲ致ス、是ヲ以民カ耕シテ兵ヲ養ヒ、兵カ戰シテ農ヲ護ス、兵農不相兼シテ相濟フ、此尤便利ナリト云ヘシ、然ルニ今日ノ如ク兵座食シテ遊惰ノ人トナリ、緩急不可用モノハ昇平ノ流弊ニシテ法ノ惡シキニ非ス、

而シテ華士族タルモノ産屋ヲ出ルヤ自ラ兵ヲ以任トシ、事アルトキハ必可死者トシ、妻妾婦女モ亦皆之ヲ期セシモノナリ、然ルニ昇平ノ久シキ耳ニ金鼓ヲ不聞、目ニ旌旗ヲ不見、身体軟弱遂ニ怯怯畏戦ノ人ト為レリ、況ンヤ農商固ト其死ヲ期スル者ニ非ス、其元氣ヲ存スル者ニ非ス、刀鎗ヲ見テハ肝ヲ冷シ、砲声ヲ聞テハ胆ヲ落ス、只其身体少シク強壯ナリトイヘトモ、又是同シク昇平中人ナリ、何ソ以強トスルニ足ラン、古人モ謂ヘリ、兵ハ精ヲ尊ンテ多キヲ貴ハス、今華士族座食遊惰用ニ任ヘスト雖モ、良法ヲ得テ之ヲ作新シ、其丁壯ヲ簡閲シ常ニ陣營ヲ造ツテ屯聚スルヲ要セス、朝ニ兵伍ヲ練シ、暮ニ刀槍ヲ習ヒ、余暇ヲ以学校ニ遊ヒ、山野ヲ跋涉シ、時トシテ將校之ヲ帥ヒテ山海ニ漁獵シ、其筋骨ヲ健強ナラシメ、其氣血ヲ運動セシメ、常ニ其氣ヲ鬱屈セシメスシテ其神ヲ暢和セシメ、我固有ノ正氣ヲ鼓舞シテ其長ニ親ミ、其伍ニ馴レ相愛相恤同進同退、致死シテ去ラサラシムルノ実ヲ責ヌハ、豈又不可用ノ人アラムヤ、必無頼ノ間民

ヲ蒐リ、怯弱ノ農兵ヲ募ルニ勝ランコト、名実果シテ如何ンソヤ、臣今四民ヲシテ平均同一ノ者トシ、唯其才不才此撰ミ玉フヲ以テ、決シテ否トスルニ非ス、実ニ盛世ノ洪拳トイヘトモ学校未タ海内ノ遍キニ至ラス、其業ヲ採ル者少年幼稚ノ徒ニシテ、農商ノ氣節風習未タ従前華士族ノ域ニ進マス、国家ノ財不阜華士族ノ禄不可奪ノ時ニ膺リ、今十数年ヲ經過スルノ間、暫ク一時ノ權宜ヲ以五百万石ヲ融酌シ、官員ノ月給ヲ裁減シ、海陸軍ノ兵制ヲ更メ、興利ノ術ヲ後ニシ、除害ノ法ヲ先トシ、国計少シク有余ヲ生シ、入ルヲ量ツテ出ルヲ為スノ本立チ、世態人情四民平均ノ実ヲ見ルニ至テ盛大備具スルノ洪拳ヲ期シ玉ハ、如何ン、臣試ニ五百万石ヲ融酌シテ、官員ノ月給ヲ裁減スルノ法ヲ画セン、凡ソ官ニ任ル者四民ノ中ヨリ此撰フト雖モ、農商ハ其才拔群ニシテ華士族ノ中、其右ニ出ル者ナシトスルニ非レハ、猥リニ之ヲ挙ケス、暫ク華士族中ニ就テ之ヲ任シ、官ノ等級ニ応シ一ケ年ノ定禄ナルモノヲ定メ、其家禄官等ノ定禄ト均シキ者ハ之

ヲ給セス、少キ者ハ増シテ官ノ定禄ニ及ハシメ、多キ者ハ減スルコトナクシテ定禄ノ外家禄ノ多少ヲ不論、更ニ些少ノ月給ヲ賜ハルヘシ、此家禄定禄相均シキ者ト多キ者、官ニ任シテ其勞ニ報セサルハ宜キニ非スシテ、家禄少キ者モ同等ノ官ヲ以同等ノ禄ヲ受ケサレハ、是亦公平ニ非レハナリ、而シテ兵賦ヲ課徴スル者ハ、今華士族ノ禄實ニ冗ノ大ナル者ニシテ、假亦多量ノ禄ヲ食スル者アリ、故ニ其多寡ニ從ヒ歩割ヲ以之ヲ計算シ、五万石以上ハ八分ヲ課シ、万石以上ハ七分、五千石以上ハ六分、千石以上ハ五分、五百石以上ハ四分、百石以上ハ三分ヲ課シ、百石以下ハ不問シテ士族モ之ニ准シ、大概自ラ受ル処七十石ヲ高トシ、十石ニ止リ、拾石以下ハ不問シテ金穀ノ内意ニ從テ之ヲ収メシメ、華士族中ニ於テ兵伍ヲ撰ミ、其任ニ当ル者ハ一人ノ禄十石或ハ十五石トシ、家禄ノ外更ニ之ヲ給シ、將校ニ昇ル者ハ別ニ多少ノ月給ヲ賜ハ、費ス処或ハ少クシテ、受ル処或ハ豊ナラン、其兵制ハ華士族聚処スルノ地ニ於テ、兵団ヲ立、將校ヲ措

キ、毎ニ屯營セシメスシテ官戎服ト器械トヲ給与シ、平常ノ衣服食料ハ自ラ之ヲ弁セシメ、農商ノ中兵役ニ堪ル者ハ拳テ其不足ヲ補ヒ、其便宜ニ從ツテ海陸二軍ニ分チ、毎道鎮台ヲ立テ之ヲ管轄セシメ、近衛府ノ如キハ毎道一大隊ヲ出シ七大隊ヲ以之ヲ守リ、一周年ヲ以交代セシメハ、在府ノ間各道ノ兵士相識面シテ兵式練練モ自ラ一至リ、朝廷ノ御氣脈モ海内ニ貫通シ、天下ノ兵モ朝廷ノ可尊ヲ知り、載上死長ノ意必ス它日ニ百倍セン、然ルトキハ兵ニ土アリ、土ニ兵アリ、地着ノ術漸ヲ以可施シテ兵農一途ニ歸スルモ亦自然ノ勢ヒニ成ルヘシ、然レハ則チ五百万石ノ禄悉ク冗物タラスシテ、之ヲ食スル者モ座食無用ノ人タルヲ免カレ、朝廷ノ厚恩ヲ載ギ、祖先ノ余光ニ浴シ、天地ノ間ニ立テ恥ルコトナカルヘシ、豈亦公私其宜キヲ得ルニ非スヤ、臣不勝冒瀆不遜之至謹取進止、

明治六年癸酉五月

小倉県士族
水島均

ラサレハ事從ハサル、自然ノ理勢故ニ、地方ノ人民ニ於テモ其名適當セサルヨリ、同省ノ発令ヲ疑惑シ、或ハ多少ノ謬誤ヲ生スル少ナシトセス、冀ハ大蔵省ノ名号ヲ改メン事ヲ、然ラサレハ将タ更ニ名実適當ノ省号ヲ付置シ、且其章程ヲ設ケ、政府ノ命令ヲ奉シ、布達スルノ体裁ニ改正シ、天下人民ノ疑ヲ解キ方向ヲ知ラシメン事、

一太政官中ニ主計寮ヲ被置、天下歳入歳出ノ大本ヲ掌ラシメ、政府常ニ金穀出納ノ多寡ヲ詳知シ、其權ヲ掌握セスンハアル可ラス、然ラサレハ万機支吾シテ基礎立(基)ス、蓋シ万国ノ政治ヲ施シ、体裁ヲ建ル、各々多少ノ差異アリト雖モ、其基礎ヲ堅クスル一般ノ通法ニシテ、動カス可カラサル処ナリ、是ヲ以テ太政官中ニ主計寮ヲ置キ、諸省府県一ト口十万円以上ノ出金アル時ハ必ス政府へ之レヲ申稟シ、許可ノ証印ヲ得テ施行シ、且ツ諸省及ヒ府県ヨリ大蔵省へ申稟スル出納記簿モ、一部ハ主計寮へ届ケサセ、更ニ規則順序ヲ設ケ、之ヲ検

査シ、譬へハ大蔵省ノ納金ハ瓊末タリトモ悉ク之レヲ届ケ、出金ニ至テハ拾万円以内ハ委任シ、専行スルヲ得ルト雖モ、月末ニ其出納記簿ヲ以テ必ス申稟スルヲ成規トナシ、諸省等亦之ニ準シ、一切大蔵省へ申稟シ、大蔵省ヨリ主計寮へ送り、許可シテ亦是ヲ大蔵省へ下スヘシ、各省等ノ内巨万ノ定額アル一ト口拾万円以上ハ必ス政府へ詳告シ、許可ヲ得テ施行スルヲ要スヘシ

按スルニ今大蔵省ニアル統計ヲ其假政府へ引移シ主計寮ノ名号ヲ付シテ可ナルヘシ、而テ政府ニ決ヲ仰カサレハ許可スルノ權アルヘカラス、則政体ノ要ナレハナリ、最主計寮、民部省ノ属ニシテ、主税寮モ双立ナキヲ得サル理ナレトモ、必竟出納ヲ分掌シタル迄ノ事ナレハ、是レヲ折衷シ、主計寮而已ヲ被置タル方、却テ区々ノ煩ヲ去リ、輕便ナランカ、乞蒙公評ノ上ニ決セラレン事ヲ、

一府県ノ長官位三四等ニ過スト雖モ、其任タルヤ土地人民ヲ保護シ、管内一切ノ事務ヲ総判スルモノナレハ、諸省ト共ニ政府ノ一部分タル言ヲ俟ス、然ルニ諸省ニ付テ一事一件ヲ問フモ是ヲ伺ヒト称シ、令ト呼ビ政府ノ命令ト聊ノ差違ナキハ如何ニソヤ、剩へ諸寮司ト雖モ亦然リ、何ソ俱ニ一部分ヲ以テ如斯ナルヤ、地方官トイヘトモ相当ノ權アルニ非サレハ、人民ノ仰望ヲ失

シ、官庁ノ威嚴ニ関ス古ハハ県官ハ朕カ耳、目トサヘ仰置ラレタリ、旧幕ノ代官
旧藩々ノ役人トハ其体裁大ニ異ナリ、然レハ政府ト諸
省諸寮司夫々行文ノ体格其差ナカル可カラス、然レト
モ追々職掌ヲ変革シ、地方官ヲ輕任ニ置クトキハ、敢
テ不可ナルナシト雖モ、現今ノ職任ニテハ行文体格改
正ナカル可カラス、今微臣政風地方ノ任ヲ辱フシ上言
此ニ及フ、嫌疑百端我レノ威福ヲ主張スルニ似タリト
雖モ、苟モ其弊ヲ知テ言ハサルハ不忠ナリ、故ニ忌諱
ヲ不憚上陳ス、冀ハ速ニ其制度ヲ確定シ、将来政府ヲ
除クノ外伺指令ト称スル名号ヲ止メラレン事ヲ、

付言、諸省府県ノ間政府布令末相往復シ、或ハ常務
ニ関スル事件ハ之レヲ輕事トシ、政府ノ命令ヲ奉シ
布達スル体裁ニ改正、各省ヘ任スヘシ、亦各管庁官ヘ
涉リ全国ニ関スル事件ハ、仮令瑣末ノ事トイヘトモ
之レヲ重事トナシ、悉皆政府ノ任ト定ムヘシ、宦省
寮ノ順序ハ則政体ノ要素本立而道生スル自然ノ理至
テ重キ事ニシテ、是レ大權ノ根元也、慎マサルヘケ

シヤ、然ラサレハ政府ノ威權立ス、從テ人民必ス多
少ノ嫌疑ヲ生シ、遂ニ遵奉スル事自カラ薄ク、従事
スル事亦随テ怠ルノ大弊ヲ生セン、之レ政体上忽ニ
スヘカラサル大意、遠邑僻陬ノ小民トイヘトモ号令
一途ノ旨ヲ誤ラス、方向一定ノ分シヲ失セサルノ要
ナレハナリ、

右一己管見恐懼ニ不堪ト雖モ、聊御参考ノ一端トモナル
ヲ得ハ幸甚々々臣政風誠恐々々頓首謹言、

明治六年五月 石川県權令 内田政風

冊子原寸 縦二八櫃 横二〇櫃 四枚

二三 筑摩県筑摩郡生野村生野克長ヨリ久光公ヘ
ノ上書 二通

勸農ト製塩官營ニ付大藏省ヘノ建白書添

〔包紙ウツ書〕

馬喰町二丁目武藏屋寄宿
生野克長伏シテ

献

大内蔵省

二〇三三ノ一

筑摩県管下信州筑摩郡下生野村生野克長再拝頓首シテ白
 ス、克長齡既ニ六十五世ニ於更ニ望ム所ナシ、只一願ア
 リ、乍併一己ノ私事ニ非ス、天下ノ治乱ニモ關係仕候儀
 ト愚察仕候ニ付、大内蔵省ニ献言ニ罷出候処、県庁ノ添
 簡無之候故御指戻ニ相成、誠ニ以テ残念至極ニ奉存候、
 左レトモ難黙止儀ト存候ニ共、詮方ナキノ所 閣下ノ英
 名天下ニ聞ヘ、野老ノ私共マテ承及候、幸ニ今般御出京
 ト承リ御旅館マテ歎願ニ罷出候間、野生ノ狂言御採用ニ
 ハ難相成候ニ共、乍恐御一覽被下、万一国家ノ実用ニモ
 可相成候ハ、其向マデ御達被下置、老夫一生ノ大願ヲ
 遂ケサセラレ候ハ、生前ノ面目此ノ上不可有候、誠惶
 誠恐頓首々々、

明治六年五月

鳥津從三位閣下
 御取次中

文書原寸 縦二四種 横三三種

生野克長



二〇三三ノ二

筑摩県管下第廿二区信濃ノ国筑摩郡下生野村百八十八番
 編戸生野克長再拝頓首シテ 監臨衙前ニ上ル、方今
 皇帝風雲ノ変ニ乗シ、丕ニ
 芸祖ノ旧園ニ復シ、英鬣林ノ如ク之ヲ翼チ之ヲ匡ケテ天
 下ノ事遺策アルコトナシ、(勿藥) 豈堯舜ノ狂言ヲ俟タンヤ、然
 ト雖モ長平生勤 王ノ微志ヲ抱キ、将サニ 国家ノ為ニ
 涓滴ノ功ヲ図ラントス、不幸齡既ニ虞淵ニ迫リ黙之地ニ
 入ニ忍ヒズ、僭越ノ罪ヲ犯シ伏シテ野芹ヲ献ス、蓋シ
 国家ノ政農ト兵トヨリ急ナルハナシ、而兵ニ比スレバ農
 尤モ急タリ、 国家ニ主タル者其尤急ナル者ニ於テ意ヲ
 刻セサル可カラズ、苟モ将サニ意ヲ刻セントセハ、
 祖宗ノ典章ヲ考ヘ申スルニ欧欧羅巴・阿阿細亞
 制ヲ以テスルニ若クハ莫シ、夫レ
 祖宗ノ典章ハ古ノ良法ナリ、然ト雖モ古今時ヲ殊ニスル
 トキハ其迹ニ泥マズ、特トニ其意ヲ取ラン爾、欧阿兩亞
 ノ制又良法アリ、然ト雖モ風土宜ヲ殊ニスルトキハ、其

形ニ拘ハラズ其意ヲ取ラン爾、蓋シ其意皆斯民ヲシテ其産業ヲ失ハサラ使ムルニ過キサレ而已、苟モ其産業ヲ失ヘハ、厚心者化シテ無頼トナリ、狡者變シテ兇客トナリ、以テ姦雄ノ招嘯ニ応ス、陳吳東ニ嘯ケハ東ニ応シ、黃李西ニ招ケハ西ニ和シ、其和影響ヨリ捷カナリ、於是乎土崩ノ勢ヒ將サニ成ラントス、國家ニ主タル者、其未タ成ラサルニ先ツテ之カ備ヲ成サ、ル可カラズ、之ニ備フルノ術、斯ノ民ヲシテ恒ニ産業ヲ失ハサラ使ムルニ若クハ莫キ也、然ラハ則チ其産業ヲ制セサル可カラズ、之ヲ制セントセハ、

祖宗ノ典章ニ考ヘ加ルニ歐阿西亞ノ制ヲ以テシテ、租庸調ノ額ヲ定メザル可カラズ、

祖宗田租ヲ制スルノ法先ツ其田ノ広狭ヲ計ル、蓋方八尺ヲ步トナシ、步三十六ヲ畝トナシ、畝十ヲ段トナシ、段十ヲ町トナシ、又其埴墟墳壤ヲ檢シ、或ハ上トナシ、或ハ中トナシ、或ハ下トナシ、下々トナシ、以テ其準則ヲ定メ、於是乎家長ニ授クルニ一町ヲ以テシ、余丁ニ授ク

ルニ二段ヲ以テシ、段ニ就テ実ヲ収メ、春テ二石ヲ得、其租ハ一斗二升此大約十五ニシテ一ヲ取ル也、此租稅ノ外別ニ調役庸役アレハ十二ニシテ大、或ハ癘疫ニ値フヤ之ヲ除キ、或ハ饑荒ニ約一ヲ取ノ額ナリ、

值フヤ之ヲ除キ而、螟蝗ハ之ヲ蠲キ逋欠ハ之ヲ免シ、以テ民ト憂樂ヲ同フス、此レ

祖宗田租ノ額ヲ然トス、又其庸調ノ額ヲ考ルニ、民ノ庸ニ服スル一歳一日ニ過キズ、或ハ故アリ、服セサレハ之ヲ庸布ニ折ス、庸布八十丁ヲ累テ一端ヲ成シ、調布ハ四丁ヲ累テ一端ヲ成ス、且庸三十日ニ過レハ租ト調トヲ并セテ之ヲ蠲キ、以テ農ト甘苦ヲ同フス、此

祖宗庸調ノ額ヲ然トス、其意ニ以為ヲ如是ナラサレハ、斯民ヲシテ恒ニ産業ヲ失ハサラ使ムルコト能ハサレハ也、方今幸ニ廟堂其人ニ乏シカラズ、幕府ヲ廢シ、藩國ヲ除キ、其城隍ヲ夷シ、其養兵ヲ省キ、其修繕宴遊ノ厚費ヲ減ズ、是ノ時ニ及ンデ

祖宗ノ典章ニ考ヘ、方今ノ時宜ヲ摺ミ民ノ産業ヲ定メ、土崩ノ患ニ備ヘズシテ、座ナカラ其患ヲ後世子孫ニ貽ル

ハ、恐クハ万世ニ 帝王ノ良策ニ非ル也、然ト雖モ方今
 武弁負債ノ後ヲ受ケ、已ムヲ得サルノ償アリ、已ムヲ得
 サルノ費用アルトキハ之方法ヲ設ケサル可カラズ、吾レ
 窃ニ其法ヲ考ルニ、今ヨリ以後天下ノ私塩ヲ禁シ、官売
 ノ法ヲ立テハ、長元采山國ノ人ト雖モ故トノ加州ニテ郷校ヲ設ケン
 時、其教師ニ招カレ、其校沿海ニ近シ、因テ煎塩ノ事
 ヲ見、煎塩ノ法ヲ問、其詳ナルコトハ尽サスト雖モ、其大略ヲ聞ケリ、
 塩貨ニニアリ、席包アリ、薦包アリ、席包ハ其価大約七八錢、此ヲ小
 俵ト云、薦包一其価十五六錢、此ヲ大俵ト云、陸運遠キ処大俵一其
 円五六十錢、尤遠キ処一円八九十錢、其価一ナラスト雖モ大約如此、自
 今以後官塩ノ法ヲ設ケハ一年ノ輸入、則チ已ムヲ得サルノ費用
 スル塩貨ノ価大概五六百万円ナラン、 則チ已ムヲ得サルノ費用
 アリト雖モ何ソ患シヤ、何トナレハ今天下ノ塩貨二三
 千万苞ニ減セズ、毎戸其人口ノ多少ヲ均フシテ、一歳大
 約二苞ニ減セズ、每苞其価十五六錢、二苞ハ其価半円、
 一百戸ナレハ其価五十円、一千戸ナレハ五百円、一万戸
 ナレハ五千万円、十万戸ナレハ五百万円、一百万戸ナレハ五
 十万円、千万戸ナレハ五百万円、之ヲ推シテ二三千万戸
 ニ至レハ一千七八百万円トナラン、之ヲ分テ二トナシ、
 一ハ竈戸竈丁ノ口糧屨錢及ヒ竈器・竈薪等ノ費用ニ充テ、
 其一ハ之ヲ官ニ輸入セハ、大約八九百万円ニ減セズ、之

ヲ用テ農ヨリ出ス攸ノ庁費ニ易ヘ、以テ勸農ノ政ヲ修ム
 ルト雖モ、国用豈ニ足ラサルヲ患シヤ、且ツ夫レ国用ハ貨
 幣ヲ急トスト雖モ又貨幣ヨリ太タ急ナル者アリ、米粟是
 ナリ、何ゾヤ貨幣ハ人造ナリ、米粟ハ天造ナリ、人造ハ
 大権ヲ握ル者云、凡百万ト雖モ立トコロニ弁ス可シ、天
 造ニ至リテハ忽チ数年ノ饑荒ニ値ハ、大権ニ乗ル者ト
 雖モ之ヲ奈何トモスルコト能ハズ、然リ而シテ之ヲ奈何
 ントモス可カラサルニ托セズシテ、人事ヲ尽シテ之ヲ助
 ケサル可カラズ、之ヲ助クル必ス農ニ由ル、然レトモ世
 ノ伶俐ナル者大抵農ヲ去リテ商ニ帰ス、豈故无カラシヤ、
 商ハ膏粱ヲ食ヒ、烟管ヲ弄シ、一朝ニシテ農一年カ耕ス
 ル攸ノ利ヲ得、農ハ鶉衣ヲ着シ、若熱ヲ忍ヒ、一年カ耕
 スル攸ハ商一朝ノ利ニ如カズ、此レ世ノ痴鈍ナル者ニ非
 レハ、誰カ農ヲ守ランヤ、然ルニ其課稅商ト同フセハ、
 農何ヲ以テ之ニ堪シヤ、既ニ堪ヘザレバ農ヲ去者累々其
 迹ヲ繼キ、田野日々ニ業蕪シテ米粟漸ク減シ、天下ノ口
 ニ給スルニ足ラズ、之ニ因ルニ饑荒ヲ以テセハ、百万ノ

貨幣ヲ以テ一升米ニ質ント欲スルモ天下糶売スル者ナク、茫然手ヲ束ネテ餓死ニ至ル、於是乎商ノ末タリ農ノ本タルヲ知ル、 國家ニ主タル者、乞フ幸ニ其本タルヲ察シ、以テ田価百分二ノ本租ヲ税シ、上件官塩ノ輸入ヲ以テ百分一ノ斤費ノ税ニ易ヘ、以テ勸農ノ意ヲ寓シ、以テ天下ノ税額ヲ定メ、天下ノ蒼生ヲシテ恒ニ其産業ヲ失ハサラ使メバ、其レ愿者ハ無頼ヲ免レ、狡者ハ兇客ヲ免レ、四海永ク 國家ノ徳沢ヲ蒙ルニ庶幾ラン、今長年既ニ六十有五斯ノ世ニ於テ更ニ希望スル攸ナシ、然ルニ卑陋ヲ顧ミズ僭越ノ罪ヲ犯シ、敢テ狂言ヲ獻スル者聊カ以テ勤王ノ微志ヲ表スル而已、若シ夫僭越ノ罪ハ自ラ逃ル、攸ナキヲ知り、則詳ニ貫址及今寄寓スル攸ノ処ヲ記シテ、謹テ 監臨ノ決放ヲ候ス、

明治六年五月上澣

生野克長



冊子原寸

縦 二四種

包紙原寸

縦 二四種

横 一六・五種 五枚

横 二五・七種

二〇〇 某氏(彰) ヨリ久光公へ

詩二首

〔朱〕

権機進取豈無時 唾恨英雄果斷達

高揭日捨五洲裏 初知東海有男兒

壯士何能事猿公 操觚地必老雕厓

平生解詭項王紀 書劍不成亦英雄

世無識生者所抱經略不能一施用之悶々作此詩同我胃壞

者于古唾洛陽少季耳

癸酉五月 彰

〔朱〕

文書原寸 縦三一・八種 横一一三種

二〇一 久光公へノ口上手控

論書ヲ下サレンコトヲ請フ

口上手控

此節就

御上京は、

朝廷之 御殊遇古今未曾有之 御会釈被為在、誠ニ恐縮
之至、別而難有奉存候処、已ニ

御下問茂被為在候得共、未

御趣意被行候時宜ニ茂到兼、日夜伏而願仰而奉祈、実ニ

寢食を不安次第ニ而御邸中皆々謹慎仕、殊更御随行人數
無余儀御差下ニ相成候上は、何れ茂心得可仕時節ニ御座

候処、問ニは外方江遊興等相催候茂有之由伝知リ申候、

右様之振舞有之候而は、

御趣意奉戴仕候儀薄方ニ相見得、為天下致力抔と申茂

不釣合之行跡ニ罷成、脇方所見茂御為不宜方ニ茂相当候

半と奉恐察候、因而近頃恐至極奉存候得共、

御書取を以 御滞京中は御邸中屹と念入候様、

御賢慮之程被 仰達被下候は、皆共相慎、彼不羈之者共

ニ於而茂指差候廉茂有御座間敷、若哉此上相募候而は不

可然儀と奉存、伏而此段奉願上候、誠恐誠惶頓首謹言、

文書原寸 縦一七・八種 横七五・八種

二〇三 小河一敏ヨリ久光公へ

君徳培養其他ノ件

(包紙ウツ書)
「愚衷」

一万機 御親裁被遊候様君徳培養し奉候義緊要ニ候事、

付り皇族之公達御そたち方之事、

一華士族之禄制を立て、廉恥を養ひ税法を改めて民心を安

んし、上は下を愛し、下は上を慕ひ奉る様国体を可被

立事、

一神祇官を再興して敬神の実を尽され、教化も学事も爰

に基き、扱大ニ史を編て国体より沿革を万世に被伝候

事、

右委細は筆継ニ不尺候、

謹言、

五月

一敏

文書原寸 縦一六・七種 包紙原寸 縦二四・五種

横五一・三種

横 三四種

二〇三 折田年秀等ヨリ朝廷へノ建言

湊川神社遙拝祠壇ヲ東京ニ設クルノ議

(表紙)
「上」

湊川神社遙拝祠壇ヲ構營スル募勸ノ記

夫以ミルニ贈三位中将楠公湊川神社遙拝祠壇ヲ造建
セント欲スル意趣ハ、方今

朝廷維新ノ政ヲ布キ、更張ノ

令ヲ行ヒ、絶ヲ継キ廢ヲ興ス、因テ楠公ニ湊川神社
ノ号ヲ

勅シテ、辱クモ之ヲ永世ノ 祀典ニ列セラル、深仁厚沢
ノ天下蒼生ヲ

嘉惠スル者其レ亦至レリ矣、豈感戴セサル可ンヤ、
抑楠公元弘ノ古ニ当テ忠魂貫日義胆蓋世其偉業鴻蹟
遍ク人口ニ膾炙スル所ナレハ、更ニ茲ニ贅セス、伏
惟ルニ湊川ノ地、山河隔絶路程曠遠ニシテ、東北諸
邦ノ人士有志ノ輩ト雖モ詣祠ニ便ナラス、是以年秀

等同志相商テ、乃

官ニ奏シ、楠公遙拝祠壇ヲ

東京

鞆鞆ノ地ニ造建シ、併セテ延元以来忠臣烈士勳

王殉

國ノ名位ヲ存シテ、茲祠ニ配供セント欲ス、凡此地
ニ詣スルモノ、貪夫モ廉ニ懦夫モ志ヲ立テ心正ク身
修ルトキハ、上忠烈ノ節ヲ存シ、下覬覦ノ行ヲ絶ス、
其人道世教ニ於テ未必裨益ナシト謂可ラス、是年秀
等区々ノ赤心、

國恩ノ万一ヲ下ニ報セント欲スルノ寸悃ナリト雖モ、
社壇ノ造建ハ費用洪濶ニシテ、一人一家ノ克ク弁ス
ヘキニ非ス、伏冀クハ有志ノ諸君子同心協力シテ、
貲財ノ多寡ヲ論セス各位贖金ヲ以テ此祠ノ全ク落成
センコトヲ、異日土木一新經營燦然士民輻輳神威赫
々トシテ千万世ニ照映センハ、年秀等深ク懇祈スル
所ナリト云爾、

明治六年五月

湊川神社遙拝祠壇構宮幹事折田年秀

同

副幹事誰某

冊子原寸 縦二七・七櫃 横二〇櫃 五枚

三六 斎藤貞蔵ヨリ「大機」ト題シテ久光公へノ

建言

(表紙)
「大機」

微臣斎藤貞蔵謹而別段機密奉申上候、抑 尊藩之御儀
ハ御一新之御首唱ニ而天下之元功ニ被成御座、霸府代
々之偷權を御破却被遊、千歳之

皇威と御再復之御依頼ニ被為入候処、御征討御一定之上
億兆治安之御基本可被為建機會ニ御臨み、小松殿初御
太功之方々諸藩之流言小嫌疑ニ被成御拘泥、御一新之
御成功(を)と無学凡庸之諸藩江被成御讓、不容易御大政を
擲ち候如くニ御帰国御傍觀被為在候間ニ、元徳川家江

攘夷之儀御殿責被為有、倒幕之論相立候御趣意と頃刻
之間ニ相違仕、意外ニ西洋ニ御親睦ニ而

龍顔迄拝許被仰付、禁中之躰迄取払、板敷胡床ニ被成、
革履ニ而昇殿し、日本服ハ糞土の如く、胡服を以礼服
と存し、官員ハ国服ニ洋製之帽履を着し、古画ニ画く
所の鶴鳥の如き醜体を極め、意氣揚々として洋人ニ摸
擬し、加之万品悉く無税之物無之、洋政ニ改革之諸省、
皆教師と唱へ夷人を廟堂之上ニ請待し、堂々たる神州
古昔

応仁天皇御賢明之御身を以、宇宙ニ卓立被為在之御国体
被為建候徳行法言法服を被為棄候ニ至り候段、

主上之御不孝極り候上、線道鉄道其外土木無限洋製之御
建築莫大ニ御造営ニ相成、旧堅を破り新弱を増而已な
らず、乍恐入を計り出すを為すの算不相当ニ而、生財
之大道不相立、追々御国債而已被為嵩、終ニ不遠歳幣
を外国江御輸出ニ可被為至、譬へハ勞瘵病者ニ美妾を
多人數与へ候と同様ニ而乍立斃れ候如くに相成候間、

何程賢明途ニ当り候共如何共為し難く相成候ハ、眼前ニ而是皆夷人の預謀ニし而、不戦して手ニ唾きして日本を所有とする之術中之処、無類之凡愚真只中其計中ニ落入候段、悲痛堪兼候余リ、西郷殿御在国中より数度建言仕、御出京御任職後も数通建白仕候得共一切御答無之、国家益日々々々ニ尺弊、此僕ニ而は即太病人ニ毒ニ成候品而已饗業と申、更ニ不与して空敷死を待候如くと日夜愁涙罷在候処、不計 御西幸中、

殿下御建言被遊候御文意奉拜見候処、一々ニ御憂国之尊慮紙表ニ溢れ、時弊ニ的し御尤至極之御儀一句之間然ニ無之奉感服候、如此ニ而こそ 御国威も 御国体も御両国家治安之御恢復之真と可申上と大渴望申上居候処、昨年十一月中和田八之進殿御出京ニ而、從天朝度々被為召候御儀も西郷殿御迎同様御帰国之儀も奉伺、不遠御出京可被遊筈と日々夜々屈指御待奉申上居候処、漸去月廿三日御入京被遊御座、幾万之士庶人心ある者知ると知ざると、満京旱天ニ雲霓を仰き候心

地ニ而、此国政御立直りを大染ミニ奉存候程之処、御着京以来已ニ半月余ニ相及候処、今以何等之御登庸之命不被為有候哉ニ奉伺、幾万人歎息落胆申上居候由、誠ニ以痛神千万ニ奉存候、昨年以来度々

勅命を以被為召候儀ニ候得ハ、御着早々御擢用之御降命可被為有筈之処、斯迄御因循日を涉り不急御下問等ニ而猶又延日之計と被疑一日延候得ハ、一日之御費政御弊書を増候、不容易急危之御時節柄、乍恐

宸意擁蔽仕候奸人有之、賢を拒ミ、

皇国之存亡を度外ニ置き、洋人ニ国を売候大奸魁共、

主上を強誣申上候儀と奉存候、無上之御国害ニ而如此、

又数日を経過仕候ハ、天下之人心益失望解体仕、乍恐尊名御誠忠迄茂奉穢候ニ至り可申と何共遺憾憤涙千万ニ奉存候間、此上ハ可然人物御撰ミ、相公閣下ハ御立面ニ而温言中敵勇を韜ミ危急之御内情被為述候御方と奉存候、右ニ而も大奸不相退御政体擁蔽仕候ハ、不得止候間、御臣下知弁と沈勇之士已七輩御撰御ケ条書を

以擁蔽之次第御敵重被仰立、天下危急存亡之機會一寸

茂難致猶予候間、相公閣下御採用無之候ハ、天下之

兵権を以 君側之奸を払、沃夷を肅清し、国家を富嶽

の安ニ置候事御当然之儀と奉存候、是ハ宋之大忠臣岳

飛・李綱之両公百万之兵権を握り居候得共、大奸臣秦

檜・賈似道之讒奸之為ニ終ニ死を送り候を微臣愚之を

論候而、何者共君側を清ふする之軍を以ニ奸を誅し、

更ニ賢良を撰て宋之社稷を輔候ハ、是宋祚を永くす

る也、計是ニ出ずして空敷奸賊之手ニ死す而已ならず、

宋祚も亦随而亡候ハ、両相股史ニ似て却而大不忠ニ相

成候と論し候と一揆ニ而

殿下も亦、右大奸売国之輩之為ニ擁蔽せられ、尊詩之

群言何破丈夫腸之御句不被為貫而已ならず、

皇国ハ洋夷之所有ニ相成候ハ全く此一策果すと否之間ニ

御座候、是即

皇国之社稷ニ替候大権道ニ而、所謂君輕社稷重矣之金言

御反覆御沈思被遊、国家存亡之大関節ニ御座候間、御

勇決被遊御処置之程奉泣血懇願候、誠惶稽首、

明治六年癸酉巳月 齊藤貞蔵再拜

上 殿下 侍史御中

冊子原寸 縦二四・七釐 横一七・三釐 六枚

三三 加藤熙ノ「復明密議」及久光公十四ヶ条建言

解釈

三冊

二〇三九ノ一

〔表紙〕
「復命密議」

目次

一至尊御学問ノ事

一立国本振紀綱事

第一文部教部

第二守戦国力

第三人材公撰

第四養老恤孤

第五制度典章

第六議典礼

第七論風俗

第八正風化

一詳量出納事

第一厭土木費

第二封建郡県改正兵賦

第三軍艦活用

一慎選人材事

一謹外国交際審可弁彼是之分事

付外国交際

一振興兵氣正軍律事

付武芸復古ノ事

一定服制事

一遠利慾重節義

一嚴禁淫乱明男女別事

一明貴賤之分事

一慎讞獄正賞罰事

一正學術事

第一建大小学大小教院

第二議教導職

第三論外教

復明密議

一至尊御學問之事

乍恐

天子ノ御起居ハ古書ニ第一御文学、第二和歌、第三

ニ管絃ト相見、何レ茂君徳ヲ崇脩シ玉フ、大道ヲ学

バセ玉フ、臣民百工輩ノ一才一芸等ヲ以テ天職ニ供

スル脩業トハ格別ノ御事ニ候、尤御文学ノ事ハ当今

皇漢洋仏ト宇内ニ並行ハレ候得共、仏学ノ事ハ古今

往々定論茂有之候得バ今更事新シク論スルニモ不及

候、尤

天子ノ学ト申スハ皇極ヲ建玉フ大道ニテ、既ニ乍恐

後醍醐天皇様迄ハ 神代ヨリ人皇

御歴代様御伝説 先王ノ御神秘ニテ、御一定被為在候事故、是ハ三器宝範ニ相讓申候、迺モ私説杜撰ノ所及ニ無之、尚又畏クモ可容喙事ニハ無御座候、尤神典之内古事記・旧事紀及六国史、聖經ニテハ四書六經・左国史漢等ハ必御研精被為在度奉存候、

一立国本張紀綱事

紀綱ハ多端ニハ御座候得共、皆皇極中ヨリ出テ民極トナリ候事、即国本紀綱ニテ国ノ本ノ立ト不立トハ乍恐皇極ニ在リ、紀綱ノ張ルト不張トハ百官宰相ノ任也、乍併皇極ヲ儼然建サセ玉ヒバ百官其任ニ不堪事ハ無之、百官其任ニサヘ堪候ハ、紀綱ノ不振事ハ決テ無之候得共、又五大洲中ノ大形勢粗方寸中ニ見通シ居不申候得ハ、決シテ奉扶皇極、百官其任ニ堪ヘ紀綱ヲ振フニ至リ候事ハ難相成義ニテ、天下ノ大事是ヨリ大ナルハ無之候、乍併其大略ヲ論候ニ其目如左、

第一文部・教部ノ大典ヲ御一定可被為在候事

万民ノ方向ヲ定メ神典興没等総而此中ニ具ス、是礼楽征伐是ヨリ出、国家富強ノ大本是ヨリ出ル程ナルニ、只今文部ト教部ト反对シ、又文部・教部ト地方官ト相反シ、又祭政ト矛盾一ナラス、文教果シテ国家ノ大典ヲ一定スルコト不能、是政教ノ一ナラザル所以説詳カニ下文ニ具ス、

第二守戦ノ国力ヲ可培養事

将略武事ニ鍊磨博通ノ士ヲ撰ンデ隣好ヲ厚フシ、外交ヲ通スルノ類此内ニ具ス、説詳于下文ニ、
第三議院ノ人材ヲ公撰シ、大開言語一候事

議員ハ翰林学士諫議大夫ヲ兼テ、博学雄才ニシテ大道ニ通ジ、典章文物ヲ考究シ、聊私心ナキ者ナラズンバ其任ニ堪不申、却テ四方ノ言路ヲ壅塞シテ、上下ノ情実隔蔽致候様可相成申候事、
第四養老恤孤ノ大典ヲ拳ケ鰥寡獨廢疾ノ者養生送死可令無遺憾事

於ニ大教院ニ華士族六十以上ヨリ養老ノ大礼ヲ行、
天下ノ耳目ヲ一新、教導ノ大義ヲ可レ給_レ為_レ示
事、右入費ハ富豪有志ノ者ヘモ子メ献資可被命
候、是ハ天下ノ子弟ヲ以テ天下ノ高老ヲ養フ。大
義ヲ明ニス可キ訳ニ御座候、

第五定ニ制度ニ以明ニ典章文物事

制度ハ大体ヲ昭ニシテ細碎ナラズ、典章文物ハ
簡易質素ニシテ小民ニ至ル迄從ヒ易ク習ヒ易ク、
窮屈ナルコトナク、情実適宜ニシテ苛刻繁縟ナ
ラズ、鹵莽ナラズ、上下貴賤ヲ弁シテ倫理綱常
粲然トシテ乱レサルヲ要トス、尤万民ヲシテ樂
ンデ是ニ赴キ、好ンデ是ヲ服事スル時措ノ宜ニ
有リ、一朝夕ニ万事改革スルコトハ却テ其弊ニ
不堪、昏乱ノ基タリ、徒ニ民情ヲ失ヒ、許多ノ
空費ニ困却スルノミ、小人ニシテ功利ヲ貪ル者
毎ニ此癖アリ、去ハ制度ヲ定ムルコトハ只大礼
ト大樂ノ主意ヲ不失、質実ニシテ鼓舞作興ノ大

本ヲ立ルニ在リ、

第六議典礼

祭典神樂ノ類實ニ神代以来ノ礼俗、粲然タルハ
冠昏喪祭頗ル明備被為在候処、是ニ加フルニ唐
虞三代ノ盛典ヲ以テシ、善ヲ尽シ美ヲ尽シ玉フ
列聖御古伝ノ御盛旨可被為在候処、方今礼樂ナ
ド申ス事ハ一概ニ漢土ノ物ト称シテ排斥スル一
種ノ邪説モ有之、又礼樂ハ胡部モアリ、夷俗モ
アリテ、天竺ハ天竺ノ服飾文物アリテ、人タル
者ハ一日モ欠ク不レ可事ヲ不知、只滔滔トシテ日
ニ幽谷ニ陥リ、遂ニ倫理綱常ヲ破テ獸蹄鳥迹_(マヤ)中
国ニ交ルニ至ル、當時当路ノ士如何ンゾ其責ヲ
天下後世ニ免レンヤ、其身スラ富貴ヲ永保シテ、
天怒神譴ヲ逃ル、事難カルヘシ、雖然移風易俗
礼樂ノ大典ニ至リテハ、縱令雖ニ周公再出、二三
年ニシテ天下ニ施行セシムルコトハナカルヘシ、
先学校教院ヲ速カニ御成功アツテ、盛大ニ先是

ガ地ヲ為スニ在リ、

第七論風俗

朝廷ニテ被行來候年中行事等ノ内、仏名灌仏仁王会等ノ事、竺俗ニ遵ヒ玉フ事ハ已ニ御廢禁ニテ、実ニ可然、又天長節等ノ大賀ヲ全国ニ為行玉フ事ハ、洋俗ニ因ルトイヘトモ、是又実ニ

御美事ト云ベク、伊勢并ニ柏原帝・先帝等ノ御遥拜所ヲ上下一致ニ為行玉フ事ハ勿論、曠世ノ御美事、乍併上下共

神州ハ旧俗ヲ概廢シ、七草・上巳・端午・重陽宴等ヲ廢禁シ玉フ事ハ、繁縟空費ヲ省キ玉フ最好シ、是ガ為ニ告朔ノ餼羊ヲ廢スレバ、億兆誠敬ノ意ヲ薄フシ、歛樂ノ下情ヲ遏仰シ、民志ニモ相悖リ可レ申ト奉存候、

第八正風化

雜劇豊後長歌・浄琉璃之類教部ニ管轄被仰付候は、尤知本之御美事トハ乍申、未タ教部ニ於テ

一詳量出納富強ノ実効ヲ可奏事

移風移俗之典礼雅楽ヲ興シ玉フ事ヲ不聞、是本ヲ失シテ末派ヲ制スル之義ニシテ、如何ニ茂大本ヲ失候事ニ奉存候、典礼雅楽ヲサヘ御興浮被遊候ハ、捨置候而も下々ノ士風民俗ハ自然ニ風化、草ノ偃カ如ニ可有御座事ニ候、

夫王政王道富庶教ノ実ハ、凡億兆飢寒ノ患ヨリ切ナルハナシ、又養生喪死憾無ラシムルヨリ大ナル仁徳ハナシ、是ハ蕭何・曹參其人ニテ、周武ノ初政ニ太公望干戈ヲ収メテ、自ラ九府ノ圜法ヲ建テ、天下金穀ノ基ヲ成スハ是ナリ、尤其人公平廉直忠実ニシテ、井田税法等ニ明カニ、海外万国ノ政体ニ通スル者ニ非レハ、其任ニ堪間鋪ハ勿論、四海ノ安危ハ万民ノ向背ニ在リ、万民ノ向背ハ安富ト困窮ニ因ル可畏ノ極ナリ、尤輕租薄歛ノ基ヲ定メ、儉素適宜ノ良法ヲ建テ、万民ト其憂樂ヲ同フスルニ至ツテハ、泚モ筆紙ノ及所ニ非ス、其人ニ存スルノミ、然シ強テ其説

ヲ問ハム、豈良策無シヤ、

第一土木ノ費ヲ可_レ厭事

当今土木第一ノ御費用ハ、尤鉄道ヨリ大ナルハ無シ、先横浜迄ノ御開キニテ、篤ト御試ノ上北奥南筑ニモ可被及ハ可然候得共、木曾道中及仲仙道筋ヨリ東海道ハ先馬車道或ハ人力車位ニテモ可然、其他道路ノ掃治道普請尤精々為仕、壮大ナル土木ハ成丈ケ御見合ニテ、追々御国用御備相立候上ニテ可然、一樓閣ノ費百万両ヲ散ンテ百万両ヲ以テ閭巷ノ小屋千万軒ヲ開キ、窮民貧商ノ風雨ヲ凌ガセ安眠ヲ得セシメバ其恩惠幾百倍ナラン、兎角虚飾ヲ省ヒテ実惠ヲ施スヘク、試ニ其一端ヲ奉ルニ、今煉火石間マダシ口二三間ニテ千金ノ土木ヲ費スヲ、千金ニテ雑ト長屋ヲ二十軒前モ造リ、是ヲ貧商ニ借与スレバ、是一家ノ土木ヲ分ツテ二十軒ノ貧商ヲ救フ也、且一人ノ二間々口ノ屋税ヲ廿軒ヨリ納レバ其多少得失又

同日ノ論ニ非ルナリ、尤外國人ヨリ御国用ノ有無ニ拘ハラズ、妄リニ土木ヲ用ヒ雜居民便等ヲ

口実ニ勸誘スル者一切拒絶シテ万国ノ公法ニ從フヘシ、有_レ限ノ財ヲ以テ彼ガ無限ノ求メ望ミニ任セナバ、宋末ノ歳幣ト均シクサヘ国害國ヲ傾ケテ、是ニ与フルニシカズ、

第二封建郡県ノ説并改正兵賦以省冗費事

凡封建郡県ノ説其得失ヲ論スルニ、皆死論ナリ、何レニテモ天下ヲ治ルハ人心ノ向背ニ関ハリ候事ニテ、封建ニテモ人心ヲ失ヒ、郡県ニテモ人心ヲ失ヒ候テハ、逆モ太平富強ノ基ヲ開キ永ク上下ノ安眠ヲ得ルコトナシ、又人心ヲサヘ得候時ハ、封建郡県何ノ差別カアラン、第一御一新ノ初メ天下諸藩ノ人心ヲ御取失被為遊、故ニ藩屏ハ藩屏タラス、干城ノ士ハ干城ナラズ、遂ニ朝廷ト諸藩ト矛盾、官員ト藩士ト隔蔽ニ相成リ、御威光ヲ以テ一時ニ郡県ニ御変改被為在候処、

旧知事ハ座而大禄土モ亦座食シテ怨誘スルノミ、或ハ旧禄削奪、天下ノ群士飢寒ヲ憤ルニ至ラハ、仁義ノ道、王政ノ御恵ミ何クニアルヤ、又抑封建ヲ廢スルヤ、天下ノ大利ヲ朝廷ニ専ラ集メント欲シテ、却テ諸藩ノ国債ヲノミ皆、朝廷ニ集ルニ至ル、夫諸藩ノ負債是ヲ諸藩ニ散シテ受負トスレバ、其急患少クシテ、諸藩奮発相競フテ儉節勉強セザルヲ得ズ、是ヲ朝廷ニ集レバ内外ノ負債急患山ノ如クニシテ、群吏手ヲ束ルヨリ策ナキニ至ル、是朝廷利ヲ求メテ反テ弊害ヲ求ル也、凡天下ノ迂策是ヨリ大ナルハナシ、然ラバ刺史県令各諸藩ニ代ツテ其国債ヲ分チ、其貢税ヲ能納ムルヤ否ト云ニ、諸県ノ力ヲ自ラ奮発勉強スル者又希ナルベシ、然カシテ而国家ノ兵備ハ一日モ欠ク不可、因テ水陸ノ軍備一千万金ニ至ル、是天下ノ藩士ヲ二重ニ禄養スルハ弊ヘニシテ、其極不練ノ兵、烏合ノ卒果シ

テ実戦実備ノ精兵タルヲ得ルヤ否、是亦不問シテ其迂ヲ知ル、今試ニ此兵備ヲ散ズレバ、忽チ一千万金ノ儉約ニシテ、天下ノ大費ヲ省ク、是ヨリ大ナルハ無ル可シ、是郡県ノ弊ヲ除ク也、問、然則又何者ヲ以テ国家一日モ欠ク可カラザルノ兵備ヲ成サン、曰、今五六百万石ヲ与フル家禄ノアル旧藩士ノ内ヨリ、丁壮ノ士ヲ撰ンデ、是ヲ用ヒバ薩長土三大藩ノ旧土族ヲ撰ミ用テモ粗余リアラントス、是郡県ノ制ヲ存シテ旧藩主ノ利権ヲ与ヘズ、旧封建ノ藩士ヲ御シテ郡県烏合ノ兵費ヲ省ク也、今新集ノ兵ヲ農ニ就カシメバ、千万両ノ費ヲ省ヒテ千万両ノ貢税ヲ納ル、ニ至ラン、然而土族ノ老幼病弱ヲ休メテ丁壮精英ノ士ヲ擢ンデ、農中ヨリハ丁壮ノ者自踊躍シテ出兵ヲ願フ者ノミヲ簡点シテ、兵籍ニ編入セバ、ヤハリ天下ノ精銳ハ皆朝廷ニ集ルニ至ル、凡天下富強ノ策是ヨリ大ナルハナカルベシ、是

急ニ大蔵ノ派出千万兩ヲ填補シテ、却テ千万兩ノ貢税ヲ収ムルニ至ル、其得失熟考セザルヘケシヤ、是日本国中世禄ノ士ヲ一度ハ抑ヘ一度ハ揚ゲ、再イカシテ是ヲ使フ、真ノ活用ヲナス、是也、今ヤ飢寒ニ迫ラントスルノ士族ヲシテ、一時ニ世禄ノ恩義ヲ感戴セシム誰カ踴躍シテ義勇ヲ厲ンデ進マサル者ヤアラン、真ノ御楯、真ノ皇軍タラシコト、一反掌ノ間ニ在ツテ、出入二千万兩ノ得失アラシコト、豈又奇ナラズヤ、是上ニ一千万金ノ利ヲ収メテ、下億兆ノ心服喜隨スル、抑亦不レ奇哉、是全ク吾奇策詭道ニ非ズ、昼夜世禄ノ群士飢寒ヲ訴フル見聞ニ不レ忍シテ、本願積慮飢寒ヲ救フ一念ヨリシテ出ル所ノ定算、初テ忠恕而已矣ノ一句今眼前ニ大奇効アルヲ知ル、雖レ不レ珍弥 神聖 皇太神宮及孔子ノ難レ有ヲ知ル、苟モ今天下ノ世禄億兆士ノ飢寒ニ迫ルヲ傍觀シテ、良農億万ノ干戈塗炭

ニ苦マントスルヲ救ハズンバ、豈人心アル者ト云シヤ、

第三兵艦ヲ運漕ニ活用シテ巨大ノ国益ヲ開ク事

今日兵部及府県ニ属スル蒸氣船并ニ御用船ナド称スル者、唯平日無用ノ兵士ヲノセ、無用ノ閑事ニ往来ノ炭油ヲ費ス、何ンノ益カアラン、況シヤ海軍水師ハ実地ニ狂瀾怒濤之間ニ出没往来シテ屢測量訓練スルニアリ、又ハ捕鯨ノ実地ニ試ルモ又可ナリ、是平日常備内ヨリ遠海運漕ハ多ク官船ヲ用テシ、舟子船卒ハ専水陸常備ノ兵ヲ活用シテ、商旅遠客ノ為メニ大運漕ヲヒラキ、上下共ニ便利ヲ得テ四方ノ消息ヲ通シ、四方ノ有無ヲ交易セシメ、其通利四海ニ徧カラシニハ何ソ鉄道馬車ノ力ヲ頼マン、其租入モ又幾巨万ヲ得玉フベシ、是又愚積年ノ持論刻苦中ニ得ル所、今日初テ是ヲ唱ルニ非ズ、

一 慎選人材事

嗚呼、人材之難^レ知堯舜^{ヤム}病^{ヤム}諸^ツ人材之難^レ得禹湯患^レ之、
 談固^ニ不^ニ容易^{ナラ}、強^テ論候へバ、先汝ガ能知ル所ヲ
 奉テ公平私ナク、其長ヲ稱メ其短ヲ不^レ責、其善ヲ
 揚ゲテ其惡ヲ隱サバ天下ニ棄才ナカルベシ、苟モ娼
 疾ノ一念ヲ不^レ免ト、却テ其短ヲ挙テ其長ヲ蔽ヒ、
 其過失ヲ揚ゲテ其衆善ヲ隱サバ天下ニ善人ナカルヘ
 シ、然人材難^レ得、姑ク当路ノ黨議ヲ廢メ、閑散遺逸
 ノ高士ヲ挙ケ、仄陋者宿ノ名賢ヲ擢デ、凡十人計リ
 ヲ幕中ノ賓師トス、是王者ノ師ナラン、然後徐々ト
 シテ密ニ議シ、精シク慮ラセ、天下ノ人材ヲ網羅セ
 シメ、公論ノ歸スル所ヲ以テ其根本ヲ立ル所ノ要路
 ニ立シメテ、其他ハ駕御使令スルニアリ、当今何ヲ
 以テ要路トセン、曰、議院ヨリ要ナルハナシ、議院
 ト政^府トニ多ク人材ヲ被居ヘ置候ハ、其他ハ随ツ
 テ漸クニ奮発開悟スヘシ、今九省中ニ徧ク一兩輩ヲ
 新タニ不居置候ハ、衆口ノ為メニ庄塞被致候而ハ
 却テ人材ヲ戕賊致候共賛成協和ハ遂ニ難シトス、

一謹外国交際審可弁彼是之分事

輦轂之下或ハ御廊内等ニ外国人ヲ令住宅候事、教師
 御雇入ノ者數輩ハ当今勢不^レ得^レ已義ニモ可被為在候
 へ共、或ハ土地ヲ与ヘテ建築セシメ、或ハ屋宅ヲ与
 ヘテ割拠、巢窟ノ形勝ヲ縱ニ致サセ候事ハ、古今各
 国未タ如此鹵莽アルヲ不聞、先初着右等ノ弁別無之
 候時ハ、終ニハ如何ナル御腹心ノ妨患ヲナシ、御肘
 腋ノ下ニ禍乱ヲ養ンモ難測、其他ハ外務ノ任是亦其
 人ニアランカ、尤適宜ノ御交際專對ノ任ニ當ツテハ
 傍觀ノ議及所ニ非ス、

外国御交際ノ事

尚又外国御交際ノ義ニ至リ候而ハ、実ニ古今ノ
 御一大事ニテ、神州ノ汚隆安危今更申ス迄モ
 無之候得共、鄰子産カ国ヲ治ル十五年間、隣国
 ノ一兵害ヲ不受、且隣旁列国ヲ協和セシメ、民
 塗炭ノ苦ヲ免カレ候義寔ニ一大功ニシテ、齊ノ
 管仲カ霸道乍ラモ被髮左衽ノ外患ナカラシメ候

事ハ、万古ノ盛業如^レ其^仁、歎美致サル、事ニテ、是ヨリ大ナル大功業ハ無之候間、外務ノ大任果シテ帷幄中ニ其人ヲ得候儀是非一大事ト奉存候、撮爾タル朝鮮・台湾・琉球等ハ姑ク是ヲ度外ニ差置キ、先第一ニ隣好ヲ厚ク情誼ヲ相通可申者鄂羅ト支那トニ有之候、何レ茂御公使等ヲ初辺ヨリ被為遣候は甚失策ニテ、本より彼茂初ハ商法ヲ以テ交リヲ我ニ求メ候事故、我ヨリモ亦先商法ヲ以テ往交リ候而、漸々和親ヲ結候ハ、彼亦隣好ヲ悦ヒ候ハ人情ノ常、是即良策ニテ其人ヲ得、其任ヲ得候ハ、樽俎ノ折衝專對禦侮彼却テ人アルヲ知ル、是公使莫大ノ財費ヲ省キ、却テ長ク彼商館客舎ニモ滞在可相成、交易ノ利ハ全屯田ノ策ニテ、往来ノ航海ハ全ク測量試験ノ策ニシテ、彼亦我ニ他心ナキヲ知ツテ、自然ニ悅服周旋致シ呉可申ト奉存候、夫善隣通好ハ王者之國法、先王徳ヲ耀カシテ兵ヲ耀サズ、小ヲ

以テ大ニ事フル者ハ仁者ニシテ、天ヲ樂ム者ナレハ必天下ヲ保スルニ至リ、小ニシテ大ニ事ル者ハ知者ニシテ、天ヲ畏ル、者ナレバ、其國ヲ保スルニ足レリ、是即大王勾踐ノ良策、全ク今日ニ可施設大道ナラズヤ、孔孟ノ書読デ活用セズンハ、果シテ何ノ益アラソ、或ハ蠱薄ニシテ大戦ノ兵端ヲ開キ、或ハ妄リニ疆場ノ事ヲ起シ、或ハ以テ大凌レ小以テ強侮レ弱ノ類皆天道ニ反シ、神慮ニ悖一己一時ノ功名功利ヲ貪リテ、終ニ永世億兆塗炭ノ大患ヲ蒙リ候儀、真ニ可畏ノ至リト、奉存候、

一 振興兵氣正軍律事

大將校尉ヲ論撰其器ニ任スルハ肝要ニハ候得共、是ハ富強ノ大本廟堂ニ御開張被為在候ハ、兵氣ハ自然ニ奮ヒ、軍律ハ自然ニ整可申事ニテ、迺モ一片紙ノ所及ニ無御座候、但武芸復古之事、

第一ニ、神州ノ長枝ト称スル刀槍ヲ廢シ、弓矢ヲ禁候事ハ、自ラ爪牙ヲ去リ、自ラ廉節ヲ失フ道理ニテ、秦皇鎗兵ノ覆轍、増テヤ 神代ノ事ハ申スニ不及、

後鳥羽天皇已来堂々ト伝ハリ来ル禁裡御鍛治匠ヲ被為廢、日本刀製作ノ古伝秘法ヲ忘却、万世不可再伝ニ至リ候ハ、乍恐奉対

御列聖 神慮可恐事ニハ無之候哉、
伊勢八幡・宇佐等ノ御奉納

皇太子御降誕ノ御祝等古例ニ被為復、其他百般武芸居合・仰ラ・棒繩ノ伝・鎗槍・直槍リ・十文字薙刀・片鎌・神代鉾・水馬水鍊・弓馬ノ故実等御軍律ノ外自費等ヲ以テ勝手ニ心掛候儀ハ可レ賞不レ可レ罰ス、追而外国ニ茂望ミノ者有之候ハ、是ハ日本芸トテ教師トナツテ伝遣サレ候ハ、宇内ノ広キ鳥孫ノ兩刀珍重伝習致ス間鋪ニモ無之、徒ラニ炮術等ノミ為致候而ハ筋骨

強壯ノ運動無之、自然弱兵ノ基ニ相成リ、又輕業芸ニテハ兒戲ニ均シク、舞樂ノ一曲モ覺サセ候方却テ養生ニ茂相成可申ト奉存候、

一定服制事

服制ノ御儀モ是迄議論紛々、実ニ可一笑、終ニ洋俗開化ノ便利ヲ主トシ、簡易ニ就テ断髮無刀胡服胡裝ニ帰スルト雖モ、朝廷ノ大礼神祭等ハ必旧来ノ冠服可然、尤中国胡服ノ事ハ趙武靈王二千年ノ昔シニ已ニ魁唱セリ、然弥以テ炮戰實用等ノ便ニ至リテハ最是ヲ賤シムハ不可ナリ、只夫レ丈ケノ実効ヲ責メテ真ニ万国並立ノ士氣兵備ヲ起スニアリ、彼徒ラニ便利ヲ名トシ、却テ驕奢安逸ノ媒トナリ、上下混雜ノ弊ヲ生ジ、虚文末飾ノ華美ヲ成シ、鉅大ノ財費ヲ惜マザルニ至テハ、反テ貧弱兵ノ種トモ相成リ可申、必定可痛歎、如此テハ尤敵国及下民ノ侮リヲ不免、速カニ紀律嚴明ニシテ炮隊水線等ノ実備ヲ壮ンニスルニ在リ、

一 遠利愆重節義退詐術貴誠実事

一 嚴禁淫乱男女別事

一 明貴賤之分事

右三箇条ハ、先心術ヨリ風教ニ関スルノ大ナル者ニテ、
冲茂一朝ニ改正難仕、其大略ハ仁義ヲ主張致シ安富ノ基本ヲ厚クシ、仁義ノ名教ヲ立候事ニテ、先力行ト好學ト知恥トノ三ツニ成リ可申、尤実地ノ修業ハ學術ヲ正スノ上ニ候得バ、下文ニ論列仕候、

一 慎讞獄正賞罰事

賞典ヲ審ニシテ野ニ遺賢ナク、朝ニ阨窮ノ士ナク、内ニ無_レ怨女、外ニ無_レ曠夫、天下ニ遺逸ノ高老ナク、山林ニ高尚ノ隱士ナカラシムルハ、宰相及地方官ノ任也、又刑罰ヲ緩ニシテ德行ヲ勸メ、奸慝ヲ蔽明ニシテ風俗ヲ糾スハ司法ノ任ナリ、是又其大綱ハ政台ノ任也、聖經ニハ礼楽不興、則刑罰不_レ中、刑罰不_レ中則民無_レ所措ニ手足トハ何ソヤ、凡慮ノ及所ニ非ス、迨モ其人ヲ得ル古今ノ難事ナリ、其人ヲ得レバ

一 正學術事

三章ノ法以テ天下ヲ治ルニ足り、其人ヲ不得ハ三千ハ刑、万ヶ条ニテ日々ニ血ヲ流シテ溝渠ニ滴、威嚴鬼神ヲ欺クトモ民免レテ無_レ恥、却テ壞防ノ大乱ヲ醸スニ足ラン、礼楽ヲ興スコトハ又大徳ノ仁賢ナラズンバ安ソ能ク箋々タル小人ノ及所ナランヤ、然レトモ強テ是ヲ擬議センニハ、亦無_レ已トス、下文ニ正_ニ學術トアル条下ニ而御参考有之度候也、

第一建大小学大小教院事

文部・教部ノ両省ハ勿論、国本ヲ立紀綱ヲ振フノ大根脚ナリ、然ルニ御一新已来霸政ヲ一掃、柏原ノ御盛代ニ茂御恢復可被為在旨、天下ニ御布告已後已ニ数年ニ及ンデ、一王ノ大学、一宗ノ大教等、確乎海内同文ノ化ニ一定スルコトヲ未_レ聞、或ハ朝ニ置テ夕ニ廢シ、夕ニ定メテ朝ニ改メ、皇学ヲ起サント欲シテ孤立不_レ振、漢学ヲ廢セント欲シテ用ヒザルヲ不_レ得、大学ヲ建テ亦

廢シ、神祇官ヲ昇セテ又貶トシ、終ニ教部ヲ被
 爲置、文。部。以。テ。洋。学。ヲ。モ。方。技。巧。芸。ノ。長。所。ヲ。ハ。御
 採用アラセラレ、殆ト宇内ノ教学ヲ合シテ一定
 ノ国典ヲ開カレントスルノ盛華ニ當ツテ、文部
 ・教部ハ詰リ同体一種ニ無之候テハ不相成候処、
 文部ハ兎角ニ教部ノ頑固ヲ嘲リ、教部ハ更ニ文
 部ノ開化ヲ疾ミ候事ニテ、如此一体同種之学職
 サヘ偏見固執ヲナシ候様ニテハ、両省共詰リ、
 其方向ヲ失、後進尽、中途ニ狐疑シテ亡羊タリ、
 其定則曖昧、進退模稜ニシテ此極ニ至ル、所謂
 以ニ昏々ニ使ニ人昭々ニ、実ニ可痛慨事ニ候、抑文
 教相互ニ扶ケ共ニ氣脈一貫候様無之候テハ閭牆
 之勢、父子相夷、朋友相狼リ、兩虎並鬪ル、ヨ
 リ外無之、実ニ教歲月ノ久シキ紛々然トシテ一
 学校ダニ未タ御風教ノ儼然相立候ヲ不見、聖明
 ハ為ニ恥ルトイヘトモ、千歳之下吾輩ニ至ル迄
 実ニ其責ヲ不_レ免者アラントス、

第二教導職之事

宗旨コソ許多ノ得失ハ有之候得共、倫理綱常ノ
 大道ハ五大洲中千百ノ宗門有之候共、夫レ々々
 ニ教導セザル国ハ無之事ニテ、是ヲ夷狄_{トモ}有_レ君
 不_レ如_ク諸夏之亡_{トナキガ}トハ申スニテ、本ヨリ我神州
 ハ 神典聖学ノ両ツヲ合セテ、政教モ祭政モ一
 致ニ御教典ヲ建サセ玉フコト已ニ数千歳ノ久シ
 キニ及ンデ、今般教導職ヲ被為置候処、全ク仏
 教ハ一時ニ概廢シ玉ハ、禍乱ヲ激動センコトヲ
 御深慮被為在、姑ク教部ノ一ニ被為加候得共、
 是又仏法ヲ以テ宗旨ヲ主張セシメ、經文ヲ説、
 經文ヲ読習ハセ候事ニモ無之候得ハ、袈裟衣モ
 フ着ケ教部ニ列シ居候モ、実ニ捧腹ノ次第、姑ク
 是ヲ度外ニ置テ可ナランカ、然ルニ大教ノ迂僻
 ヲ以テ其全局ヲ概廢セントスルハ、実ニ驚キ入
 タル事ニ候、今ノ時ニ當リ、無給無祿ノ奉勤ニ
 テ尽力致候者神官・教導ノ外ニハ希ナルヘキ、

増テヤ献金等聊ヅ、モ欠ケナキハ神官・教導ニ
及候者モ無之、独リ此一職ヲ妨害シテ是ヲ廢却
セントスルハ、是何故ニ候ヤ、速カニ我城郭ヲ
毀ツテ外教ノ蔓延ヲ願フ者ナランカ、神罰可畏
々々、

第三外教之事

耶・蘇・外・教・ノ・大・患・ハ・申・ス・迄・モ・無・之、上・下・一・般・兼・々
御洞察被為在候処、如何ニモ御交際ノ折柄、公
然拒絶ニ難被為及候、御情実奉恐察候事ニ茂御
座候得共、尚更以テ宇内ノ教典確乎不拔ノ基礎
ヲ建、然然明備不被為在候ハ、億兆乍チニ方
向ヲ取失ヒ、西海ハキリキス、北陸道ハヤソ邏
馬ナド、浸淫仕リ候様相成可申ハ眼前ニテ、乍
恐紀綱大敗、民庶惑乱、無ニ如レ之何スルコト一 至リ可
申奉存候、本ヨリ竺典ノ曖昧タル頼ムニ不レ足
ンヲ是ヲ倚頼シ、洋字ヲ盛ンニシテ自ラ彼ガ門
ヲ開キ、漢字ヲ黜ケテ自ラ羽翼ヲ断ツテ、彼ガ

路ヲ啓カントス、豈岌々トシテ不レ危乎、願ク
ハ敬神愛國ハ

皇國故有ノ大道ヲ主張シ、天理人道ハ専ラ神典
聖学ヲ并セテ巧芸技術ハ洋学ノ長処ヲ參用シ、
我一世ノ大典ヲ立テ、日新開化之実効盛大ナラ
シメ、内ニ鬩牆之虚隙ナク、外ニ離間ノ国賊ナ
カラシメ、如三本論ニ文教両省ノ御定則不被為在
候テハ、御国本決シテ難相立、御紀綱決シテ難
相振、不堪戰慄恐悚之至、

(裏表紙ニテアリ)
「加藤」

冊子原寸 縦二四・五釐 横一七・五釐 二八枚

二〇三九ノ二

(表紙)

「復明密議」

第三編」
(ウ)

復明密議第三篇

傍觀座視ノ老廢婆心恐入候得共、燃眉火急ノ大患禍機

実ニ不容易、御国家ノ第一大事又々自然ニ相迫リ候様
奉存候件々左ニ条列奉献言候間、宜敷御酌取、御高案
之上速ニ御取捨御尽力、回天反日之御成功偏ニ奉仰候、
一乍恐王政御復古被為遊候已来、幕政御改正ハ先第一ニ
頻リニ文明開化ヲ名トシ、和漢ノ名教政体ヲ破リ、只
々洋人ノ糟粕ヲ摸擬剽窃致候而、彼カ長短得失ノ御取
捨無之、日新ト乍申日々ニ幽谷ニ陥リ候始末、億兆或
ハ罵リ、或ハ非笑、下情壅蔽、上下不和ノ大患ヲ醸シ
成候事、

一外国新立ノ郡政ニ法トリ、頻煩地稅運上、凡聚斂ノ政
無レ所不レ至、一毫モ倬々蕩々タル大徳化ヲ布カセラ
レ候様ノ義無之、億兆之陷溺怨言盈レ街、有識ノ士ハ彈
指頓眉罷在候もの不可勝数候事、

一礼義廉恥、有恥且格ルノ御良法不被為建、只刑律苛刻
ノ御史治ヲ被為布候間、民免レテ無恥ノミナラズ、億
兆ノ怨懟悲歎不レ可ニ勝言ニ候事、

一教部・文部共明倫之道曖昧、旁風俗大敗、忠孝之大義

情実無之、輕躁浮薄ニ陥リ候ノミナラズ、其禍害必至
ト君父ニ迫リ、天下ノ父兄タル者大迷惑罷在候事、

一教部省ヲ被立置候間、第一ニ神州ノ神国タル敬神明倫
ノ大教ヲ被為布候事ト奉渴望候処、豈料シヤ、全ク旧
幕寺社府ノ如クニテ、打角ト王政ニ畏縮、廢止ニも可
及、僧侶輩反テ大教正等ニ御撰任相成リ、彼ガ巧言諛
辭財利等ニ迷溺シ、敬神ノ教道ハ殆客位ニ降り、聖教
ハ尤廢滅ノ姿ニ相成リ、少年壯士ノ子弟輩ハ只浮弁抗
議ヲ主張シテ、億兆ノ父老婦女子ハ、再胡仏ノ方便ニ
惑溺、滔天ノ賊心遂ニ天下万世ノ禍根乱階ヲ相貽シ可
申候事、

但天竺より釈迦ノ銅像ヲ迎ヒ来ツテ、東京ニテ開帳
ヲ企ル者アルニ至ルノ由、実ニ可レ笑可レ歎、

一神祇崇敬ノ大道ヲ天下ニ被為布候事ト奉存候処、豈料
シヤ、神社ハ府県社已下数百万ノ神領社田、祠官ノ家
祿山林等一切御引上ケニ相成リ、且教院取建等総テ自
費民費ニ相成リ、教權利權共ニ僧侶ノ手ニ落、神官一

同弥以テ大窮迫、聖教モ神道モ文道モ地ニ落可申候事、
一 神州固有ノ武道兵学等一切御廢之姿ニ候得ハ、巨細ノ
所ハ弓馬劍槍ヲ初メ水術・乗術等ニ至ル迄、師家古伝
ノ秘訣妙術其伝ヲ失ヒ、上下皆真ノ商人共同様ニ落入
リ、礼義廉恥払_レ地_ラ、土風大敗、士道ヲ取失ヒ、眼前
ニ皇國ノ衰弱ヲ醸_シ成_シ候事、

一 千万歳生シ難キノ金銀銅鉄ヲ以テ海外無用ノ産物ト御
交易相成リ候上ハ、神國ノ精氣自然ニ消耗、全國ハ只
々楮幣ノミニ相成リ、遂ニハ外債ノ為メニ御土地人民
モ奪ハレ可申形勢ニ立至リ、貧弱ノ大患不可再回復候
事、

一 教院ヲ被_レ為_レ置、教導師ヲ被_レ立_レ置候ハ、本ヨリ神官教
道ノ者御優待モ可被_レ在候ハ且教官師道ヲ重_ンゼラレ候、
実地教化ノ本源ニ候処、却而是ガ為メ神官寒士貧儒等
ニ至ル迄献金或ハ自費等ヲ被_レ命_レ候仕合、颠倒錯乱言語
同断之次第、其禍害反テ有名無実ノミナラズ、教院モ
ナキニシカズ、教師モ捨置クニシカズ、強テ立置カレ

候次第ニテ、御引立被_レ遊候共御国用不相届候ハ、却
テ官員ノ方々より定禄百分ノ一トカ、五十分ノ一トカ、
献資供給有之度事ニ候、假令バ酒色遊蕩ノ為メニハ不_レ
惜_ニ千金_ヲ、教化民益等ノ為ニハ片金寸楮ヲ吝_ミ候事ハ、
是何ノ心ニ候哉、假令姑息ニ安_ンジ候共、枕上ノ片夢
未_レ醒_サニ身家ヲ保全スルニ難カルベシ、

一 近来一文錢ハ十文ニ上リ、四文錢ハ新鑄十五文旧鑄廿
文ニ相成リ、煩雜ノ弊、何共絶言語候処、尚又銅幣御
創製ニテ、一箇或ハ九分九厘九毛、一小片或ハ三分三
厘三毛ナド之極煩シキ貨幣ヲ令通用玉フ義、如何ニモ
民間ノ情実ニ取り此上モナキ煩雜細碎ノ次第ニテ、其
迷惑弥絶言語候事、凡煩苛ノ御政令等ハ一掃シテ、民
間ノ通便ニ相任セ可然候事、

一 乍恐第一朝廷ノ御危急、薩長土等ノ大患ハ、前文ノ次
第ニテ、天下ノ怨毒下流ニ帰シ、億兆ノ衆下ハ洋俗洋
癖、却テ旧幕ヨリモ甚敷、乍恐王政ヲ怨嗟シ、公家政
事ハ古來永持ナント罵リ合、只ウシト見シ世ゾ慕ハレ

テ、旧幕ノ小恩義ヲ思ヒ、再ビ三百年ノ恩沢恩義ヲ重
 シ、却テ旧幕ノ政ヲ思ヒ候折柄、日光社ヲ松平神社
 トシテ宮司等ヲ被為置、且官幣社ニ列セラレ、去ラヌ
 ダニ荒草廢蕪觀ルニ不_レ忍、徘徊涙ヲ洒_レキ罷在候折柄、
 上野・芝両山ヲ府社郷社等ニ崇祀セシメテ再興ヲ被為
 許候事故、豊国・建勲ノ両社ハ申スニ不及、神宮遙拜
 処、楠公社等ハ迎モ感戴帰依ノ者ハ有之間敷、已ニ当
 十七日徳川家ノ祭日ニハ芝上野祭日ヲ名トシテ、御旗
 下ノ土御家人ヲ初メ或ハ袴等ヲ着シ幣物ヲ捧ゲ、老若
 男女海山ニ群ヲ成シテ、茶店ヲ掛並べ、道路ヲ開キ、
 神楽ノ金鼓天地ニ轟キ、東照宮様・権現様ト都下ヲ傾
 ケ、三百年太平ノ御恩沢ヲ打忘レテ參ラヌ者ハ、人間
 ノ数ナラズナド、ハヤシ立テ乍チニ繁盛興復ノ形勢ヲ
 ナスニ至ル、是全ク我迂拙ノ招ク所ニシテ、足利氏ノ
 為ニ民ヲ驅ツテ猷ノ壙ニ赴キ、魚鼈ノ淵ニ集リ、群鴉
 ノ林ニ投ズルガ如ク大水ノ沛然不可禦ノ有様、乍チニ
 朝廷危急ノ御大患ヲ醸シ、三旧藩ノ大禍害ヲ為サン事、

尊氏ガ九州百万ノ兵ヲ再驅リ出シテ、湊川ニ迫リシヨ
 リモ甚シキ形状ナレバ、速カニ

玉座ヲ南山ニ復シ奉リテ、薩長土三藩等ノ正義士ハ旗
 ヲ捲キ弓ノ弦ヲ絶チテ、旧幕ニ政權ヲ反ヘシ、再徳川
 氏ノ臣妾ト称シテ其余命ヲ存シ、後栄ヲ願ハンコトハ、
 寧ロ非類異族ノ海外人ニ腰ヲ屈シテ奴隷婢僕ト称シ、
 朝拜朝貢ヲ甘ンジテ止ムノ危辱ヲ蒙ランヨリハ、尚マ
 サレリトセンカ、乍恐不_レ堪_レ憤歎抗慨之至_ニ候、

一右今般御決議ノ機会ヲ取失候ハ、実ニ

神州治乱興廢ノ一大事ニテ、其興復スル者四ツ、仏法
 也、洋教也、幕政霸術也、姦雄国賊也、亦衰廢スベキ
 者四ツ也、第一乍恐

朝廷ナリ、次ニ教道ナリ、次ニ官員ナリ、次ニ御国体
 ナリ、噫又何ヲカ言ン、是実ニ燃眉火急ノ大患禍機
 不_レ可_レ不_レ深慮_ニ、一日之苟安、數百年ノ後害、実ニ在_ニ
 今日、伏請速カ腹心ノ高老遺賢鉄肝石腸ノ豪傑ヲ左右
 ニ会シ、一時ニ神決アラセ玉ハズンハ上下壅蔽シテ、

乍チニ咸陽三月ノ火ニ驚キ、徒ラニ白虹日ヲ貫クラ見
ント欲ス、可恐可憤、千思百慮、誠恐誠惶昧死以

聞ス、

冊子原寸 縦二四・五種 横一七・五種 一〇枚

二〇三九ノ三

(表紙)
「復明密議 後編完

加藤澗草稿」

復明密議後編

制度

一制度典章等之文物ハ国体ヲ建富強之実ヲ拡充スル所ナ
ルニ、自国ノ産物ヲ不用、他ノ異域等ノ遠物ヲ貴ヒ、
自国ニ生スル布帛ヲ不衣シテ他ノ氈裘ヲ用、自国ニ生
スル米粟ヲ不食シテ異域ノ珍品ヲ食スル等ノ制度ヲ立、
是ヲ天下ニ通用シ永世ノ国典トセンニハ、民ヲ誣ルノ
道ニシテ、迂拙ノ甚キ是ヨリ大ナルハナシ、ソハ寒国

ニ生スル獸ハ其天性必皮厚ク生レ付タルヲ剥去ツテ、
暖国ニ生シタル皮ノ薄キヲ衣セ換ル様ナル理ハリニテ、
酒好ニ生レタル者ニ砂糖湯ヲ吞セ、下戸ニ生レ付タル
ニ酒ヲ強ルカ如シ、民情不通ノ甚シキ、是ヲ經濟有用
ノ道トホコラバ、管晏ノ徒ハ舌ヲ吐テ冷笑セン、教道
モ亦然リ、ソハ山国ノ者ニハ水練操舟ヲ習ハセ、水国
ノ者ニハ木升リ木挽キヲ習ハセル様ニテハ、是亦学問
ノ師道立コトナシ、先第一ニ我邦ノ名産タル絹布ヲ他
国ニ出シ、外ヨリ来ル羅紗・五郎福ヲ大金ニテ買求メ
テ是ヲ服スル様ニセバ、其費弊無算ニ至ル、又我國ニ
名産タル五穀海肴ヲ不賞シテ、海外ヨリ来ルパンヤ木
ノ実酒等ヲ飲マシメバ、我至宝ノ金銀ハ皆海外ニ消耗
シテ再返ルコトナシ、彼カ糟粕ハ我國ニ入ツテ糞土ニ
化スルヲ如何、カクテハ乍チニ貧弱ノ弊ヲ成シテ、我
ヨリ衰廢ノ基ヲ造ス也、故ニ海外万国此迂遠ナル制度
アルコトナシ、且他国ノ物ヲ用ヒテ且他国ノ物ヲ用ヒ(符也)
テ我国用民用ニセヨト云ハ、全忠恕ノ道ニ叶ハズ、汝

ノ田ヲ耕シテ豊カニ汝ノ山林江海ニ漁獵シテ、衣食セヨト云バ、億兆民モ安堵シテ専ラ勉強ヲ争フ、是ヲ富強ノ策トハ云也、是ヲ天ノ時ヲ用ヒ地ノ利ニ就トモ云ナリ、庶人ノ孝ニ聖人全ク此一句ヲ説カル、ノ妙、今日初テ發明セリ、庶人ノ孝道ニ叶フ様ニセシメテ、其父母妻子ヲ養ハシメ安堵セシムルヲ政事トモ制度トモ云ヘキ事也、去ハ無_ニ政事_ニ則財用不足ト云モ是等ノ政道ノ行届カヌヲコソ云也、然ルニ他ノ怪味ヲ尊ビ珍品ヲ供スルハ、平常ノ衣食財用有余之力アラバ、外国ノ名産ト交易シテ衣食セシムルモ又民情ニ通スヘシ、然ルヲ内外本末顛倒シテハ、永ク国家ヲ保全シ万国ヲ安堵セシムルコトハ決シテ難カルヘシ、今ヤ都会ノ市店毎ニ開鋪堆積スル蛮貨蘭品ヲ目撃スルニ、富貴ノ人ハ兎ニ角ニ、山間僻邑ノ小民下々億兆ノ窮民ニ至ツテハ、十二八九ハ皆無用ノ玩好同様ニテ、是ヲ用ル者少キニテモ、永世ニ通用シテ上下便利ニナル制度文物ニ非ルコト知ルベキナリ、又祭祀婚禮喪式等ノ大礼典ニ用ル

コトモ少ナキヲ、只廟堂上ニノミ珍重シテモテハヤシ玉フ事更ニ解シ難シ、其極只恐ラクハ富強ノ国典ヲ廢シテ、一向ラ貧弱ノ下策ニ陥ランノミ、速カニ改正セズンハ他日挽回ノ及ザルニ至ラントス、

開化 文明 日新 進歩 新發明

一古ノ文明開化ハ法_ニ天之道_ニ因_ニ地之宜_ニ、天理人道ヲ明ニシテ、寒國ハ寒氣ヲ凌ク便利ノ道ヲ開キ、熱國ハ暑邪ヲ凌クベキ便利ノ道ヲ開キテ、財成輔相ノ宜ヲ得テ、只万民ト共ニ日々善ニ遷リ害ヲ除キ、又ハ彼カ長スル所ノ益ヲ求メテ或ハ古キヲ温ネ、或ハ是ヲ今日ニ考ヘ、目我為_レ古トモ遠邦ニ取ツテ習ハストモ、新發明ノ良法美事ヲ日々ニ求メテ、弥益万民ニ安堵、国家富強ノ進歩盛大ナルヲ云、易ニ日新謂_ニ之盛徳_ニ、又開物成務トモ云、大学ニ新民トアル亦同シ、然ルニ徒ラニ彼カ糟粕ヲノミ食フテ利害得失ヲ問ハズ、只遠邦ノ物ナレバ珍ラシキニ心酔シテ、我カ精神ヲ無益ニ消却スル道ヲ日新開化ナゾ云ハ、昨日迄父母老幼ヲ慈育孝養スルコ

トハ迂闊也トテ、急ニ自ラ便利ノ放蕩無頼ヲ求メテ是ヲ文明開化ト誇ルニ似タリ、是亦顛倒失措ノ大ナル者ニシテ其迂拙喩ルニ詞ナシ、

教道

一教部省ヲ置レテ教部方法明備ナラザルハ、教法ノ建ザル故ナリ、億兆ノ耳目ヲ一新シテ万民ノ方向ヲ定ルハ教部ノ任ナリ、然ルニ第一僧徒ハ人倫ヲ外ニシ、異端ノ徒トシテ世外物トシタルヲ、今堂々タル教導ノ官員ニ永ク居ヘ置カレ、数千歳天理人道ヲ講究シテ、倫理綱常ヲ明ニスル所ノ聖道儒家ヲ永ク廢シ置カル、ハ、是教ヲ立ルノ道ナキ明証ナラズヤ、教ト云者ハ何之六ケシキ者ニ非ズ、中庸ニ鳶飛魚躍トアル是也、天翔ル鳥ニ地上ヲ走レ、水ニ栖ム魚ニ空ニ躍レト云様ナル難題ヲ責ルニ非ズ、神道ニテモ儒道ニテモ人タル者ニ人タル道ヲ教ル、和漢一致ノ教、神聖一致ノ道ト云者アリ、是ヲ天下ノ達道ト云、夫レハ眼前ニ民人ノ身ノ上ニ尤切ナル者ガ不一アル、是ヲ知ツテ明ニセヨ、行得

ヨトサスルヲ教道ト云ナリ、其身上ニ切ナル者トハ何ソヤ、人ニ皆能知リ居ル所ノ仁孝ハ忠義トナリ、外ニ決シテ教道モ教法モ教化モ風化モ不思議奇妙モ有ル者ニ非ズ、然ルニ是ヲ明ニ知ラント欲セバ、天子ハ天子ノ仁孝忠義アリ、庶民ハ庶民ノ仁孝忠義アリ、此外ニ天理モ人道モ敬神モ愛國モ決テ別ニアルベキ筈ニ非ズ、去レバ先教官ニ列スル高僧ヨリ先第一ニ此理ヲ發明悟道セシメテ、万民ノ目ヲ醒ルヤフニ速カニ先自ラ帰俗セシメテ、帰俗セザル者ハ教官ヲ削リテ帰寺セシメテ可ナランカ、夫レニテモ悟ラヌハ極メテノ頑僧愚物ナリ、教官ヲ辱フシテ袈裟コロモヲ立派ニ着飾リ居タリトモ、我道ニ妨害アルトモ名教ヲ立テ万民ノ方向ヲ定ルニ何ノ益カアラン、又此虛ニ乗ジテ迎モ仏道ヲ立ヌカネバ、必外道ヲモ引コマントスル手伝ヒ案内ヲスル僧徒ハ、億兆ヲ迷惑セシムル国賊奸僧ナリ、夫レコソ国恩ヲ忘レ天ツ神ニモ叛キ奉ル大叛臣ナリ、カ、ル天歩ノ艱難ニ当ツテコソ自ラモ發明悟道シテ国恩ニ報ス

ルガ仏菩薩ノ本意ナルヘシ、サテ其大ナルヲ問バ、神州ハ神州ノ仁孝忠義アリ、万国ハ万国ノ仁孝忠義アリ、仁孝忠義ハ一ナレトモ、其人ト其土地トニ因ツテ其仕方行伏各異ナル所アリ、神典皇籍四書六芸ヲ講習スルハ、是和漢ノ仁孝忠義ヲ行フ可キ仕方ヲ習フ所以ナリ、一人一己ノ分限ニスラ各異ナル所アリ、況ヤ其国体・地利・人情、其風土等屢ニ依テ異ナルヲヤ、是ヲ一概ニ押ナラサントスルハ所謂杓子定規ト云諺ノ如ク、橘江南ヲ過テ枳チトナルヲ知ラザル愚人ナリ、逆モ教官ニ列スルニ足ンヤ、日々ニ民情風土ニ齟齬シテ遂ニ紛乱スルノミナランカ、其身其国ニ備ハリタル仁孝忠義ヲステ、他邦異教ノ仁孝忠義ヲ求ルハ、自分ノ首ヲステ、他人ノ首ヲ付ケ代ントスルニ同シク、禪語ニ頭ニ迷フヲ頭ヲ求ルト云ハ是也、神道ニ産沙産神ヲ尊ハ是回事ゾヤ、

神社

神社ハ神国第一ノ大根本也、一毫モ誠敬ヲ不可欠、然

レトモ空論ニテハ益アルコトナシ、尤神社ノ盛衰ハ其土地時勢ニモ依ルコトナレトモ、其神社ニ奉仕スル神官ヲ撰ニシカズ、衰替スル神社等ヲ再興スルコトハ一通リノ人材ニテハ間ニ合フコトナシ、第一文字ナキ者ヲ付ケ置バ戸長・氏子等ノ笑ヲ受ケ、欺リヲ招クノミニテ、自然ノ衰廢ニ至ル、地方官ハ勿論、教部省ニテ公平ニ人材ヲ登庸スベシ、然シテ神社ノ造作・修覆・祭祀等ハ大社ニテモ只官費ノミニテ逆モ壮大ニハナラサルコト也、尤其土地ノ貧富ニモ依ルコトナレトモ、大凡官幣大社ノ社用非常ノ入費等ハ、三ヶ国百万戸ノ募勸ヲユルサレ、国幣社ハ二ヶ国六十万戸ノ募勸ヲ許、県社ハ一ヶ国四十万戸、郷社ハ三郷二十万戸、村社ハ百ヶ村十万户ト云ヤフニ募勸ヲ許シ玉ハ、何ノ苦モナク立派ニ成就スベシ、他ノ大費用是ニ比例シテ推考スベシ、是ヲ要スルニ神官其人ヲ得ルニアリ、只恐ラクハ其人ニ乏シカラントヲ其要、又学校教院ニ良師範ヲ置テ人材ヲ陶冶スルニアリ、或ハ太古ノ事ノミニ

拘泥シテ知新ノ今日ニ疎ク、或ハ神典等ニノミナマ堅
リニ守ツテ、漢洋等ノ開化ニウトク、或ハ漢洋ニ通シ
テ我国体ヲ知ラサル様ニテハ、終ニ中興ハ難カルヘシ、
嗚乎悲ヒ哉、今日ニ至テ神聖ノ大道地ニ墜ントス、

学校 教院

学校ト教院トヲ二ツニ分ケテ、文部・教部ト兩省ヲ置
玉フコトハ、是古ノ德行ト道芸ト之二ツヲ以テ賢者能
者ヲ拳ルニ均シク、教部ハ德行ヲ主トシ、文部ハ道芸
ヲ主トス、故ニ教部ハ大司徒ノ如ク、文部ハ大司楽ノ
如シ、然而其婦スル所ハ庠序、小学ノ教ハ大司徒ニ属
シテ、大学成均ノ法ハ却テ大司楽掌レ之者ニシテ、此
二者実ハ等脈相通シテ一ニ婦スルヲ妙トス、故ニ文部
ニ関スル中小学校ハ、即チ司徒ノ庠序也、教部ニ管ス
ル大教院ハ大司楽ノ大学成均也、今ヤ文部ニ大学校ト
名ツクル所ナクシテ、分課ノ諸上科ヲ合シテ大学トシ、
大教院ヲ別ニヒラクハ古ノ制ニ非ス、カクテハ庠序ノ
小学ヲ併セテ大学ト称スルカ如シ、大学ノ大学タル果

シテ何クニアルヤ、教部ニテハ又德行ヲ学ハスル庠序
ヲ別ニ設ケテ、中小教院ト名付ルコトハ、大学ノ教ヲ
庠序ニテ別ニ教ルガ如シ、此兩者相類シテ非タニシテ
類ス、紛々タル所以ナリ、教部ニテハ庠序中小學ノ内
ニテ秀タルヲ拔テ大教院ニ挙テ其教ヲ布カシムヘシ、
何ソ別ニ中小教院ヲ設ルコトカ是有ン、文部ニテハ大
教院ニ上ツテ教ヲ布カシムル人材ヲ庠序中小學ニテ仕
立ツベシ、何ソ別ニ大学ヲ設ルニ及ンヤ、今ヤ此二ツ
ノ者支離分裂シテ氣脈不通ノミナラズ、教学相矛盾シ
テ相妨クルニ至リ、遂ニ並斃シテ外国ノ教ノミ蔓延ス
ルニ至ランコト、豈畏ル、ニ遑マアランヤ、速カニ教
学ノ規矩方法ヲ定ムヘキコトハ其詳ナルコト総裁ノ大
任タリ、一片紙ノ尽ス所ニ非ズ、只此マ、ニ教学ノ制
全備セリト捨置バ、天下后世ノ笑ヲ貽スノミ、噫何レ
ノ日カ与ニ再大学ヲ議スルニ足ル者ヲ見ン、

悲田院

施藥院

貧院 病院 育嬰所
教育所 貧学校

今西洋各国ニテ云貧院・病院ノ如キハ、我古ノ悲田

院・施薬院ナリ、只彼ハ多ク耶蘇教講社ノ民費ヲ以テ建設スル者多シ、尤良法ト云ヘシ、乍併是ヲ周官等ニ求ルニ民費・官費トモ其沙汰ナシ、因テ再深ク考ルニ、是ハ皆衰世ノ政ニシテ所謂子産ノ小惠ニ陥ルナリ、大司徒地方官ノ政事サヘ行届ケハ、鰥寡孤独廢疾ノ者皆養フ所アリ、何ソ独リ煦々トシテ悲田・施薬ノ小惠ヲ行フニ至ンヤ、況ヤ貧学校等ニ至ツテハ実ニ可笑ノ至リナリ、本ヨリ貧学校ニ養ハレテ己レカ学文ヲ專ニスル様ナル廉恥モナキ、発憤モナキ者ニシテ、豈大業ヲ成スコトヲ得ンヤ、養生衰死無憾ハ王道ノ初メナリ、何ゾ別ニ煩シク貧院・病院・育嬰所等ヲ設ルニ及ンヤ、

外教

此一則ハ別ニ抄出シテ外患密議一卷トナシテ前編ノ改ニ正兵制ニ以省ニ冗費ノ一則ヲ加ヒテ先日來極密当路ノ大臣公ニ上ル、

外教ノ害ハ仏ヨリモ可畏ハ、第一仏ハ我神道・儒道ト並立ツテ永世ニ行ナハレ、仏法ヲ以テ王法ヲ護リ、王法ヲ

以テ仏法ヲ盛大ナランコトヲ望ムニ止ル、本地垂跡、内典外典ト云ニテモ知ルヘシ、只洋教天主耶蘇ノ如キハ、一天神一耶蘇仏ノミ仕ヘテ他ノ神社仏宇ハ不殘廢滅シテ直チニ此一宗旨ノミ五世界ニ專ラ独立センコトヲ欲シ、現在ノ君父ハサシオキ、己レガ先祖ノ神靈モ祭ルニ不及トテ、人ニモ祭ラセヌ様ニスル、儒道等ノ汝カ君父ニ忠孝ヲ尽セ、汝ガ祖宗ニ誠敬ヲ致セト云トハ天地懸隔セリ、又其教タルヤ、行状タルヤ、直情徑行ナルコトハ雖々ノ民ヲシテ悟リ安ク行ヒ易カラシムルコト、真宗・日蓮等ノ上ニ出ルコト万々ニシテ、至拙ニシテ至巧ナルコト愚俗ヲ狂誘スルニハ利用厚生ヲ專ラトシ、施費ヲ吝セズ、慈恵ヲ施シ、其甚シキハ目クラハ目ヲアカセ、臂ハ起シメ、髯ハ耳ヲアケ、又人ヲ強テキカザル時ハ直ニ兵力ヲ加ヘテ恫慄征服セシメントス、噫西洋各国初來ツテ上陸条約ヲ期シテ許レ之、次ニハ遊歩登城ヲ乞ヒ、次ニハ居留借地ヲ乞、次ニハ造宅雜居ヲ乞、今又新ニ婚嫁施教ヲ乞、雜居婚娶ヲ許スニ至ツテハ、モハヤ我神裔モ 神別モ

皇別モ瓦石混合、内外尊卑ノ名分名義モ地ヲ弘ツテ皇道地ニ落ルト雖トモ、尙未タ一線ノ国脈ヲ存スルハ、万民未タ婚娶ヲ甘ンゼズ、又洋教モ徧ク美トスルニ至ラズ、乍併漸浸淫今又新一層ヲ加ヘテ、以テ我和魂ヲ奪ヒ、我神明ヲ魔滅シテ彼ガ邪教ヲ布キ、彼ガ本尊ヲ礼拝セシメントス、廟堂タトヘ是ヲ忍ンテ傍觀シ玉フトモ、天下ノ億兆千万ノ有志、豈是ヲ忍ンデ傍觀座視与ニ滔々タル者アランヤ、乍ニ翕然群起シテ当路ノ有司ニ迫リ、或ハ県庁ヘ訴ヘ、眼前ニ大乱ヲ生スルハ必定ニテ、一時ハ兵力ヲ以テ鎮撫屈服セシムルコトヲ得ルトモ、終ニハ土崩瓦解等ノ大患、乍恐

御国祚ノ御安危如何ニモ不可期、

或問、外教ノ害ハ固ヨリ知之久矣、上下誰カ患ヒザル、只我ニ是ヲ拒クノ国力ナシ、兵力ナシ、財力ナシ、何ヲ以テカ拒絶スルコトヲ得ンヤ、抑如レ之何、

答、国力ナシ、財力ナシ、兵力ナシ、真ニ無ンバ何ヲ以テ国ヲ立、君父ヲ保護スルコトヲ得ン、速カニ一大国ノ

属国トナツテ拳国臣妾ノ下ニ膝ヲ屈スルニシカズ、恐ラクハ自ラ求テ未レ得、或ハ自求メテ無カラシムル者アリ、或ハ求テ其求ル所以ヲ失フナリ、今ヤ我ヨリ手ヲ下シテ実ニ大敵ノ境ヲ庄シ居ルガ如ク、恐懼警戒シテ圉城中ニ廟算ヲ必死ニ求ルガ如ンバ、乍ニ国力モ兵力モ財力モ百倍スルニ至ルコト掌ヲ指スガ如シ、其実行如何ント云々、又反掌ノ中ニアリ、其術如何ント云ニ、是迄ハ只内乱ヲ鎮メテ太平ヲ希望スル丈ケノ目前ヲ廟議ニ暇マアラズ、万事徒ニ雷同付和シテ異議アルコトナシ、日新ヲ口実トシテ専ラ洋俗ニ習ヒ、牛羊ヲ屠リテ肉林トシ、蝨酒ヲ賞メ酒池トナシ、一婦人ノ洋裝或ハ数千金ヲ費シ、一家作ノ高樓殆万金ヲ抛ツ、全ク衣食住ノ冗費過半外国ニノミ利アツテ内地ヲ枯槁ス、正来中上下ノ費億万金ニ至ツテ外人ニ媚、内地ノ人民ヲ苦マシムル、何ノ文明カアラン、何ノ開化カ是アラン、千歳ノ下亡国ノ政ト亡国ノ風俗ト云レンコト、実ニ無念ノ至リナラズヤ、只今真ニ朝廷ヲ奉患、皇国ヲ大切ニ被思召候ハ、先第一ニ大臣公

ヲ初メ御大患ヲ担当アラセラレ、道ヲ以テ

天朝ヲ御輔翼被為遊候ヨリ外ニ無有良策、

問、道ヲ以テ奉輔翼、其実如何、

答、乍恐 天朝ヲ 仁徳天皇ノ御世ニ被遊候事ノミ、

再問、仁徳天皇ノ御世トハ何ゾヤ、

答、政ハ在順民心、又はを得民心、々々サヘ一意ニ尊奉

ノ時ハ如何ナル外患妖魔有之トモ不足憂、民心ヲ失時ハ

雖有高城深池不足守、雖有堅甲利兵不足守、雖有積粟百

万不足守、

又問、得民心ノ術如何、

答、諸賢素ヨリ歴代ノ史神聖ノ典籍ヲ誦サル者ナシ、今

ヤ忘却スル者ノ如ク何ゾ珍ラシク是ヲ問シ、夫欲得民心

心先順民心アリ、民ノ所好聚之、民ノ所惡去之、

即チ高津宮ノ御世是ナリ、今ヤ上下億兆一屋ノ雨露ヲ凌

クニヤスカラズ、一食ノ飢餓ヲ忍フ尤難シ、然ルニタト

ヘ富者貧賤分限各異也ト云ヘトモ、飲食ハ酒池肉林、衣

服ハ氎裘錦緞、居宅ハ高樓傑閣、然而賦税ハ日々ニ重ク、

力役ハ日々ニ煩、刑法ハ日々ニ嚴、是ニテ民庶心服可仕

ヤ、否、万々心服ノ理ナク、却テ怨憤ノ慘毒憐ムベキニ

至ラン、追々華族ヲ初メ飢寒ノ患ニ迫リ、容膝ノ居所ニ

苦ミ、稍帰農商ヲ専ニスル折柄、小民ノ飢寒ニ迫ルハ

当然ノ理ナラズヤ、乍恐先

御炎上ハ全ク倣子ノ天幸ト御発憤被為在候而、只宮中ヨ

リ御儉素ヲ被為示、

皇居御新宮ノ儀ニ付、定テ華族・官員ヲ初メ相応ニ献資

可仕ハ勿論ニ付、其内無用ノ玩好ハ御退ケ被遊、献資ノ

積高ヲ以テ先全国ノ窮民鰥寡孤独ノ者等へ御救助被為在

候様、御備金トシテ御下ケニ相成候ヘ、上下億兆定感

泣セザル者アランヤ、然ラハ民ノ竈賑ハシク相成リ候上

ハ、不出一二年速カニ文王ノ靈台靈沼庶民子来不日シテ

御落成ハ不待命令候事ト奉存候、然ル上ハ 神州全国ノ

億兆ヨリモ又献納モ可仕候、是我全国ノ民心ニ順フテ民

心ヲ得、民心ヲ固結緩急必死ノ力ヲ尽シテ奉羽翼 朝廷

候国力ヲ培養スル反掌ノ間ニ有之候、尤今般タトヘ官員

ノ月給幾分ヲ献納仕候共、旧知事ハ已ニ薄祿ニ御削リ被
為置候上ハ、右等ノ献金逆モ思フ程ニハ行届キ申間鋪、
又艱苦中より献金等仕リ候其金財ヲ以テ御新宮等華麗ニ
被為遊候ハ、全ク太平世界ノ俗吏輩等ノ為ス所ニシテ、
迎も一時ニ民心ヲ挽回シ非常ノ大患ヲ相禦キ候事ハ、乍
恐思モヨラザル御事ト奉存候、

問、得民心培養国力、是ニテ足レリヤ、

答、国力内ニ充実シテ民心一致ノ上ハ、外援ヲ求ルニア
リ、所謂外援トハ外交ヲ厚クシ隣好ヲ修ルニアリ、先亜
細亞洲中ヲ合和セシメテ、或ハ清帝ヲ感動セシメ、或ハ
魯王ヲ喜隨セシメ、必適宜応変ノ妙謀奇策アランコト、
是又反掌ノ内ニアルベシ、国力爰ニ至ツテ五大洲中ニ横
行スベシ、何ソ区々トシテ国力ノ不足ヲ患畏縮スルコト
カ是アラン、

問、国力已ニ張ハ兵力・財力富強ノ術如何、

答、国力已ニ内ニ張り、外援応之、則兵力・財力従ツテ
内ニ足ル事ハ順流直下ノ勢ナリ、兵力・財力ハ従ツテ実

効アランコト掌ヲ指シ候得共、先其實業ハ第一ニ現今兵
賦ノ費用幾百千万、旧土族ノ祿費幾百千万、兵賦ノ費用
二重ニ出テ、只貧弱ノ質ニ不堪、然レトモ姑ク不レ論ニ費
用ニ新集ノ兵ハ旧士卒ノ兵ト其実果シテ孰レカ外患ヲ拒
キ、孰レカ能全国ノ干城タル、孰レカ果シテ外国ニ横行
スルニ至ン、誠ニ一鎮台ノ兵ト一大藩ノ兵ト一旦事有ン
ニ其力ヲ抗敵セシメハ、已ニ一藩ノ士卒ハ已ニ天保度
ノ士卒ニ非ス、幼ニシテ発憤武ヲ講ジ癸丑甲子已來ハ別シ、
テ練兵名節ヲ砥厲ス
長シテ驅馳戰場ヲ歴タリ伐長伐暮已來何レモ東西、
奮走戰爭ニ与ラザル少也、老テ時変
ヲ経道芸ニ通ゼサル者少ナシ近年多事宿老ノ士ハ屢時變ヲ經、
國難ニ逢、且兵書騎射等ニ通ゼザ
ル者、新集烏合ノ徵兵ト迎モ同日ノ論ニ非ル也、其說詳
カニ前編改正兵賦以省冗費ノ条下ニ具ス又此ニ参考スベ
ヲ足ス富強、
是兵力ト財力ト
ノ実策ナリ、然ルニ実患ヲ下ニ施スコト不能、実功ヲ下ニ
責ルコト不能、徒ラニ紛々然タル神官碌々タル僧徒輩ヲ
頼ミ、空言ノ説教等ヲ以テ浮然タル外国ノ勢敵ニ当リ、
沛乎タル洋教ヲ拒ントスルコトハ、一盃水ヲ以テ威陽三
月ノ火ニソ、ギ、一片掌ヲアテ、洪海横流ノ水ヲ防グニ

不異、恐ラクハ天下後世ノ笑ヲ不免、

右ハ実ニ狂妄僭濫ノ至リ、不顧嚴尊無所忌憚奉恐縮候得共、自旧年至向頭昼夜不安眠食尊攘ノ大義ニ困苦奔走、幸以神助今日忝 朝官之末列 天沢ニ浴シ為在候次第二御座候処、今一層ニ至ツテ此大都会ニ外教蔓延、宇内ニ浸淫可仕形勢默容旁觀為在候而ハ、積年ノ苦艱功ヲ一簣ニ欠キ候次第ニテ、又天下方世ノ罪人タルヲ不免候義深ク奉痛慨候次第ニテ御座候処、本より 御廟謨ノ御次第モ不相弁、却而私憂過計ノ至リニハ御座候ヘ共、御一大事ノ義ニ付極密無余蘊申上候様被仰聞候間、密白如此伏奉仰

神鑑聖照候、誠恐昧死謹白、

明治六年五月十五日

右外教已下末文迄ハ三条西從二位様より大臣公ニ密獻スルノ急策按文ニテ御座候、加藤熙敬識

冊子原寸 縦二四・五種 横一七・五種 一八枚

〇二〇〇 東京ニ於テ久光公ノ告諭 御筆

二〇二 群馬県富岡町老医生一万田如水ヨリ久光公ヘノ建白 二通

西洋流弊ニ付憂国論

二〇四一ノ一

乍恐奉別紙候演舌書

先般

賢君御登京被為在、依而は自今以後

主上御補弼被為遊、追日近時之流弊も御改正徳化之 御

仁政ニ立至り可申と、都鄙共に人民拳而大旱之雲霓と

奉渴望候事ニ御座候、賢君之儀は天下之泰斗万望之

所帰、誰か仰慕せさらむや、小生儀は田舎間住居之学

医ニテ、薄劣浅陋固より世用ニ可適者ニハ無之、殊更

稟受多病、近來は老衰潰聾ニ及、全く廢人と相成、今

は微塵も世に希求は無御座候得共、積年之杞憂沈痼ニ

相成、隠処之余暇新聞紙を翻し海内外之異聞を聞、世

態之變遷をも窺、老病慰養之具ニ相棄罷在候処、別紙
之条件ニ読至り平昔鬱悶之鄙衷ニ的中仕候ニ付、沈痾
勃々不堪吁咽、因而其中之三条を抄録且聊愚論を付陳
仕、奉瀆 尊覽候、^(灰)承ル去壬申六月中、

主上 行幸被為在候節 賢君之御建白中ニ万古不易之

皇統茂共和政治之惡弊ニ陥リ、終には洋夷属国と可相
成形勢云々等之趣旨早々新聞紙に出候由親友被話候得
共、其書未タ拜閱不仕ニ付、確實不存義ニ候得共、兼
而天下嵩嶽之御英名は疾より伝承仕居候故、右は金玉
之至言と感銘暗記仕候、就而は誠ニ遼東之豚蛇足之至
ニ御座候得共、微賤ノ輩国家ニ焦慮して憤鬱雖剪胸、
之を言ニ発し書ニ筆する不能、然るを幸刊行流布之書
ニ出るを以て、不願恐怖奉呈 閣下執事候、伏冀ハ僭
妄不敬之罪被為措度外万分一之御参考ニ茂と、消埃之
芹意憂国一片之赤誠

御警察可被下置候、誠恐誠惶昧死謹言、

明治六年五月

群馬県管下

上野国甘楽郡富岡街

医生 一万田如水拜具

島津從三位様

御執事



副白

前件申上候通、残老之廢人自ら拜趨仕兼候ニ付、則ち城
井慎太郎を以奉差上候間、若又御叱声茂御座候ハ、同
人江被 仰聞可被下候、万一芻蕘之言も不被為棄 御下
問茂御座候ハ、尚又吐露肺腑可奉呈陋見区々之微衷候、
恐惶頓首再拜、

別紙

新聞雜誌第七十六号中ニ曰、西曆千八百七十二年十月十
日倫敦マクミラン氏出版ノ新聞紙ヲ得タリ、抄訳シテ此
ニ載ス、日本ノ往先ヲ考フルニ大ニ危難アラシコトヲ懼

ル、日本ノ開化ハ余リ進ミ過キニテ、之ヲ譬ルニ迅走ノ馬ヲ無理無体ニ馳スレハ俄ニ倒ル、ト同様ナリ、又政治改革ハ下ヨリ起テ専ラ大名官員ノ働キニ出シコトナレハ、彼大名官員モ当時權威ヲ奮ヒ、大ナル才智アリト世人皆奉承センガ、忽チ其權柄モ零落シテ遂ニ方今ノ有様ニ至レリ、国家守護ノ原由ナル政体一定不易ノ目途覺東ナシ、此先キ立君專治ニ確定スルヤ、又ハ共和政治ニ変スルヤ抑君民同治ニ至レルヤ未ダ知ルベカラズ、当度日本ノ改革ハ殆ト魯西亞ノ改正ニ似タリ、魯國ニテ貴族ヲ廢棄シ貢稅ヲ増加セル等ノコトアリ、深ク考ル者ハ如斯速ニ弛(弛カ)ル所ノ日本ノ進歩ニ不都合ノ起シコトヲ当惑セル計リナリ、

又一危難アリ、若年ノ書生兩三年外国ニ留学シ、不熟ノ學ヲ以テ帰國シ、直ニ大事件ニ關係シ、遂ニ其威力ヲ以テ政府高官ニ任セラル、コトナリ、實ニ此等ノ學者ニ重大ナル政事ノ吟味ヲ任センナラハ、日本将来ノ事照シ合セテ見ルベシ、

日本横浜ヨリ歐米ニ向テ発艦セシ若年ノ書生ハ、自國ニ於テ教育ノ功ヲ積マズ、直チニ各國ニ留学シ、而シテ國法敵令モナク各思ヒノ低ニ高上ノ學問ヲ求メ、僅ノ年月ノミ止留シ、浅少ナル修業ニテ既ニ學問モ深ク進ミタル如ク、傍若無人ノ量見ヲ生シ、猥リニ自負自重スルナルベシ、斯ル浅學ヲ挾ンテ帰國シ、國人海岸一步モ出ザル者ニ向テ嘘鳴欺罔シ、終ニ日本ヲシテ洪水ノ溢ル、如キノ患アラシメン、且各留学セシ國ヲ鼻屑シテ、米利堅ヨリ帰リシ者ハ共和政治ヲ唱へ、英吉利ヨリ帰リシ者ハ統一政治ヲ稱シ、区々ノ議論其混雜思ヒ遣ラレタリ、此後日本若シ如此學者ノ為ニ支配セラレテ、人民安全スレバ、天ノ助クル倖僥ト云ベシ以下一條アレトモ此ニ略ス、

上件ノ三条一閱仕リ、愕然ト驚キ悚然トシテ恐レ、稍暫ク大息シテ窃ニ謂ク、彼國人ニシテ早ニ吾邦ノ形勢洞視スル斯ノ如、愚生平昔此杞憂ヲ抱クコト久シ、然トモ未ダ曾テ一言ヲ発スルコト能ハス、夫ノ政体一定不易ノ目途覺東ナシ、此先キハ立君專治ニ確定スルヤ、

又ハ共和政治ニ変スルヤ云々、次条ニ不熟ノ学生ヲ以テ直ニ大事件ニ關係シ、遂ニ其威力ヲ以テ政府ノ高官ニ任ゼラル云々、又其次条ニ若年ノ書生淺少ノ修業ヲ以テ傍若無人ノ見ヲ生シ、海岸一步モ出ザル国人ヲ嘘喝欺罔シ、終ニ日本ヲシテ洪水ノ溢ル、如キノ患アラシメント云々等ニ至テ、不覺掩卷テ痛哭ス、苟モ神州ノ男児タル者之ヲ讀テ誰カ慨歎セサランヤ、句々言々吾朝ノ将来ヲ指掌スルガ如シ、然レトモ廟堂ノ公卿方ニ於テハ更ニ御注意アラセラレザルガ如シ、西洋事情ニモ各国ニテ古來ノ風俗旧例ヲ集テ一体トナシ、次第ニ其形ヲ成シタルモノヲ国法ト名ク云々、又曰、其形ヲ成スニ至ルマテノ順序ハ甚タ遅々トシテ殆ト其起原ヲ知ル可ラスト云ヒ、又法ノ本ハ其國ノ習俗ニ由テ來ルコト明白ナリト、此等ノ言ヲ以テ考レハ、其習俗ノ遅々トシテ幾千百ヲ經テ其國法トナリタル者ヲ一旦ニ廃棄シテ、西洋ノ風俗ニ改変セントスルハ、豈ニ危難ヲ招クニ非ンヤ、故ニ其次条ニモ古風旧例ヲ改メ其

方向ヲ正ス可シト雖モ、之ヲ廢スルハ甚難シト云、又曰、妄リニ新奇ヲ好ミ紙上ノ空論ヲ信シテ其旧ヲ棄ルハ、勿卒ノ甚キト云ベシトモアリ、尚又古來ノ國法ヲ一旦ニ改変セントスレハ、何レニモ一度ハ國乱ヲ生ス云々等ノ説モ見ヘシト覺ユ、西洋事情ナドハ卑近ノ書ナレトモ、上件ノ説ノ如キハ國政改革ノ今日ニ當テハ緊要ナラン、冀ハ在上ノ賢君方渥ク此ニ深慮遠謀アラセラレ、先ツ第一國典ヲ確乎立サセラレ、歲月ヲ積ミ漸次ヲ以テ開化十全ノ偉勲ヲ遂サセラレン事ヲ、日新真事誌二百廿五号ニ記載セシ投書中ニ、政府ハ人民ノ政府ニシテ政府ノ人民ニ非ス云々、故ニ人民尽ク通商ヲ欲セハ、政府之ヲ保護シテ貿易ヲ盛ニス、人民拳テ宗論ヲ興セハ政府之レヲ許可シテ教導ヲ博フス、之レ嚴父ノ愛子ヲ慈育スルガ如シ、茲ヲ以テ政府タル者ハ人民ノ帰望スル所ニ随テ事々物々堅固保護スルヲ專務ノ職トス云々、

愚生窃ニ謂ク、此議論ハ法則ヲ歐米ニ資タルナレトモ、

本朝ニ於テハ然リト為シ難シ、僕ハ却テ危疑憂懼ヲ増ス、如何シナレハ、政府ハ人民ノ政府ニシテ政府ノ人民ニ非スト、此言ヲ信シテ人民其意会ヲ謬レハ、向後君上ノ治率方一人望ニ適セサルコト有レハ忽チ背悖シテ、人民ヨリ賢明才徳アル人ヲ択テ君ヲ立ント欲ルノ意ヲ生スベシ、是即チ立君專治ニ非レハ、則チ共和政治ニ変スル起原トナルコト疑ナシ、又人民拳テ宗論ヲ興セハ政府之ヲ許可シ教導ヲ博ス云々ノ言ハ、將來耶蘇教ヲ暗ニ誘引スル基礎ナルベシ、因テ忌諱ヲ不顧此ニ一言ヲ贅シテ賢覽ニ奉ル、

横浜ガゼット新聞ニ、日本ノ和尚二人耶蘇ノ教受ヲ受ンガ為メ普國ノ都府ベルリンニ到リ、頻リニ西教ヲ学ブ、其通弁タル者モ日本人ノ仏語ニ通スル者ナリト、

或人ノ話ニ、去壬申ノ九月下旬東門跡ノ僧一日東京府ニ參ル由ニテ、自宅ヲ出テ横浜ニ到リ、直ニ外国エ出航セシガ、是ハ全ク省府ノ内意ヲ受テ耶蘇教伝習ノ為メナリト、此説ニ由テ参考スレハ、上件ノ和尚ハ恐ク

ハ此僧ナラン欤此僧ノ話ハ其頃都下ニテ紛々ノ巷説モアリシガ、爾後東本願寺ノ老僧及ヒ其門派一同ニ遣ラレンシ確証ヲ得タリトテ新聞紙ニ出テ世人ノ知ル処ナレバ、上件ノ真偽判シ難シ、又報知新聞ノ投書中ニ、

仏法ハ方今議スベキ時ニ非ス云々、捨テ於テモ自ラ衰廢ス、然レトモ亦後日興隆ノ時アルベシナド、喋々弁ヲ廻シ論說ノ中暗ニ耶蘇ヲ引ノ意味含蓄明了タル故、奇怪ノ至リト思ハレシガ、恐レ多クモ尚意解シ難キハ、二月廿四日ノ御布告中ニ、從來高札面ノ義ハ一般熟知ノ事ニ付、向後取除可申事ト被仰出アリ、其深意ハ下愚ノ測リ知ルベキニ非レトモ、彼是ヲ照シ熟察スルニ、廟堂ニハ最早耶蘇教ノ義モ後日施行アラセラルベキ御決議ニ相成リシコトニヤ、噫去ル上ハ最早片語タリトモ間然スベキニ非レトモ、耶蘇ノ義ハ積年苦慮セシ故、去ル己巳ノ十月中モ集議院ニ建白奉リ、其節ノ愚言中ニ、耶蘇教一度流布仕レハ千古不拔ノ禍原ト相成リ、乍恐神州御國脈ノ断否ニモ關係仕ル一大重事ト奉存候云々等ニ及ビ、集議ノ諸君ニモ建白ノ旨一々尤ナレハ、当院ヨリ付札イタシ、太政官ニ進達可致旨仰聞アリタ

レトモ、太政官ニテハ更ニ御採用ニハ相成ラズ、最モ右等ノ事件ヲ評議ニ及ベハ直ニ外國人エ漏通スル故、又何カ難題出ルモ計リ難キト御遠慮ノ由、後日ニ及デ伝承仕ル所ニ候、

前件ノ御廟算ニ候ハ、最早一言モロ外致ス間敷候得共、耶穌教ハ全ク共和政治ヲ醸成スル胞胎ト相成リ、其変遷即チ

皇統ノ断続ニ關係仕ル国家至大ノ患害ト奉存候、明君ニハ別段御賢慮可被為有候得共、愚直杞憂之余奉冒瀆 尊聽候、不禁恐懼栗^(稟)之至、

明治六年五月

一万田如水拜具

あ

冊子原寸 縦二〇糎 横一三・七糎 一一枚

二〇四一ノ二

副白

小生儀ハ積年抱杞憂、今は耳聾全廃人と相成候鬱悶之余、近世流布之新聞紙を毎読抄録仕候而、鄙評相加へ候ニ付、

其中数条抄出仕、先般好兒城井寿章を以而進呈仕候処、

御嘉納被為在候由同人より被申越、意外之光榮難有敬承罷在候、就而ハ尚又管見之評論中より尤時弊ニ関涉之箇条を抄出仕り、且新聞雜誌中之付録一卷併而進呈仕候而、謹而奉備乙夜之台覽候、方今之世態ハ元来 御洞識被為在候通り候得共、乍恐時世之体裁

聖慮ニハ如何被為在候哉、是迄之御政体ハ実ニ属国同様にて、神州之威儀風俗ハ日々消録いたし候、加之一昨年来より追々政度律令を始め凡百之事皆洋風ニ倣擬し、

第一

朝廷ニ於而も洋服を以而大札制服と被為成、刀剣を廃し椅子ニ而立礼より殊ニ恐くも

皇上 御散髪ニ被為成、皇后にもアラビヤ国之馬ニ西洋鞍を置而戎服にて被為召候由、

尚又永世不易之高札面迄取除被為 仰出候程之古今未曾有之御变革ニ立至り候、天下之人賢愚智不知となく皆一同驚歎疑惑罷在候、誠ニ以而恐多くハ御座候得共、今般

進皇仕候別冊時宜ニ寄り不苦候ハ、極御内々奉塵

天覽候様仕度奉存候、恭惟天統之御勅智聖明ニ被為在候

ハ、一旦豁然と御悔悟被為在候ハ、社稷生民之大

幸不過之儀と乍恐奉存候、而して之れを懲慙して啓沃輔

佐し奉るハ、実ニ

明公閣下之御任と奉存候、区々微衷奉言上度儀ハ難尽筆

紙、百中一二を採録して万一之御採択ニ奉備候、消滴茂

御裁納被為在候ハ、実ニ意外之大幸不過之と奉存候、

誠恐誠惶頓首再拜白、

明治六年七月

熊谷県下

上州富岡医生

一万田如水



謹上

島津従二位公

下執事

冊子原寸 縦一九種 横二三・五種 三枚

二〇三 佐賀県士族柴田洪平ヨリ久光公へノ建白

時論

二冊

二〇四二一

〔表紙〕
「時論 前書」

一上無威敵、下不懾服シテ終ニ綱紀紊れ、国基顛墜ニ及

候事、乍恐曩昔聖王明主之御治世ニは賢明忠謙之士追

々相進、奸佞邪曲之徒漸々貶黜相成、夫故御威光御確

重御政徳御盛大、御仁恩御潤渥ニ而上下奉欽慕、寃罪

之民無之、又僥倖之族も無御座、四民各其職業ニ安候

得共、世之澆季ニ随ひ人物次第ニ浮薄相成、御政事向

不一貫処より終ニ奸臣賊子之類致擢出、重権を握り私

門を営み我意を振候様成移、随而御政令向も兎角非薄

酸烈之御新法ニ相変し、又外夷侏儻^種左衽之風ニ陥り無

何 皇綱頽廢し、王者之御威權自と相衰、民俗一般

皇政奉怨望、有志之士は益慷慨義烈之心相発し、又々

騷擾相及候通時勢日ニ差迫候条、和漢興廢之事跡篤と

御觀破相成、一際人民致安途候様更ニ方法被相付、御威敵御重大下々致懾服候様有御座度事、

一方今最大枢要之事件は最兵務重大ニ候処、海陸之軍制不明、法律不正、學術不精、兵氣不振、依之外夷驕侮し、茨木県其城郭を燒失して不憚、甲斐・豊後・越前等之一揆不断差起候得共、上勅奏官より下兵卒水火夫等ニ至迄驚駭する者なく、只様學術粗瀆ニ陥り、練磨憤勵一際危急御用相立候様心懸候向無之、徒ニ官途之上下を論し、日常之學課相怠、制行状不埒ニ而無謂容貌を飾り淫欲を恣ニし、安逸無頼之輩而已有之候而は、
迎も 皇威を赫張し人民を綏撫し、就中外夷を征し刃陣を安候等之義は、千万歳を雖歷不相叶道理ニ而、是畢竟凡庸暗愚之人才御登庸相成、天下之安危存亡之理ニ暗く、又治乱興廢之術ニ疎く、人民は日ニ怨望し奸賊は月ニ朋党し、終ニ數百年希有之 御恢復一挙シテ土崩瓦解之期且暮差迫り、実ニ不勝慨歎事、
一乍恐当今之御政致を奉傍觀候ニ、奉誑惑

至尊之御幼弱、御德行且御學問は不奉御教誨而已ならず、

神祇御崇尊より治国安民之道は尚更不被奉御勸勵、名

器を尊重し廉恥を砥礪し、可否献替之義絶果、第一

天智帝御中興以後

宇多 後三条 後鳥羽 後醍醐帝を奉始、就中

先帝之御憤慮等毫も不被為懸

叡慮通申上、日々非薄輕易之御行状奉為蹈、人望日ニ

消滅 皇威月ニ欠損し、忠義無双之御国柄却て五倫淪

没之外夷を崇尊し、其弊政を主張し、善惡を不駭、得

失利害を不弁、総て之を軌模し、名器顛墜、廉恥糜滅

し候処より終ニ魯国公子朝覲之砌は辱も

一天万歳之君をして横浜 行幸を奉促、前代未聞之御施

設恰も君臣之礼遇被為尺候通之御儀、則御施行被遊候

様御勸申上、殊ニは御饗応之余とは乍申、戲場迄奉誘

導候由、道路之言語実否如何とは奉存候得共、赫々た

る日月光臨

天津日繼代々之帝之御照覽も可有御座之処、斯迄 皇威

為奉輕蔑候亘如何ニも残念之至ニ而、有志之士ハ益感傷悲泣ニ不勝事、

一御歴代之帝深神祇御崇尊被遊、大小之事故必宗廟社稷之神靈ニ被為告、第一大掌、^(書)新掌^(書)之御儀式を始諸社毎歳定格之御祭典有之候故、神祇官必諸官之元ニ被為置候処、方今神祇官被廢、乍恐皇威日ニ衰可申奉感泣候処、教部省被為置、凡下神仏を不弁様相成候半、右教部省又々文部省合併被仰付、終ニ神仏混淆、紀綱頽廢ニ及、就中文部は近來外国之文事を主張し、皇學及漢學を廢止し、君臣五常之道路を泯滅隔障し、独耶蘇之教法を尊崇し、数千歳神祇崇敬之羈を破却し、或は是迄被頒布候

伊勢大廟太祓麻を停止し、又無謂曆書等も廢止して西洋曆を被施設、無識之至、外夷好着之事とは乍申、府県人民之憂患を不被顧之為体、且坊官之叙位除目又何等之事ニ候哉、実ニ涕泣之御時勢ニテ無用之御更改、是全大体不明政事向不知案内故ニ而、万古不替之皇統

空敷委泥土候様成移り、是又不勝憤慨事、

一方今国基顛墜紀綱頽廢ニ及、神祇破却して耶蘇皇張し、洋夷頗跋扈して人心悉萎縮し、法律不正、淫刑敷行、撰拳不明、諂諛用事、租稅酸酷、官々肥大我意を振淫行を事し、女謁苞直大ニ被行、言路壅塞し、慨世之者ハ則禁錮束縛して道路目を以す、破産之徒日ニ多、乞食も生を不聊、上下困弊人民乖離、比年之一揆終ニ茨木・山梨之騷擾を醸成して、又越前・豊後等之動搖を馴致し、是末如何成事変致出来候哉、実ニ難計時勢成移候得共、議院之義は慎微戒隱之道は指置、拾遺補欠之義不相立、徒ニ容色を飾婦女ニ耽り候風評道路ニ溢て、議事は洋夷を尊ミ、皇国を卑て必国家ニ不有益、其院局は
禁内ニ在て奴隸不通言路を開之名ありて、下情普達之無実、又議院之位置外夷因習之姿あつて又外夷装置之權なし、立局爾來數十ヶ月を歴共一事之矯正を不聞、如此無用之官局被為置、許多之官費月俸泥土ニ捨候よ

りも甚敷候条断然被廢止、彈正台御再興人才拔擢被任之、是非曲道を糾弾し奸悪之官々を黜罰し、賢良忠直隱退之士を撰挙し、菲薄醜酷之御政令御改革相成、一際善政被為行候様有御座度事、

一治世之最大急務ハ人才拔擢之方法被相立候義極簡要ニ候処、方今佞奸邪智諛狡猾之徒追々相進、其党与相集時人を誑惑し、収斂を重し、莫大之土木を興し、又殊ニ淫行を旨とし、御維新間爰切憤激心力尺竭之向々は令黜退候故、有志之士ハ益孤憤を懷き、人民之怨望今日より甚敷時無之、和漢之先蹤秦末南宋ニ擬似し、挙朝趙高・秦檜之徒致輻湊、天子を輕蔑し我意を振淫刑を施候末は、乍恐

皇体も終ニ胡亥・子嬰・徽宗・欽宗之覆轍被為蹈候様相至可申、又近来旧幕ニも井伊(直野)・安藤(信正)・久世等(広周)之如き佞邪奸曲之輩擢出して、忠謙賢明之徒を黜罰殺戮候、余殃終ニ天罰不廻踵尖ニ御恢復之御大業被為奏候義ニ而、旧幕ニは全人才撰挙之方法不相立、収斂を厚し人

民困却候余上を奉戴不致通成移り候顛末ニ候処、又々右等之覆轍を慕ひ被為蹈候通押移り、実ニ感泣ニ不勝、將此末何日迄も此佞之御政体被為蹈候半は、何時奸賊致憤起如何様之珍事致出来候哉も難計候条、奸邪狡猾之徒は勿論、凡庸諛諛之族は速ニ黜罰被相加、人才撰挙之方法更ニ被相設、賢良方正之士御撰択相成、国基創立紀綱皇張之基礎是又更ニ被御打立候様有御座度事、一能を量り官を授け才を択て職ニ任し候義、治具之最大基本ニ候得共、自然其能を不量其才を不択して其官職を授任候義は、謬妄第一ニ而、当今任授黜陟之義不正不明之御事可有之筈ニ而無之候得共、間ニは何等之人才御拔擢彼是ニ而、御一新間爰切功勞之向は漸々罷官免職相成、聚斂之輩而已追々御登庸候処より、下々之困苦窮迫を不顧大变革之御事御国用御凋令(零)ニ仮托一際収斂を厚し、郡国人民之優余を檢査し、更ニ租税之御規則被相立、新ニ刑律を編し如何成罪科ニ而も償贖金ニ而被相有、一事ニ而も夫等之目途相付候向は速ニ

昇進有之候故、小役人ニは就中人民之折合を不察、何事欵見出聞付夫を取柄として一級ニ而も昇達可致存慮差構へ、八方ニ耳目を賦り候付、其内下々凡愚之至自己困迫之余他之優余を致批判候処より、是又無拔目被聞付、夫々御所置相成、又右聞出候人ニは尽力之廉を以追々昇進相成候得は、外人々ニも又此ニ見習兎角下々之穴隙を相探候様相至、上下之困窮可申様無之、実ニ歎ケ敷御時勢ニ而御座候、板倉某も天下之政道は擦棒を以一升柀を搔廻し、四隅之穴隙は見逃候様沙汰有之候由和漢之ためし、収斂を重して風俗を敦美ニし官職其人ニ非して人民安逸なる事無之、依之御国用不足ニ候ハ、無用之官人を減廃し、一際御儉約被相立土木之營築を見合、国用充実之時を被待、奢侈を禁して下民業を楽候様有御座度事、

一地方官之義は地理之沿革田園之墾廢、豊拓之区別も御座候得共、式拾里乃至七拾里之広地管轄之県も有之候付、其内暴悪奸兇之徒無之とは難相定、又水旱風雨之

憂患有之、又不慮之災害も有之候故、間々人傷殺害は勿論出火洪水を始山林田野之検査より堤防橋梁等之土木築造之事故手筈も有之候処、五十万石以上下を區別し、県官人員多寡之定規被据置、殊ニ貢米諸税金上納之期限被相定候通ニ而ハ、何分御定時限ニは可届候様無之、下民安途其職業ニ安候通ニは中々行届申間敷、將政府諸省を傍觀仕候ニは指而官員多寡之御定規御座候共不承、夫故自と多人數相成、事物之速整必然之道理更ニ不珍奉存候、地方官ニは第一教化禁令最大務ニ而、租税等取立方ハ其次件ニ而可有之候処、右様官員之定規被相極候而は、逆も下情通徹不仕義当然ニ而、自と強は弱を圧潰し、剛は柔を掠奪して忠孝不顯、暴悪公行、教化不被行、固陋不開、物産不起、商売不通又隨之川欠亡地之類愈多、墾廢草荒之田益殖、橋梁不架、道路不拓、水旱風雨之手当不行届、日々下民之困苦相嵩、已ニ或県杯ニは管内之郡村大方公事訴訟繁多ニ而、右公事ニも中々一通之事故ニ而無之、兩三年乃

至十年ニも相及候得共、仕置不宜故欤官員不足之処より欤、今以致落着兼、畢竟教化不行届処より之義ニ而可有之、殊ニ横死・溺死等之始末、水損・出火等之事故、橋梁營繕・山林伐払等之届願共陸續致出来候得共、下手之術は指置、第一夫等検査ニも人員差支候位ニ而、其他之事件枚挙ニ不暇、実ニ一県副形之通ニ而、脇々諸県ニも定而不都合之事件も間々可有之、抑地ニ依て官を制し人ニ依り事を異ニす、頗偏頗之様被相考候条今一層御吟味相成、諸省ニも御留用御減省被相付兼候通、成丈彼是御校合相成、於県ニも官員増減は勿論御政令向其県令・参事ニ御委任有之、下民怨讟困窮之族無之、御政令向行届候様有御座度事、

一地方官之義は、王化を敷き教令を施し、風を美ニし俗を敦し、孝悌を表し忠直を挙げ、暴戾を禁し奸惡を懲し、農耕を励し紡織を勧め、水旱之禍を遠け凍餓之患なからしむ之類皆教化禁令ニ基き県官之最大職務ニ而、聴訟之權、収租之任総而之ニ委任して、威嚴虓武

を重し仁恤撫愛を厚しむ、故ニ暴惡不軌之徒は之を捕縛し、人民煩擾之事故ハ之を糾弾し、水旱災害を救助し、四民其職業を安せしむ、若水旱災害並臻人民之憂患不少公事訴訟不絶、不軌暴惡之徒横行し、冤罪不明は全県官之落度仕置不正不明より之事ニ而、古来より其科ニ依、或は貶黜或は罪科を蒙り候様稠敷御法則被相立置候、夫故貸与難被致、右權も兼而被差免置候処如何之御事ニ而可有之候哉、今般乍恐御国用御凋弊之折柄、巨大之御費用を不被為厭、別段官局被相開官員被差廻、聴訟等之事件は司法省より御管轄相成、又租税関涉之事故は大蔵省より御取扱相成候趣、定而御宏碩之御利益御盛大之御功德可被相奏候得共、実は叙任之人柄ニ依刻薄慘烈之事業而已相進、仁愛撫恤之道終ニ絶果可申、於然は下民之情状愈以 皇政を奉怨望、危急困迫之余不得止事非常相企、一揆等所々差起候ハ、方今御兵力も御強大無之折柄、如何之御所置可被相付候哉、実ニ不容易御時節ニ而、最早不遠内右等之

事故出来目前ニ御座候処、何日迄も山東は郡盜之思召ニ而打進、此假之御酷政御進歩相成候ハ、御恢復之御詮も無御座、終ニ夷狄之支配共可相成、実ニ感泣之至ニ不堪候条、矢張是迄之通県官へ御委任、税則等を始皆以旧法ニ復し、諸事行届候様相成候ハ、新規官局被相設候御費用向も莫大御減略相成、又御盛大之御仁恤相立可申候条、小欲大損無之候様有御座度事、一古来より聖王明主爰切農耕之義御心力を被為尽、余程御勸励相成、僅狭少之空地副成丈田地ニ被取立、一莖ニ而も作増米穀增多相成候様御任組被相立候義、人民之死生ニ致関係、一日も不可欠之物品ニ而、殊ニ水旱風雨之憂患有之、又豊凶之年故も有之候故、如何成珍奇之物産有之候共、右田地へ取立候義嚴重御法度被据置候末ニ而欵、西国筋ニ而は田地之義自然屋敷地相顧家作相営候ハ、篤と加検査、其地稅被相増、過分之稅納仕候様有之候義、畢竟田地減省之予防法ニ而、殊ニ鄉村之義住居之人民皆以耕作一篇ニ而、別家業相営候

義固嚴禁被相立、商人は勿論諸職人別決而村内居住不被相叶、尤往還筋宿駅丈可也も有体之家業被相許置、其他之場所は如何之訳有之候而も一切不被相叶義は、畢竟下民之情狀只々利欲ニ耽候者ニ而、作業商法等致比較成丈身体不疲方して利潤を得候勝手耳ニ相走り、終ニ耕作取止候様成移、自と米穀致減耗払底候段相置、若凶歳等打続候ハ、救助之方便相付兼候処より前件之通稠敷御法則被相立置候処、先般大蔵省御布達ニは田畑ニ而も成丈取縮、桑茶楮漆之類植立、一廉之利益相與候様、剩へ農業取止商法相営、不苦趣迄御策出相成候由、如何成大利有之、先賢古哲之趣意相悖り御政令向万般齟齬相及候哉、右様只々利潤之事而已御勸相成、自然凶歳打続米穀乏絶相成候ハ、外夷を便り飢餓御救助可相成哉、実ニ暗愚之御立法ニ而古人之深慮を水之泡沫となし、利欲を一篇として未来之大禍を不知、一個之小智を振て先啓之大謀を非とす、必人民速ニ飢餓之憂患ニ懸候義、是又目前ニ而、既ニ享保之凶

歳、文政之風災等ニ而四方飢餓之徒路傍ニ溢れ、死体郊野を埋候体之事変も為有之由ニ付、深く心志を古今ニ照し前後を被顧、農耕之義先前之通一際御勸励有之、今日より凶歳之予防被相立、人民飢餓之憂患無之様有御座度事、

一 近来諸大臣方を始大方之人気言行を致傍觀候ニ、日本魂致飛散、一として信義を厚し忠直を本とし候向無之、曖昧糊糊として徒ニ光陰相送候迄ニ而、曩昔聖王明主之御治世ニ本つき 御維新之御大業万代へ照耀候通奉補佐候人無之、実ニ遺徳不斜奉存候、一体御一新之御奏功は辱も

先帝之御憂慮、徳川氏久敷 皇政を奉纂奪候義被遊 御憤慮候耳ならず、第一外夷之猖獗を被為厭候処より有志之士奉継繼

勲慮、眚勉尽力之功相立、徳川氏速ニ 皇政奉返還事未奉継

先帝之御遺慮、元年ニは既ニ外夷御伐払可相成御決議も

為有之由之処、如何成事故ニ而欵御取止相成、近来ニ而は右等之事は中々及も不依御事ニ相成、攘夷杯と唯唱候人ニ而も束縛ニ預り、却而外夷を主張し居宅衣服は勿論剪髪・脱刀ニ而、甚敷は外夷ニ諂諛、朝之美話夕は醜談ニ相転し候通相変し、治平之習とは乍申段々鋒も相鈍れ、二年ニは天下之強国英国第一等之風評而已ニ而、直様英国ニ可依頼被思召込候半、英公使バークス^(バークス)在留中ニ而、此者ニは各国公使中最拔群之人才ニ而為有之由ニ候得共、同人ニ被論破終ニ御政事向迄御質問有之候通成移、剩万般英国之制度ニ擬准し海軍を始學術等全英制ニ御変革相成、速ニ教師等御雇入、学生等數多被差遣置候処、仏普之二国及鬭争、普国勝利を得候趣ニ付陸軍ニは普制之方可然杯相唱候向も有之、夫々御接遇も相替り、将米国は別て近国と申、兵力も強大ニ而余程豊饒之国柄候得は、尚更懇熟御交接無之候而不相叶候杯とて、又々御取入、追々留学生杯も大総被差遣候半、魯国ニは三大洲ニ跨り山丹・満州も既

ニ併呑し、普仏之間ニ虎視狼顧し、宇内南面之狀態有之杯とて、又魯国ニも肩を被入、公子来朝之砌は前件之通之御接遇も有之、日月地ニ落て確乎たる御大体も崩解し、將信義も不相立、唯々世之風説而已ニ而諛佞日を送り、儉安姑息之御事ニ相成候得は、是末御和親御条約之國々自然御接遇之彼厚此薄相咎御取合ニ及、軍艦等差向候ハ、如何御所置可相成哉、今時之海陸軍ニ而は何分緩急御用ニ相立申間敷、左候ハ、魯国等ハ御依頼御戰爭可相成候哉、実ニ無覺束義ニ御座候、惣而元來 皇国之武威最早衰絶相及、廉恥之風消滅候上は、如何様之砥石ニ而磨礪相成候共、逆も上研之跂ニは相至申間敷候得共、責而元年之御決議ニ被相依外夷御打払之御所置被相付、由断之大多を覺醒し、本性之武風ニ返し、海陸軍は勿論諸官省尚更御憤発相成、貧国弱兵之御仕与被相廢、本製之富国強兵ニ被御仕立、輕薄之宿習を矯正し、淳朴之風俗ニ変還し、狡猾を制し信義を厚し、外夷之交際被相慎、強弱ニ依偏頗之御

接遇無之、將彼等より些細之口舌不申入、実ニ粟々震懼いたし候様一際御憤勵有御座度事、

一昔日徳川氏横浜開港ニ及、芝八ツ山夷館造営を免許し、堀某諫死又攘夷之輩隨而燒失之挙有之を以、其館終ニ廢し、 皇威之衰絶今日ニ不及、外夷も又唯徳川氏を卑下すと雖も、未諸藩之武權を懼而敢て今日之跋扈ニ不至之処、近来御国体を不弁別廉恥を不顧念、奸佞兇黠之徒頻ニ御登庸相成、諸侯之武權を奪ひ日々我武威を鍛去、信義を忘却し、礼讓を失ひ、第一外夷接御之道を謬誤し、甚敷は諸侯之邸宅を没入して却而外夷へ投与し、皇城之門郭を毀壞して、其守備を徹す士民之出入を禁して、外夷之行通を異とせず、又大臣怯懦之色ありて外夷忌憚之藩なく、終ニ五畿八道之民財を掠奪して建築を始め、頗繁華之商地をして花夷之雜居を免し、数世占地之人民をして亡地失業之憂患ニ令被掛洋夷之為ニ路頭ニ迷はし、实ニ無識之至言語ニ絶候条(兼説)、皇城近傍之公使館皆以御取上、外夷総而横浜ニ追却し、

花夷之雜居を禁し早く建築を廢止して先前之通居宅造營差許、商賈各其職業ニ安し、上下各安途いたし候様有御座度事、

一 大凡天下之政事は外夷接御之難事ニ而無之、又商法盛拳之苦事ニ而無之、人民綏撫之一事ニ而、夫と申も只衣食住三個之大便を令得迄ニ而、外事無之と奉存候、然処今般五十四ヶ条之御条目を以嚴重法律被仰出、殊ニ東京河岸地等一切家作不被相叶義は勿論、是迄數世相營致住居來候家作ニも共々致毀潰候様被仰渡候由、抑右河岸地立家之義は、大方京堵三分一之地位ニ而、元來是迄幕政ニ悖り不正之廉も種々可為有之候得共、指当人民之難渋前代未聞之筋ニ而、殊ニ代り地等一切不被差出由ニ而、反的居宅相困り、第一京橋筋去春大火等ニ而殊之外困弊、家業向副碌々不果敢取半、又々家屋敷迄御取上相成、建築被相始大金不差入候而は居住不相成趣ニ付、泣々諸方へ立越、一方可致難渋由ニ而、兎哉角數十万人之困苦相醸し候得共、夫等之筋

ニは少も不被為厭、刻薄殘忍之御施行、下々一般只管御上を奉怨望、皇政ニ厭果候様相成候得共、自由自在之權相与候杯相唱へ、謬妄千万之義ニ而御座候、抑徳川氏江戸基業人民大聚之願望故、形之通廣大之屋宇數里ニ連候通相成、夫故初嚴禁被相立置候河岸地等も人民聚落之余立錐之地無之旨を以漸々見逃し、家作差許候義と相見へ候処、其定ニは少も被心付候人無之御時勢とは乍申、実ニ無是非次第ニ御座候、全体皇居も被為置候位ニ而は此等瑣細之義ニ不被関、尚更戸籍一層増加之御制度社可被相立筈之処、御政事向日増細微之事件ニ陥り、下民之困苦不被顧狂暴之挙而已有之候而は、恐多も皇運被為傾候外無御座、実ニ慨甚千万之至御座候条、責而は北条氏之世末遊歴僧相歎候事跡等篤と被相考、徳川氏淳興之遺轍被思召、合人民綏撫之道被相立、四民欽慕之御仕置被相付候様有御座度事、

一 司法之義は別而大名ニ而刑戮を掌り、又監督を兼其人

を得候得は、重権之ニ帰し其人を得不得は上下不懾服し
て、終ニ無用之器ニ相属可申之処、追々刑典等更ニ被
相設、普く天下ニ被為敷行候ハ、先以古今を照合し、
就中近代を斟酌し、是非曲直を甄明確定し、上下之情
状を洞察候上立法無之候半而不相叶、第一司法は治
國之大職ニして、刑律は又安民之重器天下之公法ニ而、
一人之私法ニ而無之候故、仮令何程外夷好着とは乍申
皆其方法を主張し御变革相成候訳ニは決而相至申間敷、
抑法度等之義は上ニ相立候様可被思召候得共、中々左
様之訳ニ而無之、上下一般相守候半而は法とは曾而被
申間敷事と奉存候、然処既ニ先般御布達相成候新律、
殊ニ今度被相違違式註違等之五十四ヶ条御策出相成
候得共、上下何れも難有奉戴可仕者無之、畢竟其人を
不被得訳ニ候哉、刑律全淫刑ニ帰して不正不明不被行
廉而已多々有之、前代未聞刻薄酸烈之御制法迫も幕制
諸藩ニ而も筒様之御法則無之、上下殆困却を極め、怨
讟之声道路ニ満候通相成、万民保護之ため御施設相成

候事とは不相見、却而玩器ニ陥り、折角被相立候司法
重大之御威権日々消滅相成、下民懾服之場合不相至、
是又 皇運被為傾候一端ニ而可有御座相考候条、乍恐
司法省被相廢、更ニ刑部省御再興、是等之廉々被御取
戻、是迄之刑典ニ被相依、勸善懲惡之甄典更ニ被相設、
上下致安途候様有御座度事、
一 中古田地之法徭役賦租之制、関市諸税之規、皆土地之
肥瘠、人民之位置ニ依御制度被相立候処、鎌倉以後足
利氏紊政ニ及、英雄割拠之勢ニ馴致し、各便宜を計、
更ニ租税之制法を相設、徳川氏又其遺法を守方法被相
立置、其内少々之变革為有之義ニ候得共、下々指而難
洩等之事故無之、勿論諸藩ニは先代之古格相用來物議
等差起候障碍無之候処、昨年来廢藩立県之御政体相成、
今般更ニ徭役賦租及関市運輸之諸税皆以御増加相成、
下々一般殆致困却候由、右は外夷御交接以來諸僱年月
ニ貴騰相及、殊ニ 御一新之砌或は兵火ニ懸り、或は
軍役等打添窮耗衰窶相究、其償補副相付兼候半、又候

千古希有之新法牛馬之稅より地券其外百般新奇苛酷之御制度被相立、人民之生路最早絶果、此上凶歳ニ而も輪廻候ハ、只々街衢ニ致餓死候外有之間敷、夫故諸県追々騷擾ケ間敷事件有之候得共、寸分夫等之筋ニは少も不被御氣付、仁恤撫愛之道弥増減失、上下之困乏窮迫今日より甚敷時勢無之、畢竟此等之御政体成移候義も外夷之御国債有之故と奉存候得共、全大蔵省出頭之向々出納筋極不知案内ニ而、廢藩之御詮も不相立、其上形之通苛酷之収斂被相整候而も、愈困迫を被相究上下一般難渋之場合相至候、一体御一新之砌徳川氏其外之債金千万両程之由伝承仕居候処、当今道路之風説ニは莫大之御国債相嵩候趣、右は如何之訳ニ而右様御増加相成候哉、殊ニ近来夷人殺害等之義打絶無之、又戰爭ケ間敷事變も無之、第一郡県之御政途夥大之御租稅御入金も余程相嵩、御国債も尖ニ御払済可相成之処、又々今般苛酷之稅則等は、更ニ御策出形之通日ニ増、御国債御増加相成立、実以驚駭不斜、又慨歎千万

奉存候、畢竟邪曲奸兇之徒出頭我意を振淫欲を恣し、宇内之形勢沿革ニ暗して外夷ニ諛徳し、上下之困弊を不察して無用之土木工作を興し、皇運之衰絶を不顧収斂を厚し、人民之怨望を催進し、暴戾奸惡之至候条、早く邪曲奸臣之頭を刎、天下ニ被謝、苛酷之収斂を省減し、無用之土木工作を廢し、外夷を驅逐し、天下一般実ニ皇政之難有御仁恤を奉感戴候様有御座度事、一工部土木は天下有用之器ニ候得共、形勢を不詳時期を不計して之を興造せハ、又無用之玩器ニ陥り、国家益困弊ニ及、上下大ニ怨望し、其弊ニ乘し奸臣賊子卓出し、終ニ王家篡奪之事有之候は和漢之先蹤確明ニ候処、方今外夷之憂患不少、御国債愈莫大相嵩、郡県之御政途収斂深刻ニして、上下之困弊日増相漸、糊口之道絶果、怨讟之声道路ニ喧敷、兵乱之機已且暮ニ差迫候付而は、尚更無用之弊費を省き仁恤撫愛之道社被相立、上下困却無之通御救助筋一篇ニ御仕置可有之候処、右等之筋ニは少も無御頓着、莫大之御入費被相懸、実

ニ当今無用之鐵道・伝信・灯明台等より海陸軍省を始
數多之建築御創立相成、五畿八道之駅通を廢して天下
之行旅を窘め、夥多之冗費を捨て夷舶之來往を便ニシ、
危急之機密を不知して漫ニ伝信を通し、無用之建築を
創して都下之商工を苦め、國家之ため如何成大利益可
有之候哉、実ニ天魔狐狸之妖氛ニ被誑惑、世態之澆季
人情之菲薄、皇運亦不振起一端とは乍申、実ニ涕泣之
場合ニ御座候、古來より莫大之費用を以土木を興し、
秦政不廻踵之亡轍も有之候条、乍恐速ニ工部并土木を
廢し、無用之建築を禁し収斂を省き、一際儉約を旨と
し、富國之道被相立候様有御座度事、

一文明開化之義最大名ニして、御歴代ニも余程稀成御事
ニ而、纒ニ指を屈し

高津朝杯を世ニ聖代と相唱へ候処、方今人民之膏血を絞
り、上下之困弊を究め、外夷ニ諂諛して非常之國債を
増加し、鐵道・伝信等無用之玩器を装置して、人心日
月ニ涸涸怨望し、礼讓恭謙之風却而狡猾妄誕之俗ニ陷

り、君臣上下之經序不明ニして、五倫之道終ニ崩解し、
斷髮・脱刀して武士之職任を忘却し、商賈之小利を希
貪して、皇綱之頽廢を不顧念、菲薄之人情澆季之世態
ニ及、天日亦隱翳し、邪曲奸兇之徒日ニ擢出し、忠讜
賢良之士月ニ隱退し、外務之事件大ニ起り、郡県之變
故荐ニ競ひ、天下又動乱之階梯相生候時勢押移候処、
文明開化之唱号を下し、剩へ妄誕之新聞を板行し、天
下之愚夫愚婦を惑し、無理ニ虚喝をこち付開化之世態
と名け、文明之治宇と号し、大学坊を廢して文部を置
学制不正ニして偏ニ洋学を固主し、皇学・漢学を停
止して五倫之経緯を絶斷し、又学生増加を不意念却而
公費之生徒と唱へ、之を減却し、文明開化虚喝ニ陥り、
文部終ニ無用ニ属し、博識多才之人を不挙却而不学無
頼之徒をして令入洋、皇國夥多之冗費小益を不償、
又甚數は紡績之事業を不教誨して無識之婦女子洋学せ
しめ、終ニ落魄、頑童之為纏頭を蒙り、女学校却而淫
行之階梯と成、是等無謂迂遠虚誕之事業を相創し、是

又天魔之所業ニ相類し、言語道断悲泣ニ不堪候条、早く新聞を停止して衆庶之耳目を一洗し、女学校を廢して紡績之事業を勧め、東西洋之留学生を帰朝せしめて許多之冗費を省減し、文部省を廢して大学坊を再興し、皇学・漢字を奨励して国本を立、紀綱を皇張し、総而之教師を駆逐して洋学を兼課とし、礼讓を興し風俗を敦し、君臣五常之道を明ニして上下尊卑之儀を正し、本真之文明開化被行候様有御座度事、

一 礼儀之式、衣服之度、律曆之制、元來経国之最重要事件ニして、敷教施政之基本と相成、和漢之聖王明主之甚所難ニ候故、叔孫通・婁敬之徒漢之礼樂を制して賈誼尚之を論駁す、我朝

推古帝始て冠位之御制度被為立候より

村上帝ニ至り漸く文物格令大ニ整備す、其間既ニ二十余世ニして、聡叡之帝賢哲之臣是非を討論し、邪正を弁駁し、以今日ニ至り皆神祇を尊崇し徳化を毓敷し、文教を興隆し、君臣父子之大倫を明ニして、上下尊卑之

礼經を序し、衣冠を正し、容貌を嚴ニし、国風を敦美ニし、体俗を肅齊し、律曆を制して農工之四民ニ施し、時期謬妄之事故無之処、方今

皇運日ニ傾頽、世道陵弛(遠)し、当路在職之向々大概詐欺巧黠ニして国体を不弁、時勢を不覈、浅見無識万代一姓赫烈之 皇基を卑下して、五倫淪没、外夷之邪習を主張し、或は共和政治を称誉し、或は君民政治を褒賞して、風を壞り俗を毀り、侏僂(難)左衽ニ汚染し、儀礼埋滅して大倫礼經紊類し、律曆(或)違して農工望晦を謬誤し、風化日ニ輕菲ニして国俗月ニ悖戾、剪髮以容貌を傷り、脱刀以武威を鍛、国基倒れ紀綱廢れ、賤価之国产綾羅錦繡之絹帛貴品を捨て、貴騰之洋製毛布氈綿之衣襦粗物を貴ひ、

鳳闕之箕踞大臣之漫語 朝儀終ニ泯滅して又可見物なし、裸体突立して剩へ

至尊之行幸を放観し、大臣之輕薄傀儡娼妓ニ狎馴し、終ニ数千歳之古典 先皇之遺格泥土ニ委す、殊ニ外夷之

政治を尊奉して 皇統傾覆之勢ニ漸次す、実ニ感泣悲涕ニ不堪候条、大ニ律令格式を正し、更ニ 朝儀を嚴立し、典礼を肅斉し、 行幸之御儀式を盛備し、衆庶之放觀を禁し、神祇之敬恪、節朔之朝礼、冠冕衣服之制度古典ニ復し、又新曆を廢して古曆ニ復し、愚夫愚婦をして令易見 朝参必胡服を制禁し、容貌を嚴肅し、言語を敬慎し、君臣父子之大倫を確明して上下尊卑之礼経を頒序し、国風を一新し体俗を一洗し、教化を施敷して黎元を撫育し、外夷掃蕩 丕業恢廓之勲功を被奏候様有御座度事、

一源右大将始而霸府を鎌倉ニ創して、大江広元 朝家之典礼を用て之を補佐し、足利氏室町を營して華奢僭驕を究と雖も、尚今川・伊勢・小笠原之三氏各所受之古実を以大ニ其格式を調理す、徳川氏興て又普く之を校合し、節朔觀朝之礼・冠冕衣服之制・遊獵射芸之法・叙任令書之規皆之を格正し、終ニ之を武家之作法儀式と名け、実は 朝家之遺式貽法ニして一日も不可忽者

也、方今 皇政御恢復之折柄、先以 先皇之典礼格式より武家之格令式目馳駈周旋之儀則等嚴密御調相成、御確重之御礼格被相立、第一王者之御威嚴耿赫、上下震栗致奉戴候通可有御座之處、是等大体之事件ニは少も無御関係、却而祭祀朝拜馳趨等之大礼を廢毀し、朝廷官省之差別無之、便語錯雜箕踞胡服し、或は雨衣を着し、或ハ半纏羽織を着衣し、 朝廷出仕之向々不少、文盲無識と乍申非礼非儀之挙動、実ニ絶言語候、是畢竟詐欺巧黠ニして国を売之小人在職して国基を立は、先礼儀を正して国家を経緯し、朝野を調理して 皇化光被する之最大本務を不弁知、終ニ今日之廢礼滅儀ニ所令至也、仰冀は別段式部省之一大局を被爲置、 皇家之典礼武家之式目を醜酌し、冠婚葬祭は勿論、節朔朝覲之礼拜趨周旋之儀確重之御制度典礼を御設立相成、天子赫烈之御威嚴四方光被之御徳化、上下尊卑之班序、奴隸僕従之定格、叙任除目之文体、 朝廷私室之謁見、應對嚴肅ニして、朝衣便服之制則輿馬許否之規律猥ケ

間敷無之、皇風振起外夷震栗して国本屹立之御基礎被相立候様有御座度事、

一鎌倉之覇府創立爾来皇権日ニ縷々紀綱終ニ弛弛、奸臣賊子卓出し、守介之名目守護地頭ニ属して、僕隸之徒或は庄園^(庄)を領し、或は郡国ニ跨り、足利氏政衰て奸雄各一方ニ割拠して、豊臣氏・徳川氏雖興又其地を不能削除、尚其拠有之郡国を与へて終ニ自封建今日之勢形ニ馴致す、徳川氏衰ニ及奸臣如雨政途頽廢大臣之奢侈、士卒之怠惰歌舞を事し、糸竹を務とし、文武儀礼掃地て無跡、外夷驕侮奴視して四方事多し、又威武之可見者なし、此時ニ当て独諸侯之権重政正して文学を勧め武事を敵ニす、優美惰弱之風なく冒雪凌霜之功を鍊候故、外夷亦之ニ遇する幕士と日を同して輕蔑奴視するを得、然といへとも二百有余之諸侯皆以然るを得は、又形勢沿革之所因縁也、併此邦之窮乏彼国之富饒、此藩之美政彼藩之弊政、善惡相価、興廢相救て転輪循環して以皇国之威武を維持し、四民之怠惰を

矯正して以今日ニ至る、故ニ御維新間其藩政藩風ニ依、或は慷慨義烈協心戮力して姦不業を奉奏し、或は因循姑息中立天下之形勢を傍觀し、甚敷ニ至てハ頑陋無識名分を不弁知して徒ニ皇師ニ抗する者あり、然共一善之以無可賞、一惡之以無可懲、曖昧^(曖)糲糊之世態押移り、皇政之興隆衰廢、封建之馴致勢形を不被審察、昨年来封建之体裁甚以不宜旨ニ而、功勞叛逆之無區別、俄ニ廢藩立県之御政令普く天下ニ被布達、四方之士囂々として皇政尊奉之色無之、却而怨望切齒之者多く、迺も郡県之御政途不一貫妖瑞ニ而、内貧国弱兵之御政令鋭尖ニして外威武鍛除之兵勢強大也、熟惟ニ郡県之政途古今和漢同轍ニして皇綱衰絶、廉恥糜滅を不被顧念して、淫欲驕之三利を被貪願、依之都下之兵士愈惰弱無頼を究め候上、諸侯之兵権崩解して終ニ外夷をして猖獗跋扈昔日ニ百倍せしめ、又不日奸臣之為天日必隱翳し、皇運遂將傾、実ニ慨歎ニ不堪是郡県政途之弊害ニして又如何とも不可為時勢相趨、

封建不可解崩之景況ニ候、伏冀は有功は賞し有罪は罰

す、古今之通規ニして先皇之常典也、方今之形勢未廃

藩立県之時運不到来、当今之急務実ニ黎元を撫育し威

武を四方ニ皇張する之時ニ御座候、依之速ニ有功之藩

は旧ニ復して封建し、益政治を磨礪し文武を鍛鍊して

皇国之干城とし、中立傍觀之藩は其采地を削て其封を

滅し、以過期猶予之罪を懲し、或は敢て天師ニ抗する

者は其封を奪て方今之位置ニ供し、名分を不弁之罰を

声し、又公卿大夫士庶人之大勲功を奏者は其采地を与

へて諸侯ニ列し、以下功之大小差等ニ依功田・爵位及

褒賞を賜与し、勸善懲惡、廉恥砥礪、内は以富国強兵

之基本を立、外は以外夷掃蕩之威武を震ひ、皇威赫

耀・徳化宏遠光被于四方候様有御座度事、

明治六年五月 佐賀県士柴田洪平謹白

冊子原寸 縦二四・五種 横一七・二種 三七枚

二〇四二二

(表紙) 一時論 後 一

一政事論

一華夷之弁

一司法廢省之事

一大藏廢省、民部・大藏之二省建設之事

一郡県不可設事

一彈正台建設之事

一皇居可復旧都、東京不可都して大藩諸侯江可任事

一町屋之建築を廢し川河疏通山野開拓之事

一奥羽等之川河堤防築造之事

一華士族商賈禁止之事

一募兵之事

一獵狩之事

一外夷通商長崎・横浜・箱館之三港ニ滅却之事

一外夷鎖交之事

一奸臣誅戮之事

政事論

一大凡政事は五倫之道を明ニシ、上下尊卑之礼経を制し、又儀礼格式を盛興し、四民をして各其職業ニ安せしむる而已、故ニ下としては篤く上を奉戴し、上としては能下を無愛するニ不過也、雖然世ニ聖主賢臣並生而其政柄を取ニあらされハ、異同緩急之事變不生を不得、是則勢形沿革之所生也、故ニ世道之興隆衰弱、民風之淳朴輕薄も亦自不存を不得、爰を以上代ニは治教休美民風淳朴ニして上を侵す之徒なく、下を不愛之君なく中世ニ降に及て政教稍古ニ不及、民風も亦大ニ衰頹し不軌奸兇之徒出而上下尊卑之礼を紊し、天威を輕蔑し下民を掠奪す、於是乎誅戮竄流之刑律所因起也、随て忠讜義烈之士殺身傷体之奸兇を討罰し、君主を保護す、於是乎賜与褒賞之礼典所以出也、是故ニ刑賞は一日も不得不並施、以人心を梗^(喻)炙し、其方嚮をしらしむ、是則法典之所以制也、是畢竟世道を維持し人心を矯正して、以て政途一時之權輿とす、世之澆季ニ及て治教

不正風俗日ニ廢て、忠良隱退し奸兇在位之上を無し下を輕し、神祇を不崇尊は又

天子を不奉戴、鰥寡を不賑恤は何黎民を無愛せん、是を以政令を煩多ニシ、刑律を嚴刻ニすれハ、則下民之情状愈以上を憾讟して大綱之政令を輕易し、枢要之刑律を不恐輕易し、不恐則上益我意を募り邪智を振て政令を苛酷ニシ、刑律を酸烈ニす、苛酷酸烈之極は則四民其手足を無所措、積怨之毒積怒之讎終ニ天下国家を顛覆す、和漢古今之常勢ニして更ニ無可疑者、僅ニ三章を約し無実之広大土地を与へて天下を得、漢高祖・足利尊氏之輩枚拏ニ不暇、伏而冀は方今之御急務和漢古今之治乱興亡ニ注意し、政刑得失之筋目篤と御吟味無之候而は暈^(愚)卵之危急目前ニ御座候間、新奇之珍政を止め苛酷之繁令を廢し、重大之治教を興し、嚴肅之儀礼を盛ニシ、又酸烈之刑律を弛め、聚斂之租税を免し、四民各其職業を憤勵し、門戸を不鎖遺を不捨、御維新之御宏謨相立、上は以